
サーザンエンド辺境伯戦記

雑草生産者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーザンエンド辺境伯戦記

【Nコード】

N0588Q

【作者名】

雑草生産者

【あらすじ】

遙か南の地からやってきた銀髪に褐色肌の少女は、破産した帝国騎士の若者に告げた。「私は、貴方にお仕える為に参りました」これに、彼が応えたとき、彼らは帝国南部を揺るがす戦火に巻き込まれる。否、彼らは、自ら望んでその戦火の中へと飛び込むのだ。金もない。地位もない。権力もない。地盤もない。知名度もない。軍勢もない。ないない尽くしから始める銃と剣による近世風異世界戦記。

近世風異世界戦記です。よくあるファンタジーのような魔法、

魔物といった類は登場しません。基本毎月「0」の付く日に更新します。たまに「5」の付く日にも更新します。

一 クロス家の屋敷にて

大陸で最も大きな版図を誇る神聖帝国の帝都の北の一画にクロス家の屋敷はあった。辺りには貴族や大商人、上級聖職者の屋敷が立ち並び。家々の間隔は広く取られ、庭先には花々が咲き乱れ、家庭菜園が営まれ、芝生は短く刈り込まれている。石畳の道路は整然と掃き清められ、溝も小まめに浚われていて、都会特有の悪臭も少なかった。

道路の幅は一〇ヤード以上はあり、時折、滑らかに毛並みを整えられた馬が引く金銀の装飾で飾った馬車が走りぬける。向かいから同じような馬車がやって来ても容易にすれ違い、御者が帽子を持ち上げて挨拶を交し合えるほど余裕のある立派で広い道路だ。

傲慢に道路の中央を走り抜ける馬車に轢かれないように、どこかの屋敷で雇われているであろう使用人や女中たちが道路の脇を忙しなく行き交う。

あまりにも清潔で整然としすぎていて、多くの庶民が生活する下町や商人たちが商売に精を出す市場、職人たちが仕事に励む職人街のような活気や生活臭ともいふべき人の生きる雰囲気には少々欠けるが、それでも、生活する人の雰囲気や生気が感じられる。

その中で、クロス家の屋敷は閑散としていた。

屋敷の大きさは、皇族をはじめとする公伯といった大貴族、教会を指導する枢機卿や大司教といった上級聖職者、大陸各地に支店を持ち、大船団を編成して、海外から取り寄せた貿易品を商う大商人といった帝国でも最高位にある者たちの大邸宅が並ぶこの辺りでは小さめで、装飾も少なかったが、シンプルな線で縁取られた白壁の美しい家だった。庭先は整然と片付いているというよりは、何もなく物寂しい印象を受ける。屋敷に出入りする人の姿はなく、人気もなかった。

その寂しい屋敷の前に、一人の旅人が立った。茶色い襷褌のよう

な薄汚れた布を頭からすっぽりとかぶり、足元まで隠している。布のせいで外見を窺うことはできないが、大の男ほどの背があった。その怪しげな姿に道行く人々は不審な目を向けていた。

旅人は屋敷を見上げてボソリと呟く。

「ここか……」

そうして、門扉を押し開けて敷地の中へ入る。閑散とした庭先を進み、玄関前に立った。人の背の二倍はあろうかという重厚な木造の扉をノックするが、中から反応はない。

旅人は少し躊躇した後、扉を押し開いた。扉は重々しい音を立てながらゆっくりと開いていく。昼にも関わらず薄暗い広間に日が差し込む。

足を踏み入れ、屋敷の中を歩いていく。外と同じように屋内も閑散として、物は殆どなかった。このような屋敷には必ずある彫刻や絵画などの美術品は勿論、テーブルや椅子、棚、筆筒、洋服掛け、衣装箱、食器、絨毯、カーテン、何もなかった。そして、誰もいなかった。ただ、埃は少なく、人がいなくなって幾月も経っているという雰囲気ではない。まだ人はいる。若しくはいなくなってから日が浅い。

案の定、二階のある部屋へ足を踏み入れると、声がかかった。

「遅かったな」

声のした方向を旅人は見た。

部屋の窓際に若い男が粗末な椅子に腰掛けていた。手にはグラスがあり、葡萄酒がなみなみと揺れている。

男は濃いグレーの髪を乱雑に伸ばし、切れ長の目に赤い瞳で、背がすらりと高い。木綿の白いシャツの上にグレーの上着を羽織っており、濃い青色の長ズボンを履いていた。腰には装飾のない無骨なサーベルを提げている。

「もう何も残っちゃねーよ。レミュー金貨は勿論、セリン銀貨すら何枚かあるだけだ。あとは、上着が今着てるグレーのと赤いの。今履いてる青いズボンと茶色いやつ。木綿のシャツが何枚かと下着が

何着か。それから、靴下が何足かと靴が一足。おっと、それから、このサーベルと、あと、ナイフだ。葡萄酒は今飲んでるやつで最後。ああ、グラスと椅子もあったな。まあ、どっちも金になるようなもんじゃない」

男は不機嫌そうにぶつぶつと言った。

「あとは全部他の奴等が持っていつちまったぞ。言つとくが、この屋敷も土地も既にフィゼル家の抵当に入ってるからな」

そう言つて彼はグラスを傾けた。

「今更、来ても何も渡せるもんはないんだ。あるとすりゃあ、今言つた分だけだが、全部合わせたつて一〇セリンにもならねーさ。あんなも死んだ親父に金を貸したんだらうけど、渡せるもんつつたら、もう俺の命くらいしかねーんだ」

男の言葉に、旅人はゆっくりと首を振った。

「私は借金の取立てに来たわけではありません」

旅人の声は予想に反して若い女のもので、男は少し面食らった。彼女は男の前でゆっくりと頭からかぶっていた襪褌のような布を取った。帝都では滅多に見かけない褐色の肌に、銀色のシヨートヘア、瞳の色は教会から悪魔の色と忌み嫌われる漆黒。シャツの上に薄手で大きく胸元が開いた長袖の上着を着ている。履いているグレートのシヨートパンツも薄手の生地だ。

「私はキスカと申します」

あまり感情を感じさせないハスキーで乾いた声だった。

「ほう。そのキスカさんつてのは南の方の出身か」

「ええ。私はムールド人です」

帝国は多民族国家である。多数派にして支配階級にある帝国人の他に大まかに数十もの民族が居住している。帝国に大人しく恭順している民族もあれば、帝国の支配を潔しとせず抵抗を続ける民族もある。

ムールド人は後者の方だった。帝国東半の南に突き出ている半島の南端部に居住する遊牧民で、暑い地域に住んでいる故に褐色の肌

が特徴である。異教を信じ、長らく帝国の支配に抗い続け、更には黒に近い肌をしていることから、西方教会から強く嫌悪されている民族だ。熱心な西方教会信徒の中には彼らに触れることすら嫌悪する者も少なくない。褐色の肌が穢れているというのだ。

西方教会において、黒とは悪魔の色と忌避され、嫌悪される色なのだ。滅多にその色を持つ髪や瞳の者は生まれませんが、生まれれば悪魔の子と断罪され、生まれて間もない赤子でも火炙りにされることが少なくない。場合によっては、その子が生まれたのは、その生母が魔女なのだとか悪魔とセックスしたからだとか糾弾され、母子諸共処刑されることも珍しくはないほどである。

そのように、過激な宗教思想が蔓延し、魔女や異端や悪魔信者を焼く火が消える日はない世ではあったが、彼はそんなふうには思っている人間ではなかった。

彼の父、アルベルト・フェルゲンハイム・クロス卿は、この時代にしては、かなり開明的な思想の持ち主で、被差別民の異民族や障害者、伝染病患者を手厚く庇護し、そういった弱い立場の人々を助ける教会や修道院に大きな支援をしてきたものだった。その父に育てられた一人息子も当然その影響を受け、古くからの教義や迷信を妄信することなかれと教えられ育ってきた。

とはいえ、その父の趣味ともいえる慈善活動と過激な宗教思想への批判姿勢のお陰でクロス家は教会から目を付けられ、散々嫌がらせを受けた結果、教会に嫌われているクロス家との取引を商人たちは遠慮し、家の財政は傾き、散々悪足掻きをしたものの、父亡き後に見事御破算と相成った次第なのだが。残された莫大な借金は悪足掻きの名残だ。

「そのムールド人のキスカさんが何の用かな。アレか。親父へのお礼参りにか」

今までも、何人か父アルベルトの世話になったという人が屋敷を訪れることがあった。

その度に、父は彼らを厚くもてなし、激励し、彼らは心の底から

父を慕い、感謝しているようだった。とはいえ、その父も今はもういない。この屋敷も明日、明後日には帝都でも一、二を争う銀行家であるフィゼル家の所有となり、クロス家の生き残りである彼は着の身着のまま放逐され、いつかどこかで野垂れ死ぬことだろう。

人助けをするのもいいが、加減というものがあるだろう。と、彼は思いつつも、しかし、こんな別嬪がわざわざ会いに来てくれるのだから悪いことばかりではないなとも思った。とはいえ、彼にではなく、父に用があるのだろうか。

「残念なことだが、親父は先月熱病をこじらして、あの世に逝っちゃまってな」

「いえ、そういうわけではないのです。私は、貴方の父君アルベルト様に会いに参ったわけではありません」

キスカと名乗る若いムールド人は軽く頭を振って否定し、彼を見つめた。およそ感情を感じない目ではあるが、しかし、こちらを観察するような、心の中を見抜こうとでもするような意識をその瞳から感じた。

そして、やおら彼の前に傳くと厳かな口ぶりで言った。

「私は、レオポルド・フェルゲンハイム・クロス様。貴方にお仕えする為に参りました」

「私に仕えるだと」

破産した小貴族クロス家の一人息子レオポルドは、突如、自宅へ現れたキスカと名乗る異民族の少女の申出に怪訝な顔をした。そして、すぐに不機嫌そうに鼻を鳴らして、片手に持ったままだったグラスの中身を空にした。

「そりゃ何の冗談だ。仕事にあぶれて雇ってもらおうと思って来たのか。生憎だが、そいつは無理な相談つてもんだ。金がないのは冗談でも何でもないからな。俺一人食っていけるか、いや、生きていけるかもわからん状態で、人を雇うなんざできるわけがない」

レオポルドは怒ったような笑顔で両手を広げて言った。

「それとも、詐欺か何かか。言っとくが、どんだけ絞っても俺から

はもう一銭も金は出ないぞ。財布の中がスツカラカンなのは本当なんだからな。若しくは、没落貴族の跡取りを使って詐欺か商売でも始めようつてののか」

キスカは彼のいずれの言葉に対しても黙って頭を振った。

そして、静かに口を開く。

「私は、レオポルド様にお仕えし、サーザンエンドの地まで来て頂く為に参りました」

レオポルドは眉根を寄せ、頭の中に地図を思い浮かべた。

帝国のある西方大陸をはるか上空から、否、それはもう宇宙にも近い位置から、遙か前方に北極を見た常態で、見下ろすと、西方大陸は横に長い形をしていて、その両端がいくらか下に突き出ている。その大陸のうち帝国の版図は東の三分の一を占める。このうち、帝国の中心は西部の平原地帯にあり、帝都や主要な都市もこちらに集中している。

さて、この帝国の東半から南に突き出ている大きな半島がある。この半島の付け根にはグレハンダム山脈という非常に険しく高い山脈が連なっており、これを越えると、気候は一気に乾燥し、また、気温も非常に高くなる。半島の西の海岸地帯に聳えるプログテン山脈が西風を遮り、水蒸気を含んだ雲が内陸部へ進むのを阻んでいる。せいであり、また、南の海上を大きな暖流が流れているせいでもある。

その内陸部一帯は乾燥した平原で、更に南へ進むと砂漠地帯となっている。

サーザンエンドはこの乾燥した平原の最南部から砂漠地帯の北部を占めている。帝都からは随分と南で、普通の旅路で行けば二月か下手をすれば三月かかってもおかしくはない距離だ。特にグレハンダム山脈の山越えは大変な難所で、冬には峠が雪で閉ざされ通行は不可能となる。

「そんな南の果てに俺を連れて行ってどうするっていうのだ」

レオポルドは問いかけたが、心当たりがないわけではない。なかった。

サーザンエンドとクロス家は縁がある。というのも、祖母はサーザンエンド辺境伯フェルゲンハイム家の出身で、ミドルネームのフェルゲンハイムはそこからきているのだ。

辺境伯とはかなり上位の貴族の爵位である。帝国騎士身分のクロス家なんぞとは比べ物にならないくらい上である。男爵よりも偉く、子爵よりも偉いし、伯よりも偉い。しかし、公や方伯よりは格下だ。辺境伯というのは、要するに辺境の伯のことである。では、伯とは何かというと、昔々の帝国で皇帝から地方を統治する為に派遣された地方長官のことであり、これが一つの家に相続されるようになっていけるわけだ。つまり、昔は役職であったのが、今は地位・階級となっているわけだ。この伯の中で、一際、辺境に派遣され、普通の伯よりも強い権限を与えられた伯がいる。これが辺境伯と呼ばれる。

その辺境伯家の娘が一介の帝国騎士風情の家柄に嫁入るとは、非常な名誉である。その上、クロス家の子息はフェルゲンハイムの名を名乗っても良いとの認可も頂いているのである。

何故、そのような名誉に浴したのか、レオポルドは知らなかった。ただ、祖母がサーザンエンド辺境伯フェルゲンハイム家の人間だということは何と聞いていた。とはいえ、彼自身、サーザンエンドには行ったこともない。その祖母はレオポルドの生前に亡くなっていたから、話を聞いたこともない。父は幾度か足を運んでいたようだが、何をしに行っていたのかすらよく分からない。

「まさか、フェルゲンハイム家の直系が断絶したから、俺にお鉢が回ってきたとかいうわけじゃあないだろうな」

「そのとおりです」

自分の問いを肯定したキスカを見て、レオポルドの表情は険しいものとなった。

世には、貴族の爵位や地位、特権をちらつかせる詐欺がごまんとある。例えば、「貴方にはどこそこの家の血が流れているので、あれこれの地位を継承することができると嘯き、その地位を手に入

れる為の工作に金が必要だとして金を巻き上げるといった詐欺である。

レオポルドはまずそれを疑った。しかし、すぐに打ち消した。第一、自分には金がない。そして、自分に金を貸してくれる者もいそうにない。貴族とはいえ、質に入れる財産すらない若造で、その上、教会に目を付けられている。そんな奴に金を貸すとすれば、自ら不良債権を作ることにはならない。

詐欺師ならば、その辺りの事を調べているはずだ。調べていなければ、そいつは酷くお粗末な詐欺師といえよう。

もしも、万が一、このキスカと名乗るムールド人の少女がマヌケな詐欺師だったとしても、どうやっても金は出せないのだから、そもそも、詐欺を恐れる必要がない。財布を持っていなければスリに注意する必要がないように。

では、詐欺でないとするれば、何なのか。

まず、考えられるのはキスカの言葉が本当だということ。本当に、フェルゲンハイム家の直系が断絶し、血族を辿って、レオポルドにサーザンエンド辺境伯位が巡ってきたのかもしれない。としても、その迎えが異民族の少女一人というのも解せない話だ。確かに、サーザンエンドは、地名こそ西方風ではあるが、異民族の居住する地である。住民の九割は西方教会を信仰しない異民族であり、帝国語を解さない者も少なくない。そちらでは帝国人の方が少数民族なのである。

しかし、サーザンエンド辺境伯という地位は帝国の地位であり、役職であり、階級である。この地位の継承問題に関して異民族である彼女が出てくるのは不自然ではないか。

空位となったサーザンエンド辺境伯への就任依頼があるのであれば、きちっとした使者がやって来て文書が何かで正式な要請をしてくるものではないか。

「あなた、本当に正式な使者なのか」

レオポルドは胡散臭げな顔でキスカに問いかける。

「……正式っていうと」

キス力は無表情でほんやりとする。

「いや、俺もよく分らんが」

レオポルドは貴族とはいえ、貴族の中では低位である騎士身分の若造である。辺境伯の地位がどのようにして巡ってくるのかなどわからないし、考えたこともなかった。ただ、なんとなく、正装を着た地元の貴族か役人か何かの正式な文書を持ってきて就任を要請するのではないか。

レオポルドは胡散臭さを感じずにはいらなかった。このキス力と名乗る娘自体はそれほど悪人には見えないが。しかし、安心はできない。そもそも、悪人が全員ぱつと見て悪人だと分かっていたら、犯罪はぐんと減るだろう。純朴で人の良さそうな顔をした詐欺師のなんと多いことか。

サーザンエンド辺境伯への就任という餌にほいほいと食いついていった先が、地獄では堪らない。ここは慎重に構えるべきだろう。少なくとも、最近のサーザンエンド辺境伯領について調べておくべきだ。サーザンエンドに行ってみたら、辺境伯がピンピンしていたなんて事態になっては笑えたもんじゃない。

一 クロス家の屋敷にて（後書き）

毎月「0」の付く日を更新としています。たまに「5」の付く日にも更新します。

感想、意見、質問、要望、批判等々、首を長くしてお待ちしておりますので、是非是非お気軽手軽にお寄せ頂ければ幸いです。

二 レイクフューラー辺境伯邸にて

破産した貴族クロス家の一人息子レオポルドは、サーザンエンド辺境伯に就任できるという話について、暫し黙考した後、口を開いた。

「考える時間が欲しい」

「如何程ですか」

サーザンエンドからやって来たという異民族の少女キスカが尋ねると、レオポルドは顎に手をやって少し考えてから答えた。

「そうだな。一晩くれ。明朝には結論を出そう」

「一晩ですか」

キスカは無表情で突っ立っている。視線がゆっくりと泳いでいる。漆黒の瞳が右へ左へとゆらゆら泳ぐ。

「都合が悪いのか。一日も惜しいほど急いでサーザンエンドへ行かねばならんとか」

「いえ、そういうわけでは……」

彼女は言い辛そうに口を薄く開いたり閉じたりを繰り返す。

すると、レオポルドは段々とイライラが募ってきた。彼は比較的短気な性格であった。

「何だ。言いたいことがあるなら言え」

彼の怒声にキスカは大袈裟なくらいビクつくど、おずおずと口を開いた。

「実は、その、お恥ずかしい話なのですが、路銀が……」

「ほっ」

「それに、帝都では、私のような異民族を受け入れて頂ける宿も多
くはなく」

つまりは、泊まる場所に当てがないということらしい。となると、何を求めているかは言わずもがなであり、それに対するレオポルドの返答の選択肢も決まってくる。

「うーむ、まあ、止むをえまい。うちに泊まっていきたい」

レオポルドの言葉にキス力は微かに顔を赤らめて頭を下げ、厚く礼を言った。

「あー。何だ。毛布の一枚もないような、何も無い屋敷だが、まあ、雨風は凌げるだろう。自由に使ってくれ。で、俺は、外に用事があるから、ちよつと出かけてくる」

レオポルドはなんだか照れ臭くなってきて、その場を後にした。

上着の汚れを気にしながら彼は屋敷の外に出た。席を立て外に出るのは、美少女に丁寧な礼を言われるのが照れ臭かったせいもあるが、きちんと理由があった。

活気も人気もない屋敷の外に出ると、そこは広い道路である。貴族や大商人の邸宅が建ち並ぶ地区だけあって、道路上に目立つ損傷はなく、ゴミや何かも落ちていないし、浮浪者がうろついていたりもしない。ひっきりなしに、どこかの屋敷で働いているであろう使用人が行き来し、時折、上等な毛並みの馬に曳かれた馬車が走り去っていく。

空は赤く染まりかけた頃合で、使用人たちは主人の夕飯の支度に追われている頃だろう。この忙しさを乗り切れば、大方の使用人は本日のお勤めは終了。家のある者は帰り、住み込みの者は狭苦しい屋根裏の部屋に退く。

かつてはクロス家にも使用人はいた。執事に料理人、女中が二人。執事のベネディクトは、レオポルドの祖父の代からクロス家に仕える老人で、家のほとんど全てを仕切っていた。家が破算したとき、彼は既に七十歳を超えていたが、尚も無給でも家に仕えようとしていた。しかし、以前から痛めていた体の具合がいよいよ悪くなり、レオポルドは彼の子を呼び寄せて半ば無理矢理ベネディクトを病院に入れさせた。これ以上、ベネディクト老に迷惑をかけたくなかった。

料理人のロバーツは雇われてから一年しか経っていなかったが、クロス家に対する愛着は深いもので、立ち去ることを渋っていた。

とはいえ、彼にも養わなければならぬ家族がいる。レオポルドが彼の再就職先を斡旋すると、深々と頭を下げて屋敷を後にした。何度も、屋敷を振り返りながら。

女中の一人マルゲリータは、早くに亡くなったレオポルドの母代わりとして、彼を育ててくれた老婆で、クロス家を立ち去るときには一日中泣き続けていた。とはいえ、彼女は非常に聡明で賢明であった。自分がこの場に留まってもどうにもならないことを理解していた。彼女は修道院に入って、亡きアルベルトを悼み、レオポルドの幸福と健康を願うと言って去って行った。

もう一人の女中フィオリアは、レオポルドよりも一つ年上の、異民族であるフェリス人の娘で、父アルベルトが拾ってきた孤児だった。レオポルドと彼女は姉弟のように育ち、物心ついた頃からはマルゲリータに教わって女中として家の家事やレオポルドの世話を焼いてくれた。頑固で分からず屋で、最後まで家を出ようとしなかったが、レオポルドが一日かけて説得した末に、別の貴族の家に仕えることになった。

レオポルドはクロス家を去って行った使用人、というよりは、家族にも等しい人々のことを思いながら、道を歩き、角を曲がり、坂を上った。その先に、赤い邸宅があった。

真つ赤な煉瓦造りの塀に囲まれた赤煉瓦の三階建ての屋敷だ。その敷地は、クロス家が十でも二十でも入りそうなほど広い。

門には数人の門衛が槍や銃を手に通行人に目を光らせていた。レオポルドが近づくと姿勢を正した。

レオポルドは会釈して門を通る。誰も制止もされなかった。顔見知りだからだろう。この家は屋敷の中に他人が入ることを意にしないのだ。それどころか歓迎すらしている。さすがに、一見の者は身分を確かめられるだろうが、何度か来た者ならば、誰であろうとも無条件で中に招き入れる。

屋敷に入ると右手には大きな厩があり、何十頭もの馬が繋がれ、

馬車が並んで停車していた。厩番や御手が馬の世話をしている。屋敷のものもあるだろうが、来客のものの方が多そうだ。

真正面に屋敷があり、門は開かれている。入って少し進むと大広間で、そこは大きなパーティや行事のときに使用される。今日は特に使用の予定は入っていないようで、明かりも最低限しかなく、空っぽの広い空間だった。

一階には大広間とは別に、いくつか小さな広間があり、客はソファや椅子に座って寛ぎ、煙草を吹かせたり、料理をつまんだり、酒を飲んだり、カードゲームに興じたり、話し込んだりしている。

一階にあるのは、あとは台所と使用人や守衛の控室くらいなもので、屋敷の住人は二階以上でもっぱら生活しており、そちらがプライベートな空間で客人は立ち入りが制限されている。

レオポルドはいくつかの広間を見て回った。彼を見た貴族や商人や聖職者、軍人、官僚といった身分の人々は様々な反応をした。クロス家の破算の話は既に帝都中に広まっており、知らぬ者はいないのだ。ある者は気の毒そうに彼を見やり、慰めの言葉をくれる者もいた。またある者は侮蔑の表情を浮かべ、或いは馬鹿にしたような下卑た笑みを浮かべたり、皮肉を口にする者もいた。無反応な者も、興味のなさそうな者もいた。人間それぞれといったところか。

いくつかの広間を歩き回って、羞恥と屈辱と様々な感情を抱いた末に、彼はようやく目的の人物を見つけた。

その広間には一際多くの人が集まっていた。その中心にいるのは小柄な若い女だ。セミロングの茶髪に、青白い肌、人が良さそうだが表情の読めない細目、薄い唇。上品で高級そうな絹のシャツに、履き易く動き易そうな綿パン。その上に派手派手な真紅のマント。そして、左目には白の眼帯。その白眼帯には交差する二本の赤いサベルが描かれている。

彼女がこの屋敷の主、レイクフューラー辺境伯である。辺境伯の周囲には多くの男女が集まって、何やら議論していた。

その集まりから一人離れて壮年の男が椅子に座って煙草を吸って

いた。濃灰色の髪に黒い瞳、背格好は中肉中背。細面で控え目な口髭。外見は紳士のよう。ただ、彼に表情は薄く酷薄な印象を受ける。「デリエム卿」

レオポルドは声をかけた。

「これは、クロス卿。調子は、まあ、良いわけではないだろうな」

デリエム卿は無表情で紫煙を吐いて応じた。卿は辺境伯の側近とされる人物で、若い辺境伯に代わって多くの諸事務を取り仕切っていた。

レオポルドは苦笑した。デリエム卿は、社交辞令を含め必要のない嘘を言わない主義なのだ。

「この度は、うちの使用人を受け入れて頂きありがとうございます」
レオポルドと共に育ってきたフィオリアを受け入れたのはレイクフューラー辺境伯家であり、レオポルドが頼み込み、承諾したのはデリエム卿だった。辺境伯家の屋敷には三桁もの使用人や衛兵が働いており、その一人一人の雇用については、辺境伯ともなればほとんど関知せず、部下に一任しており、一任されているのがデリエム卿なのだ。

「その件か。そのことならば、礼には及ばぬ」

デリエム卿は片手を振りながら言った。遠慮ではないのだろう。これほど大きな屋敷であれば使用人が何人いようと仕事はいくらでもあろう。一人二人くらい新たに雇用することは造作もないことだ。

「いえ、大変助かりました」

それでも、レオポルドは頭を下げ、礼を言った。それくらい、彼には感謝していた。

「ところで、お願いばかりで申し訳ないのですが、もう一つ、お願いしたいことが」

「ふむ。君も中々図々しいな」

レオポルドの言葉にデリエム卿は遠慮なく言った。とはいえ、その顔はいつもどおりの無表情で、さほど迷惑している風でも嫌がっ

ている風でもなく、ただ単に感想として述べただけのようだった。
「家も財産も失った身ですから。遠慮などしても意味はありませんから」

「確かにその通りだ。で」

「はい。南部に詳しい方を紹介して頂けないかと。特に、サーザンエンドについて」

レイクフューラー辺境伯が、屋敷を開放して多くの客を招いているのにはそれ相応の理由がある。ただの道楽ではない。これは情報収集の一環なのである。

辺境伯は、情報について、とかく拘りのある人物で、帝都で、帝国で、大陸で、それどころか世界中で起きていることをなるべく多く詳しく知り得ようと尽力していた。そのために、あらゆる手段を講じており、屋敷になるべく多くの人々を集め歓迎することもその一環であった。

単純に人が多ければ多いほど、質はどうあれ情報は多く集まる。レイクフューラー辺境伯はなるべく多くの人を屋敷に集め、歓談させることで情報を吐き出させ、それを収集しているのであった。その情報は真偽が定かではないものも多かったが、情報は多ければ多いほど良い。要は、そこから正しいものを選びたいだけの話だというのが辺境伯の考えであった。

歓待される客も客で、彼らもまた辺境伯の屋敷で情報収集や情報交換をしている。つまりは、情報を欲する者にとってレイクフューラー辺境伯の屋敷は、非常に都合であった。その為、辺境伯がこれを考え、屋敷を開放した十年前から、辺境伯邸は多くの人々の情報交換の場となっている。

クロス家も長年、情報収集と情報交換に利用してきた。特に父アルベルトは、身分に格段の違うがあるものの、辺境伯とも懇意であった。レオポルドはまだ若いのが既に数年前から世話になっている。

レオポルドは、キスカの言葉の真偽を調べるために、レイクフューラー辺境伯邸で情報収集をすることにしたのだった。

「南部。サーザンエンドか。そうか。君の家にはフェルゲンハイムの血が流れていたな」

デリエム卿はぶつぶつと呟くと、レオポルドをじろりと見つめて言った。

「フェルゲンハイム家に身を寄せるつもりか」

「あー。そういうわけではないのですが……」

レオポルドは暫し言い淀んだが、デリエム卿には素直に全てを話すことにした。今まで世話になった恩義を感じているし、キスカから聞いた話をデリエム卿に話したところで、自分の不利益になるとは思えなかった。そもそも、失うものなど既に何も無いのだ。

「なるほど」

黙って煙草を吹かせながら聞いていたデリエム卿は、顎鬚を摘みながら呟いた。

「では、上手くいけば、君がサーザンエンド辺境伯に収まる可能性もあるということか」

「いや、まあ、本当の本当に、上手くいけばの話ですが」

「確かに、夢物語みたいな話ではある。眉唾である可能性もある。とはいえ、情報を集めてみる価値はあろう」

そう言って彼は立ち上がった。

「今日はちょうどレガンス司教付司祭が着ていたはずだ。まだ帰っていないければよいがな」

レガンス司教区はサーザンエンドよりもやや北方にある地方だ。帝都にいる連中よりもはるかに南部の事情には詳しいだろう。それに、司教付司祭という帝国騎士とは同程度の聖職者ならば、話も聞きやすい。

二人の騎士は連れ立って屋敷の中を歩き回り、ある広間で目的の人物を見つけた。

「プロア司祭殿」

デリエム卿が声をかけると、非常にふくよかな体系の中年の聖職者が振り向いた。白を基調とし、銀の刺繍や飾りの入った聖服を身

にまとい、頭はつるりと禿げあがっていて、顔は真っ赤で、汗ででかてかと輝いていた。丸っこい手にはなみなみと葡萄酒が継がれたカップを握っている。

「おほほほ、これはこれは、デリエム卿。挨拶が遅れまして失礼を」
プロア司祭は機嫌よく笑いながらデリエム卿に歩み寄った。

「いや、しかし、フューラー産の葡萄酒は大変格別ですな。それに、この魚介の料理も非常に美味で。いやはや、このような代物があるから、暴飲暴食がいつまで経ってもなくならないのですなっ」

プロア司祭はそう言って愉快そうに豪快に笑った。

「おっとっと、そうだそうだ。暴飲暴食を慎むように言うべき聖職者である私がこんなに飲んではいけませんな。そろそろ、控えねば」

「いえいえ、葡萄酒は主の血ですから。それくらいは主も大目に見てくれるでしょう。それに、我々が、このような美味なるものを口にできるのも、また、偉大なる主の恩寵でありましょう」

「んん、なるほど。確かに。いやはや、それならば問題ないかな。

なんて、また、飲み過ぎて酔っ払っては、神に怒られずとも、司教様に怒られてしまいますっ」

プロア司祭は再び豪快に笑うと、そこで初めてレオポルドに気付いたようで、表情を引き締めた。さすがに、初対面の人間を相手にずっと笑っているわけにもいくまい。

「司教殿。こちら、レオポルド・フェルゲンハイム・クロス卿」

デリエム卿に紹介され、レオポルドは軽く時候の挨拶を述べながら右手を差し出す。

「フェルゲンハイムといいますと、サーザンエンド辺境伯のフェルゲンハイム家ですか」

司祭はレオポルドの手を握りながら呟くように言った。

クロス家の破算については知らないようであった。一帝国騎士家の破算など帝都の外に出るほど大きな事件でもないからだろう。レオポルドにとって自家の破算という負い目を晒さずに話せる相手は

ここ最近いなかっただけか、レオポルドは心情的にだいぶ楽な気がした。

「ええ、私の祖母がフェルゲンハイム家の出自です」

「なるほどなるほど。それで南部にご興味か」

レオポルドが答えると、司祭が応じる。そこへデリエム卿が口を挟む。

「そういうことです。帝都にありますと、南部の情報はあまりこないものですからな。少し、南部に関してご教示願えませんか」

プロア司祭は人のよさそうな笑みを浮かべ、胸を打って請け負った。

「それくらいお安い御用です。おお、そうだそうだ。お二人も、どうぞどうぞ。いや、私の酒じゃなくて、デリエム卿の敬愛すべき主君边境伯爵下の酒なのですがね」

司祭はそう言っただけで高笑いし、レオポルドも釣られて笑った。デリエム卿は苦笑していた。

その後、プロア司祭は二人に南部のざっとした情勢などについて説明した。南部という边境の地の情報は帝都では貴重で、デリエム卿にとってもかなり役立つ情報のようで熱心に話を聞いていた。

その中で肝心のサーザンエンド边境伯についても有意義な情報が得られたのだった。

二 レイクフューラー 辺境伯邸にて（後書き）

一話だけでは、あんまりにも寂しいので、もう一話更新しておきます。

次回更新は1月20日であります。

三 サーザンエンド辺境伯について

プロア司祭曰くには、サーザンエンドには三つの主たる都市があり、数十の町と数百の村を抱えているそうである。

帝国本土からの移住者の多くは最も北にある都市コレステルケに居住し、辺境伯の居城がある最大の都市ハヴィナは帝国出身者と異民族が半々。南部のオアシス都市ナジカと他の多くの町村に住むのは異民族が多数であり、人口の九割は異民族であるという。

その地を治めるサーザンエンド辺境伯は帝国建国と共に設けられた歴史ある官職である。その役割は、大陸西部より進出した帝国とその国教である西方教会に臣従しない異民族・異教徒を抑え、従属させ、改宗させることにある。

帝国に忠実な勇将であったコンラート・フェルンゲンハイムが初代辺境伯に任じられ、彼とその子孫は南部の野蛮な異民族と激しく戦うこととなった。その任務は厳しく辛く難しい仕事であった。

南には荒野や砂漠に住まう野蛮な異教の諸民族が跋扈し、度々、辺境伯領に侵入しては町や村で略奪や乱暴を欲しのままにした。その為、辺境伯は幾度も軍を編成して南部へ討伐に行かなければならなかった。

サーザンエンドの北には帝国に従属はしたものの、未だに改宗には応じず異教信仰を続けるアーウェン人が居住しており、彼らは表向き帝国に従ってはいたが、積極的に帝国の為に行動しようとはしていなかった。アーウェン人領主たちは格上であるサーザンエンド辺境伯に度々反抗し、帝国からの南伐令をも無視することが多かった。

周辺に有力な諸侯はおらず、西方教会を信仰する諸侯であっても、その領地の住民は異教徒が過半を占めていた為、自由に動くことができず、せいぜいが辺境伯の援軍に数百、数十という兵を差し出すくらいが関の山であった。お陰でサーザンエンド辺境伯は代々百数

十年に渡って異教徒・異民族と孤軍奮闘してきたのである。

この長引く戦の為、フェルゲンハイム家は慢性的な財政難に悩まされた。財政を改善させる為、民から税を搾り取るうとすると、やはり、これまた異教徒・異民族である住民は大いに反発して、暴徒となり、その鎮圧と、その後の復興に余計な出費を余儀なくされた。気を長くして根気よく産業を振興し、商業を奨励し、農業に新たな農法を取り入れ、税収を増やそうとしても、定期的にやってくる南部の蛮族がせっかくの利益を根こそぎ奪い去っていつてしまう。

南伐を行うと軍費で赤字が増大する。徹底的に南部諸族を弾圧しようとしても、彼らの多くは遊牧民族であり、居住地は仮のものであつて、焼き払ってもほとんど意味はない。彼らは広い広い平原や砂漠を自由に逃げ回ってはゲリラ攻撃を繰り返し、やがて、辺境伯軍は軍費が底を尽き、歯噛みしながら渋々と撤退するのがいつものパターンとなつていた。

そんなこんなで辺境伯家は酷い財政赤字に悩まされ続け、ついにはどんなに頑張つても必要な経費が捻出できず、仕方がなく商人から金を借りることになる。最初は少額であつた借金も雪達磨式に膨れ上がつていき、当然返済できなくなる。そこで、商人は担保にしていた土地や権利を取り上げる。

このような状況は他の諸侯にも知れ渡る事態となり、そんな貧しい家に嫁ぐ嫁などいやしない。ついでに、娘を嫁がせる嫁入り費用にも事欠く次第で、フェルゲンハイム家は他家からの嫁にも婿にも事欠く有様と成り果てた。仕方がなく、親戚間で婚姻を重ねる羽目になつた。従兄弟と従姉妹、叔父と姪、叔母と甥なんていう近親婚が続くと、当時としては知られていないことであつたが、遺伝子に異常がでやすくなる。一族の者は体が弱く、能力も低い者が多くなり、やがて、子が生まれ難くなつていった。本家筋は何度も断絶し、その度に分家から養子を取つて辺境伯位を継承させていったが、一年前、第十六代目辺境伯が没した後、相続に適格な者は全くななくなつてしまつていた。唯一残つた一族の者は継承権を持たない先

々代辺境伯の非嫡出子（妾に生ませた子供）で、齡六〇にもなるロバート老のみであった。

帝国政府はロバート老を辺境伯代理に任じたが、速やかに正当な継承者を用意できない場合は、フェルゲンハイム家から辺境伯の地位を取り上げると通告した。

とはいえ、帝国としても大した税収もない貧しく、しかも反抗的な地域をわざわざ直接統治などという面倒くさいことはしたくないできれば、今のまま押し付けていたかった為、だいたひ穏当な手段を取ったのだった。

困ったのは継承問題を押し付けられたロバート老である。今まで貴族としては大変貧しいとはいえ、庶民と比べればまだ随分と良い生活を送ってきたが、フェルゲンハイム家が断絶とされると、自分はほぼ無一文で追い出される羽目になってしまう。

仕方なく、ロバート老は手段を講じた。

まず、フェルゲンハイム家に対して債権を持っている商人たちを集めて、尊大に言い放ったのだった。

「このままでは借金は返済できない。そして、このままでは当家は断絶する。そうなると、諸君の債権は消え失せることになる」

商人たちは困惑した。借金が返されないのは困る。しかし、フェルゲンハイム家に断絶されるのはもっと困るのだ。というのも、この借金はフェルゲンハイム家に対する借金である為、フェルゲンハイム家が断絶されれば、当然、債権も消失する。それどころか、今まで借金の担保に取っていた土地や権利も、次の統治者に奪われるかもしれない。土地や権利を借金の担保として譲り渡すのは、これもまた、フェルゲンハイム家との契約に過ぎないのだから。次の強力な統治者が「そんなことは知らん」などと言い出して強制的に土地やら権利やらを接收しかねない。更には前任者の失敗を学ばずに、かつてのように重税を課して、再び暴動を誘発させかねない。暴徒は商店を襲い、財産を奪い尽くすだろう。そんなことになっては商売上がったたりだ。破産すらしかねない。破産。それは商人たちにと

つては地獄に落とされるよりも恐ろしい事態だ。

仕方がなく、商人たちはロバート老に協力することにした。具体的には借金の返済に猶予を設け、また、利子を低率に設定し直した。こうして、財政破綻の危機を先延ばしにすることに成功したロバート老ではあるが、その直後、彼は熱病に罹患して、卒倒し、意識も戻らぬ状況であるらしい。

このサーザンエンド辺境伯家存続の危機に際して、周辺諸侯や諸民族はそれぞれがそれぞれ色々な動きをしているという。

ある諸侯は、あくまでフェルゲンハイム家によるサーザンエンド統治を望み、ある諸侯は辺境伯の地位を篡奪し、自らがサーザンエンドを支配しようと目論み、ある民族は、帝国人たちを北の地へ放逐し、民族の土地を取り戻そうと企み、ある民族は安定を望み、帝国との共存を模索し、ある民族は事の成り行きを見守るといった次第で、各々が己の利害と目的をもって行動しているという。

「まあ、何にせよ。これからサーザンエンドがどうなるかは全くもってわかりませんな。残念ながら栄えある皇帝陛下と帝国政府は南部のことには非常に無関心ですので、このまま帝国の介入なく、混乱に陥ることは確実でしょうな」

プロア司祭はすっかり赤くなった顔でそう言って話を締めくくった。

「なるほど。有意義なお話をありがとうございます」

「なんのなんの。こんなに美味な酒と食事を頂けるのですから、それに比べれば何ほどのことでもありません。それに、お分かりでしょうけど、私は話をするのが好きでしてな」

司祭は赤ら顔で快活に笑った。レオポルドは、ちよつとうるさくて隠し事とかには不向きそうな人だが、多くの人から好かれそうな場を明るくする人という印象を受けた。これくらい明るく話好きで、人好きされる人物ならば、民衆相手の説教は結構な人気なのだろうかと思われた。

聖職者は、あらゆる機会に民衆相手に説教をするものだ。西方教会では、週に一度の安息日には仕事を休み、教会へ行くことを推奨している。

安息日の教会では聖歌が歌われ、聖典が読まれ、そして、聖職者が説教をする。また、聖人に関する記念日などにも説教は為される。

この説教というのは、主に、聖典の中のエピソードに基づく道徳的なありがたい話をするのだが、この話を聞くにしても、何度も聞いたことがあるような、通り一辺倒のつまらない話を聞かされると聴衆も退屈して、そそくさと教会を後にしてしまう。それを防ぎ、教会の教えを浸透させ、神の存在と信仰の力を信じさせる為に、聖職者の側でも、より話をよく聞いてもらおうと、説教の内容や話し方にはあれこれ工夫を凝らすものだ。ある者は聖人の業績を物語風にして語り、ある者は地獄の世界を怪談風に語り、ある者は自らのエピソードを交えて真実味を持たせてみたり。その為、娯楽が少ない庶民にとっては教会の説教は貴重な娯楽の機会なのだ。

プロア司祭くらい明るく快活に話す人ならば、聴衆も喜んで話を聞きに来るだろう。

そこまで考えてから、ふと気づく。もう一つ聞いておこう。

「ムールド人については何かご存じですか」

レオポルドの問いにプロア司祭は顔をしかめた。

「ムールド人ですか。ふむ。あー、砂漠地帯に住んでおり、交易や遊牧を営む民ですな。少ないですが、砂漠の中にあるオアシス都市に住む者もおります。中には山賊や盗賊に身を落としている者もいて、徒党を組んで都市を襲うこともあります。その社会は部族ごとに構成され、部族は大小二十八あるようです。肌は褐色で、あー、残念ながら、我々の教えを聞いてくれる者は多くはありません」

今まで調子よく話していた司祭の口が重いのは、つまりは、そういうわけのようだ。聖職者の身からすれば、邪教を信じる異教徒について客観的に話すのは難しいことだろう。あまり非難的なことを口にしていないだけ、聖職者としてはかなり寛容だと言える。そこ

ら辺の聖職者ならば神の教えを信じない邪教徒。悪魔の使い。神の敵くらしいのことは言いそうなものだ。

「そのムールド人っていう連中は、どーいう立ち位置なんでしょうか。あー、今回のサーザンエンド辺境伯位の空白という事態に関して」

「ふむ。先程、述べたとおり、ムールド人は部族社会でしてな。その部族ごとに立ち位置は違うのです。帝国や辺境伯に公然と刃向う部族もいますし、従属している部族もいますし、中立というか様子見している部族もありますな。まあ、しかし、全体の傾向としては刃向う者の方が多いようです。帝国側についているのは、数少ない都市に住む部族が中心みたいですね。彼らは元々帝国寄りだったのですが、此度の辺境伯位の空白という事態に際して、帝国側の力が弱まっているせいで、他の反帝国派の部族に圧迫され、辛い立場のようです」

「なるほど」

プロア司祭の話聞いて、レオポルドは南部から来た異民族の使者キスカの素性がなんとなく理解できた。何故、彼女が南部からわざわざ帝都までやって来て、レオポルドにサーザンエンド辺境伯になってもらうよう頼みに来たのか、その行動の理由がなんとなく推察された。

レオポルドはプロア司祭に厚く礼を述べてから、デリエム卿と共に場を辞した。

四 レイクフューラー辺境伯邸の一室にて

「必要な情報収集はできたかね」

「ええ、十分に。わざわざお付き合ひ頂き感謝します」

デリエム卿の問いかけに、レオポルドが礼を言つと、彼は廊下を歩きながら話し始めた。

「いや、我々も南部の情勢には興味があるからな。所謂南部と呼ばれるグレハンドム山脈以南の地は帝国のおよそ五分の一ほどの国土を占めている。地域内には豊富な埋蔵量を持つ銀山や鉄鉱山も確認されおるが、情勢の悪さからほとんど手つかずのまま放置されている。また、南の海の果ての南洋諸島との交易の拠点としての役割も期待されている。つまり、南部は宝の山といえる。彼の地が今のまま放置されることは、閣下も宜しく思われていない。然るべき力を持った諸侯が統治することを望んでおられる」

その話は、南部で唯一帝国に忠誠を誓う大諸侯であるサーザンエンド辺境伯の復興に期待を寄せる内容であつて、それをレオポルドに言つということは、言外にレオポルドが辺境伯位に就き、南部を安定させられるのであれば、레이크フューラー辺境伯はそれを支援する用意があると言つてゐるに等しい。

とはいえ、現状はまだレオポルドがサーザンエンド辺境伯になれるかどうかなど全く分からない状況であり、今後、どのような展開になるか分からない中で、不用意な発言をしたくないのだろう。

しかし、レオポルドにとっては、万が一にも、キスカが言つていたとおり、彼がサーザンエンド辺境伯位を狙える位置にいったとき、帝国東岸の有力諸侯레이크フューラー辺境伯の支援を仰げる可能性があるというだけで十分な価値ある話であつた。

「で、君はこれからどうするのかね」

「とりあえず、その、南部に行つてみたいかと思ひます。まあ、帝都にいても居心地が悪いだけですし、住む場所ありませんから」

デリエム卿の問いにレオポルドは答えた。キスカの言っていたことが正しいか否か。実際に辺境伯になれるかどうかはさておき、財産も仕事も居場所もない身としては、暫し、遠くへ旅に出てみるのもいいと思ったのだ。それに、どこへ行っても破算した家の者として見られる帝都から離れたたいという思いもあつた。

「その南部から来た娘に付いていく気かね」

「まあ、そうですね。それしか手が無いもんですから。向こうに着いたら現地の情勢を知らせますよ」

帝国郵便公社の郵便網は南部にあつては配達外地域であるうが、帝都へ行く行商人などの旅人に手紙を託せば、いつかは届くだろう。「そうしてくれると助かるな。まあ、達者でやりたまえ」

そう言つてデリエム卿は辺境伯のいた広間の方へ歩み去つた。旅立つ者を相手にしては大変素っ気なくあつさりとした別れだが、彼はそういう人だつた。

レオポルドもそれを十分に知つているし、上辺だけの惜別の挨拶を頂いてもしょうがないので気にせず、辺境伯邸を出た。辺境伯邸に来るまで感じていた閉塞感や焦燥感がいくらかマシになっているのを自覚して、彼の足は自然と早くなる。

今まで追い詰められて二進も三進もいなくなつていたのが、目指すべき目標を見つけて、歩むべき道を見つけて、彼の気分は随分と上向きになつていた。

レオポルドははじめとする来客たちがレイクフューラー辺境伯邸を後にした後、レイクフューラー辺境伯は二階にある食堂で、夕食を取つていた。食堂には赤絨毯が敷かれ、幾本もの蝋燭を立てた巨大なシャンデリアが吊るされている。

何十人も同時に着けるような巨大な食卓に一人着き、その傍らには給仕とデリエム卿が控えていた。

デリエム卿が一日に得た情報をとりまとめ分析した内容は、毎日夕食のときに、晩餐会などの用事があるときは、その後に辺境伯に

報告されるのが常であった。

卿は日中に彼自身や若しくはその部下が得た情報の中から有益と思われる話を簡潔にまとめて、報告していく。その中に、夕方のレオポルドとサーザンエンド辺境伯の件も含まれていた。

その報告の間に辺境伯は香草と豆とキノコのスープを飲み干し、茹でた野菜のサラダを摘みみ、白身魚のフライを平らげていた。その合間合間に白い小麦パンを食べたり、真っ赤な葡萄酒を飲んだりしていた。

メインディッシュである子羊肉のソテーが食卓に置かれた頃、デリエム卿の話が終わった。

「なるほど。確かに、南部は宝の山といえますね。帝国の力が及んでいないことも、非常に良い。我々の影響力を強く及ばす余地が十分にあるわけですからね」

辺境伯は子羊肉のソテーを切り分けながら呟くように話し続ける。「いつか先、我々が連中と対することになったとき、我々の側に一人でも多くの有力な諸侯がいることは非常に有益ですからね。新たなサーザンエンド辺境伯を味方に引き込めるよう工作を行って下さい」

そう言って彼女は一口サイズに切った羊肉のソテーを口に放り込んで満足げに微笑み、手にした杯を傾け、血のように赤い葡萄酒を喉に流し込んでから呟く。

「まあ、我々の側に付いてくれるのであれば、誰が新しい辺境伯でも構いませんがね。クロス家の坊ちゃんであろうが、現地領主の誰かであろうが、異民族の有力者であろうが」

彼女の言葉に、デリエム卿は黙って頭を下げた。

さて、辺境伯が優雅な夕食を頂きつつ、デリエム卿の報告に耳を傾けているとき、同じ辺境伯邸の一階隅。若い女中が数人共同で寝起きする為に宛がわれている部屋で、一人の女中が数少ない自分の荷物を纏めていた。

明るい赤茶色の髪を後ろで一纏めにしている。小さな鼻と口に、吊り気味の大きな赤い瞳。大変な小柄だが、しかし、華奢ではなく、健康的に程よく筋肉のついたしなやかな体つきをしている。十代半ばほどの少女に見えた。

少女は真剣かつ不機嫌そうなしかめ面で、殆ど持っていない数少ない私物を片っ端から古臭い革の鞆に詰め込んでいく。下着に衣服類がほとんどで、あとは年季を感じさせる櫛とか手鏡、今までに与えられた給金の全額。聖典の中身を要約した小聖典。それらを片っ端から鞆に放り込んでいきながら彼女は数時間前に偶然耳にした話を思い返していた。

彼女が実の弟のように思ってきた彼がこの屋敷へとやって来て、ある司祭と会話していた内容だ。それは、帝都よりはるか南の地方の話であり、その地は大変な危険に満ちているらしい。そして、彼自身はその危険な南の地へ赴き、危険そのものへ飛び込むが如き行動をとるそうなのだ。

南の地へ旅するだけでも大変な危険を伴うことを彼女はよく知っていた。もう二度と会うことができないかもしれないという可能性を考えて、彼女はいてもたってもいられなくなった。自分を雇ってくれている屋敷を黙って飛び出した結果、発生するであろう諸々の問題や、その恩義を考慮しても、彼女はその衝動を押さえることができなかった。

彼に二度と会えないかもしれない。その顔を未来永劫に見ることができないかもしれない。彼が人生で最も危険で重要な筋目にあるときに、その場に共にいられないなんて我慢がならなかった。

ついでに、この屋敷に来ておきながら、実の姉同然であろう自分に挨拶の一つもないとはどういうことか。というか、顔も見ないってどうということなのか。自分は彼が来たことを知って、慌ててできる限り身嗜みを整えて、いつ出会っても問題ないように心構えをして、屋敷内に入った彼の行動を常に、逐一見守っていたというのに、彼は自分には全く気付かず、というか、自分を探す素振りもなく、

いつも恐い顔をしている家令のデリエム卿と、客の太った司祭と話
し込んでばかりだった。その後は、さつさと帰ってしまった。こち
とら離れている間も、朝も昼も夜も夢の中でも、ずっとずっと彼の
ことを気遣っていたというのにつ。

彼女は怒りに任せて、荷物でパンパンになった鞆を強引に閉める
と、それを引つ掴み、あちこちの壁や柱にガンガンゴンゴンぶつけ
ながら、辺境伯邸を後にして、自分が生まれ育った、実家といっ
ても差し支えない懐かしいクロス家へと向かったのだった。

五 再びクロス家の屋敷にて

レオポルドが、質に入っている自身の屋敷に戻ったとき、日はすっかり沈んでいた。夕暮れ過ぎの街に人影はなく、人々はすっかり家々に閉じ籠ってしまっているようだった。一般庶民の住む街区であれば、飲食を提供する店は掻き入れ時で、多くの客で賑わい、喧噪が外にまで漏れているものだが、上流階級が住まうこの街区ではそういつた喧噪とは無縁で、ひっそりと静まり返っていた。

クロス家の屋敷も街の通りと同じように人気も絶え、閑散としている。とはいえ、この家の場合、閑散としているのは昼も夜も朝もであり、たぶん、この先、フィゼル家に売却され、更に、他の誰かに売却されて新たな住人が入るまでこのままなのだろう。

レオポルドは己の生家の運命に嘆息しながら、玄関の戸を押し開けた。

「ぐお、何だっ」

そして、顔に叩きつけられた煙に驚愕した。見れば、玄関入ってすぐの広間には灰色の煙が充満していた。喉や鼻は詰まって息苦しくなり、目には棘が刺さったように痛む。

煙の中、目を凝らすと、広間の中心で火が焚かれていた。

「何でだっ」

レオポルドは驚愕のあまり絶叫する。

「あ、おかえりなさいませ」

煙の中から、目ざとくレオポルドを見つけ出した南部の異民族ムールド人の娘キスカが、丁寧に挨拶の言葉を口にした。

「何を燃やしてるんだっ」

「あ、えと、乾燥させた牛糞です」

レオポルドが叫ぶとキスカはおずおずと答えた。その答えを聞いて彼は再び叫ぶ。

「牛糞だどっ」

「あの、えーっと、私たちの生活では、牛糞を燃料とするのが一般的なものだ」

「牛糞を燃料にだどっ」

レオポルドは驚愕した。牛糞を燃料に使うなど、一応、貴族の端くれである彼には思いもつかぬことだった。

「しかし、臭くないのか」

「いえ、よく乾燥させた牛糞は臭いませんし、焼いても嫌な臭いはありません」

言われて、レオポルドは改めて周囲の臭いを嗅いでみた。煙たいが、確かに、糞のような臭いはしない。それどころか、少し甘い臭いがする。

「それにしても、何故、牛糞を燃料にせねばならんのだ」

「私たちの住む地は荒野と砂漠で、燃料にできる薪を十分に確保できないのです」

そういえば、確かに、聞いた話によれば、ムールド人が居住する地域は荒野と砂漠であり、薪を生み出す木々が存分に生えているという地勢ではないはずだ。

「なるほど。牛糞は貴重な燃料なのだな」

レオポルドは納得した。限られた資源の中でも、上手く生き抜く人々の生活の知恵に関心した。

「て、違っつ」

そこで、彼は話が横道にずれていることに気が付いて叫んだ。向かい合っていたキス力は驚いて体を震わせた。

「私が問うているのはそんなことではないっ 何を燃やしているかは問題ではないのだっ。 お前が何故、こんなところで焚き火をしているのかが聞きたいのだっ」

「あ、えーと、食事の用意を……」

見れば、確かに、焚き火の上には何処かからか拾ってきたと思われる煉瓦や石が置かれ、簡易な竈のような仕組みになっていた。ここでは肉が焼かれ、鍋が温められている。

「料理をするのはいいが、何故、家の中でやっておるのだっ」

「いや、いつも、家の真ん中で火を熾して料理を作るものですから……。しかし、私たちの住んでいる家では火を熾しても、こんなに煙たくならないのですが……」

レオポルドの怒声にキスカは困惑した顔で呟く。

「お前らの住んでいる家つてのはどんななんだ」

「えっと、羊の毛で作ったフェルトの、テントのようなもので、屋根には穴が開いていて……」

そこまで話してキスカは口を閉じた。

レオポルドは思い切りしかめ面で彼女を睨む。キスカは顔を背けた。

「いいか。この家は煉瓦できていて。で、天井には煙を逃がす穴が開いていない。通気性は全くと言っていいほどない。飯を作るときは、別棟にある厨房で作る。そこには、換気のできる窓もあるし、煙突を備えたコンロもある」

レオポルドはくどくどと説教臭いことを言い募る。キスカは決まりの悪そうな顔で俯いていた。

「つまり、俺が何を言いたいかというのだな。ここは、この広間は飯を作るところじゃないし、ましてや火を熾して焚き火をやるどころじゃねえってことだっ」

その後も、レオポルドはくどくどくどくと小うるさいことを言い続けていたが、いよいよもって広間に煙が充満し、あわや兩名とも窒息か中毒しかねない事態になりかけた。

二人は慌ててドアというドア、窓という窓を開け放って煙を外に逃がした。

煉瓦の家に密閉されていた煙が一斉に外へと放たれ、煙は夜空へと立ち昇っていく。これを見た周辺の住民が、すわ、火事かと街区の警視に通報したのは、全く当然の行為であろう。

警視は帝都総裁の下で帝都の安全や治安を司る公安長官の指揮下

にある役人で、帝都を三三に区切った街区ごとに駐在している。彼らはそれぞれ五十人ほどの巡查を率いており、犯罪を取り締まり、風紀を維持し、街区の清潔を保ち（ゴミ処理は警視の管轄であった）、そして、火事や災害の防止に務めている。その為、住民は火事を発見せし時は、直ちに警視に通報し、その指揮の下、消火に当たることと定められていた。

警視は直ちにクロス家へ飛んできて家の門を叩き、対応に出たレオポルドに何事かと問い質す。

レオポルドはちょっとした小火だとかなんとか言っつて、どうにかその場を逃れることにし成功した。

警視はとりあえずは彼の言葉を信じたようで、火の取り扱いには十分に注意するようにと言いつつ含めて去つていった。破産したとはいえ相手が貴族では強く言い難かつたのかもしれない。

「やれやれ、嚴重注意された程度で済んだとは運が良かった」
レオポルドは警視が去つた後、玄関のドアを閉めながら、ぶつぶつと一人呟く。

消火設備が未だ十分に整備されていない都市にとって火災とは悪夢に他ならない。特に風の強い日や乾燥した日などは都市を一つ丸ごと円焦げにしてしまうことすらあり得る。そうなつたときの人的災害には誰もが目を覆いたくなるだろうし、復興に要する費用を考えると都市の財務関係者はぞつとするだろう。故に、行政はもとより市民の自治組織も失火に際しては非常に神経を尖らせており、不注意な失火をしたともなれば、その家主は最悪逮捕されることすらあり得るのだ。

そう考えれば、今回のように煙を大量に家から吐き出すなんていう、すわ大火事かと勘違いされるような紛らわしい行為をしたレオポルドにはなんらかの行政処分や制裁があつてもおかしくはない。

まったく本当に運が良かった。と、そう思つてから、彼はふと思ひ出した。確か、レイクフューラー辺境伯は帝都の治安維持を司る

公安長官の職に就いていたはずだ。若しかすると、警視は辺境伯邸にいくらか出入りする自分に下手に手を出すと上司である公安長官の機嫌を損ねるのではないかと考えて不問に付したのかもしれない。「申し訳ありませんでした」

そんなことを考えていると、不意に足元から謝罪の声が聞こえてきた。

見下ろせば、例の失火の原因たるキス力が平伏していた。

「やめろ。そんな自分を貶めるような真似をするな。気分が悪い」レオポルドは顔をしかめて言い捨てる。なんとなく、人が自分に對してへりくだるような言動をしてるのが好きではなかった。父親が常々言っていた平等思想とかそういうものの影響かもしれないが、とにかく、下僕に傳かれて踏ん返り返っているのは性分ではないのだ。

キス力は顔を上げて、口を開けたり閉じたりしてから、先程まで火が焚かれていた床に視線をやる。当然のことながら、焚き火をしていた床は見事に焼け焦げていた。

「ふうむ。こりゃいかな。ここの辺の石を剥がして敷き直さんと話にならない」

レオポルドは顎を撫でながら焼け跡を眺める。キス力は余計にしようぼりした。

「とはいえ、ここはもう人にやつちまう家だ。俺の知ったことじゃない」

彼はニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべて言った。

「この焼け跡を見たあの強欲なフィゼル家の連中がどんな顔をするか見物だな。とはいえ、その頃にああ、俺はとくに帝都を出て南に向かっているだろうがな」

その言葉に、キス力ははっとして、顔を上げた。

「で、では、あの、来て、頂けるのですか」

キス力は期待に満ちた顔で立ち上がり、レオポルドを見つめながらにじり寄る。レオポルドはその勢いにたじろぎ後退りながらも頷

いた。

「その前に、ちと聞きたいことがある」

彼の言葉に、キスカは顔に出ていた期待を引っ込める。

「お前の目的は何だ」

「貴方に仕え、サーザンエンドへとお連れすることで……」

「それは聞いた」

レオポルドは彼女の言葉を遮り、鋭く彼女を睨む。

「俺が聞きたいのは、そんなことじゃない。何故、お前が俺をサーザンエンド辺境伯にしたいかだ」

キスカは、薄い唇を開けたり閉じたりを繰り返し、結局、声を発しなかった。

「俺が想像するに、お前は、というか、お前の属する部族は、ムールド人の中でも、帝国に近い、今まで帝国側に立ってきた部族で、辺境伯が空位になり、帝国の力が後退するのを望んでいないんじゃないか」

そもそも、全く面識のないキスカが、何の理由もなく、レオポルドを辺境伯位に就ける為に尽力するなんてことがありえるはずがないのだ。そこには、必ず何かしらの理由があるはずだ。

プロア司祭の話聞いて、レオポルドが推測したのが、前述のとおり理由だった。

つまり、キスカは、フェルゲンハイム家の血が流れるレオポルドを利用して、サーザンエンド辺境伯の勢力を保ち、己の部族の優位性を維持したいのだろう。レオポルドはキスカの部族の利益の為に利用され、権力闘争に巻き込まれ、かなりの確率で戦乱に身を投じる羽目になり、若しかすると傷つき、最悪、命を落とすかもしれないのだ。

レオポルドの問いに、キスカは何も言わなかった。その沈黙こそが回答であった。

自身の推測が正しかったことに、レオポルドは納得したように一人頷く。

「まあ、そんなことはどうでもいい。聞いたのは、確認してみたかっただけだ」

キスカは目を丸くして、レオポルドを見つめた。

「お前の言葉を全て信用したわけではないが、確かに、サーザンエンド辺境伯位は空白の状態が続いていて、俺が付け入る隙もあるよ。うだからな。それに、まあ、俺自身この町に居場所がない。行く当てもない。ともすれば、都合よく目の前にぶら下がった毒入りかもしれない果实にも飛びついてしまってもんだ」

彼は自嘲気味に言って、苦笑した。

「俺とお前の利害が一致しているのだから、何も問題はあるまい」
キスカは黒い瞳で、レオポルドを真っ直ぐに見つめて言った。

「御安心を。何があるうとも、どんなことがあるうとも、レオポルド様の御身は私が身を挺して、誰からも、何からも、お守り致します」

六 南部への道について

南部と呼ばれるグレハンダム山脈以南の半島へ足を踏み入れるには、帝都からならば二つのルートがある。

一つは帝都を南へ下り、帝国西部南岸の港湾都市アルヴィナから船に乗って半島西部イスカンリア地方の港町カルガーノに上陸し、イスカンリアの東側を南北に走るプログテン山脈を越えて、南下していき、サーザンエンドに至る海のルート。

もう一つは、帝都から東の街道を進み、大きな街道が十字に交差する交通の要衝エレスサンクロスの町から南へ下りグレハンダム山脈でも数少ない人馬が通行できる大蛇の峠を越えて、北アーウエン地方へ。そこから更に南下して、南アーウエン地方を通り、サーザンエンドに辿り着く山越えルートである。

どちらのルートも長い時間と労力を要する難行には変わりないが、海のルートは海賊に襲われる危険を除けば、穏やかな海を行くので、どちらかといえば安全といえる。また、早く到着することができる。

もう一方の山越えルートは、険しい峠越えを伴う上に、単純距離からして長い道程である為、大変危険で長い旅となる。

旅をするならば、当然海ルートの方が良いだろう。ただ、アルヴィナからカルガーノへは定期船が出ているわけではなく、商船に便乗させてもらわなければならない為、タイミングや運、それに、コネや金が必要になる。

レオポルドには、アルヴィナに知り合いなどいない為、好意に甘えてのタダ乗りは難しいだろう。かといって船賃を払えるほどの金もない。そもそも、迷信深く保守的な海の男たちが、異民族の女を乗船させてくれるとは思えなかった。

レオポルドの実質的な後ろ盾と見込めるレイクフューラー辺境伯にしても、地盤は大陸の東岸フューラー地方で、南に縁は少ないはずだ。

「となると、やはり、山越えルートしかないか」

レオポルドの言葉にキスカは無言で頷く。

二人は食堂に場所を移し、キスカが床を焦がして作った食事を食べながら今後の方針について話し合っていた。灯りは食卓の上にある縮こまった蠟燭だけなので、非常に暗いが、飯を食べないほどではない。

「というか、お前はどうかやって来たんだ」

「あ、えーと、歩いて」

庶民の旅行手段は基本的に徒歩である。とはいえ、南部の果てから帝都まで全て歩いてくるとなると大変な時間と労力がかかることは言うまでもない。

「何日かかった」

レオポルドの問いかけにキスカは指折りして、何かを数えるように考え込む。その間、レオポルドはキスカの作った羊肉らしきものの串焼きを頬張っていた。味付けは塩と何かの香草だけのようで野性的で味付けではあるが、大変美味だった。

「二月ほどでしょうか」

「二ヶ月か。そりゃあ、大変な長旅になりそうだな」

「あ、私は少し急いで休まず来ましたので、レオポルド様ですと、もう半月はかかるかと」

キスカの言葉に、レオポルドは顔をしかめる。

とはいえ、大の男とはいえ、彼は貴族の坊ちゃんである。長い旅などしたことはない。

「なるほど。確かに」

そこは素直に認めておくことにする。

「馬があればその半分近くに短縮できるのだろうがな」

そうは言っても、馬を調達する金などあるはずもない。ともすれば、ひたすら歩くより他に方法はない。毎日毎日歩いて歩いて歩き続けるしかないのだ。

「まあ、無いものねだりをしてもしようがあるまい。ここは大人し

く徒歩で行くこととして。早速、明日、出発することとしよう」

目的地も道程も向かう方法も定まったところで、レオポルドは言い、キスカも黙って頷いた。

「そういうわけで、明日から、宜しく頼む」

レオポルトはそう言っただけで右手を差し出した。当然のことながら、彼は握手のつもりで差し出した手なのだが、キスカの方は何を勘違いしたのか、その場に立膝突き、恭しく彼の手を取って、その甲に口付けした。

「誠心誠意、お任せさせて頂きます。どうぞ何なりと御命令下さい」
そうして、上目遣いでそのようなことを言った。

彼女の行動にレオポルドは呆気にとられた後、赤面する。

家が破算した故か、酒を嗜む故か、どこか荒んだ雰囲気を感じてはいるが、実際、彼は中々真面目で堅物な人物である。若い年頃の女子に手の甲に接吻されるといふ行為を唐突にされてしまうと、咄嗟に反応できず、ただただ気恥ずかしく照れてしまうのだった。

「う、うむ……」

なんとか気恥ずかしさを隠して、貴族らしく鷹揚に頷いてみたりする。

主従は、互いを見つめ合い、これから二人を待ち受けるであろう困難に、一致協力して当たらんと暗黙のうちに確かめ合った。二人の利害はほぼ共通のものであり、その運命は一蓮托生なのだから。

雰囲気としては悪くなく、良い場面なのかもしれない。

「ちよおーつと待あつたあーつ」

しかし、その雰囲気や甲高い怒号がぶち壊した。

レオポルドとキスカはぎょっとして声のした方を見る。
そこに立っていたのは小柄な少女であった。

明るい赤茶色の短い髪、吊り気味の大きな赤い瞳。大変な小柄だが、しかし、華奢ではなく、健康的に程よく筋肉のついたしなやかな体つきをしている。年の頃は十代半ばほどに見える。

レオポルドは驚きのあまり、暫し言葉を失っていたが、我に返る

と、少女に問いかけた。

「な、何で、ここにいるんだ。フィオ」

突然現れた少女こと、フィオ。正確には、フィオリアは、幾年か前に、今は亡き父が拾ってきたフェリス人孤児で、レオポルドより一つ年上の少女だった。幼馴染というよりは、姉のような存在であり、クロス家が破算するまで、この家で共に暮らしていた。家の破産後は、レイクフューラー辺境伯家の女中として雇われている。よくよく見れば、確かに服装は女中の恰好だ。手には大きなカバンを持っていたが。

「出てきた」

「出てきたって」

彼女の素っ気ない返事にレオポルドは愕然とする。

辺境伯ともなれば、自分の屋敷にいる召使の一人二人欠けようが、気にかける程度のことでもないだろう。そんな些末なことは全て家来に任せて「良きに計らえ」状態なのは想像に難くない。とはいえ、なんとかお願いして就職を斡旋したレオポルドの面目は丸潰れだ。

「一体、どういっつもりなんだ」

「どういっつもりかって聞きたいのはこっちよっ」

レオポルドの問いかけに、フィオリアが言い返す。

「帝都を出るところか、南部に行こうだなんてどういっつもりなのっ。しかも、物凄く物騒なところに行くらしいじゃない」

フィオリアは剣呑な表情でレオポルドを睨みつける。

「あ、いや、えーと、まあ……」

睨まれた方は、一体、どこで聞きつけたんだと狼狽しつつも頷く。フィオリアは更に不機嫌そうな顔になる。

「そんな危ない所に、一人で行く気だったの」

「いや、彼女と一緒に」

彼の言葉に、フィオリアは更に更に不機嫌そうなかめ面になってレオポルドを睨んだ後、キスカに鋭い視線を向けた。

キスカの方は、突然現れた少女に、どうしてだか睨まれる状況に、

困惑、狼狽しているようだった。

「あ、あー。彼女は、キスカって言って、サーザンエンドから俺を迎えに来た人だ」

とりあえず、レオポルドはフィオリアにキスカを紹介する。フィオリアは、無言で彼を一瞬睨んだ後、再びキスカに鋭い視線を向ける。

「で、フィオリアは、あー、俺と一緒に育った、まあ、姉みたいなもんだ」

続いて、レオポルドはキスカにフィオリアを紹介する。かなりてきとうな紹介ではあったが、キスカは理解したようだ。

彼女はフィオリアに向き合って、口を開く。

「キスカと申します。レオポルド様に誠心誠意仕え、身命を賭してお守りする所存です」

そう言って、深く頭を垂れた。

キスカの銀色頭を睨みつけたフィオリアは、極めて苦々しい表情で暫くの間無言だった。

何とも言い難い霧囲気の悪さというか重さに、レオポルドが泣きたい気分になってきた頃、フィオリアがそつとその小さな口を開いた。

「……私も行く」

彼女の言葉に、レオポルドとキスカは顔を見合わせる。

まず、最初に反応したのは、レオポルドだった。

「は、いや、え、ちよ、ちよつと、待てっ。何て言った」

「だからっ。私も行くってこのよっ」

フィオリアに怒鳴られ、レオポルドは顔を蒼くする。

「いやいやいやいや、ちよつと待て。落ち着け」

「私は十分落ち着いているけど」

「いや、落ち着いてない。だから、んな突拍子もないことを言い出すんだ」

「突拍子なくないっ」

フィオリアはそう怒鳴ると、レオポルドに人差し指を突き付ける。「弟が危ない所に行くつていうんだから、それに付いて行ってあげるのは姉の務めじゃない」

「そんな義務は聞いたことないぞつ。そもそも、そんなガキの買い物じゃあるまいし」

「それになつ」

彼女は突き付けていた人差し指を引つ込めて、拳で弟みたいな奴の胸を打った。

「家族はねつ。一緒にいないといけないのつ。もう、あんなふうにはバラバラになるのは嫌なのつ。お父様がいなくなつてしまつて、ベネディクトもマルゲリータもロバーツも行つてしまつて。今度は、あんたまで行つちゃうつていうのつ。そんな、そんなことされたらさつ。私、一人になつちゃうじゃないつ」

物心ついた頃から、彼女は既に一人だった。

気が付くと、教会の孤児院にいて、そこは、孤児院というよりは、強制収容所とか刑務所といった方がしっくりくるような、貧民窟に溢れる孤児をただ放り込んだだけのような場所だった。教会や孤児院の幹部である帝国人の聖職者たちは異民族の孤児たちを悪魔の子供でも見るような目で見ていて、現地人の下級聖職者は金や物を自分の懐に入れることと、子供を虐待することを生き甲斐にするような連中で、子供たちは互いにいがみ合い争っていた。誰もが自分のことだけを考えて生きていて、誰もが他人同士だった。

そんな環境で生まれ育つた彼女が初めて手に入れた家族が、クロス家の人々だった。血は繋がっていなかったが、そんなことは関係なくらい、気にならないくらい、彼らと共に過ごした日々は、騒がしくも楽しく、明るく、暖かな日々だった。彼女にとってはかけがいのない日々だったのだ。

しかし、彼女にとって幸福といえるその日々は、ある時、唐突に終わりを迎えた。当主アルベルトの死と、クロス家の破算である。生涯で唯一親と慕った養父の死を悼む間もなく、家の人々はバラバ

ラになっていった。

この悲劇が彼女に大変な恐怖と悲痛を与えたことは想像に難くない。これを彼女が耐えることができたのは、離れ離れになってしまふとはいえ、まだ、同じ帝都の中に弟と想うレオポルドがいるからだ。彼女を使用人として引き取ったレイクフューラー辺境伯とクロス家の関係は良好で、レオポルドは度々辺境伯邸を訪問していた。その気になれば、歩いて会いに行ける距離ならば、まだ彼女は耐えることができた。

しかし、彼が南部へ行ってしまうとなると話は全く違う。幾度も述べているとおり、南部は帝都から遙か南の地で、移動手段が船と馬と馬車、あとは徒歩しかない時代にあつては気が遠くなるほど遠い地だ。そうそう簡単に会える距離ではなくなるのは勿論のこと、その生死すら定かではなくなる。

誰かがその所在や近況を教えてくれればいいし、便りがあれば尚よいが、郵便網が整っている帝国中央部に比べ、辺境である南部では手紙は行商人や巡礼者、旅人に預けるしかなく、その伝達の不確かさは言うまでもない。例え、レオポルドが南部の地で倒れようとも、帝都にいるフィオリアにその情報が伝わりとは限らないのである。

しかも、レオポルドが向かうというサーザンエンドは動乱の兆しが濃厚で、何かの危険に見舞われる可能性はかなり高いといえるのだ。

今回、二人が別れたとすれば、その別れが永劫の別れになる可能性は否定できない。

家族との二度の別れを経験した彼女にとって、それは耐え難いことなのだ。

生まれたときから一人だった彼女は、家族を得て一人ではなくなつたが故に、家族の暖かさを知ってしまったが故に、過去に経験した孤独をもう二度と味わいたくはなかつた。

「あんたっ、私を、また、一人にする気なの？。私を置いて、一人

にっ」

悲痛に満ちた声を上げるフィオリアを、レオポルドは胸に抱き締めた。いつしか、自分よりも小さくなっていた涙脆い姉を。

「ごめん」

レオポルドの謝罪の言葉に、フィオリアは暫くの沈黙の後、応える。

「この馬鹿っ。もっと早くに気付きなさいよっ」

彼女はレオポルドに胸に顔を押し当ててから、顔を上げ、彼を睨んだ。

「そういうことだから、あたしを置いて、一人でどつか遠くの危ない所に行くなんて、姉であるあたしが許さないんだからねっ。あたしも同行して、危なっかしいあんたを見ててやらないといけないんだからっ」

フィオリアのその言葉に、レオポルドは苦笑して頷いた。

暫くして、ふと、彼はこの場にいるもう一人の存在を思い出して、彼女の方を見やった。

「あー。そういうわけで、旅の仲間が一人増えた」

キスカはすぐに頷いたが、少々困った顔をして言った。

「しかし、路銀の方が、あまり……」

サーザンエンドは貧しい地である。そこから来たキスカの財布に余裕があるうはずもない。そして、破産したレオポルドにも金はない。

二人が困った顔で見つめ合っていると、フィオリアが声を上げた。「それくらい大丈夫よ」

彼女はそう言うと、パンパンに膨らんだ鞆を開けると、中から皮袋を取り出して、レオポルドに渡す。

「何だこれは」

「財布代わりよ」

レオポルドは訝しがりながら皮袋を開く。中には眩い光を放つレミュー金貨が一枚にセリン銀貨が十数枚、それに小銭が多数。

「どうしたんだ。これ。まさか、お前、辺境伯閣下の金をくすねてきたとか言うわけじゃないだろうな。レイクフューラー辺境伯に目を付けられたら最期だぞっ」

レイクフューラー辺境伯は思い切った金遣いをする人物であり、吝嗇ではないが、自分が使う以外の理由で金が減るのは我慢ならぬ人物である。辺境伯から金を盗んだり、騙し取ったりしようものならば、地獄の果てまで追いかけれ、地獄の責めにも引けを取らぬ過酷な拷問と処刑が待っているとは、巷でよく噂されていることだった。

「お世話になつた人にそんなことするわけないでしょう」

フィオリアは心外だとばかりに、機嫌悪そうに顔をしかめる。

「これは、私が今まで貯めてきたお小遣いと給金よ」

「それにしたつて、レミュー金貨まであるのは……」

レオポルドは、驚きを通り越して困惑していた。レミュー金貨は、帝国が発行する最高額の貨幣であり、これ一枚あれば、大の男が一年は食っていけるほどである。

「これは、遺産よ」

遺産と言われて、誰の遺産が見当がつかないほど、レオポルドは間抜けではない。彼女の家族は、クロス家だけだったのだから。そして、そのクロス家で、金貨一枚を遣せるほどの人物といえ、亡き父しかいまい。

「お父様も、病床で家の破算は避けられないと思っていたのね。何かのときの為にと、私に遺してくれたの」

レオポルドに預けなかったのは、レオポルドはクロス家の次期当主であり、家が破算すれば、その全財産は債務処理の為、没収されてしまうからだろう。債務処理の段階で、財産を隠すような真似をすれば、それは処罰される罪である。

「そして、きつと、今がその何かのときなのだわ。これだけあれば何とかなるでしょう」

フィオリアは得意げに胸を張る。

レオポルドは、これだけあれば船に乗れるのではないかと考えたが、思い直して、大人しく山のルートに行くことにした。金があっても、必ずしも船に乗れる、または乗せてもらえるとは限らないのだ。

何はともあれ、路銀の心配がなくなっただけ、彼の気持ちは幾分か軽くなった気がしたのだ。

七 安宿にて

振り返ると、遙か遠くに高く白い壁が見えた。世界に名高き帝都の白壁である。高さ一〇〇フィート。厚さ二〇フィート。四〇〇の塔。二〇の門を備えている。

この地方都市の教会の尖塔をも凌ぐ高さの白い壁が帝都をぐるりと囲っている。この高く分厚く堅固で、なおかつ美しい白亜の城壁に、帝都を訪れる者は等しく圧巻され、帝国の強大さを視覚的に実感するというわけである。

帝国中興の祖と名高き第五代皇帝ジギスメント帝による偉業であるが、実際のところ、帝国はこれでかい壁の扱いに苦慮していた。

長らく城壁の建造費は帝国財政を圧迫したばかりか、完成してからも維持管理修繕費として毎年少なくない額の出費を強いられていた。また、壁は非常に余裕をもって市を囲むように建造されていたが、建造から五十年も経てば、膨張する人口に伴い市域は拡大していくのだが、これを城壁が阻んでいた。

その上、城壁近くは極めて日当たりが悪い為、市民からは大変な不評を買っていた。

「こんなに歩いたのに、まだ見えるのね」

レオポルドに釣られて、ほぼ同時に振り返ったフィオリアが呟く。朝早くにクロス家を後にした一行は、市場が開くと同時に旅に必要になりそうな物を買い込み、昼頃に門を潜り、それから数時間に渡って歩き続けてきたのだが、未だに帝都の城壁は視界に入るのだ。まるで、どれだけ遠くに逃げようとも、帝都からは離れられないのではないかと錯覚すらする。帝都には楽しい思い出もあるが、今となっては嫌な感情ばかり浮かんでくる帝都から逃げられないのではないかと。

逃がさんと伸ばされた帝都の手を振り切るかのように顔を前に向けて、いくらか前を初めて出会った時に身に纏っていた襤褸のよ

うな茶色い布をすっぽりとかぶったキスカが黙々と歩を進めている。その歩みは遅くも速くもなく、一定のペースを維持している。旅初心者であるレオポルドとフィオリアは彼女に合わせて歩いていた。おそらくは、旅に不慣れな二人を気遣って疲れ難い歩き易い速度で歩いてくれているのだろう。

フィオリアが持ち込んだ大金によって、当面の路銀の心配はしなくてもよくなった一行ではあったが、旅が終わっても資金が必要になることは容易に想像された為、できる限り金を節約して、馬や馬車を調達せず、また、馬車に便乗することもなく、徒歩での旅を選んでいた。

三人は口数も少なく、たまにレオポルドとフィオリアが会話する以外は、殆ど口を閉じたまま、延々と街道を東へ進んだ。

帝国第一の都市である帝都と東部主要都市を結ぶ街道だけあって、人通りは多く、頻繁に速度のある馬や馬車が三人を追い抜いて行き、馬車や人とすれ違った。

よくある旅装姿のレオポルドとフィオリアはさておき、全身を襦袢のような布きれで覆い隠した格好のキスカは非常に悪目立ちするようで、すれ違った人々は一様にぎよつとした顔でキスカを見つめていった。とはいえ、素顔を隠さずに晒していたとしても、褐色の肌の異民族など、帝国中央では滅多に見るものではない為、これまた注目されるであろう。

すれ違う人々に一樣に注目されるという、少々気恥ずかしい思いをししながら、半日ほど歩くと、夕暮れには、とある聖人の出生地として名高い村に到着した。

「今日はここに宿泊しようと思います」

こんな田舎の村には場違いなくらい、ひどく高い教会の尖塔を見上げていると、キスカが静かに呟いた。

「ふむ。では、教会の宿泊施設を借りるか？」

レオポルドは教会の尖塔から目を離して言った。

名高い聖人の生誕地ということで、この村には大きな教会があり、

少なくない数の巡礼者を受け入れていた。その宿泊施設ならば、信徒ならば誰でも安価に利用することができる。

彼の発言を受けて、二人の女性はそれぞれに否定的な表情を浮かべた。

キスカはいつもの無表情ながら、眉根をちよつと寄せて困ったような顔になり、フィオリアも同じように眉間に皺を寄せ、口をへの字にひん曲げた。

二人の顔を見て、レオポルドは思い至った。

フィオリアは一応西方教会信徒ではあるし、安息日には教会に通つてはいるし、聖典の文句を諳んじもする。しかし、教会に対する彼女の感情は最悪といつても過言ではない。生まれ育った教会の孤児院の酷さに加え、クロス家の破算の大きな要因が教会の嫌がらせだからだ。彼女にとって教会は家族をバラバラに引き裂いた怨敵のようなものである。

そして、キスカに至つては西方教会信徒ではない可能性が高い。ムールド人は帝国への反感が強いのだが、その理由の一つは彼ら独自の宗教を信仰していることもその要因の一つであった。

そもそも、帝国が神聖帝国と呼び名される所以は、帝国がそもそもは教会の武装組織である教会騎士団領が基だからである。この騎士団領が東へ東へと徐々に領土を拡大していった結果、神の意思によつて、その異教徒を滅ぼし、西方教会を大陸へと広めた偉大なる功績により騎士団総長が時の西方教会総司教に皇帝の称号を与えられ、帝国が誕生したのである。

そういつた建国の経緯もあり、帝国は異民族異教徒に西方教会への改宗を強く迫ることが多い。力のある民族はこれを跳ね除けるし、上手く取り入つて異教を信仰し続けることを黙認される民族もある。が、大半の民族は殆ど強制的に西方教会化が進められる。今まで信仰してきた異民族の儀式は否定・禁止され、偶像は破壊される。この過程で多くの民族・宗教紛争が発生するのである。

帝国とムールド人との間の対立も、よくあるこのパターンである。

ムールド人であるキスカの教会への感情が宜しくなくともおかしくはない。

「あー。いや、やはり、教会の施設よりも、もっと安い宿があるやもしれん。そちらを探してからの方がよいな。これからのことを考えると金はいくらあっても足りんからな。小銭であるうとも節約したいところだ」

二人の反応を見て、レオポルドは上手いこと前言を撤回した。しかし、その理由がよくなかった。

教会は基本的に慈善施設である。その宿泊施設よりも安い宿など滅多にあるものではない。確かになくはない。なくはないのだが、そのなくはない安い宿は、本当に、大変安い宿ということになる。宿泊料に宿の質が比例するのは言うまでもない。

この村で唯一教会の宿泊施設よりも安い宿は、無愛想な老婆が営む、ただの民家を少し改造しただけみたいな安宿で、部屋にはベッドもテーブルも灯りもなく、木の床に申し訳程度の薄っぺらい布が敷かれ、黴臭い毛布が積んであった。宿の部屋というよりは牢獄の部屋という方がしっくりくる。

とはいえ、教会の宿泊施設に宿泊しない名目を宿泊費の節約としてしまったのだから、教会より高い宿に部屋を求めるわけにはいかない。

それに、雨露さえ凌げればそれでいいじゃないか。我々は道楽で旅をしているわけではないのだ。この先、野宿する機会もあるに決まっている。それに比べれば断然マシだろう。

レオポルドはしきりとそういった点を強調し、フィオリアも同調して、キスカも頷いたものだから、結局、その安宿への宿泊が決定した。

年頃の男女三人ではあるが、宿泊料を節約する為、三人はその狭苦しく黴臭い部屋に雑魚寝することになった。

夕飯をキスカが持っていた干し肉と固焼きパンでさっさと済ませた後、三人はそれぞれ毛布を手に取った。日が暮れてしまうと、部

屋は窓から差し込む月明かり以外に灯りはなく、その暗闇の中では寝る以外に何もすることがないのだ。それに、早くに寝て旅の初日の疲労を回復し、明日は早くに村を出て、一刻も早く東へと歩みを進めようという思惑もあった。

「あー。それでは、休もうか」

レオポルドが乾いた声で言うと、キス力は黙って頷いた。真つ暗なので、誰も彼女が頷いたことには気づかなかった。

「そ、そうね。明日も早いし、早く寝ましょう」

フィオリアが早口で言つて、もぞもぞと毛布に潜り込み、玄関から見て、部屋の右隅に転がる。

反対側にはキス力が毛布に丸まっていた。

そうになると、この狭い部屋では、レオポルドの居場所はの間しかない。部屋の真ん中に寝そべって毛布をかぶる。

まだ誰も寝ていないはずだが、誰もが声を発せず、気まずい沈黙が部屋を支配する。

レオポルドがそのまま黙って目を閉じていると、横で身じろぎする気配を感じた。

「レオ。もう寝た」

そつと声がする。

「ん。フィオ。まだだけど」

二人は昔からのあだ名で互い呼び合う。

「二人で寝るのなんて、何年ぶりかな」

フィオリアが感慨深そうに囁いた。

正確にはもう一人、キス力もいるのだが、まあ、それはさておき。

「ああ、そういえば、昔は一緒に部屋で寝てたな」

「レオが一人じゃ眠れないって泣いたからね」

「いやいや、フィオが一人で寝ると夜泣きが酷かったからだろ」

「はあつ。ちよつと、何言ってるのっ。何を勘違いしてるのっ。あんたが泣くからしょうがなく、あたしが一緒に寝てあげたんでしょがっ」

「いや、違うだろ。フィオの夜泣きが酷いから、困ってたんだけど、俺と同じ部屋で寝かせたら、夜泣きしなかったんで、一緒に寝かせるようにしたって親父が言ってたぞ」

「何言ってるのっ。お父様がそんなこと言ってるの聞いたことないわっ」

二人は起き上がるとあーでもないこーでもないと、怒鳴り合いの論争を始めた。

残りの一人は、頭から毛布をひっかぶって、健気に黙って騒音を我慢していたが、言い合いが一〇分にも及ぶと、さすがに我慢しかねたのか、毛布から顔を出して遠慮がちに言った。

「あの、お二人とも……」

キスカに声をかけられ、二人も気が付いたようで、気まずそうに黙り込み、毛布をかぶって寝の体勢に戻る。

「そういえば、風が強い日には、レオ、あたしにくっついてきてたよね。風の音が恐いって言ってさ」

「そっ、んなこともあったけど……」

咄嗟に否定しようとして、心当たりがあったのか、レオポルドは渋い顔で認める。

「昔の話だ。もう十年以上前だぞ」

「うん。そうね」

そう言っただけでフィオリアはレオポルドの方へ顔を向ける。

「でも、あの時の、昔みたいに、また、一緒に並んで寝られるって、なんだか、とつても、素敵な気がする」

彼女は手を伸ばしてレオポルドの肩に触れた。

「皆、バラバラになっちゃったけど、育ってきた家もなくなっちゃったけど、何でだろう。こうやって、一緒に旅して、一緒に並んで寝ていられるのは、なんだか、少し楽しくて、幸せなんだ」

フィオリアはそう言っただけで微笑み、レオポルドはなんだか照れ臭い気分になって毛布をかぶった。

翌日、安宿の毛布にはダニやノミが大量に潜んでいたらしい。三人は翌日から体のあちこちを掻きながら歩く羽目になった。

八 エレスサンクロスにて

帝都を出て東へ三日も歩くと、ミハという比較的大きな都市に入った。

ミハは大学が三つもある帝国屈指の学術都市で、巷には学生が溢れていた。

意外と勉強家であるレオポルドは、大学や図書館にかなり興味を惹かれているようだったが、

「学問なんてのは金持ちのやることよ。あたしたちには無駄に使えるお金なんてこれっぽちもないのことを覚えてるっ」

と、フィオリアに一喝され、一泊すると翌朝にはミハを発った。

旅路は順調で、雨は降っても小降り程度と天候にも恵まれた為、一行は当初の予定である一月よりも大幅に早い、出発から三週間ほどで南北の街道が交わる交通の要衝エレスサンクロスに到着した。元々、かなり余裕を持った旅行日程ではあったのだが、何にしる早めに着けたのは僥倖である。

到着したのは、昼前であった為、とりあえず、一行は適当な宿に部屋を借り、そこに大きな荷物を預けると、広場に出ていた。

広場には飲食を提供する屋台が出ていて、中々の活況を呈していた。

南北の街道が交差する交通の要衝であるエレスサンクロスには、帝国は元より国外からも多くの人や物が集まる地である。当然、それを相手にした商売も盛んで、市の中心部にある聖オイゲン像広場には、帝国各地からやってきた旅人と、彼らを相手にした屋台が集まっており、大変な賑わいであった。

一行はその中で焼いた鶏肉を甘辛いソースで味付け、パンに挟んだ軽食を出している店で昼食を摂っていた。

「今のところ、中々順調だな」

レオポルドは痛む足首と疲れを感じる脚を気にしつつも上機嫌で

言った。最初に宿泊した安宿でダニやノミに食われて、未だに体のあちこちが痒いことを除けば、今のところ、大した問題のない旅であった。

それどころか、予定よりも随分と早くに進めている。

レオポルドの言葉にキスカは黙って頷き、二人の貴族育ちは安堵する。

ほとんど帝都から出たことのないクロス家の二人にとってこの旅はほとんどキスカ頼みなのだ。当然のことながら、三人は、旅に關してはキスカの意見を第一として行動していた。

キスカがOKと言えば、残りの二人はとりあえず安心なのであった。

「そこのお若い方々」

三人がのんびりと昼食後のお茶を啜っていると、中年の恰幅の良い男が声をかけてきた。見かけは商人風で、悪い身なりではなかった。

「お時間に余裕があれば、是非、あの方のお話を聞くべきです」

男の言葉に、三人は顔を見合わせる。キスカは黙って俯いている。フィオリアは黙ってレオポルドを見る。仕方なく、レオポルドが口を開く。

「あの方とは？」

その問いかけに、男はある説教師について説明した。

「ポートウリツヒ博士は、なんでも、フューラー公の大学で神学を学ばれた方で、大変博識で正しい見識を持った方です。博士の話というのは、今の教会についてです」

彼の言葉に、三人は再び顔を見合わせる。教会の話など、本当ならば、三人とも勘弁願いたいところだった。クロス家は、教会の嫌がらせが原因で破算したのだ。レオポルドは教会に対して良い感情を持っていなかったし、フィオリアは家族をバラバラにした教会を心底嫌っていた。そして、キスカは西方教会信徒でもない。ムール

ド人の中で西方教会を信仰している者は多くはないのだ。

「今の教会は、創始当初の慈愛と寛容に満ちた姿から変容してしまい、今や欲望に塗れて墮落しているのです。知っていますか？ エレスサンクロスの聖オイゲン教会の主任司祭には、愛人が三人いる上に、男色の趣味まであるとか。そのような墮落した教会の指導の下で、正しい信仰をすることができでしょうか。不可能に決まっています。今こそ、退廃した教会を捨て、聖典に基づいた正しい信仰を取り戻すときなのです。ポルトウリツヒ博士はそのように仰っているのです」

男は丁寧だが熱っぽく語り、それを聞いた三人は一様に驚いた。

西方教会は、帝国をはじめとする大陸の多くの国々で信仰されており、実質的には、大陸国家全ての国教であると言っても過言ではない。その教会を批判することなど、本来許されるはずがない。

教会を批判した者の多くは、不信仰者のレッテルを貼られ、いわれなき差別を受けることになる。まさに、クロス家のようにである。これがもつと酷い場合には、破門されることになる。帝国ははじめ西方各国では、破門は社会的な死刑を意味していた。破門された者と付き合うことは憚られ、あらゆる行事や付き合いから疎外される。

ところが、この町では、往来の盛んな広場であからさまな教会批判を口にしていた。しかも、周りの人々はその言葉を聞いても、気にするどころか、同意するように頷く者すらいる。

その様に、三人は驚きを隠せないでいた。

「ポルトウリツヒ博士は、いつも、今くらいの時間に、この広場の聖オイゲン像の前に立って説教をしているのです。ああ、ほら、ちようど、お見えになりました」

そう言っただけで彼が指し示す先に、痩せぎすな初老の男が歩いていた。着ているものは、襷褌とまではいかないが、粗末で質素な衣服だった。手には長い杖を切ってきたような杖を持ち、脚が悪いのか引き摺るように歩いている。

そのポルトウリツヒの後ろを多くの人々が付いて歩いていた。老

若男女、都市貴族と思しき者から貴婦人、裕福そうな商人、工房の親方、女将さん、兵士、農民、雇われ人、浮浪者まで、ありとあらゆる人間が一緒になってポートウリツヒの後ろを歩く。

ポートウリツヒは聖オイゲン像の前に立つと、大衆に向き合い、声を張り上げた。

その語り口調は穏やかで、丁寧であった。だが、その口調とは逆に、話の内容は、腐敗した教会を痛烈に批判し、今の教会指導者層を否定し、彼らこそが、主によって破門されるべきであるという、非常に攻撃的な内容だった。

そして、人々は、腐敗し、墮落した教会から、自らを切り離し、華美な行事を催したり、豪華な聖像や聖画を崇拜したりするのではなく、聖典をよく読み、主と心を通わせ、日々、勤労と節度を旨とした慎み深い生活を送り、隣人を愛し尊び、弱き者を助けるといった、素朴で純粋な真の信仰に回帰すべきであると、彼は主張するのだ。

ポートウリツヒの主張は民衆から大きな支持を得ているようだった。

というのも、教会の腐敗と墮落は有名な話であった。教会の幹部に愛人がいるとか、あまつさえ、子供までつくっているという話は珍しくもなかったし、特に、この町の主たる教会である聖オイゲン教会の主任司祭は女たらしとして名高く、教会に女子供だけで行ってはならないと噂されるほどであった。

また、聖職者たちが信者から集めた税や寄付で贅沢三昧に耽っていることも常識と聞いていいほどよく言われていることである。

勿論、全ての聖職者がそのように腐敗しているわけではない。清貧な生活を送り、隣人を愛し、弱者を助け、信仰を日々の糧とする聖職者も少なくない。少なくともはないが、多数でもないことは紛れもない事実であった。

ポートウリツヒはその不満と批判を見事に言い当てた。そして、それを臆せず堂々と口にした。そうして、自身は大衆から支持を得

ているからといって図に乗らず、少々の食べ物や衣服、生活必需品などの寄付を受け取るだけで、その他の贈り物や寄付は断固として拒否した。その清貧な態度はこれまた多くの支持を受けた。

この事態を教会が看過できるわけではない。

教会はエレスサンクロスを統治する市参事会に対して、ポートウリツヒを逮捕するか、若しくは市から追放することを強く要請した。しかしながら、市参事会員の中にも、彼の支持者は多く、結果的に市参事会はポートウリツヒに対しては殆ど何もしなかった。

業を煮やした教会は自ら手を下すこととした。

この日、ポートウリツヒが聖オイゲン像の前で説教を始めてから半時ほどがした頃、広場の片隅に白い集団がいるのに、キス力は気が付いた。

純白の甲冑に身を固めた教会騎士団の騎士たちであった。

神に仕えし純白の騎士たちは、民衆を押し退け、怒号を上げながら、ポートウリツヒの許へ向かっていく。

民衆は突如現れた教会の剣を持つ下僕の暴挙に、当初は混乱し、怯えたが、聴衆の中にいた何人かの貴族や法律家、商人などが、教会の暴挙に抵抗すべきだと民衆に訴えた。その号令の下、市民は怒りの声を上げ、教会騎士団の騎士たちを押し返し始めた。

「これはまずいな。厄介なことになるぞ」

その一部始終を広場の外れで見っていたレオポルドが渋い顔で呟く。「この場を離れた方がよいのでは？」

キス力が助言し、彼は頷いた。

教会騎士たちと民衆の衝突から逃げるように、一行はその場を離れ宿に戻った。

「エレスサンクロスの情勢は今見たとおり、かなり不安定のようにだ。レオポルドは確認するように言い、二人を見つめた。

「このまま、この町に留まるのは賢明とは思えん。さっさと町を出よう」

彼の言葉に二人は同意し、一行は荷物を纏め、宿を出た。

エレスサルクロスは別名十字の町といわれるとおり、東西南北に街道が十字に交差する町である。

ここから北へ行けば、北部の商業都市アポクリスに至り、東へ進むとフューラー地方に着く。西に戻ると帝都があり、そして、南下すれば南部である。

一行は門が閉鎖される前に急ぎ南の門へ向かった。

町に有事があるときは、門が閉鎖されることが常だからである。

その目的は、外敵が市内に侵入することを防ぐ為と、逃亡者や内部に潜んでいたスパイの脱出を防止する為である。

一行はなんとか無事に面倒な騒乱に巻き込まれることなく、門を通り抜け、南への街道を進むことができた。

九 大蛇の峠にて

エレスサンククロスから南の街道を半月歩くと、面前にグレハンダム山脈の山並みが見えてくる。

天高く空へと向かって聳えるグレハンダム山脈の、二〇〇〇メートル級の山並みは、半島の付け根に沿って、西の海岸から東の海岸まで横断し、南部といわれる半島と帝国本土との自由な往来を分断している。

この険しい山脈を越えるには、いくつかある峠を通るしかない。

その中で、大蛇の峠は最も人々の往来が盛んな峠で、古くから伝わる伝説によれば、ある巨大な大蛇が通り抜けた後といわれている。グレハンダム山脈を越える峠の中では最も整備されている峠ではあるが、その山道の幅は馬車がすれ違うのでやっとというくらいで、箇所によっては馬車一台が通るのもやっとというほど道幅が狭い。また、真冬になれば降り積もった雪で閉鎖される。

レオポルドたち一行は幾度か道の端で野宿しながら、山道を延々と上り続け、山に入って五日目の昼、峠に到達した。

峠にはいくつかの宿の他、石造りの塔を備えた関所があつて、人々の往来を監視していた。とはいえ、帝国はじめ大陸では基本的に人々の移動を禁止しておらず、関所の役人が行う仕事は、有事の際に峠を閉鎖することや、峠を抜けようとする犯罪者の検挙などである。また、峠にある宿から税を取り立てるなどの業務も行っていた。レオポルド一行は宿の一つに部屋を借りた。まだ時刻は昼だったが、長い登り坂を上り終えたばかりで、疲れも堪っていると思われたので、キスカが今日は十分に休んで明日以降の山下りに備えようと提案したのだ。旅に関してはキスカの意見を尊重しているレオポルドもフィオリアも同意して、本日の移動はこれにて終わりと相成った。

とはいえ、昼間から部屋に引き籠っているのは、つまらない。と、

フィオリアは思った。元々、彼女は行動的で活発な性格なのである。太陽が出ている間に、屋根の下に居るのは勿体ないと考えるような娘である。

「そういうわけだから、ちょっと散歩に出かけましょう」

彼女はそう言って、レオポルドを散歩に誘った。

休みだというのに、外を歩き回って休みにならないのではないかとレオポルドは考えたが、あんまり遠くまで行かなければいいかと思いついて、彼女の提案を承諾した。

「あー。えーと、キスカ、も、一緒に行くか」

レオポルドが尋ねると、部屋の隅に座っていたキスカは、困ったような顔をした。

レオポルドを見つめてから、その傍らに立つフィオリアを見る。

「……いや、私は、いいです」

「そうか。じゃあ、ちょっと行ってくる」

「お気をつけて」

キスカは頭を下げてレオポルドとフィオリアを見送った。

宿の狭い廊下を歩きながら、レオポルドは自身と旅する二人の女性の関係について考えていた。

というのも、帝都を出て旅を始めてから一ヶ月以上が過ぎているというのに、キスカとフィオリアの間にはほとんど話がないのだ。時候の挨拶くらいは交わすものの、二人とも黙っているか、或いは口を開いても、話しかける相手は必ずレオポルドで、時には、フィオリアの質問をレオポルドが経由して、キスカが答えるとかいう非効率的なコミュニケーションをすることもしばしばだった。

何故、こんなことになっているのか、レオポルドには全く分からず、ただただ首を捻るばかりであった。

キスカは寡黙な性格で、レオポルドと話するときも必要最低限以上の会話はしないので、彼女があまり会話をする必要がないフィオリアに声をかけないのは理解できる。

しかし、明るく快活で行動的なフィオリアがキスカと会話しない

のは何とも解せないことであつた。

この点について、彼は前々より尋ねようとは思っていたが、キスカもいる場所で話すのは、気が引け、後回しにしてしまっていた。今回、久しぶりにキスカと離れて二人になつた為、これを尋ねるには絶好の機会だろう。

宿を出て、少し歩きながらレオポルドは口を開いた。

「そつえば、フィオ」

「何」

「フィオつて、キスカ、と、あー、仲悪いのか」

レオポルドのこの質問の仕方はどうかと思うが、彼には他にどう尋ねればいいのかわからなかつたのだ。

「仲悪いのかつて、別に、悪くないけど」

フィオリアはそう言いながらも、どういふわけだか、不機嫌そうな顔をする。

「何でそんなこと聞くのさ」

「いや、フィオとキスカの間に会話がないなーと思つてだな」

「それは、別に、話すことないから……」

フィオリアは渋い顔で答える。その言葉は彼女にしては珍しく歯切れ悪い。

彼女は少し迷つように視線を泳がせた後、口を開いた。

「あつ、あのさ。あんまり誤解はして欲しくないんだけど」

そう前置きしてから尋ねる。

「レオはさ。あの人を信用してるの」

そう聞かれて、レオポルドは、フィオリアがキスカに対してよそよそしい理由をいくらか理解した。自分にそれを尋ねるということは、彼女は、キスカをあまり信用してはいないということだろう。

そう考えるのも理解できるといふものだ。見ず知らずの他人をいきなり信用しろというのも無理な話だし、しかも、キスカは南部の異民族なのだ。帝国本土に住む人々にとって、遙か南の辺境の異民族なんてのは、山賊か海賊か犯罪者の集団か何かみたいないメージ

なのである。話も通じないどころか、自分たちと同じような思考をしているのかどうかも疑わしい。正義や良心、慈悲の心を持ち合わせているのかさえ分らないといったくらいなのだ。

その上、キスカは言葉は通じるものの、無口で無表情なせいか、何を考えているのかよくわからない不気味な雰囲気を漂わせていると言えなくもない。

フィオリアがキスカを信用できるか不安視するのも無理からぬ話である。

「全面的に信用しているわけではないが、ある程度は信用している」
レオポルドの答えにフィオリアは小首傾げる。それを見て彼は話を続ける。

「話を聞くに、彼女の目的は俺と一致しているからな。彼女の所属する部族は、ムールド人の一部族らしいんだが、その部族は、どちらかといえば、帝国寄りらしい。つまり、彼女というか、その部族にとつて、サーザンエンド辺境伯の力が弱まることは都合が悪いらしい」

今までのどおりの現状維持を望むなら、フェルゲンハイム家の血筋の奴を辺境伯に据えるしかない。そこで目を付けられたのが、レオポルドというわけだ。他の血縁者は尽く断絶してしまったか。若しくは、何かしらの理由で都合が宜しくないのだろう。

「ま。そういうわけで、彼女、というよりは、彼女の部族と俺の利益は一致している。利益が一致しているなら、他人同士でも協力関係は成り立つだろう」

「それはそうだけど……」

フィオリアは少々腑に落ちないような、微妙な表情で頷く。

暫く黙って考えてから、口を開く。

「それじゃあ、もしも、あの人の部族の考えが変わったら」

フィオリアの指摘に、レオポルドは渋い顔になる。

確かに、そこは大きな問題である。もしも、彼女の部族が心変わりしたとき、キスカは変わらずレオポルドに仕えてくれるだろうか。

彼女の部族が変心する可能性はいくつか考えられる。例えば、今は帝国寄りである部族が今までの方針を転換して、反帝国の旗を掲げたら。若しくは、辺境伯に据えるのに、別の候補者を推すことになっただら。

その時、レオポルドとキスカの関係が今のままでいられるとは思えない。

「そこは俺も危惧しているところだな。とはいえ、まあ、今はそこを気にしてもしょうがないだろう」

気にしたところで、レオポルドたちにはどうすることもできないのだから。

「ん。まあ、それはそうなんだけど」

フィオリアは頷きながらも納得いかない様子だった。

「まあ、なるようになるさ」

「そんな楽観的な考え方で大丈夫なの。何かできることがあるんじゃない」

レオポルドの能天気な言葉に、フィオリアは険しい顔で指摘し、彼は考え込む。

今、できることはどう考えても限られている。その数少ない選択肢のうちの一つで、最も確実なのは情報収集だろう。キスカの部族の思惑、動向について調べることだ。とはいえ、帝国は南部に対して非常に関心が薄く、情報が少ない。その情報が少ない南部の中の一族の中の更に一部族のことなんか帝国人は誰も知らないだろう。せいぜい、旅の途中で漏れ聞く噂話から確実な情報を集めるしかない。

或いはキスカ本人から話を聞くということもできよう。

とはいえ、クロス家の屋敷で彼女が話したことは全てだとレオポルドは感じていた。何の根拠もない憶測ではあるが、キスカはあまり嘘が上手な方には思えなかった。彼女は率直に正直にレオポルドと接しているような気がする。

屋敷で話したときから状況が変わっている可能性もあるが、今ま

で四六時中一緒にいて、キスカが自身の部族からの便りなり伝令なりを受け取った様子は皆無であった。もしも、気付かないうちに何かの指示を受けていたとして、レオポルドの存在価値がなくなつたとするならば、いつまでも一緒に行動している意味はないだろう。キスカがレオポルドと行動を共にしていることが、キスカの部族がレオポルドを必要としている何よりの証左であるといえるのではないだろうか。少なくとも、キスカとしては、レオポルドを辺境伯にしようという目的で行動していることには、今も変わりはないだろうと、レオポルドは思っている。

しかし、考えてみると、確かにレオポルドはキスカのことを何も知っていない。彼女の部族の名前とか様子とか、彼女の部族内における立ち位置などだ。その辺りはいつか聞いておいてもいいかもしれないと、彼は考えたのだった。

一〇 キスカについて

大蛇の峠に到着した日の夜、レオポルドは早速、キスカに質問してみることにした。

フィオリアが宿の厨房を借りて作った夕食を食べながら、レオポルドはキスカに問いかえる。

「そういえば、君の部族ってというのは、なんて名前の部族なんだ？
というか、名前とかあるのか」

ムールド人の部族社会については、以前、なんとなく概略を教えられただけで、具体的なことは何もわからないのだ。それこそ、部族に名前があるのかどうかも疑問である。

「あります」

キスカは短く答え、食べかけのパンを置く。

「私の部族は、ネルサイ族といいます」

「そのネルサイ族ってのは、どこに住んでいるんだ」

聞いたところによれば、帝国寄りの部族は、基本的に遊牧民であるムールド人の中では少数派の定住生活を送っている部族だという話だった。それらの定住型のムールド人部族は、サーザンエンドに三つある都市のうち、北部のコレストルケは帝国人が多数だという話だから、首都であるハヴィナか南部のオアシス都市ナジカ。或いは、もっと小さな町や村に住んでいるのだろう。

「ネルサイ族に定まった住居というものはありません」

「ということは、遊牧民なのか」

キスカは黙って頷く。

どうやらキスカの出身部族であるネルサイ族は帝国寄りのムールド人にしては珍しく遊牧を続けている部族らしい。

「夏は馬や羊、山羊などの家畜を連れて平原を移動し、冬になると、少しの間、冬営地に定住しています」

「部族皆でか」

「いいえ。基本的には家族単位です。ただ、冬営する際には、部族のほとんどが集まっています。あと、何か有事があるときも、集合することがあります」

「なるほど」

レオポルドはキスカの部族の話を興味深そうに聞いていた。彼は元々勉強家で、そういったことを学ぶのが好きなのだ。

「ところで、冬の間、冬営するのは何故だ。冬の間の家畜の餌はどうしている」

レオポルドは疑問に思うことを次々と質問していく。それに対して、キスカは無表情に淡々と応じていた。

いつまで経っても、遊牧民であるネルサイ族の生活様式、社会、文化スタイルといった社会勉強的質問ばかり続けるレオポルドだったが、隣でフィオリアが意味ありげに咳払いをすると、ようやく当初の目的を思い出す。

それじゃあ、ということ、彼は次にサーザンエンドについて色々質問をぶつけた。そろそろ、サーザンエンドも近くなってきたので、その地の情勢について詳しい情報が欲しいと思っていたところでもあったのだ。レイクフューラー辺境伯邸で知った情報も有益ではあったが、少し大雑把すぎるというものだ。

レオポルドの質問に対して、キスカは先と同様に、短く簡潔ながらも、淡々と答えていく。

まず、サーザンエンドの人口についてだが、最も人口が多い都市は首都ハヴィナで、五万人ほどの市民がいるという。北部のコレステルケには三万人。南部のナジカには二万ほどの人口だという。この他に町が二五ほどあって、その人口を合わせると五万ほど。数百ある村の人口は合わせて二五万くらい。これで合計四〇万人。これに、遊牧民などが加わる。遊牧民の数はおおよそ一〇万くらいということだった。サーザンエンドの人口は全部で五〇万人程度ということになる。

さて、この五〇万人の内訳はというと、帝国の多数派である帝国

人と呼ばれる人々は、ここでは圧倒的な少数派で、一割に留まるといふ。北部に多く住み、人口の二割程度を占めているのはアーウェン人で、南部には主に遊牧民であるムールド人が居住する。ムールド人は二八部族あるが、これを合計すると、一〇万人ほどとなり、全体の二割となる。残りの多くはテイバリ人で、彼らがサーザンエンドの多数派民族となる。

なお、宗教としては、帝国の国教である西方教会信徒が二割ほど。あとは、土着の伝統的な宗教を信仰しているそうだ。

次に、サーザンエンドの産業についてだが、北部は比較的農業に向いている土地であり、小麦やイモ、野菜、果実を生産されているものの、それほどの収穫量は見込めないという。中部では牧畜が盛んで、牛などの家畜を飼いつつ、農業をする半酪半農を営まれているが、これまた、それほど豊かではないらしい。そして、南部は農業に不向きな乾燥した痩せた土地で、専ら遊牧が行われている。キスラの部族もこれに含む。

この他、中部の各地に鉱物資源があることが知られているが、鉱山設備も道路整備もされていないので、今のところ、利益を生み出していない。

サーザンエンドの不安定な情勢を嫌ってか、隊商や行商人はサーザンエンドに寄りつかず、これを迂回していくルートが主となっていて、商業も発達しているとはいえない。

聞けば聞くほど、魅力を感じさせない地勢だ。

その上、雨が少なく乾燥していて暑く、砂埃が酷いともなれば、どうして、そんなところにわざわざ住んでいるのかと問いたくなるくらいだ。

更におまけに住民は反抗的で、年貢もろくに収めないどころか、武器を手にして襲い掛かってくるともなれば、統治者にとっては、ろくでもない土地といえるだろう。

「話には聞いていたが、厄介極まりない土地だな」

レオポルドが渋い顔でぼやくと、隣に座っていたフィオリアが素

っ気なく言い放つ。

「土地買う前に荷車買うなってね」

これは、聖典の中にある故事である。ある農民が土地を買つ前から、新しく買う予定の土地の収穫物に過剰な期待を寄せ、その収穫物を運ぶ荷車が必要だと考えて、荷車を先に買ってしまい、結局、土地が高くて買えなかったという話で、要するに、手に入る保証がある前から、過剰な期待をしたり、無用な心配をするなどということである。

レオポルドは苦々しい顔で黙り込む。

キスカは少し困惑した顔で、両者の顔を交互に見つめた。

レオポルドはわざとらしく咳払いをしてから、質問を続けることにした。

「あとは、サーザンエンドの有力者について知りたいのだが」

この時代は、まだ封建社会と呼ばれる時代であり、社会はピラミッド状の構造をしている。帝国でいえば、トップは皇帝であり、最下層には何千万もの庶民の階層がある。その間には公伯などの諸侯や、男爵、騎士といった中間支配階層が何層にも連なっている。

これは、諸侯の社会構造においても同じで、帝国のピラミッドの小型版が諸侯それぞれの社会にあるわけである。

当然、サーザンエンドでもそれは同じである。トップにある辺境伯と最下層の庶民の間にはいくつもの中間支配層がある。中小貴族や豪族というふうにいわれる連中である。サーザンエンドを支配する為には、この中間支配層を掌握する必要があるのは言うまでもない。

キスカ曰くには、サーザンエンドにおける有力な勢力は七つほど存在するという。

北部には、サーザンエンドの北隣のアーウェン地方の諸侯から支援されたアーウェン系のガナトス男爵が他の勢力を圧迫し、その勢いに押された北部の小領主たちは帝国系のドルベルン男爵の下に集まって同盟を結び、両者の勢力は拮抗しているという。

中部では、首都ハヴィナはフェルゲンハイム家の生き残りであるロバート老とその部下が辛うじて維持していたものの、テイバリ人系のブレド男爵は辺境伯位を狙っているという話だった。帝国系領主のウォーゼンフィールド男爵は事態を静観していた。

南部は主にムールド人の地盤であるが、帝国寄りのムールド人部族の連合である七長老会議は辺境伯への協力を申し出ていた。このうちの一部族がキスカの出身部族である。他のムールド人部族は、帝国に対して反抗的だったが、身内同士の間で争いが絶えず、統一された勢力とはなっていなかった。ただ、その中でクラトウン族の勢いは盛んで、クラトウン族と、それに近い部族、従属する部族を合わせると、南部の半分近くを支配しているという話だった。

「なるほど、よくわかった」

キスカの短い簡潔にして的確な説明に、レオポルドは満足した。「あなた、随分と詳しいのね」

フィオリアが、キスカを見つめながら言った。どこか棘があるような言い方だ。

とはいえ、彼女の疑問も領けるというものだ。庶民に対しては、学校教育もろくにされていない帝国においては、識字率すら酷いものである。特に、それは辺境の異民族に対して顕著である。というのも、庶民に対する教育は、学校がない代わりに教会がそれを担うことが多い、それによって庶民の何割かは最低限の知識を得ていた。故に、西方教会信徒ではない異教徒である異民族に対する教育は全く為されていないと言っても過言ではないのである。

そういつたわけで、一般的な異民族の庶民においては、文字も読めないくらいに、教養というものが欠けていたわけである。生まれた村の教会の尖塔が見えなくなる所まで離れたこともなく、一生を終える者も少なくないのである。己が住んでいる地域に関する知識もなければ、自分たちを支配する領主層のことも何も知らないというのが一般的な庶民であろう。

そういつた観点から見て、キスカは一庶民にしては、知識が豊富

過ぎるのだ。フィオリアはその点に違和感を感じたようだった。レオポルドもその言葉を聞いて、確かに、そうだなと疑念を抱く。

「族長だった父に聞きました」

その答えで、クロス家の二人はなるほど納得する。族長の娘であれば、地域の実情に詳しいのも頷けるという話だ。

よくよく考えてみれば、辺境伯に据える候補を出迎えに行く使者が、そこらの庶民であるはずがないのだ。それなりの地位と立場がある者を派遣して当然であろう。それが、フェルゲンハイム家のきちんとした家来でないのは、情勢が不安定すぎて、帝都に人を派遣している余裕もないからなのかもしれない。

「しかし、君は、族長の娘ということとは、言うなれば、部族の姫なんだろう。そんな君がこんな遠方まで私を迎えに来たのは何故だ。君の父上はどういうつもりで君を行かせたのだ」

確かに、高い地位にある人物ではあるが、姫様を使者代わりに使うのは不可思議である。

「私が志願したので。それに、父はもう亡くなりました」

と、キスカが無表情で言い、レオポルドはなんだか悪いことを言ったような気がした。どういうわけだが、フィオリアにも睨まれる。「私には兄弟がいませんので、今の族長は、父の兄、私の伯父が務めています」

「え。じゃあ、あなたはお母さんと二人きりなの」

「母は私が幼い頃に亡くなっています」

フィオリアの問いに、キスカは相変わらずの無表情で答える。

ということは、キスカは家族がない天涯孤独の身ということらしい。同じように家族のいないフィオリアは、彼女の身の上に共感したようで、うるんだ瞳でキスカを見つめていた。

「じゃあ、あなたも一人きりなのね」

フィオリアは感極まったように、キスカの手をぎゅっと握って、彼女を見つめる。キスカはちょっと困ったように俯く。

「しかし、あの、伯父や伯母、従兄弟もいますから」

「そう。伯父さんたちは優しいの。寂しい思いはしてない」

フィオリアはお節介ともいえるような気遣いを見せる。家族がないことに恐怖ともいえる感情を抱えている彼女には、家族がいな
いということは、放っておけないことなのだろう。

「ええ、まあ」

キスカは曖昧に答えてから、淡々とした口調で続ける。

「婚約者ですから、大事にされています」

「婚約者っ。あなた、婚約者がいるのっ」

フィオリアが驚いて声を上げた。

「ええ、私の部族では、従兄弟同士が結婚するのが古くからの慣わ
しで」

「そうか。婚約者がいるのか」

キスカの答えに、フィオリアは渋い顔で一人呟いていた。

翌日以降、キスカに対するフィオリアの態度は、以前とはかなり違っていた。

「今日はかなりいい天気ね。絶好の旅日和といえるわ」

「大蛇の峠は霧が多いのですが」

「そうなの。じゃあ、この景色が見えるのは運が良いってことね」

二人は目に見えて親密になり、会話は非常に増えていた。特に、
フィオリアからキスカに話しかける量が多くなっているようだった。

レオポルドは、どういうわけで二人が急に仲良くなっているのか
分からず、首を傾げるばかりであった。

「ほら、レオ。さっさと行くわよ。ぼんやり突っ立ってないで、早
く来なさい」

フィオリアに呼びかけられて、レオポルドは先に行く二人を追い
かけた。

一 クロヴェンティ司教の館にて

大蛇の峠を通り、グレハンダム山脈を越えると、北アーウエン地方に入る。

ここから先は帝国南部と呼ばれる、帝国本土とは、一線を画した地域である。ここでは、帝国人は少なく、多くが異民族であり、異教徒である。帝国中央政府の力は十分に及ばず、一応は帝国に従属してはいるが、殆ど自立した異民族の諸侯が支配していた。

南北アーウエン地方は、アーウエン人の住む地域である。四の伯領、二の司教領、十数の帝国子爵や男爵などの領邦が分立しており、その多くはアーウエン人領主である。

帝国には非協力的どころか反抗的で、その命令に簡単に従ったことはまるでなく、帝国がいよいよ武力行使も辞さぬという態度を示すと、渋々と順々な態度を取る程度の連中である。

当然のことながら、南部における帝国の名代のような立場であるサーザンエンド辺境伯に対しても反抗的で、歴代の辺境伯は、北部にあつて、帝国との連絡線を分断するアーウエン諸侯との関係に苦心させられてきたものである。ただでさえ、帝国本土とかなりの距離があるというのに、その間に横たわるアーウエン諸侯が敵に回るとなれば、サーザンエンド辺境伯は完全に孤立無援の状況に追い込まれてしまうからである。

この南北アーウエン地方を北から南へ縦断するには、徒歩で一ヶ月を要し、南アーウエン地方を過ぎれば、ついにサーザンエンドである。

グレハンダム山脈を越えた先には、まず、グラペスという都市があり、レオポルド一行は、そこで一泊し、山越えの疲れを癒した。「いいことを考えた」

その日の夜、食堂で干からびたような肉の塊が浮いているシチュウを突きながら言った。

「何」

宿の食堂で出された糞不味いシチューと乾燥しきつてボロボロに砕けるパンに辟易としていたフィオリアが不機嫌そうに尋ねる。パンを砕いてシチューに沈める作業に没頭していたキスカも顔を上げて、レオポルドを見つめる。

「いや、これからの方策について色々と考えていてな」

レオポルドは食べる気もないシチューを押し退けながら言った。

「俺の最終的な目標は、勿論、サーザンエンド辺境伯の座に就くとだが、今の情勢を見るに、そりゃ、かなり難しいことだ。このまま、サーザンエンドに行つてもすんなり事が運ぶとは思えない」

キスカ曰くには、サーザンエンド辺境伯の家柄であるフェルゲンハイム家の血筋は尽く断絶しており、今や、最も、その血統に近く、継承権を有するのは、レオポルドという話であった。

とはいえ、そのフェルゲンハイム家に成り代わってサーザンエンドを支配しようという有力勢力はいくつもあるようで、すんなり、フェルゲンハイム家の当主に収まることはできたとしても、サーザンエンドを支配できるとは限らないのである。配下の男爵が反旗を翻して辺境伯位を強奪しに来るかもしれないのだ。

「そうなったとき、俺の動かせる兵力がいくらいるかは分からないが、どう考えても大した数にはなるまい」

フェルゲンハイム家に忠実な家来や、帝国寄りのキスカの部族などを糾合して、対抗できる兵力になるかどうか疑わしいところである。まだサーザンエンドに入ってもいないレオポルドには想像しかできないところだが、あまり期待はしない方がいいものである。未来の予測は悲観的であるべきだと彼は思っていた。

「そこでだ。そうなったとき、援軍を派遣してくる味方を作っておく。援軍を送るまではしてくれなくても、頼めば支援や敵の牽制くらいはしてくれる勢力をだ」

「そんなことできるの。ていうか、そんな味方になってくれそうな人なんているの」

レオポルドの策に、フィオリアは疑問を呈し、少し考えてから、ふと思いつきを口にする。

「それって、レイクフューラー辺境伯のこと」

「いや、違う。辺境伯は、おそらくは、俺を支援してくれるが、あまりにも遠すぎて、直接的な支援にはならん。せいぜい、資金や武器を援助してくれるくらいだろう」

もしも、レオポルドが窮地に追い込まれたとき、支援の急使を発しても、レイクフューラー辺境伯の許に使者が辿り着く頃には、既にレオポルドは息絶えていることだろう。それくらい遠くては話にならない。

「アーウエン諸侯を味方にするのですか」

キスカが怪訝な顔つきで尋ねた。

帝国本土から隔絶された南部にあつて、サーザンエンドに直接的影響力を及ぼせる勢力といえ、まず、浮かぶのはアーウエン諸侯である。

「しかし、彼らは北部のアーウエン系領主に味方するでしょう」

中でもアーウエン人のガナトス男爵は勢い盛んで、サーザンエンド辺境伯位も狙っているという。同族の男爵を差し置いて帝国系のフェルゲンハイム家を支援してくれるとはとてもじゃないが思えない。サーザンエンド辺境伯をアーウエン系にしてしまえば、アーウエン人は最早南部では恐い者なしなのだから。

「まあ、多くのアーウエン諸侯はそうだろうな」

レオポルドは思わせぶりなことを言い、フィオリアとキスカは顔を見合わせる。

「しかし、中には、アーウエン人辺境伯の誕生を阻止したいと思っている奴もいるだろう。これ以上、異民族色を強くしたくない勢力が。異教徒を増長させたくない連中が」

彼のこの言葉で、フィオリアもキスカも、その存在に思い至った。が、何とも言えぬ顔をした。

というのも、彼が言わんとする勢力とは、つまり、

「西方教会だ」

レオポルドの言った結論に、フィオリアはあからさまに嫌そうな顔をして、完全に食べる気の失せたシチューを押し退け、キスカは気まずそうに顔を伏せた。

「もっと具体的に言うなれば、レガンス司教とクロヴェンティ司教だ」

レガンス、クロヴェンティ両司教は、アーウェン地方に領地を持つ有力な司教である。

帝国では、諸侯と呼ばれる領邦君主は貴族だけではない。中には、大司教や司教、大修道院長といった上級聖職者も含まれる。彼らも広大な領地を保有し、統治している。こういった聖職者の領邦君主を聖界諸侯と呼ぶ。

「確かに、聖界諸侯ならば、アーウェン人の伸長は望むところではないでしょう」

キスカは納得する。

異民族にして異教徒であるアーウェン人の伸長を防ぐために、レオポルドたちの味方に回る可能性は十分にあり得る。

問題はフィオリアが教会に嫌悪感を抱いており、キスカも異教徒であって、教会に良い感情を抱いていないことである。まあ、言うなれば、それだけである。二人が我慢すればいいだけのことなのだ。「そういうわけで、俺たちは、レガンス司教領とクロヴェンティ司教領に寄ってからサーザンエンドに向かうことにする」

レオポルドの出した結論にフィオリアは不満を隠そうとしなかったし、キスカは戸惑っているようだったが、彼はあえてそれを無視した。

山脈南のグラペスの町から、一週間南へ歩くとクロヴェンティ司教領に入る。その首都はオコロブという町で、その中心部にある広場に面した館に司教はいるらしい。

とはいえ、居場所がわかっていても、司教本人に面会するのは非

常に難しい。というのも、司教ほどの上級聖職者の身分は公伯と並ぶほどの高位者である。レオポルド程度の騎士身分では全く釣り合わない存在である。

司教のすぐ下に位置する副司教、司教座聖堂参事会長レベルでも面会してくれるとは思えない。レオポルドに相応な相手となると、司祭か聖堂参事会員程度の下級幹部クラスだろう。

まあ、それでも、いいかとレオポルドは思っていた。大事なものは細くてもいいからパイプを作っておくことだ。下級幹部でもいいから、内部に顔を合わせた人物がいることに意義がある。今はまだ没落した帝国騎士に過ぎないが、近い先に、辺境伯候補として名が出る程度になったとき、自分と会ったことがあり、名前を知っている人物が司教領にいるということが重要なのだ。

そういうわけで、レオポルドは、司教の館に挨拶と称して訪問した。帝国騎士程度の身分があれば、無碍に追い払われるようなことはなく、丁重に一室へ案内された。

ちなみに、身分を証明するものとは、ずばり、服装である。高級な衣服は非常に高価であり、一般庶民には手に入れることもできない代物であった。故に、見るからに高価な衣服に身を包んでいる人物は、それだけで高貴な身であるとの証明になったのである。

レオポルドは、家が破算した結果、衣服の多くも売却していたので、衣服は簡単なものしか所持していなかったが、フィオリアが思わぬ大金を手にしていたので、これを使って高貴な身分に相応しい衣服を揃えていた。

細いシルエットの丈の長い赤い上着に、その下には絹の白いシャツを着込む。首元にはリネンのクラヴァットを飾っていた。下は濃紺の長ズボンに、革の短ブーツ。それに加え、羽飾りの付いたつばの広い帽子があるが、屋内では、脱いでいた。これだけ揃えるのに、金貨が一枚消えてしまった。貴重な資金を衣装代に費やしてしまったことを浪費と捉えるか投資と捉えるかは、後々わかることだろう。ちなみに、今回の訪問に、フィオリアとキスカは同行しておらず、

宿に留まっていた。フィオリアは教会に対する不信ゆえであるのは言うまでもなく。キスカについては、異民族を同行させることはメリットがないどころか、デメリットが大であると判断した。

一人、正装に身を包んだレオポルドが、待機していると、金色の縁取りが為された白い聖服に身を包んだ年老いた聖職者がやって来た。小柄で柔和な顔つきの人の良さそうな老人である。後ろには部下らしき簡素な聖服の若い聖職者が従っている。

レオポルドは起立して恭しく頭を下げ、挨拶と自己紹介をした。

「これはどうも。クロヴェンティ司教を務めておりますトマス・カラブラです」

老人が名乗り、レオポルドは緊張に身を固くした。まさかまさか、司教様ご本人が出てくるとは思いもしなかった。表情も一瞬凍りついたが、すぐに気を取り直して、笑顔を取り繕って右手を差し出す。

「お会い出来て光栄です。司教様下」

司教はにこにここと微笑みながらレオポルドの右手を細い皺だらけの手で握り返す。

「こちらこそ、クロス卿。まあ、お座りになって」

二人が座ると、それまで控えていた若い聖職者が、二人の前にお茶の入ったティーカップを置き、部屋を出て行った。

きちんとした正装に身を包んでいるとはいえ、初対面の輩相手に部屋で二人きりになるとは、警戒心がないのか、余裕なのか。

「まあ、お茶でもどうぞ。一心、神に仕える者の家ですからね。お酒を出せないのは残念ですが」

「いえいえ、ありがとうございます。頂きます」

レオポルドは恐縮して勧められるがままにティーカップに口を付ける。

「さて、ところで、クロス卿はアレですか。サーザンエンドへ向かわれる途中なのですか」

同じようにティーカップを傾けていた司教がカップを置きながら尋ねる。

「はい、その通りです」

どこでそれを知ったのか、というか、何をどこまで知っているのか全くわからなかったが、ここで否定してもしょうがないので、レオポルドは正直に答えた。

「ふむ。なるほど。それで、私のところに参ったのは、まあ、神に祈りにとくかではないでしょうねえ」

「いえいえ、こちらの聖堂には今朝方、礼拝に行かせて頂きました。大変素晴らしい聖堂です」

これも嘘ではない。彼は今朝方、きちんと聖堂に礼拝に行つて、少なくとも額の寄付もして来た。そうしておくことで、教会関係者の目に留まるようにしておいて、少しでも心証をよくしておこうとの打算ゆえではあったが。

「いや、帝都から来られた方には恥ずかしい限りの小さな聖堂ですがね」

確かに、聖堂は小さかった。金や銀で飾り立てられてもおらず、絢爛豪華といった帝都の大聖堂とは比べ物にならなかった。しかし、建物は小さいながらも洗練されていてセンスが良く、内部もシンプルにして調和のとれた静かな雰囲気満ちており、レオポルドとしては、この方が神の家に相応しいのではないかと思っていた。

「まあ、それはさておき、クロス卿が参られたのは、辺境伯位を巡るサーザンエンドでの出来事で、我々に何かしらの助けを求めるということではありませんかな」

司教はずばり核心に触れてきた。

レオポルドの存在とその目的を知っていれば、彼が自分たちに何を求めてくるかは容易に推察できるだろう。

「その通りです」

レオポルドはここでも正直に頷く。

「私は、これから、サーザンエンドに赴き、辺境伯に就任し、かの地で起きている騒乱を鎮めたいと思っています。その為の援助を、司教猥下に期待して参りました」

彼ははつきりきつぱりと目的を全面的に表に出して言い切る。これだけ、相手に自分の意図がバレているのでは、隠すことなど何もあるまい。逆に、オブラートに包んで妙な言い回しで相手を不愉快にさせる方が自分の利益を損なう可能性がある。あとは、こちらの利益と相手の利益が共通のものであると説得し、相手の温情に縋るのみだ。

「宜しいでしょう。我々は貴殿を支持し、可能な限り支援しましょう」

あまりにも呆気なく、司教の口から支援を約束する言葉が出てきて、レオポルドは呆気にとられた。口約束とはいえ、あまりにも簡単に事が進んでしまった。

「我々もサーザンエンドの行く末には危機感を抱いておるのですよ。帝国に従順な辺境伯が就任するのならば、それに越したことはなく、その為の支援は惜しまないつもりです」

レオポルドが共通の利益を訴えるよりも先に、司教は既にその点について、十分承知しているようであった。

「帝国や教会に敵対するような者がサーザンエンド辺境伯に着くことになれば、南部は反帝国派が支配することになるでしょう」

今でさえ、反帝國的な諸侯が跋扈している南部において、唯一最大の帝国系大諸侯のサーザンエンド辺境伯まで反帝国に回れば、両者の拮抗していたバランスは崩れ、南部は一気に反帝国の機運が高まる事が予想される。分離独立を目指す動きになる可能性も否定できない。

「そうなれば、我々にとつても、民にとつても不幸なことです。というのも、南部が反帝国を目指せば、帝国は南部に兵を派遣し、この地は今までにない戦乱に巻き込まれることでしょう。そうなったとき、最も被害を受けるのは、民なのです」

それを避ける為には、帝国に従順な者が辺境伯になるべきであると司教は考えているらしく、それ故に、司教はレオポルドを支援するつもりのようなのだ。

「ただし、我々にもできる範囲があります」

というのも、あまりに教会勢力がレオポルドを支援すると、ただでさえ帝国系のレオポルドに反帝國的で異教徒でもある異民族から反発を買う可能性があるからだ。また、アーウエンの聖界諸侯がレオポルドを支援することによって、他のアーウエン諸侯がサーザンエンドに介入する口実を与えることになるかもしれない。それ故に、教会勢力からの支援は陰に陰に行うべきだというのが司教の考えであるらしい。

レオポルドもその点には同意し、司教による支援の意向に感謝の意を表明して、その場を辞した。

全ては口約束であり、口頭での確認のみである。具体的な支援内容も定まっていはいない。

しかし、まだサーザンエンドに到着してもいないレオポルドが具体的な支援の確約を求める立場にはない。まずは、彼がサーザンエンドに到着して、辺境伯位を狙える位置にいつてからの話である。レイクフューラー辺境伯と同じである。何にしても、実績のない相手など誰も完全には信用してくれないのだ。

「さて、どうなることやら」

クロヴェンティ司教の館から退出したレオポルドは帽子を深くかぶりながら一人呟いた。

一二 剣の修道院にて

クロヴェンティ司教との会合が上々な結果に終わった後、レオポルドは投宿している宿に戻って、その宿の食堂で夕食を摂りながら二人の同行者に会合の内容を話した。

「司教様はどうしてあなたの目的を知ってたのかしら」

消し炭かと思うくらい焼かれた羊肉をナイフで突っいていたフィオリアが渋い顔で言った。

「ふむ。おそらくは、レガンス司教の方から聞いたのだろう」

レオポルドは同じように黒い羊肉をナイフで突きながら考えつつ答えた。

その答えにキスカは怪訝な顔をする。

レガンス司教はクロヴェンティ司教と並ぶ南部の聖界諸侯である。その司教領は、クロヴェンティ司教領よりも、いくらか南にある。

レオポルド一行がまだ至っていない地の司教から聞いたのではないかとこの推察に違和感を感じたようだ。

「俺は、帝都のレイクフューラー辺境伯の屋敷で、レガンス司教付司祭からサーザンエンドについて話を聞いていてな。その司祭が上司の司教にそのことを伝えていたのは間違いない。で、レガンス司教からクロヴェンティ司教へと話がいったと。ま、そんなところだろうな」

教会が強い力を持っているのは、教会の教えは、神の意思であるという人々の精神面への影響力と共に、寄付された広大な土地や莫大な現金収入などの財力の他にも、それらと同じくらい、教会が大陸中にネットワークを張り巡らせていることにある。各地の教会、修道院から、逐一情報は教会の本部に伝わり、また、教会と教会、修道院と修道院もこれまた密な情報交換をしている。情報の力が偉大であることは言うまでもなく、その点において、教会は当時トップクラスのレベルを誇っていた。

それ故に、おそらくは、帝都でレオポルドが話した内容は、教会の本部や関係部署、南部の主要な教会や修道院などに伝わっているとみて間違いはないだろう。

「それって大丈夫なの」

「俺が辺境伯位を狙っているって話が教会関係者に広く伝わっていることがか。概ね問題ないと考えている」

不安そうにも見えるフィオリアの問いにレオポルドは渋い顔で答えた。

彼が問題ないと考える理由は、まず、第一に、教会にとっては、レオポルドが辺境伯に就くことがメリットになるからである。

クロヴェンティ司教が語ったように、また、レオポルドが考えたように、教会にとっては、帝国寄りのサーザンエンド辺境伯が居続けることが南部の安定と南部における教会の地位の維持・向上に役立つと考えている。そして、その帝国派の辺境伯候補は今のところ、適任とされる人物がいない状態が続いている。辺境伯位に意欲を見せている現地領主もいるが、彼らは異教徒・異民族であり、彼らが帝国に大人しく従うのかは甚だ疑問であり、また、教会と友好的な関係を維持できるか非常に疑わしい。

その為、教会は、レオポルドの目的を知っても、それを妨害するどころか、支援するものと思われた。事実、クロヴェンティ司教も支援の用意があることを口頭で約束してくれている。

問題があるとすれば、辺境伯候補として適役といえるレオポルドの存在を知った、辺境伯位を窺う現地領主たちや帝国に反抗的な異民族がどのような反応をするかである。どう考えても好意的なお出迎えをしてくれるとは思えない。

とはいえ、教会の内部に伝わっている情報が、教会と付き合いのない異教の領主や異民族にそうそう簡単に伝わるとは思えない。両者は潜在的な敵対関係にあるのだ。

以上の考えから、レオポルドは、現状は問題ないと判断していた。それどころか、教会の内部で、次のサーザンエンド辺境伯候補にレ

オポルドという適任の者がいるという印象付けが行われることは好都合とすら考えていた。

「それでだ。この後、俺たちはレガンス司教の方にも行く予定なんだが、その後、もう一つ、教会関係の施設を訪問しようと思ってる」

「どこですか」

キスカの問いに、レオポルドは答えた。

「剣の修道院だ」

剣の修道院は、正式な名前を聖ギンデルカール修道院という。

聖ギンデルカールとは、かつての聖人の名前である。かつて、教会がまだ大陸中に広まる前、古代の帝国に弾圧されていたとき、教会信徒を捕えて男は殺し、女は奴隷にしていた悪代官を倒したとか、自分に反乱扇動の冤罪を被せて逮捕しに来た一〇〇人の兵士と戦って勝ったとか。皇帝の面前で、皇帝の臣下で最も強い元帥と剣の試合をして見事勝利を収め、感心した皇帝が改宗するきっかけをつかったとかという伝説とか英雄譚で語られる。この聖人は、非常に優れた剣術を身に付けていたということで、聖ギンデルカールは剣術の守護聖人とされており、騎士や軍人からも人気が高い。

この剣の聖人の名を冠したこの修道院は、聖ギンデルカールに倣い、剣術を切磋琢磨することによって、信仰心を高め、また、悪魔や反教会の不信心者から、教会を守るために戦うという趣旨の修道院である。修道士たちは、いずれも優れた剣士であるという。

それに加え、修道院というものは、修道士の労働による商品の利益や巡礼者からの寄付などで豊かなもので、また、信仰の為の修練を行う目的故、人里離れた地にあるものである。それが、異教徒の跋扈する南部にあれば山賊や何かに襲われることも多い。そういった輩を撃退する為に、剣術が欠かせなかったのかもしれない。

この修道院が、他のアーウェン諸侯に配慮して多人数の援軍を派遣するのは無理にしても、何人かの一騎当千の強者をこっそりと派

遣してくれば、心強い味方になるに違いない。

そんなわけで、レオポルドはレガンス司教領に加え、剣の修道院をも途中の目的地に加えたのだった。

一行は、翌日、オコロブを発ち、南へ向かって歩き出した。細い街道を半月ほど南下していくと、レガンス司教領に入る。

レオポルドはレガンス司教領では、司教座聖堂参事会員の一人と会談し、ここでも好意的な応対を受け、できる限りの支援を約束してもらえた。

レガンス司教領を出て、さらに南へ数日歩くと、サーザンエンドはもうすぐ近くではあるが、ここで、今度は進路を東へ向ける。剣の修道院は街道から少し外れた平原の真ん中にある。

剣の修道院までは、まともな道もなく、ただただ平らな野っ原の歩き易そうなところを二日ほど歩いていく。東に進路を向けて三日目の朝。真っ白の輝く朝日の眩しさに顔をしかめ、目を細めながら歩いていると、地平線の彼方に四角いクリーム色の塔が見えてきた。それでもペースを緩めず黙々と歩いていくと、昼頃には修道院の建物の全景が見えてきた。

修道院は黄色っぽいクリームみたいな色の無骨な四角い塔や棟がいくつかあり、それらを渡り廊下で繋いでいた。いずれも基礎は石造りで、壁は分厚い煉瓦製だった。小さな窓はかなり高い位置にあって、ちよつとした砦のような外観だった。

修道院の中には、完全なる俗世との隔絶を謳い、外界の人との接触を極度に忌避するところもあるが、剣の修道院においては、違っている。剣の聖人ギンデルカールにあやかろうという騎士や軍人の巡礼も多く、客人を受け入れるのに慣れている様子だった。客人用の部屋がいくつも用意されているくらいである。また、修道院の中には女子禁制のものもあったが、聖ギンデルカール修道院においては、女子修道院を併設している為、女子禁制というわけではない。

応対の修道士は異民族のキス力を見て、少し眉をひそめたが、レ

オポルドが咄嗟に彼女は教会に改宗した異民族だと方便を使つてなんとか皆揃つて修道院に入ることを許された。ただ、フィオリアのキスカの女子二名は女子修道院の方に宿泊してもらい、食事もそこから別に摂ることになった。回廊で囲まれた中庭か、その傍にある集会所でのみ、異性との会話は許されるという。それ以外の場所では会話どころか目線を合わせることもすら禁止である。

とりあえず、三人は中庭で、今後の方針について、話し合った。

まず、レオポルドはクロヴェンティ司教から渡された紹介状を手に、修道院の有力者と会合を持つ。その間、女子二人は食糧や水、衣服を手に入れ、まだまだ続く旅に備える。今日は一泊して、明日の朝、再び中庭に集合して、旅を再開する。これらの方針を確認した後、レオポルドは二人と別れた。

客人用の部屋に荷物を置き、旅装から例の正装に着替えてから、彼は修道院の事務室に赴き、名を名乗った。

応対していた若い修道士は、よく分からなそうな顔をして呆けていたが、その後ろで書類仕事をしていた中年の修道士が立ち上がり、若い修道士を押し退けて、前に立った。

「是非、修道院長がお会いしたいとのことです。どうぞ、こちらへ」
中年の修道士はそう言つて、レオポルドを二階の部屋に案内した。やはり、こちらにも、レオポルドの名前は伝わっているようだ。次期サーザンエンド辺境伯候補として。

案内された二階の部屋は中庭に面した応接室のようで、窓からは青い芝生の眩しい広い中庭を一望できた。庭を眺めていると、ぞろぞろと数人の修道士たちが現れた。全員が全身白く長い衣服を着て、フードをかぶっている。彼らは庭の真ん中辺りに散らばると、一斉に木剣を振るい始めた。剣の修道会の名は伊達ではないようで、その剣捌きは、貴族として少々剣術も嗜むレオポルドから見ても、非常に優れたものであった。おそらく、そこで修練している修道士剣士と戦ったら自分は確実に負けるだろう。

「お待たせしてしまい、申し訳ない」

そう言いながら部屋に入ってきたのは、壮年の修道士だった。真っ白な長い衣服を身に纏い、頭は綺麗に禿げ上がり、毛一つなかった。顔つきは柔和だが、体つきは老人にしてはがっしりとしていて、腕も太く、手も分厚く無骨だ。

「いえ、こちらこそ、突然の訪問にも関わらず、お目通り頂き、大変恐縮です」

レオポルドは貴族風に礼をしてから、改めて自己紹介をした。

壮年の修道士はマルク・ポーションという名の、修道院長代理だという。

「まあ、どうぞ、お座りになって。いやはや、今日は中々蒸しめますな」

修道院長代理はそう言つて、中庭に面した窓を開ける。季節はそろそろ夏で、南部はその訪れが早いようだ。乾いた風が部屋に吹き込み、微かな蒸し暑さを消し飛ばす。中庭で修練する修道士剣士たちの掛け声が聞こえてくる。

「やや、ちと、外の声が煩いですかな」

「いえ、全く。耳に心地よいくらいです」

修道院長代理の言葉に、レオポルドは微笑して答えた。

レオポルドは、まず、クロヴェンティ司教から渡された紹介状と、ついでに預かつてきた修道院宛の手紙類を渡した。

修道院長代理は、手紙類を傍に控えていた中年の修道士に手渡し、紹介状に目を通した。その間に、中年の修道士は手紙類を持って部屋を出て行き、部屋には二人だけが残された。

「我が修道院も、司教猥下と同じく、できることを致しましょう」

紹介状を読み終えた修道院長代理の回答は、両司教と全く同様の内容だった。できることをする。つまりは、できないことはしない。そのできることというのは、司教が、修道院が決めることだ。レオポルドには具体的な支援内容を約束させる力も地位もない。今はこの回答に甘んじるしかないのである。

教会としても、できることは限られているのだ。他の異民族・異

教徒の諸侯・部族を刺激せず、なるべく穏便に事を運ばなければならぬ。南部では教会は、大陸本土のように絶大な力を有しているわけではないどころか、非常に苦しく弱い立場なのだ。

「何卒よろしくお願いいたします」

今のレオポルドにはこうして頭を下げるしかないのだ。

世の中とは、こうやって、よろしくよろしくお願いしますお願いしますと頭を下げて生きていくものなのである。

一三 黒髪の修道女について

レオポルドと修道院長代理の会談は上々の結果に終わり、二人はお茶を飲みながら、世間話に花を咲かせていた。帝国本土から遠く離れた南部においては、レオポルドが話す昨今の帝都での話は非常に重宝されるのだ。

互いのティーカップが空になった頃、窓の外から何やら騒動が聞こえてきた。

「はて。何事でしょうかね」

修道院長代理は怪訝そうな顔で立ち上がると、窓の方へ向かった。なんとなく、レオポルドも付いて行き、傍らに立って窓の外を見やっただ。

前述したとおり、窓からは回廊に囲まれた中庭を見下ろすことができる。

その中庭では、先程まで修道士たちが木剣を振るって修練に励んでいた。しかし、今、修道士たちは、修練を止め、レオポルドから見て右手の方を向いていた。そちらに視線をやると、そこにはやたと図体のでかい若い貴族が突っ立って、何やら怒鳴っている。

何事かとレオポルドと修道院長代理が並んで、暫く観察していると、要するに、この貴族はいくらか己の剣術に覚えがあるようで、優れた剣士が多いと聞く、この剣の修道院の修道士と手合せがしたいと、そういうことらしい。

今にも剣を抜いて戦いたがる貴族に対して、修道士は、自分たちの剣は信仰と精神修行の為に磨いているもので、その剣を振るうのは、神の敵を相手にするときだけであり、それ以外では、原則として剣を交えることはない。という旨を述べてやんわりと拒絶するが、相手の貴族にそれを聞き入れる様子はない。とかく、貴族という連中には自分の思い通りにならないと我慢がならないという自分勝手に我儘な輩が少なくはないのだ。

修道士たちは困惑し、互いに顔を見合わせる。

いつまで経っても煮え切らない態度の修道士たちに苛立つ貴族は、手にした木剣で一人の修道士を指名して、

「おい、貴様、私と勝負せよ」と傲慢にも言い放つ。

周りの修道士たちは、そんな勝手をされては困ると抗議するが、貴族は聞く耳を持たない。木剣を構えてすっかりやる気である。

指名された修道士は木剣を構えることもなく、事の成り行きを見守るかのようになり、黙ってただ突っ立っている。

その我関せずといった態度が余計に勘に触ったのか、貴族は気合の入った怒号を放ちながら木剣を突き出す。

正式な剣術の試合や勝負ではないものの、いきなり攻撃を仕掛けるなどは許されることではない。唯一、許されるとすれば、それは、剣の本来の使い場所である戦場においてのみである。戦場においては卑怯もクソツタレもないのは言うまでもない。戦場で卑怯だなどと言ったら笑いものだ。

しかし、ここは戦場ではない。修道院である。しかも、勝負というか試合というか手合せをしようという互いの認識が成立もしていないうちに、手を出すとは卑怯極まりない愚劣な行為である。手を出した貴族の中では成立していたのかもしれないが、客観的に見れば、明らかに不意打ちであり、一方的で身勝手な行動である。その行動にその場にいた誰もが驚き呆れ軽蔑する。

突然の奇襲を受けた修道士も、さすがに驚いたのか、一瞬、動きが遅れたものの、素早く屈んで、突きだされた木剣を避ける。木剣は修道士の頭上をすり抜けていき、フードの上端を微かに掠めている。その勢いで修道士がかぶっていたフードが脱げた。そこから現れたのは長く艶やかな漆黒の闇の如き黒髪だった。

相手が姿勢を直す前に、黒髪の修道士は右脚を勢いよく踏み出し、石畳を踏みしめる。折り曲がった膝を伸ばしながら、立ち上がる勢いに乗せ、右手にしていた木剣を突き出した。その勢いと速さたる

や、相手の貴族の比ではなく、目にも止まらぬと言っても過言ではない速度で、木剣の丸みのある剣先は貴族の腹に突き刺さる。真剣であれば、衣服と肌を突き抜け、肉を切り裂き、内臓を貫き、骨を砕いて背中から剣先が飛び出るくらいの勢いだった。

無防備な腹に、先に丸みのある木製のものとはいえ、剣を突き刺された貴族は唾液と胃液を噴き出しながら仰向けに卒倒する。

その一部始終を見ていたレオポルドは唾然としていた。相手の貴族の愚劣さと修道士の素晴らしい剣技もさることながら、その修道士が黒髪だったことに最も大きな衝撃を受けた。

西方教会において、黒とは大変縁起の悪い悪魔の色とされており、人々は異常なまでに黒を嫌悪し、忌避している。西方大陸において黒い髪の間人は滅多にいないが、たまに黒髪の子が生まれたりすれば、悪魔の子だと糾弾され、生まれて間もない乳児であっても火刑に処されることも珍しくなく、その子を産んだ母親をも、悪魔とセックスしたに違いないとして焼くことも多い。それくらい忌避され、嫌悪されている黒髪を持つ人間が教会の、修道院に入っているとは、一体如何なることか。

隣に立つ修道院長代理を見やると、彼は明らかにまずいことになったと言いたげな苦々しい顔をしており、慌てた様子で部屋を飛び出していった。おそらく、中庭へと急いだのだろう。

とりあえずは、ここにいでもしょうがないので、レオポルドも中庭へと降りてみることにした。

「ソフィーネっ。なんとということをしてくれたのだっ」

レオポルドよりも一足早く中庭に達した修道院長代理は黒髪の修道士に向かって怒鳴った。

驚いたことに、無礼な貴族を打ち破ったのは、黒髪の修道女であった。女性にしては長身で、手足はすらりと長く、髪とは対照的に肌は新雪の如く白い。切れ長の吊り目に真紅の瞳。顎はほっそりとしていて、全体的にシャープなラインの顔立ちである。

「攻撃をされたので、自衛の為に反撃致しました」

ソフィーネと呼ばれた黒髪の修道女は眉間に皺を寄せ、憮然とした調子で答える。

「それにしても加減というものがあるだろうっ」

修道院長代理は額に青筋を立てて怒鳴り散らす。確かに、彼女の攻撃は本気だったように思えた。相手を殺すくらいの覚悟で突きだされた剣だった。

「恐れながら、戦いに加減はないと思います。いつ何時であろうとも、剣を振るときは全力で振るべきと信じております」

ソフィーネの精神論みたいな反論に、修道院長代理は顔を真っ赤にして歯噛みした。

修道院長代理とソフィーネが言い合っている間に、レオポルドは一撃でやられた愚劣にして無礼な貴族の御尊顔を見に行った。周囲には修道士が集まっていて、大丈夫か。生きてるか。と、介抱している。

「げっ」

貴族の顔を一目見て、レオポルドは思わず声を上げていた。

「この方を御存知で」

修道士に尋ねられ、レオポルドは顔を歪める。御存知も何も。

「ウィツカードルク伯です。あー。白亜公の御嫡男です」

レオポルドの答えを聞いた修道士たちの顔が一拳に青くなった。

白亜公は帝国でも最も力を有する大貴族である。というのも、白亜公は現皇帝の伯母の夫にあたる皇族にして、若き皇帝を補佐する有力者である。大法官兼高等法院院長という役職にあつて、帝国司法界に強い影響力を持ち、帝国にいくつかある派閥のうち最大規模とされる法服派の代表格である。今の帝国で最も力を持つ権力者を挙げると言われれば、十人に五人は白亜公と答えるほどの実力者。それが白亜公である。

その子息が、全く、出来損ないの愚劣極まりダメ息子だということとは、帝国宮廷では公然にして暗黙の了解であった。大した腕もな

いくせに、剣士を気取って、あちこちに武者修行に出かけていつては、そこら辺で勇名を馳せる剣士に勝負を吹っかけ、敗れると、逆上して不正があったとか何とか言い出して、裁判だ何だと騒ぎ出すことで有名だった。

レオポルドは帝都にいた頃、幾度が白亜公の華麗なる宮殿の如き屋敷に父と共に招かれたことがあり、遠目ながら、そのバカ息子ウイツカードルク伯を見る機会もあったのだ。

レオポルドからその話を聞かされた修道士は青くなり、修道士から、その話を聞かされた修道院長代理も、顔色を赤から青に急激に変化させ、ついには土気色にまでなってしまった。

「こ、これは、困ったことになったぞ……」

修道院長代理は真つ白な顔でおろおろと右往左往しながら乾いた声を出す。

一方、最大の当事者であるソフィーネは白い顔はそのまま、顔をしかめて黙り込んでいる。

「い、一応、生きてはいるようですが、気を失っておられます。あー、あと、おそらく、骨や内臓も、無事だとは思いますが……」

ウイツカードルク伯の様子を看ていた修道士の一人が報告した。伯は相変わらず仰向けに倒れ込んだまま気を失って、口からは泡を噴いているが。

「生きていても怪我がなくても重大事には変わりないだろうがっ。正当な勝負に負けただけで裁判沙汰にするような御仁だぞっ。これほどやられて黙っているはずがあるまいっ」

修道院長代理は怒っているのか泣いているのかよくわからないような顔で叫んで、頭を抱える。

「聞くところによれば、この間、ウイツカードルク伯を負かせて、打撲を負わせてしまったさる將軍は、先日、ようやく五年に及んだ裁判が終わり、伯に治療代及び慰謝料として一〇〇〇セリン銀貨を支払うことになったそうです」

「打撲で一〇〇〇セリン……」

レオポルドが追加情報を提供すると、修道院長代理は余計に落ち込み、天を仰いだ。今にも神にでも祈り出しそうな勢いだ。

ちなみに、一〇〇〇セリンともなれば、都市の中に家を一つ建てられるくらいの金額であり、將軍からすれば年収ほどの金額であろうか。決して少なくない額の出費である。

「ところで、こんな時で申し訳ないのですが、彼女は一体」
レオポルドはふと関係ない質問をし始める。

修道院長代理は神の啓示でも降ってこないかと天を眺めるのに忙しいようなので、代わりに壮年の修道士がそつと小声で答えた。

「二〇年ほど前に、近隣の町の教会に捨てられていたのを、前の修道院長が引き取ったのです。前の修道院長は、非常に開明的な考えの方で、髪が黒いだけで、悪魔の子とするのはおかしいと言われておりました。まあ、聖典にも、黒を悪魔の色とはしてありますが、黒という色を全て否定しているわけでもありません」

確かに、聖典は、黒を悪魔の色とはしているが、黒という色自体を否定しているわけではないのだ。あくまで、悪魔の色は黒であるとしているだけで、黒い髪や目や肌をしていたら、そいつは悪魔だとか書いているわけではない。それがどういうわけだが、長い歴史の間に、黒は悪魔の色だから、黒が含まれているモノは全部悪魔の仲間みたいなものという迷信が広まってしまっていたのだ。故に、聖職者や神学者の中には、黒を全て否定するのはおかしいという論を展開する者も少なくない。

「ただ、今の院長様は、あまり……」

壮年の修道士は渋い顔で咳きかけてから、修道院の中の事情を外の人に話すことに躊躇いを覚えたのか、言いかけた言葉を飲み込んで口籠る。

「しかし、彼女は非常に優れた剣の腕を持っていますね」

「ええ、幼い頃から、この修道院で、剣術を学んできたせいか、若い者の中では、最も優れた剣士ですよ。ただ、加減を知らないといつか、いつでも全力で相手と戦うのが、少々厄介なのですが」

なるほど。と、レオポルドは頷き、壮年の修道士に礼を言う。彼には一つ、良い考えが浮かんでいた。

「私に良い考えがあります」

別室に移った修道院長代理に、レオポルドが声を潜めて囁いた。「良い、考えですか」

未だに青い顔の修道院長代理の言葉に、彼はゆっくりと頷く。

「ウィットカードルク伯の怒りを逸らして、この修道院に害を及ぼさない方法です」

「その方法とは……」

修道院長代理は僅かながら生氣を取り戻して、身を乗り出す。

「あの黒髪の修道女に全ての罪を着せるのです」

レオポルドの言葉に院長代理は息を飲む。

「幸いに、と言うべきか、なんと言うべきか。今回の事件は正式な勝負ではなく、たまたま修道院内で起こった私闘に過ぎないので。その勝負を修道院は認めていないし、そこに修道院は一切関与していない」

つまり、今回、起きたのは、あくまで個人同士の私闘に過ぎず、修道院がセッティングした勝負ではない。たまたま修道院の中庭で個人的な闘争が発生しただけである。そこに修道院の責任はない。全ては個人同士の問題であり、トラブルは本人同士で解決すべきである。そこに修道院は関知しないと主張することは難しいことではない。

要するに黒髪の修道女ソフィーネに全責任を押し付けてしまうということだ。

ウィットカードルク伯が文句を言ってきたら、修道院は知らぬ存ぜぬを決め込んでしまえばいい。うちはそんな勝負を認めていないし、あなたたちが勝手にやったことなのだから、その勝負で発生したトラブルは、その当事者同士で解決してくださいよ。と、そう言って逃げてしまえとレオポルドは言っているわけだ。

修道院としては大変楽な決着であるが、全責任を自らの修道院の仲間に押し付けるといふのはあまり夢見の良い話ではない。

「しかし、ソフィーネはうちの修道院に所属している者でありまして……」

修道院長代理も仲間を犠牲にする、ある意味、卑怯な解決方法に難色を示す。

「それに、所属元である修道院の監督責任を問われる可能性も」

「ならば、先手を打って、彼女を追放しては如何です」

レオポルドの提案に修道院長代理は啞然とする。

「ウィツカードルク伯の意識が戻る前に、修道院内で私闘を行ったという罪で、彼女を修道院から追放するような恰好で逃がしてしまうのです。そうなれば、修道院と彼女は関係ない存在になります。伯の関心も自分を倒した後、逃げ去ってしまった彼女の方へと向くでしょう」

「あ、いや、確かに、そうすれば、伯の怒りは修道院に向かないかもしれませんが。とはいえ、しかし、仲間である彼女を、そんな目に遭わせるのは……」

修道院長代理は青い顔で俯き口籠る。

レオポルドは声を抑えて囁く。

「これは好機なのです」

彼の言葉に修道院長代理は目を見開く。

「修道院に黒髪の女。良く思わない人間は少なくない。そうではありませんか」

レオポルドの指摘に、修道院長代理は黙ったまま身動きもせず彼を見つめていた。

「修道院の中にも好ましく思っていない人間はいるでしょう。例えば、新しい今の院長様とか」

主要な修道院の院長職については、教会の本部から派遣された名門出身のエリート聖職者が任命されることが多い。剣の修道院においてもそれは同じで、幾月か前に、前の修道院長が亡くなった後、

帝都から新院長が派遣されてきたとレオポルドは聞いていた。

開明的であったという前院長と同じように、新院長が開明的な思考の持ち主で、悪魔の色だという黒い髪を持つ人間でも分け隔てなく扱ってくれる人物であればいいが、一般的にはそうでない人間の方が圧倒的に多いのが現実である。

また、教会から派遣された異端審問官やら何やらが彼女を見つけたとき、なんと言うか。今まではなんとか見つからずにきたか、若しくは院長が庇ってきたのかもしれないが、その院長亡き後も、今までどおり、修道院として彼女を守りきることができなのか。何らかの理由をつけて追い出した方が得策なのではないか。

その考えは常に修道院長代理の頭の中にはあった。レオポルドもそれを察している。

「この一件が公になったとき、修道院に黒髪の女がいるという話まで広まれば、教会の上層部がなんと言うでしょうか」

黒髪の女を修道院の中に置いておくだけでも至難の業だというのに、その女が事件を起こして、それを庇うとなれば、余計に大変な事態であることは言うまでもない。

修道院として、どのような手段を講じるのが、最も被害が少なく効率的かは明らかである。ただ、それでも、仲間を斬り捨てるという卑怯とは思えない行動に踏み切るには勇気がいる。

「これは、彼女にとっても、最善の策なのです」

そこへレオポルドはすかさずこの方法の正当性を吹聴する。

「このまま修道院で彼女を庇い続けるのは非常に難しい。いつかは限界が来るでしょう。そのとき、害は修道院のみならず彼女にも及ぶのです」

「しかし、彼女は生まれてこの方、ずっとこの修道院の中で生きてきたのです。いきなり、外に出されても……」

この問題にも、レオポルドは素早く解決案を提示する。

「ならば、私が預かりましょう。私はこれから更に南のサーザンエンドに行く予定ですから、殆どの人の目の届かない場所に連れて行

「くことができます」

教会の力も、白亜公の力もほとんど及んでいないサーザンエンドであれば、彼女の身の安全は保障されるだろう。修道院との繋がりをお断りされる可能性も低い。

そして、ここまで言えば、レオポルドの目的が何かは言うまでもない。彼としては、この機会に、素晴らしい剣の使い手であるソフィーネを自分の配下に収めてしまいたいのだ。これから行くサーザンエンドは非常に不安定な情勢下であり、当然、治安も宜しくないと考えた方がいい。そうなったとき、武器を扱える人間がレオポルドとキスカの二人だけでは心もとない。もう一人、しかも、抜群に強い剣士がいれば心強いというものだ。

レオポルドのこの目的に、修道院長代理も気付いているかもしれない。気付いていたとしても、両者の利害は共通しているし、レオポルドに恩を売ることのできるのだから、修道院にとって悪い取引ではない。

結局、修道院長代理は、レオポルドの提案を受け入れた。

一四 サーザンエンドにて

レオポルドたちは昼前に訪れたばかりの剣の修道院をその日の夕方には発していた。当初は修道院に一泊し、翌朝出発という予定だったのだが、例のソフィーネとウィツカードルク伯の一悶着があった為、予定を大幅に繰り上げたのだ。

ソフィーネの木剣が余程堪えたのか、泡を噴いたまま起き上がらないウィツカードルク伯が目覚める前に、さつさと彼から離れて、面倒事を回避しようというわけだ。

ソフィーネは生まれ育った修道院を離れることに大変な難色を示していたが、レオポルドが修道院長代理にしたような説得をして、彼女を納得させた。それから、素早く荷物を纏め、旅支度をするように指示した。ついでながら、女性用の宿舎にいるキスカとフィオリアを呼んでもらい、全員が集合したところで、逃げるように修道院を後にする。

「ウィツカードルク伯ね。噂は聞いたことがあるわ」

道中、ソフィーネを連れて行くことになった経緯を聞いたフィオリアが不機嫌そうな顔で言った。

「騎士道物語にハマって騎士だか剣士だかを気取って、そこら中で迷惑を振りまいてるボンクラでしょ。騎士道を気取ってるくせに、何か都合の悪いこととか、気に入らないことがあると、すぐに父親の権威に頼って、裁判だ何だって騒ぎ出すって話じゃない。確か、白鳥騎士団とか恥ずかしい名前の団体を作って、正義の味方ごっこみたいなこともしてなかったかしら。ああ、それから、領地で、町娘とか村娘に手を出してるらしいわ。まったく、本当に糞みたいな野郎ねっ」

「随分と詳しいな」

フィオリアの言葉に、レオポルドは感心して言った。とはいえ、最後の方の汚い言葉使いは感心できないが。

「キレニア様に聞いたの」

「キレニア様って、レイクフューラー辺境伯か」

キレニアは、フィオリアが一時就職していたレイクフューラー辺境伯の名前である。辺境伯ともなれば、貴族の中でも非常に高貴な身分である。一介の女中と気軽に話をするようには思えない。

「あの人、お喋り好きなの。部屋の掃除とか、身支度の手伝いとかしてたらよく話しかけてくるのよ。で、その話のほとんどが本当か嘘がよくわからないゴシップとかスキャンダルとか、あとは他人の悪口と陰口なの。性格悪いよね」

フィオリアはそう言って、面白そうに苦笑する。

今まで雲の上の人みたいに感じていた高位の貴族の、意外と人間らしい一面を知って、レオポルドは妙な気持ちになった。

「あの」

レオポルドとフィオリアの会話が一段落したのを見計らってか、背後から声をかけられた。低く落ち着いているが、どこか尖った感じの声音だ。

二人は歩きながら振り返る。最後尾を歩いていた紺色の長い衣服に身を包み、深くフードを被ったソフィーネがレオポルドを見つめていた。眉間に皺を寄せ、渋い顔をしている。鋭く尖った視線がレオポルドに向けられている。

「私はこれからどうなるのですか。というか、あなたは私をどうするつもりなのですか」

そう言われて、レオポルドは、黙ってフィオリアを見る。何故か、フィオリアも険しい顔をしていた。

「それは私も聞きたいところね」

フィオリアからも質問を浴びせられる。

「この綺麗な修道女さんを連れてきて、どうするつもりなの」

レオポルドはどういうわけか責められているような気がして、視線を前に向ける。前方ではキス力が黙って歩いていた。こちらの会話や様子は耳に入っているはずだが、ずっと前を向いて黙々と歩

いていて、気にする素振りもない。本心では気にしているのかも
れないが、口を挟む気はないようだ。

「いや、別に、どうもこうも。まあ、これは、アレだ。人助けみた
いなものだ」

誰かに助けを求めるのは諦めて、レオポルドはソフィーネとフイ
オリアを交互に見やりながら答える。

「目の前に窮地に陥っている人がいれば助けるのは当たり前という
ものだろう」

レオポルドの言葉に、フイオリアとソフィーネは非常に似通った
胡乱な目でレオポルドを見つめる。まるで信じていないのは言っま
でもない。

「というのは建前だ」

二人に無言の圧力をかけられて、レオポルドはすぐに直前の発言
を撤回し、本来の理由を述べた。

つまり、これから向かうサーザンエンドは、情勢が不安定であり、
治安も良いとは思えない環境で、いつ山賊やら盗賊やらに襲われる
か全くわからない状況である。その地を行くのに、戦うことができ
る人間はいくらいても多過ぎるということはない。

「あなたは、神に仕え、信仰に生きようとしていた私に、人を殺せ
というのですか」

「まあ、そうなるのかもしれないな。いや、そう言っているような
ものだな」

ソフィーネの刺々しい視線を受けながらレオポルドは認めた。

「とはいえ、君が剣を向けるのは、教会の教えに従わぬ神の敵ばか
りだ。ある聖人の言葉にあるだろう。神は人を一人殺した者を許さ
ないが、異教徒を百人殺した者を英雄とするってな」

見事なまでに自分勝手な理論である。同じ人の命に別々の価値が
あるとでもいうのだろうか。おそらくそうなのである。ある聖典
に準ずる扱いを受けている古典には、神に仕える英雄が延々と異教
徒を殺し、異教徒の町を焼き、異教徒の国を滅ぼすような話があり、

それを教会は賛美しているし、教会での説教で引用されることまであるのだから。教会が異教徒の命をどう思っているかなと言わずともわかるというものだろう。

「それを言ったのは、聖人ではありません」

レオポルドの言葉に対して、ソフィーネは苦い顔で否定した。

「あれ。そうだったか」

「かつての教会騎士団総長オルベンデルの言葉です。彼は福者にはされていますが、聖人ではありません」

「そうだったか。まあ、どっちにせよ、教会の見解としては、異教徒はいくら殺しても問題ないってことだろう。ならば、君が異教徒相手に剣を振るうことに何の問題がある」

ソフィーネは険しい顔をして彼を睨みつける。黙り込んだ彼女に向かつて、レオポルドは更に言葉を重ねた。

「それに、君とて、修道院にそれほど未練があるわけではないだろう」

「何故、そんなことがあなたにわかるのですか」

「修道院に残りたいという気持ちがあれば、俺の説得にもっと強く反抗してもよかったはずだ。本当に、生まれ育った家から離れたくないって奴は、あんな説得くらいじゃ納得しないもんだ。それこそ、泣くわ喚くわ殴るわ蹴るわで、もう」

「レオっ。何言ってるのっ」

レオポルドの言葉の途中でフィオリアが口を挟む。顔を真っ赤にして、レオポルドに掴みかかる。

「痛っ。痛いから、フィオっ」

義姉の攻撃に悲鳴を上げる辺境伯候補を見つめながら、ソフィーネは呆れ顔で溜息を吐く。

確かに、彼の言うとおり、自分には、それほど修道院に強い未練はなかった。昔ならば、違ったかもしれないが、少なくとも、今の修道院は、あまり彼女にとって居心地の良い場所ではなかった。そもそも、拾われてそこにいただけで、別に、自分から進んで修道院

に入ったわけでもないし、それほど、神に仕え、信仰に生きたいと真面目に思っているわけでもない。

それでも、修道院にいたのは、野垂れ死ぬか悪魔の子として焼かれるしか道がなかった自分を拾ってくれた修道院長に対する恩義と生まれてこの方ずつといるという愛着からだった。

前の修道院長が死に、帝都から新しい修道院長が来て以来、悪魔色の髪を持つ彼女の立場は非常に苦しいものになっていった。

その上、新しい修道院長は、剣術を磨くことによって信仰を極めるといふ剣の修道院の方向すらあまりよく思っていないようであった。確かに、教会としては、修道院としては、特徴的過ぎて、異端と思われるかもしれないような気もする。

しかし、これは、れっきとした聖人に因んだものであり、長い歴史を持つているのだから、新参の余所者修道院長が偉そうに言うなと彼女は感じていたのだが、どうにも、修道院長代理をはじめ、修道院のお偉方は、修道院長にヘイコラ頭を下げるばかりで、彼女の不満は鬱積していた。

やたらと偉そうに絡んできた何某とかいう伯に本気の突きを繰り出してしまったのも、そういった鬱積した気持ちでイライラしていたからかもしれない。

修道院を去ることにあまり未練を感じなかったのも、修道院における自分の境遇と、修道院のお偉方の情けない状態と、そのせいだろう。

何の問題もなく、修道院から離れられたのは、好都合だったような気もしてくる。古い因習とよくわからない教義に縛られて、髪の色なんかで差別されるような狭い社会から逃れられて、自分はもう自由なのだ。そう思うと、なんだか、晴れ晴れした心地にもなる。

とりあえずは、自分を自由にしてくれたこの連中に付いていっても悪くはないような気がした。奴隷商人の類には見えないし、いざとなれば、とつと逃げればいいだけの話だし。

ソフィーネを古い因習が支配する修道院から引き摺り出してくれ

たレオポルドはというと、未だにフィオリアに引つかかれたり叩かれたりして悲鳴を上げていた。

「やめっ、やめろっ。フィオっ。何だって、そんな機嫌が悪いんだっ」

「別につ。なんでもないっ」

フィオリアはそう叫ぶと、ぷいっとなつぽを向いてしまった。

レオポルドは「わけがわからない」とぶつぶつ呟きながら頭を掻く。その様子を、キスカは無表情で、ソフィーネは渋い顔で見守っていた。

剣の修道院での一悶着の後、レオポルド一行は元来た道を戻っていく。三日歩いて、南部を南北に貫く街道に入り、そのまま南へ向かう。サーザンエンドはもはや目と鼻の先である。

何日か歩くと、南アーウェン地方最南端の町に入った。

到着したのは夕刻近くだったので、いつものように、今日はここで一泊ということで、適当に安そうな、でも、ノミやらダニやらがわさわさ出てこないような宿を探して部屋を一つ借りた。

と、そこで、ソフィーネがゴネた。

「こ、この部屋で寝るのですかっ」

「まあ、そうね。お金の節約よ」

フィオリアがあっけらかんと言いつつ。一行の資金管理は彼女の担当なのである。彼女曰くには、レオポルドは役に立たないものを買おうだし、キスカは騙されて金を取られそうだし、そう言われた二人は微妙な顔で黙り込んでいた。

その資金管理者が宿の選択権を有しており、最終的に宿を決定し、部屋をなんとか安い値段で借りる交渉までの全てはフィオリアの裁量に任されている。その間、他の連中はボンヤリ荷物の番をしている。

そんなわけで、今夜も無事に選ばれた部屋にソフィーネはご不満らしい。

確かに、部屋は狭いし、日当たりも悪いし、床には小さな穴が開

いていて、下の物置部屋の様子を見ることができくらいだ。しかし、一晚借りるだけなのだ。我慢できないことはない。毛布は薄っぺらいが、どうやら、ノミやダニはついていないみたいだし、第一、この辺りは気候が温暖なので、夜とはいえ、屋内ならば、薄い毛布一枚でもなんとかなる。

「いや、私は部屋に文句を言っているわけじゃありませんっ」

ソフィーネはそう言って、今回泊まる部屋についてアレコレ説明していたフィオリアの言葉を押しとどめた。

「問題は、その人も一緒の部屋で寝ることですっ」

そう言ってソフィーネは微かに赤い顔でレオポルドを指差す。

「年頃の男女が同室で、四人も寝るなんてっ。おかしいですっ」

ソフィーネの主張に三人はあまりピンとこない顔で首を傾げる。

「あなたたち、ずっと、一緒の部屋で泊まってきたんですかっ」

ソフィーネの問いに三人は当然といった顔で頷く。

「どうやら、ここでは少数派らしい彼女は頭を抑える。」

言われてみると、確かに、年頃の男女が四人も同室で泊まるのは少々あれかもしれないと、レオポルドは考えた。旅の始まりの頃は、少々気恥ずかしさがあつたりもしたものだ、長い旅の間に、そんなものは吹っ飛んでしまっていた。

「着替えとかはどうしていたのですかっ」

「あたしらが着替えるときは、レオは外に出てたし、レオが着替えるときは、あたしらが外に出てた。気を付けることはそれくらいね。後は、特に問題もなく」

「問題ですっ。こんなこと、神がお許しにならないっ」

ソフィーネは真っ赤な色の険しい顔で言い放つ。

彼女は男女が同室にいることや会話すら制限する厳しい掟のある修道院で生活してきたのだ。男女が同室で寝るということには、一般人以上に忌避感が強いのだろう。

「その神様が部屋代出してくれるっていうんなら、レオを別の部屋に寝かせてもいいけど。お金は節約しないといけないしね」

しかし、フィオリアはあっけらかんと言いつつ放つてしまふ。全く相手にしていないようだ。

「それに、レオは手を出してくるようなことないしね。紳士だから」
安全な男認定をされたレオポルドは少々微妙な顔をしたが、黙っていた。

「そんなに心配なら、ソフィーはそっちの端に寝て、レオは反対側に寝ることにしましょ。レオはあたしが監視してあげるから。もし、怪しげな行動を起こしたら斬ってもいいわ」

そこまで言われては、引き下がらないわけにもいかないようで、ソフィーネは渋々と招致した。

夕食の後、剣を抱き締めながら、壁にくつつくくらい部屋の端に寝るソフィーネを見て、レオポルドは、今夜は朝まで寝床から起き上がらないと決め込んだ。便所に起きたところを勘違いされて斬り殺されては堪ったものではない。

なんだが、散々な扱いをされているなど思いながらレオポルドは横になって、薄っぺらい毛布をひつかぶる。毎度の如く、明日、虫刺されだらけじゃありませんようにと祈った。

無事、レオポルドが斬られることもなく、翌朝を迎えると、一行は、早々に町を出た。すると、今まで何も言わずにひたすら黙って歩いていたキスカがくりりと振り向いて、後に続く三人を見つめた。何事かと訝しむ三人に向かって、キスカはいつものように無表情で告げた。

「ようこそ。サーザンエンドへ」
どうやら、一行はいつの間にか、サーザンエンドに入っていたらしい。

キスカから話を聞くに、どうやら、一般的には先の町よりも南の方はサーザンエンドと見做されているようだ。というのも、アーウエン地方とサーザンエンド地方の境目はアヤフヤで、明確に定まっているわけではないのだという。目印も何も無い荒野に正確な境界

線を敷こうというのが、元より無理な話なのだ。

とりあえず、その辺りの町や村の帰属先がどちらかが決まっていればそれほど大きな問題はないに違いない。領主たちが最も気にかけるのは税金の入り先であって、金を生み出さない何も無い土地にはそれほど興味もないのかもしれない。農業が盛んな地域であれば、農地の問題で一エーカーの土地をめぐって訴訟沙汰を繰り返しているとこころだろうが、生憎とこの辺りは水不足の為、耕作には不適で、少しばかりの雑草を食む家畜を放牧させる程度に利用できるだけなのだ。

また、サーザンエンド北部にはアーウェン人領主も多く、いわば、ちよつと遠い所に住んでいる親戚みたいなもので、それほど厳格に境界を決めないでにおいて、後で何か問題が起きても話し合いで解決できるのだろう。その問題といつても、境界辺りで犯罪者がうろついているとか、家畜の群れが境界を通り越してるとかそのくらいだろう。いくら揉めても大したことはない。

「いい加減な話ね」

「土地に対してそれほど執着がないのだろう。農業をやらん民はそういうもんだ」

呆れるフィオリアに対して、レオポルドの方はよく理解しているようだった。以前読んだ本にでも、農耕民族と放牧民族の思考の違いについて云々が書いてあったのだろう。

「で、これからどうするの」

フィオリアが尋ねると、レオポルドは少し考え込んでから口を開く。

「やはり、まずは首都であるアルヴィナに向かうべきだな」

アルヴィナにいるフェルゲンハイム家の生き残りや遺臣たちに、正当なるフェルゲンハイム家の後継者としての立場を認められることができれば、レオポルドのサーザンエンド辺境伯即位という野望は、極めて実現性の高いものとなる。また、今まで全く知名度も名声も地盤も軍事力も経済力もない状態から、少しはマシな状態にな

るだろう。

問題は無事にフェルゲンハイム家の後継者と認められるかどうかだが、今まで後継者として適当な者がいなくて困っていたのだから、問答無用で門前払いされることはあるまい。

何にせよ、いよいよ、ここからが本番なのである。

レオポルドは感慨深い気持ちで、南の地平線を眺め、傍らのキス力を見やった。突然の彼女の訪問から、もう三ヶ月近く経っている。思えば遠くまで来たものだし、長い旅をしてきたものだ。

キスカもレオポルドを見返す。二人は無表情で見つめ合って、僅かに頷き合う。互いに今までもそれほど会話を交わしたわけでもないが、二人の間には確実に見えざる絆のようなものがあつた。というのも、この中で目的が一致しているのは二人だけなのだから。

レオポルドをサーザンエンドに連れて行き、辺境伯にするという目的は、二人の目的であり、フィオリアとソフィーネはそれに付いてきているだけなのだ。

二人の目的は成就に向かって、僅かずつだが、確実に実現に向けて進んでいる。二人はそう思いながら、願いながら、サーザンエンドの地を踏みしめていた。

一五 野営にて

サーザンエンドに入っても、辺りの風景はまるで変わらなかった。天高く晴れ渡る青空、乾いた茶色の大地に萎びたような草木、巻き上がる砂埃、遙か彼方に見える地平線。

ほとんど南アーウエン南部の景色と変わりなく、自分たちが本当にサーザンエンドに入ったのか疑わしい気持ちになる。

レオポルドたち一行は延々と乾いた地面を歩き続ける。周辺には、町も村も見えず、ひたすら乾いた大地が広がっている。

周囲を見ても、農業をしている様子は全くないし、足元の土を見る限り、農業ができそうにも見えないどころか、植生も豊かには思えない。生きているのか枯れているのか定かではないような草木がぼつりぼつりと見えるばかり。

「サーザンエンド北部は、まだ農業ができる地じゃなかったか」

レオポルドは首を傾げながら呟く。以前、キスカから聞いたサーザンエンドの地勢についての話で、そのような説明を聞いた覚えがある。

「農耕はもつと南のオアシス近くや川沿いで行われています」
確かに、これだけ乾ききつているところで農業はできません。

「この辺りは水源から遠く、町も村も少ないのです」

「だから、さつきから人影一つないのね」

キスカの言葉に、フィオリアが納得する。

「で、次の町まではどれくらいかかるんだ」

レオポルドの問いに、キスカは暫く考えてから答えた。

「三日ほど歩いた先でしょうか」

乾ききつた土の上を延々歩き続けていたせいで、すっかり消沈していた一行の気持ちが更に落ち込んだのは言うまでもない。

キスカの言葉どおり、その日は日暮まで歩いて、町も村も小屋

すらも視界に入らず、一行は観念するように野営の準備に入った。

長い旅の間に、何度か経験しているとはいえ、やはり、野営は避けたいところである。いくら安宿の床が硬いとはいっても、そこは木の板で、それだけまだマシというものだ。

野営となれば、布を敷いた下は土なのだ。草地では草がちくちくするし、石が多ければ背中がゴツゴツする。砂地であったなら風で砂が舞い上がって寝ている顔に降り注ぐ。どれも安眠を損ねるには十分な効果を持つ。

その上、外で寝るとなれば、常に風雨に晒される可能性を含んでいるし、気温の低さも屋内に比べて非常に厳しい。

更には、野盗や盗賊といった輩、狼や熊などの野生の獣に襲われる危険すらある。

とはいえ、見知らぬ土地を寝ずに歩き続けることは更に危険である。旅で重要なのは、無理せず、しっかりと睡眠と休息、栄養と水分の補給を欠かさぬことだ。

というわけで、レオポルドたちは望まぬ野営をすることになった。野生動物と良からぬ輩からの襲撃を防ぐ為と少しでも暖を得る為に火を焚き、一人見張り番を置いて休むことになった。見張り番は全員で交代して行う。

今夜の見張り当番は、キスカから始まり、レオポルド、ソフィーネ、フィオリアという順番であった。

いつものように石のように硬いパンと乾ききった干し肉を齧り、皮袋の水を回し飲みした後、見張り番のキスカだけが焚き火の傍に残り、他の連中は思い思いの場所に布を敷き、毛布をかぶって横になった。

レオポルドが寝床に選んだのは、干からびたような木の傍で、焚き火からもそれほど離れていない場所だった。あんまり近すぎると寝ている間に燃えると怖いので、気を付ける必要がある。

しかし、どうにも寝辛い。布の下は地面の為、ごつごつと背中が痛いし、寝返りを打つこともままならない。ごわごわの毛布にも慣

れない。肌に触れるとちくちくするのが非常に気になるのだ。

そもそも、貴族生まれ、貴族育ちで、羽毛がたっぷりに入ったふかふかの布団で寝てきた彼は、中々、野営に慣れることができないのだ。実を言うと、安宿で寝ることにも未だに慣れておらず、彼はここ最近、いつも寝不足気味であった。

一方、遊牧民の出身で、他の連中以上に長い旅を続けているキス力はすっかり慣れていようで、その気になれば、岩の上でも木の上でも眠れるようであった。

ソフィーネは修道院暮らしだが、清貧であることが当然である修道院で生まれ育った為、ずっと固い寝床で寝てきたようで、安宿にも野営にも比較的早くに順応していた。

フィオリアも育ちはレオポルドと同じではあるが、幼少期は劣悪な環境の孤児院で育ち、また、クロス家においても、レオポルドの姉のように育てられてはいたが、その立場は使用人としてのものであり、寝室も屋根裏の使用人用の部屋が与えられていた。それ故に、レオポルドよりは劣悪な環境に慣れるのが早かった。

つまり、レオポルドだけが、未だに、安宿にも野営にも順応できていないのであった。

レオポルドは暫くの間、硬い土の上で、ごわごわした毛布に包ましながら寝苦しい数時間を過ごした後、のそりと起き上がった。

すると、キスカが無言で視線を向けてきた。もの問いたげな顔で、レオポルドを見つめる。

「中々寝付けなくてな」

レオポルドは乱れた髪を撫でつけながら、焚き火の傍に座り込む。キスカは何か言いたげに、口を薄く開いたが、暫くして、静かに唇を閉じて、焚き火に視線を戻した。

レオポルドはそんなキスカを横目に見ながら、荷物を漁って革袋を一つ手にした。それはレガンス司教のところでお土産にと頂いた葡萄酒を入れた革袋であった。

熱い砂漠や荒野では、革袋が非常に便利である。水などを他の入

れ物に入れておくと、熱であつという間に温められて湯になつてしまつが、革袋の場合、中の水などは小さな穴から少しずつ蒸発して気化熱を奪うので、温度を上げずに持ち運べるのである。元々は遊牧民の知恵と聞く。

レオポルドは革袋に直接口をつけて葡萄酒をいくらか飲むと口を拭いた。温いが、味は悪くない。

「君も飲むか」

キスカに葡萄酒の入った革袋を差し出すと、彼女は迷うように視線を揺らした。

「フィオは酒をあまり飲まないし、ソフィーネも修道女だからな。誰も酒に付き合ってくれないんだ。できれば、一人くらい付き合つて欲しいものだ」

「それならば、頂きます」

レオポルドが助け舟を出すように言うと、キスカは革袋を受け取り、同じように直接革袋に口をつけて葡萄酒を飲んだ。

「味は悪くないと思うのだが」

「はい。美味しいです」

「君の部族にも酒はあるんだろう。どんな酒を飲んでいるんだ」

「主に乳酒を飲みます」

「乳酒っていうと、乳からつくるのか。珍しいな。どんな味だ」

レオポルドはキスカの言う乳で作る酒に興味を持った。酒の種類は数多あるが、葡萄酒を代表とする果実酒、麦酒などの麦からつくられる各種の酒、蜂蜜酒など、いずれも植物を原料とするものばかりである。少なくとも、帝国本土においては、動物由来の原料でつくられる酒は出回っていなかった。

「あまりキツくはなく、甘く酸味があります」

「なるほど。それは飲んでみたいな」

そう会話をしながら、二人は交代で何度も葡萄酒を口に流し込んだ。

いつも飲んでいるレオポルドは当然ながら、キスカも酔う様子は

なく、顔色にも変化は見られなかった。見張り番をしなければいけないので、あんまり酔うようであつたら、酒をしまおうと思つていたレオポルドはキスカの強さに感心した。

「中々強いな。故郷では結構飲んでいたのか」

「いえ、あまり。それほどは」

キスカは謙遜するように言い、少し顔を赤らめる。女性にとって酒に強いことはあまり褒められたことではない。という風潮が世の中にはあつた。

しかし、レオポルドはそのような風潮など意に介さず、機嫌よさそうに更に葡萄酒を勧め、キスカは断らずに淡々と葡萄酒を口にする。

「ところで、君はいくつなんだ」

散々酒を飲ませておいて、レオポルドはこの時、初めてキスカの年齢が気になつた。この時代に、飲酒に関する年齢制限など法律で定められてはいないが、やはり、酒は大人飲み物である。子供は口にしないのが原則だし、若い頃の飲酒は慎むべきものとされている。

「二十歳になります」

キスカの返答にレオポルドは地味に大きな衝撃を受けた。高い背に、見事なプロポーション、大人びた顔立ちと落ち着いた人柄から、若い印象はなかつたが、まさか、自分よりも年上だつたとは。

と、そこで、彼は考え込む。フィオリアはその生まれの経緯から、生年がはつきりとはしないが、小さい頃は、レオポルドよりも一足早い成長を見せていたから、おそらくは彼よりも一つか二つほど年上であろうと思われている。ソフィーネも同じように生年は不明だが、レオポルドと同じか年上に思われた。そして、キスカはレオポルドよりも二つ年上だという。

ということとは、旅をするこの面子は、全員が自分よりも年上以上ということになる。自分が最年少だということに、レオポルドは少なからぬ衝撃を受けていた。

「そ、そんな年なのか」

レオポルドは動揺のあまりそう口走っていた。

キス力が恥ずかしそうに顔を伏せたのを見て、レオポルドは先の発言は非常にまずいということに気付く。

女性に年齢を聞くということ自体、非常に失礼にも関わらず、その上に「そんな歳」とは紳士にあるまじき発言である。

その上、この時代の結婚適齢期は非常に早く。十代後半には多くの者が伴侶を見つけることが一般的である。二十を超えると、結婚が遅いと言われ、二十五を超えれば完全に行き遅れと見做される傾向が強い。三十路を過ぎても結婚しない者は聖職などにあるか、よほど貧乏で結婚ができない者、病気で結婚どころではない者など、それくらいである。それが良いことか悪いことかは別として、それが常識とされている。帝国では万事において古い因習と慣例が強い影響力を持っているのだ。

しかも、ムールド人をはじめとする遊牧民は更に結婚の時期は早く。十代半ばには多くが伴侶を見つけ、二十まで独り身となれば、完全な行き遅れと見做されるどころか、一族の恥とまで思われるほどだ。女の仕事は家事だけでなく、子を産んで育てることという古臭い考え方が支配的ばかりでなく、家族単位で生活する遊牧民にとって子供は重要な労働力であり、子供は多ければ多いほどよいと思われている。その為、女は早くに嫁いで早くに子を何人も産むことが重要視されるのだ。嫁ぐのが遅ければ、その分、子を産める期間が短いことから、晩婚が忌避されるのは言うまでもない。

キス力は悄然として俯いてしまっていた。彼女自身、結婚が遅いことを気にしているらしい。

その様子に、レオポルドはすっかり慌ててしまう。

「あ、いや、その、多少、人よりも結婚が遅いくらいどうということはあるまい。フィオもソフィーネも結婚していないしな」

レオポルドはそう言いながらも、この弁は苦しいと自覚していた。フィオリアもソフィーネも彼女よりも年下であるし、ソフィーネに至っては聖職ではないが、貞節を守ることが義務付けられている修

道女である。これでは慰めにはなるまい。

「それに、君には婚約者がいるだろう。それならば、もう結婚しているも同然だ」

こちらの言葉は、十分に説得力があると思われた。彼女には婚約者がいるというのは、以前、聞いた話で、婚約者がいるのなら、後はもう式を挙げるだけというものだろう。結婚が少々遅いくらい、大した問題でない。

「あちらが、私との結婚を望んでいるのは、私が族長の娘だからです」

レオポルドの言葉に、キスカはすっかり気落ちした様子で呟くように言った。話を聞くに、キスカの亡父は前の族長で、子はキスカのみであったらしい。ということ、その財産はほとんど彼女が相続している。つまり、前族長の唯一の遺児と結婚すれば、その遺産がまるっと手に入るといふ寸法だ。しかも、世襲が原則である族長の地位継承に当たっても、族長の遺児と結婚していることは非常に有利であろうことは言うまでもない。

要するに、キスカの婚約は財産目当ての政略結婚であるらしい。

この時代ではよくある話である。よくある話ではあるが、本人としては納得できるものではない。

「あちらは、私自身に魅力を感じているわけではないのです。私に魅力などないのでしょう」

キスカは自分の立場というものをよく理解しているようであった。そして、彼女はどうにも悲観的な思考をしているようだ。

「いや、君は十分に魅力的だろう」

自分の言動のせいで、すっかり落ち込んでしまったキスカを励まそうと、しきりと彼女を褒めはじめた。

「背は高いし、スタイルも見事だ。非常に魅力的だと思うが」

「女としてはでかすぎるのではないのでしょうか」

キスカは膝を抱えて体育座りしながら呟く。確かに、彼女はでかい。そこらの男並みに背が高く、彼女はそれをコンプレックスとし

て感じているようであった。確かに、世の中の風潮としては、女性は男に守られる存在という意識が強く、故に、小柄な方が好まれる傾向があった。

「いやいや、そんなことはあるまい。背が高いくらいなんだ。スラリとして、素晴らしいではないか。それに、その銀髪も非常に綺麗だと俺は思うぞ」

レオポルドはそのようにアレコレとキスカの外見を褒め称えた。暫くの間、黙ってレオポルドの言葉を聞いていたキスカは、顔を赤らめ、彼をじっと見つめて、尋ねた。

「そ、そう、ですか」

「そうだとも」

「じゃあ、レオポルド様は、私のことを魅力的だと」

「勿論。一人の女性として、非常に美しく魅力的な女性だと思っている」

レオポルドはそう言うてから気付く。これでは、なんだか、自分がキスカのことを口説いているようではないか。今まで自分がどれだけキスカのことを綺麗で魅力的な女性であるかを熱弁したかを思い出してレオポルドは赤面した。顔から火が出そうとはこのことを言うのだなと思う。

レオポルドとキスカは二人して真つ赤な顔で黙って焚き火を見つめた。

「あ、あの」

何かを思い立ったかのように、キスカが口を開いたとき、ぬつとソフィーネが二人の間に顔を出してきた。

レオポルドとキスカはぎょっとして、飛び退き、目を丸くして、無言で顔を突っ込んできたソフィーネを見つめる。

「何を恥ずかしい話をしているんですか」

「いや、あー、別に」

じと目で尋ねるソフィーネに、レオポルドは赤い顔を隠すようにそっぽを向きながら答える。

「まあ、お二人が何を話していても別に構いませんけども」
そう言ってソフィーネは二人に鋭い視線を向ける。

「何かの気配を感じます」

彼女の言葉に、顔を赤らめていた二人は、真顔になって、周囲の気配に注意を払う。

「狼か」

「この辺りの荒野には、ヌーラという肉食獣も出ます」

「そいつはどういう獣だ」

キスカの言葉にレオポルドが尋ねる。帝国本土では聞き慣れない名前の獣だ。

「大きな黄色の猫です」

「猫ならばどうということはあるまい」

「ただ、狼よりも大きく、中には人よりも大きなものもいます。牛を襲って食うこともありますし、人が襲われて食われることもあります」

大きな猫とはいっても、油断ならない獣であるらしい。

二人が話している間に、ソフィーネは長剣を携えて、近くの岩の上に立ち、周囲を見渡していたが、やがて、張りつめていた気を少し緩めた様子で、焚き火の傍に戻ってきた。

「どうやら獣だったようです。私たちを襲うのは止めたようです」

獣は非常に慎重で警戒心が強い。単独ではなく、また、眠ってもいないし、油断してもいない人間に、襲い掛かるほど短絡的ではない。ましてや、獣にとっても人間は天敵なのだ。人間は狩りをして家畜を襲う害獣である肉食獣を殺すことも多いのだから。

どうやら、レオポルドたちを観察していた獣は、狩りの成功率が極めて低いと判断し、早々に場を離れたようだ。実際、それは非常に賢明な判断であろう。眠っているときならば、いざ知らず、三人も起きている中、獣が襲ってきて、返り討ちにできる自信が彼らにはあった。

「では、私は見張りの当番の時間まで寝ます。後はお二人で愛でも

何でも語っていて下さい」

そう言ってソフィーネは毛布をかぶって横になる。

「いや、我々はそういうことを話していたのではなくてだ」

「寝るので静かにして下さい」

反論すると、ソフィーネに素っ気なく言い放たれ、レオポルドは閉口した。

「あー。キス力。君も、もう休むといい。次は俺が見張りをするか」

「あ。でも、時間が」

「いや、いい。元々、上手く寝付けなくて、眠れなかったからな」

レオポルドはそう言い、キス力を休ませた。キス力は遠慮しつつも、最終的には休むことに同意し、毛布をかぶって地面に横になった。

こちらに背を向けて寝入るキス力の背中を見つめながら、レオポルドは先に己が言った恥ずかしい台詞の数々を思い出して一人赤面し、手で顔を仰いで、顔の熱を冷まそうとした。荒野の夜風が火照った顔に心地よい。

一方、横になったキス力は、毛布をかぶり、横になって、じっと目を閉じていたが、目は覚めていた。少し思うところあって、暫し眠れぬ夜を過ごした。

一六 コレステルケにて

サーザンエンドに入って一週間が経った日の夕方。レオポルド一行は、ようやくサーザンエンド北部の都市コレステルケに入った。コレステルケはサーザンエンドに三つある主要な都市のうちの一つであり、南部の中では数少ない帝国人の多く居住する地域である。

大きな川に面した都市で、周辺には麦畑が広がっていた。麦の他に、果実や野菜の畑もあり、また、レオポルドやフィオリアが見たこともないような木々もあった。キスカ曰くには南部では多く栽培されており、その果実は主要な食品の一つであるそうだ。そのまま食べたり、干して食べたりもするし、シロップにして砂糖や蜂蜜の代用としたり、ジャムにしたりもする。また、酒や酢にもなり、干した果実や種子は家畜の飼料にもなるという。若芽には野菜として食べられるし、幹は建材にも燃料にもなる。非常に万能かつ有益な植物で、南部では広く一帯で栽培されている。どういう経緯で伝播したのか、東方大陸の南部でも栽培が盛んだという。

閑話休題。

コレステルケの町は、北のアーウェンよりも帝国本土の都市に近いように思えた。帝国本土の多くの都市と同じように、市の中心には大きな広場があり、広場に面して市参事会堂や教会の帝国風の煉瓦造りの建物が並ぶ。

門を潜り、大通りを広場まで歩いていくと、ちょうど時刻は夕食時で、広場にはいくつもの食べ物屋の屋台が出て、美味そうな香りを周囲に振りまいていた。鳥や豚、牛、羊などの焼肉、くず野菜と干し肉のスープ、白く薄っぺらいパンに肉を挟んだもの、川魚のフライ、混ぜ物がたっぷり入った麦酒に葡萄酒、よくわからない果実酒。

昼頃に食べた、もはや食べ飽きた石のように硬いパンと塩辛い干し肉の昼食もすっかり消化されていたレオポルドたちは、屋台に並

ぶ安っぽく粗野ながらも美味そうな料理の数々を食い入るように見つめる。できれば、いそいそと肉汁が滴る焼肉や、ここ最近、とんと食べていない魚を、泡立つ麦酒と一緒に食べたいところだが、そうはいかない。

「夕食は先に宿を取ってから。もうこんな時間だし、まともな宿が空いてるかどうかも微妙なところなんだから、余計な時間を使っている暇なんてないわよ」

一行の財布を握るフィオリアは断固として宿を探し、部屋を確保することを最優先の目標としていて、その前に、夕食を摂ることを許してはくれなかった。

渋々とレオポルドたちは、後ろ髪引かれる思いで、屋台が集まる広場を後にし、宿が集まる通りへと向かい、そこで散開して、それぞれ、良い宿を探した。旅の初めに、酷い安宿に泊まって以来、彼らは、特にフィオリアは宿泊する部屋に大きな関心を持っていた。

あれこれ、宿を探し回って、四人くらい雑魚寝しても大丈夫な空室があつて、部屋の環境は悪くなく、程々に安い宿を見つけ、彼らがそこを宿泊場所と決めるときには、夕食時はとくに終わっていて、広場の屋台は店じまいをしているところだった。一行はがっくしと落ち込みながら、広場を後にする。

「久しぶりに魚が食いたかつたんだがな」

レオポルドが気落ちした様子で呟く。

ここ数週間、いや、一ヶ月以上、内陸部を進んできた彼らの食糧は主に肉とパンで、その他、たまにチーズなどの乳製品、野菜や果実を口にする程度のものであった。ほとんど塩味の肉と硬いパンばかり食べてきて、彼らはその食事にもう飽き飽きしていたのだ。魚なんてもうずっと口にしていない気がした。

「魚が食べられないくらいで、そんな落ち込まないの。若しかしたら、宿の食堂で魚料理が出るかもしれないじゃない」

フィオリアが励ますように言い、一行は、それに淡い期待を寄せた。

宿の一階には食堂が付いていることが常であり、そこで食事を作ってもらい食べることができる。

今回、彼らが宿を取った「豚の尻尾亭」にも立派な広々とした食堂が備え付けてあった。

「せめて宿の名前が魚の尾っぽだったら、魚料理が出そうなものだが」

宿の看板を見つめて、レオポルドは呟いた。

「豚の尻尾亭」は非常に大きな宿で、部屋数は数十以上。収容できる人数は数百人にも及ぼうかというほどだった。料金も安く、部屋も清潔で、文句のない宿と言えた。

一行が宿の食堂に入ると、既に夕食時を過ぎているにも関わらず、食堂は結構な混み具合で、席の多くが埋まっていた。多くが旅人や行商人のようで、帝国人もいれば、アーウエン人もいるようだ。キスカと同じように茶色い布をすっぽりとかぶった連中の姿も見える。皆、食事を摂り、酒を飲み、機嫌良さそうに騒いでいる連中もいた。店員たちはあっちへ駆けこっちへ駆けと、忙しそうに立ち回っている。

レオポルドたちはどうか空いていた席を確保し、店員を呼んだ。

「はいはいはい。ただいまー」

そう言っつて小間使いの小僧がテーブルに駆け寄ってきた。

「魚料理はあるか」

レオポルドは真剣な顔で小僧を見つめて尋ねた。

「はいっ。川魚のフライとか、鯉の煮付けなんかがあります」

それを聞いたレオポルドは目を輝かせて財布の権限を握るフィオリアを見やった。

「じゃあ、川魚のフライに、パンをいくつかと、あと、何かスープと麦酒を下さい」

フィオリアが注文し、レオポルドは満足げに頷いていた。

「そんなに魚が食べたいですか」

小僧が立ち去った後、珍しくキスカが口を開く。どうしてか、微

妙な顔をしている。

「暫く食っていなかったからな。肉も嫌いではないが、塩辛くて脂っこい肉ばかり食っていては、あっさりした魚の味が恋しくなるものだ」

レオポルドの言葉に、キスカはなんだか苦々しいような嫌そうな微妙な顔をしていた。

「何だ。その顔は」

「いえ、何も……」

キスカはそう言って俯く。

気になったレオポルドが更に追及すると、キスカは渋々といった風にその理由を述べた。曰く、遊牧民にとっては魚なんてもんは上等な食い物ではないらしい。

そもそも、遊牧民は水気のある場所を体に悪いと思っており、また、水辺に住む人間を見下し、川で魚を獲って食うなんて行為は軽蔑すべき行為というのが、遊牧民の認識であるらしい。

キスカ自身には、水辺に住む人や魚を獲る行為を見下すような意識はないものの、それでも、魚は上等な食べ物ではないという長年の認識は簡単には捨て去れないようだ。

「ふむ。古い貴族が四足獣の肉を食いたがらないようなものか」

キスカの話聞いたレオポルドが呟く。

貴族の間には、四足獣を下等な食べ物と見下し、肉は鳥しか食べないという一昔前の概念を未だに引き摺る者が少なくなかった。

そこへ、注文した料理がやってきた。テーブルの上に置かれた大皿には一口で食べられるくらいの大きさの川魚のフライが山盛りになっていた。あっさりした白身の川魚を、小麦粉を麦酒で溶いた衣をつけて、からっと揚げて、塩を振りかけただけのシンプルな料理だ。

「君の言い分はわかった。しかし、食わず嫌いはいかん」

そう言ってレオポルドはフライを一つ摘まんでキスカに突き付ける。

「ほら。一つ食べてみるといい」

キスカは非常に困惑した顔で突き付けられた川魚のフライを見つめる。レオポルドの目を見て、彼が本気で、引く気がないと察して、観念したように口を開いて、フライを食べた。

「味はどうだ」

キスカは暫くの間、渋い顔で口をむぐむぐさせていたが、やがて、表情の硬さは取れていった。

「……美味しい、です」

そう言った彼女は信じられないという様子で、川魚のフライを見つめる。初めて、魚を食べて、その美味しさを理解したらしい。

その様子を見たレオポルドは満足そうに麦酒の注がれたカップに口を付ける。

と、そこで、フィオリアが険悪な目で自分を見つめている、というより、睨みつけていることに気付く。

「な、何だ。フィオ」

「べ、つ、に」

フィオリアは大変不機嫌そうな顔でつつけんどんに言うと、揚げ立ての川魚を一匹口の中に放り込んで、なんともそっぽを向いてしまふ。

「なんか、怒ってないか」

「べ、つ、にっ」

フィオリアは明らかに怒った顔で麦酒をあおるように飲み干す。

その様を、レオポルドは啞然として見守り、同じように困惑するキスカと顔を見合わず。

そんな三者三様を、ソフィーネは呆れ顔で黙って見守っていた。

夕食の後、一行は部屋に戻った。

部屋はいつものように一つである。客室がある最上階である三階の廊下から最も奥まった部屋だ。

未だにソフィーネは異性と一緒の部屋で寝ることに拒否感がある

ようで、一々、一緒の部屋で寝ることに遺憾の意を表し、両者は最も離れた位置に横になった。キスカとフィオリアはその間に寝る。

すっかり旅慣れたキスカとフィオリアは早々と寝入り、ソフィーネは寝ているのか起きているのかよくわからないものの、横になったまま微動だにしない。

ただ一人、未だに安宿の硬い床に雑魚寝という就寝スタイルに慣れないお坊ちゃんなレオポルドは、この日も、中々寝付けない夜を過ごしていた。幾度も寝苦しそうに体の姿勢を変えながら、黙って目を瞑っていた。眠れなくても、目を閉じて黙って横になっていれば、やがて眠くなることを経験から知っているのだ。

まんじりともせず、一〇分、二〇分、三〇分と時間が過ぎ、レオポルドの意識がようやく夢の国に片足突っ込みかけた頃、音もなくソフィーネがゆらりと立ち上がった。

その気配を察したキスカも起き上がり、ソフィーネを見上げる。

「足音がします」

ソフィーネは部屋のドアから視線を外さないまま、囁くような小声で端的に言った。

その声を聞いて、レオポルドも夢の中から現実の世界に引き戻された。

「何、足音」

レオポルドは寝ぼけ半分で呟く。

「こちらに近づいています」

ソフィーネは険しい顔で呟きながら、寝るときでも常に傍らに置いている自身の長剣を手を取った。非常に長い両刃剣だ。柄が特徴的な形状をしている為、剣全体の形が十字に見えることから、十字剣と呼ばれる剣だ。教会騎士団の騎士が好んで使うという。長く重い為に使い難いが、その威力は相当なもので、手練れの騎士が振るえば、鎧を着た兵士を縦に一刀両断できるともいわれるほどだ。

「誰かが便所にも行ったのではないか」

レオポルドは一応声を潜めて言うも、すぐに便所は一階にしかな

く、この部屋は階段から最も離れていることに思い至る。となれば、足音がこちらに近づいてくるとなれば、この部屋に、この部屋にいる連中に用事があると思えない。

「やましいことがなければ、こんな足音を忍ばせたりしません」
ソフィーネの言葉にキスカも頷いた。確かに、普段、生活していて、意識して足音を忍ばせて歩くことは少ない。

しかし、どんなに音を立てないようにしても、太陽はとうの昔に地平線の向こうに姿を隠し、世界はすっかり黒に染まり、人々は家の中に引き籠り、ベッドで夢を見ているような、静寂に包まれた闇夜では、その足音を隠しきることはできない。耳を澄ませば、木の床がぎしりぎしりと軋む音が微かに聞こえてくる。

長剣を手にしたソフィーネは音もなく長剣の両刃を鞘から抜き放ち、キスカも半月型の剣を手に取った。レオポルドはサーベルを掴み、部屋の真ん中で寝ているフィオリアを、なるべくゆつくりと、荷物をまとめて置いて置いている壁際の邪魔にならない場所に転がしておいた。それでも、のんきに眠っているフィオリアを見て、レオポルドは少し呆れた。

微かな足音はゆつくりと静かに近づいてきて、やがて、ドアの向こう側で止まった。

何者かがドアを押し開ける。そこにいたのは茶色い布で全身を覆った男たちで、その手にはキスカのものと同じような半月型の抜き身の剣が握られていた。

目が合った瞬間、布の隙間から見える男の顔が驚愕に満ちる。

次の瞬間、押し開けられたドアの死角にいたソフィーネが勢いよくドアを蹴倒した。ドアを開けた先頭の男はドアの下敷きになり、体を起こそうとする前に、ドアごと重く長い十字剣で串刺しにされ、悲鳴を上げる間もなく絶命した。

ソフィーネはドアを片足で踏みつけながら、十字剣を抜き取り、廊下に屯する残りの男たちに向ける。

その間、十秒も経っていなかった。

ようやく、事態を把握した男たちは半月刀を振りかざしてソフィーネに立ち向かうが、入口の狭さから、同時に襲いかかることができず、一人目は袈裟懸けに斬り伏せられて鮮血を噴き上げながら倒れ込んだ。二人目は横薙ぎにされて、脇腹を斬られると同時に背骨を折られ、内臓を潰されて、断末魔の悲鳴を上げながら部屋の隅に転がる。

あつという間に三人がやられて動揺した男の腹を十字剣が貫く。男の腹を突き破り内臓を串刺しにして、剣先は背中から突き出る。ソフィーネは一人を串刺しにした勢いのまま更に押し出して、その後ろにいた男まで突き刺して、そのまま廊下の壁に打ち付けてしまった。

最後に残った一人が横からソフィーネに向けて半月刀を振り下ろす。が、剣を握っていた右腕を振り切ったにも関わらず、ソフィーネは平然としていた。男がふと自身の右腕を見ると、手首から先がすっぱりとなくなって勢いよく血が噴き出していた。半月刀を握ったままの右手は床に転がっている。男は酷い痛み悲鳴を上げながら屍餅を着いた。

最後の男の右手を綺麗に斬り落としてしまったキスカは血の滴る半月刀を持ったまま、男を見下ろし、短く問い質すと、男は恐怖と激痛に身を縮めながら、涙を流しながら、何事も言い返している。レオポルドには聞いたこともない言語だった。

「何の言葉をしているのだ」
レオポルドが尋ねると、壁に突き刺した十字剣を引き抜こうと、死体を足で抑えながら十字剣を引っ張っていたソフィーネが素っ気なく答えた。

「ムールド語です」
「ムールド人の言語か」
「ムールド語っていうんだから、そうに決まってるじゃありませんか」

ソフィーネはキツイ口調でそう言いながら、死体から引き抜いた

十字剣を哀れな被害者の衣服のあまり血濡れていない部分で、丁寧に血を拭き去り、鞆に納めた。

「ということは、こいつらはムールド人というわけか」

キスカと同じ民族ということになる。ただ、話を聞くに、ムールド人は部族社会で、部族ごとに、風習も様式も思想も帝国への感情も違うようで、部族間抗争も激しいという。おそらくは、キスカの部族と対立する部族から送られた暗殺者か何かだろう。と、レオポルドは考えた。

「レオポルド様」

生き残りの男からの事情聴取を終えたキスカがレオポルドに向き直る。

「彼らは金で雇われて、私たちを襲撃したようです。雇ったのはアーウエン人だったそうです」

「ほう。アーウエン人か。じゃあ、ガナトス男爵が黒幕か」

いささか単純すぎるかもしれないが、可能性としてはそれが最も高い。サーザンエンドのアーウエン人系領主ガナトス男爵は辺境伯位を狙っているという話で、アーウエン地方の諸侯から強い支援を受けているという。

レオポルド一行はアーウエン地方を抜けてきたので、どこかでレオポルドの存在が知られ、その情報がガナトス男爵の耳にでも入ったのかもしれない。サーザンエンド辺境伯位を狙う者にとって、フエルゲンハイム家の血を継ぐ者の存在は邪魔以外の何物でもない。多少手荒な手段を講じてでも亡き者にしてしまおうと画策しても全く不思議ではない。

「しかし、俺のことなんか知っている奴がいるとは思えんがな。教会には挨拶して回ったが、教会とアーウエン人は仲が良くないし」
レオポルドは首を傾げ、ふと、視界にソフィーネが入って、思い至った。

おそらくは、彼女が原因だろう。

ソフォーネがレオポルド一行に加わる原因となったのは、彼女が

帝国屈指の大貴族白亜公の子息ウィツカードルク伯を酷い目に遭わせてしまったせいである。彼女がそのまま修道院に残っていては厄介なことになるうから、その場から逃げようというわけで、レオポルド一行に加わったのだ。

ここからは、想像になるが、目が覚めたウィツカードルク伯は、自分をそんな目に遭わせた奴を呼び出すだろう。しかし、修道院は、そいつはもういないと答える。じゃあ、どこに行ったのか。レオポルド・フェルゲンハイム・クロスという帝国騎士と一緒に南へ向かいました。そのような会話がなされたことは想像に難くない。

そこから、ウィツカードルク伯はどのような行動を取るか。なんとかして、ソフィーネを見つけ出し、復讐しようとするだろう。その過程で、ソフィーネの話や同行者のレオポルドの話が出てもおかしくはない。そうして、レオポルドの情報は教会の中から外へ出され、あとは、サーザンエンドやフェルゲンハイム家の事情に詳しく、察しの良い者の耳に入るのを待つだけだ。彼はレオポルドがサーザンエンド边境伯位の継承を狙っていると推察するだろう。その情報は早馬でアーウェンからサーザンエンドのアーウェン人領主ガナトス男爵に届けられる。

おそらく、事の真相は以上のようなものだろう。というわけで、ここから先は、常に暗殺者の襲撃に警戒しながら、進まねばならないのだろう。今まで以上に厳しい旅になりそうだ。

しかし、それよりも、今は、この現状をどうするかである。先程、物音を聞きつけて見に来た宿の人間がこの惨状を見て、悲鳴を上げて逃げていったのだが、どうしたものか。と、レオポルドは難しい顔で考え込む。

部屋の中では、相変わらずフィオリアが幸せそうな寝顔でぐっすり寝入っていた。

一七 シュバルにて

宿の主人から通報を受けたコレステルケ市の役人は、レオポルドたちを事情聴取はした後、今回の事件を早々と単なる強盗未遂と判断した。コレステルケは帝国人の町であり、その支配階級も帝国人である。同じ帝国人で、かつ貴族であるレオポルドを被害者とし、ムールド人どもを強盗犯として断じるのは自然なことだ。ソフィーネの行為も多少過剰ではあるが、自己防衛として処理された。

唯一の生き残りである右手をなくしたムールド人は役人が引つ張つていき、その隙に、レオポルドたちは逃げるようにコレステルケを後にした。役人の事情聴取やら裁判の手続きやらに付き合っているのは、いつまでかかるかわからない。厄介なことになる前に、姿をくらませてしまおうというわけだ。

コレステルケの役人たちも、そこら辺はかなりきとつで、レオポルドたちが町を出るのを見逃した。

「まんまと逃げておいてなんなんだけど、なんかいい加減ね。強盗事件の被害者を放置しとくなんて」

町を出て南へ歩きながらフィオリアが呟いた。

「まあ、被害者が逃げるなんて思っていないんだろ。普通は、逃げる意味がないしな。それに、連中としても、こんなのは、ただの強盗事件で、あとは、生き残りの一人を吊るせば全部終わりつてなもんなんだろうさ」

人が何人も死んだ事件とはいえ、役人たちにとっては、よくある日常業務の一つでしかないのだろう。南部は非常に治安が悪く、強盗や殺人なんて事件は日常茶飯事で、役人たちはただただ機械的に片っ端から犯人を、或いは犯人と思しき者（市外から来た余所者の異教徒で異民族）を吊るしていつているのだろう。捜査や裁判なのは、形式だけなのかもしれない。

「しかし、今朝はビックリしたわー。起きたら、廊下が血の海なん

だもん」

「俺はあんな事件があっても寝てたフィオにビックリだ」

レオポルドの言葉に、普段は反応の薄いキスカとソフィーネが頷いた。

フィオリアは罰の悪そうな顔をして押し黙るが、すぐに口を開く。「そういえば、レオの考えでは、もうあたしらのことは、ガナトス男爵にバシてるってことなんですよ」

「おそろくな」

剣の修道院でのソフィーネとウィツカードルク伯が対決した一件で、後に意識を取り戻したウィツカードルク伯が、ソフィーネと、彼女を引き取ったレオポルドの行方を捜して、そこから中で騒ぎ出した可能性は高く、そうなったとき、その話がアーウエン人諸侯たちの耳に入るとは確実であり、そこからアーウエン人領主であるサーザンエンド北部の有力者ガナトス男爵に連絡が行くのは当然というものである。アーウエン人に雇われた襲撃犯が襲ってきたことが何よりの証左である。

ガナトス男爵がレオポルドたちがサーザンエンドに入っていることを知っていることは間違いないと思っていだろう。

「そういうわけで、ここから先は急ぐ旅になる」

「そんなこといっても、どうするのさ。走って行く気」

徒歩で旅をする彼らには歩く以外に移動する手段がないのだ。走って旅をするなんて、馬鹿な真似はできまい。脚を痛めて体力を消耗してぐったりするのがオチだ。着実に自身の体力に見合った速さで歩いていくのが最も効率的なのだ。

「いや、歩いていく。が、休息とか休養を少なくして、多少無理をしても、朝早くから夕方ぎりぎりまで歩くことにする」

夜道を歩くのは非常に危険である。周囲や足元が暗く、危険を察知し難いし、道から外れてしまう可能性もある。見知らぬ土地で道から外れ、迷子になることは、遭難を意味し、最悪の場合、野垂れ死ぬこともある。また、夜になれば、野盗などの良からぬ者や獣な

どが跋扈する時間である。そんな時間に外をうろつき回るのは褒められた行為ではない。

レオポルドもその時間まで無理に移動しようとは考えていない。ただ、日が暮れるギリギリまで移動を続けて、何とか少しでも早くに目的地であるサーザンエンド辺境伯領の首都ハヴィナに辿り着こうという魂胆らしい。

彼の提案に、皆は同意し、一行は無理をしない範囲でなるべく急いで南へ進んだ。

きちんと整備されているとはいえない、でこぼこの街道は川に沿って、やや西よりの南へ伸びている。コレステルケからハヴィナへは、この街道を南下して行って、徒歩で一週間くらいの道程である。急げば一日か一日半くらいは短縮できるとレオポルドは目論んでいるようだ。

街道が上手い具合にガナトス男爵の領地であるサーザンエンド北東部を避け、彼と対立する帝国系のドルベルン男爵やその傘下の領主たちの領地を通っていた。街道がガナトス男爵領を避けるように作られているのは、おそらくは、この街道を建設した何代か前のサーザンエンド辺境伯がガナトス男爵家を信頼していなかったからだろう。

これならば、容易に襲撃されることはなかつと、レオポルドは半ば安心していた。

シュバルの町に着いたのは、コレステルケを出て二日目の夕方のことだった。

シュバルは、街道の途上にある比較的大きめの町で、周囲はぐりりと城壁に囲まれている。

周辺には麦畑が広がり、野菜や果実の畑、牛や豚が飼われている放牧地も見られた。川には水車を備えた粉挽き所がある。

町の中心部には広場があり、教会がある。コレステルケ同様に典型的な帝国風の町だ。

一行の中で唯一サーザンエンドの情勢に通じているキスカ曰くには、この町を領有しているのは、パウロス卿という帝国系の領主で、サーザンエンド边境伯の宮廷では、中堅どころの貴族であるそうだ。今回の騒乱ではあまり目立った動きを見せていないが、どちらかといえば、同じ帝国系のドルベルン男爵の静観姿勢に同調しているらしい。

帝国系の領主ならば、レオポルドの存在に気付いても、厚遇こそすれ、捕えたり、弾圧したりということはなからう。悪くても、無視するか、厄介だからさっさとどこかへ行けと追い出されるかそんなもんだらう。

それ故に、レオポルドはある程度、安心していった。
しかし、その安心は脆くも崩れ去った。

いつものように安くて清潔でそこその広さの部屋がある宿を見つけて、部屋を借り、例の如く一階に併設されている食堂で夕食を食べているときだった。

不意に、宿の入り口辺りが騒がしいと思い、四人が顔を向けると武装した数人の兵士が食堂に上り込んで来るのが見えた。

兵士たちは鉄兜を被り、胸甲をつけ、腰にサーベルを提げている。一人だけ、つばの片側を折り上げた、白い羽飾りを付けた灰色の帽子を被り、白いシャツの上に緑の上着を羽織り、白いズボンに、乗馬ブーツを履いた士官がいる。

兵士たちはレオポルドたちの傍へ真っ直ぐやって来て、士官が一歩前に出た。

士官は帽子を手に取り、優雅に一礼してから、レオポルドを見つめて口を開く。

「レオポルド・フェルゲンハイム・クロス卿ですな」
「如何にも」

ここで否定しても何の意味もないと感じたレオポルドは素直に応じた。真っ直ぐこちらまで来てフルネームを言われては、相手には完全にこっちの身許は知れているのは間違いないだらう。

「我が主君。ヨーゼフ・ルドルフ・パウロスが、是非とも、貴殿と面会したいとのことで、お迎えに参上致しました。外に馬車と護衛の者がおりますので、我らと御同行願います」

パウロス卿が派遣した部隊の士官の言葉は、丁寧ではあるが、要するに、大人しく、付いて来い。と、そういうわけだ。その上、ご丁寧にも、ここに居る者の他、外にも兵士はいるから、多勢に無勢である。無駄な抵抗はしないようにと暗に言っているも同然だ。

パウロス卿がどのような思惑でレオポルドを呼びつけたのか。今のところ、確実なことはわからないが、ここで、同行を拒否しても、無駄だろう。拒否して大人しく引き下がるのであれば、最初から、何人もの武装した兵士を送ってきたりはしない。

「よかるう。ただ、パウロス卿にお会いするのに、旅装では失礼だ。正装に着替えるのに、少し時間が欲しい。それから、同行の者はどうしたらいい」

とりあえずは、相手の要求を受け入れてから、こっちの都合を話してみると、士官は着替えの時間を許し、他の者は、宿で待機するようにと答えた。

着替えの為ということで、レオポルドたちは、一旦、二階の自分たちが借りた部屋に入った。パウロス卿の兵士は部屋まで付いてこなかった。階段は一つだけだし、窓から外に飛び降りたとしても、宿の外にも兵士がいるのだから、逃げられても捕まえられる自信があるのだろう。

「ねえ。逃げた方がいいんじゃないの」

「まあ、わざわざ、こんな物騒な御呼出しをするくらいだから、きな臭い感じはある」

フィオリアが不安そうに言うと、レオポルドは冷静に答えた。

「おそらくは、パウロス卿は、ガナトス男爵と通じていて、領内を俺が通行したときは、捕えて引き渡せとも言われているんだろう。その代わり、パウロス卿の領地には手を出さないとか、サーザンエントド边境伯に就任した際に厚遇するとか、そういう約束でもあるん

「だろうな」

「じゃあ、絶対逃げなきゃダメじゃないっ。言われたとおり、ほいほい付いて行っちゃダメじゃんっ」

レオポルドの冷静な分析に、フィオリアが怒鳴り出す。キンキン声で叫ばれて、彼は渋い顔で耳を抑えた。

「大きな声を出すと、下に聞かれます」

キス力が無感情に呟き、フィオリアは気まずそうに黙り込む。

「確かに、状況は悪い。が、パウロス卿が、完全にガナトス男爵に付いているとは限らん」

「それってどうということ」

ガナトス男爵と何らかの約束があつて、既に、宿にまで兵を差し向けて、出頭を求めているのだから、それはもうガナトス男爵の側に付いていると見て、間違いないのではないかと、フィオリアは思っていた。他の二名も同じようで、レオポルドの言葉に首を傾げる。

「もし、パウロス卿が、完全にガナトス男爵派で、俺をひっ捕らえて男爵に引き渡すと、腹を括っているんなら、わざわざ、こんなこと丁寧なお迎えはしないだろ。問答無用で、縛り上げて引き摺って行くはずだ」

パウロス卿の兵士は、武装して大人数で来てはいるが、無理矢理にでも引っ張つていこうという気配はなかった。実質的には同行しなければ許されない状況ではあるが、形の上では、同行してくれるように「お願い」をしている。最初から、捕えて、引き渡すつもりならば、その相手に礼儀を尽くすにしても、ここまで丁寧なのはおかしい。

「たぶん、パウロス卿は迷っているんだろう。帝国人であるパウロス卿が、異民族で異教徒のガナトス男爵に寝返るような形で、俺を差し出せば、サーザンエンドの帝国派はどう思うか。それに、帝国政府、それから、教会」

パウロス卿は、ガナトス男爵に通じかけてはいるが、まだ、完全

に向こう側に寝返るところまでは決断し切れていないというのが、レオポルドの推察だった。その為、レオポルドを無理矢理にはなく、形の上では、同行をお願いする形で、呼び出したのだろう。呼び出して、会ってみて、それから、どう決断するか考えるものと思われた。レオポルドがシュバルに滞在するのは一晩なので、この機を逃せば二度はないからだ。領内の素通りを許すということは、ガナトス男爵に付かないという意味表示になりかねない。とりあえず、呼び出して手許に置いておいて、ガナトス男爵に付くならば、そのまま引き渡せばいいし、帝国派に留まるならば、お土産でも持たせて解放すればいい。とでも、考えたのだろう。

「まあ、全部。俺の推察なんだが、どちらにせよ、会って話をしてみるとなんとも言えん。それに、逃げようにも逃げられないしな」
そう言つて窓の外を見ると、宿の前には士官が言つたとおり、馬車一台ある他、パイク（長槍）を持つた兵士が十人以上。マスケツト銃を持つた兵士の姿もある。それに、士官と旗手の他、騎兵が四騎。いくらソフィーネが剣の達人でも、相手にして敵う人数ではない。逃げたとしても、マスケツト銃兵に狙撃されるかもしれないし、騎兵にはすぐに追いつかれるだろう。

「ここは大人しく、連中の言つたとおり、付いて行つた方がいいだろう」

レオポルドの言葉に、キスカは黙つて頷き、フィオリアも洪々と同意した。ソフィーネは興味なさそうであつた。

数分後、一張羅の正装に身を包んだレオポルドは馬車に乗り込み、他の三人は宿で待機することにした。一行は行列を作つて、シュバルの郊外にあるパウロス卿の館へ向かい、残された三人はそれぞれの表情でその行列を見送つた。

一八 パウロス卿の館にて

パウロス卿は、線の細い気弱そうな老人だった。痩せ細った体に、枯れ木のような手足。顔には深い皺が刻まれ、目は落ち窪み、髪も髭もすっかり白くなっている。

レオポルドが通されたのは、パウロス卿の屋敷の二階にある応接室らしい部屋で、パウロス卿はレオポルドの向かいに座って困ったような顔をしていた。

応接室に入ったレオポルドにパウロス卿は椅子を勧めた。パウロス卿の隣には中年の厳つい貴族が座り、レオポルドの背後のドアには腰にサーベルを提げた二人の兵士が立った。

「この度は、わざわざご足労頂きまして……」

パウロス卿はぼそぼそと言って頭を下げた。小さく聞き取り辛い声で、実際、最後の方は何を言っていたのかよく聞き取れなかった。卿は随分と年上ながら、非常に低姿勢だった。というのも、両者は同じ騎士身分ではあるのだが、その家格には明確な違いがあるのだ。

パウロス家はサーザンエンド辺境伯の配下の小領主で、城持ち騎士といわれる身分である。この階層は、小さな町や村を一つか複数支配し、より上の領主であるサーザンエンド辺境伯の宮廷に出仕している。また、戦争の際には、一族郎党を率いて辺境伯軍に参加する。

これより下には部屋住み騎士という自身の領地を持たず、主君や親類の城、領地などに住む低位の騎士もいる。

では、レオポルドはどうかというと、クロス家も領地を持つ城持ち騎士ではあったが、破算したので、今は領地がない。とはいえ、元々は領地を持っていたので、パウロス家と同等である。

両家の違う点は、直属の主君が違ふところである。クロス家は帝国騎士という家柄であり、皇帝直属の家来なのである。皇帝の宮廷

に出仕し、皇帝の軍に参加する。官庁の上級官僚の役職や帝国軍の士官も数多い。サーザンエンド辺境伯の陪臣と皇帝直参の騎士では家格が違ってくるというのは当然である。

ただ、家格だけが高くとも、実績や財産、名声がなければ、何の意味もないもので、今のところ、レオポルドにはそのどれもが欠けており、パウロス卿がそこまで低姿勢になる必要はないはずだ。それでも、下手に出ているのは、家柄にこだわりのある古い人なのか、見た目どおり気弱な人柄なのか。

「私は、シュバルを治めておりますルドルフ・ヨーゼフ・パウロスと申します。こちらは倅です」

「アーサー・ルドルフ・パウロスです」

パウロス卿が蔑つい貴族を紹介し、青年は挨拶した。

レオポルドも自己紹介をして挨拶を返しつつ、

「お招き頂きありがとうございます」

と、皮肉なことを言っただけだ。

「しかし、南部の方は、皆さん、どなたも非常に親切な方ばかりです。すね」

パウロス卿が口を開く前に、レオポルドは穏やかな笑みを浮かべて言った。

「南部に入ってから、ここに来るまで、余所者の私を、誰もが客人として温かく出迎えてくれます。クロヴェンティ司教にお会いできましたし、レガンス司教区の方とも話ができました。剣の修道院でもお世話になりました」

レオポルドが話していることは、他愛ない世間話のようにも思えるが、しかし、これは、パウロス卿にとっては、非常に痛い話題である。

南部における帝国の名代ともいえるサーザンエンド辺境伯の空位によって、南部は過去にないほど、帝国の力が弱まっている。それに反比例するように、異民族系の諸侯たちの力は強まっている。

そのような情勢下にあつて、レオポルドを捕えて、サーザンエン

ドで勢力を伸ばそうとする有力者に、差し出せば、大きな利益になることは明白である。領地は安堵を約束されるだろうし、新たな土地や特権を与えられることも十分にあり得る。

それでも、パウロス卿が未だに明確に、そういった動きに出していないのは、彼が帝国人だからであろう。

異民族が、異教徒が、帝国に反抗的な行動に出るのは自然であり、ありふれたことだが、帝国人が帝国に反抗する行為に及ぶのでは意味が違う。いうなれば、同胞を裏切る行為に他ならず、今まで付き合ってきた仲間から裏切り者と糾弾され、教会からは異教徒と通じた背信者と断罪されることを覚悟しなければならない。破門をも覚悟しなければならぬだろう。教会信徒にとって破門は死刑宣告にも等しい。

そういった大きなリスクを抱えるパウロス卿がレオポルドの捕縛に躊躇するのは自然なことだろう。

レオポルドが話したのは、そのリスクを想起させる内容だった。自分は教会と繋がりがあり、少なくとも、南部における教会勢力と関係を持っていると述べたのだ。

教会の権威が絶対的で、公伯よりも、大司教や司教が力を持ち、下手すれば、皇帝よりも総司教の方が上にも感じられるような時代は、既に昔のものではあるが、相変わらず、教会は非常に強い権勢を誇っている。

レオポルドの言葉は、その強大な力を持つ教会の権勢をかさに着るが如きものだ。

教会と繋がりを持っているということで、自分に手を出せば教会が黙っていないぞ。ということを決めたわけである。実際、教会がレオポルドをどれくらい重要視しているかは、レオポルド自身にも分からないが、そんなことは相手に言わなければいいだけの話だ。レオポルドがどれくらい教会と仲が良かったかなど、相手は知らないのだから。

教会を敵に回したくないパウロス卿にとっては、機先を挫かれる

切り出しだった。

「ところで、パウロス卿は帝都に行かれたことは」

ひとしきり、南部を旅した感想を一人で話した後、パウロス卿が本題を口にする前に、レオポルドは更にのんきな世間話を続ける。

「あ、いや、何度か足を運んだことはあります。倅はないのですが」「そうなのですか。帝都には、是非、一度は行かれるべきです。帝國中、いや、大陸中、世界中から物や人が集まる大都市ですからね。行くだけで勉強になります」

レオポルドの熱心な勧めに、パウロス卿父子は困ったような顔で聞き手に回っていた。

「失礼ですが、御子息は」

「二人います。一〇と七になります。あとは娘が二人です」

レオポルドが、パウロス卿の子息に尋ねると、アーサー・ルドルフはそう答えた。

「それならば、是非とも、御子息を帝都に留学させるべきです。若い頃に見聞を広め、大いに学ぶことは、非常に重要なことです」

「確かに、その通りですが、帝都というと中々」

遠く離れた辺境の地である南部から帝都に行くだけでも多くの旅費と長い時間が必要になるのは、今までの旅を見てきたとおりである。

その上、帝都に何日、何週間どころか、何ヶ月、何年にも渡って滞在し、留学するととなると、旅費の他、滞在費用も必要となる。部屋を借りる代金に、飲食代、衣料費、世話をしてくれる人の給金、勉強をするにも、本の代金や、大学の教授の講義を受ける受講料、その他、諸々の費用は庶民に比べれば莫大ともいえる資産を持つ貴族にしても、無視できない出費である。

また、金さえ出していればなんとかなるといってもない。大事な跡取りを預けるのだから、世話をする者は信頼のおける者でなければならぬし、田舎の貴族を相手にした詐欺なども少なくない。部屋を借りる契約をしたが、その肝心の部屋は契約内容とは全く違

う檻樓屋で、詐欺だったと気付いたときには、相手の行方は分からずなんてことも少なくない。留学を斡旋・仲介すると見せかけて、貴族の子弟を誘拐し、身代金を要求するなんて輩もいなくはないのだ。帝都に縁のない田舎貴族が子弟を帝都に送るのは中々難しいものがある。

「それでしたら、レイクフューラー辺境伯閣下を頼られるとよいかと思います」

レイクフューラー辺境伯の名前が出て、パウロス卿父子の表情が固まった。

「閣下は留学生の受け入れと支援に御熱心ですから、必ずや力になってくれるでしょう。何でしたら、私から紹介状を出しましょう。

私も、閣下とは少なからず面識がありますので」

レオポルドのお節介な申し出に、パウロス卿父子は強張った顔で、「お心遣いありがとうございますが……」

と、ごによごによ言いながら、丁寧に辞退した。

レイクフューラー辺境伯といえば、帝国屈指の名門大貴族である。当代当主キレニア・グレースバツハの祖父フューラー公ルプレヒト一世は、当時の皇帝の弟で、長く内務大臣を務め、事実上の首相格として国政を担っていた。フューラー公とその一党はフューラー派と称せられ、強い力を振るった。

二代目フューラー公ルプレヒト二世の失脚で、フューラー派は瓦解し、全盛期に比べれば、その力は随分と落ちたが、今でもフューラー派の牙城であった内務省や治安総監府。つまりは、公安系に強い影響力を持ち、帝国全土どころか大陸中に独自の情報網を持つというもつばらの噂であった。帝国の中でレイクフューラー辺境伯の耳に入らないことはないといわれるほどである。

田舎の小貴族であっても、その話は十分耳にしている。教会を敵に回すだけでも怖いのに、その上、レイクフューラー辺境伯ら旧フューラー派にまで睨まれたくないものだ。

しかも、レオポルドは皇帝直参の帝国騎士である。下手に手を出

して、皇帝からお叱りがこないとも限らない。

教会と親しく、レイクフューラー辺境伯にも顔が通じ、皇帝の直参であるレオポルドに手を出すことは、非常に危険に思われた。もしも、彼を捕え、異民族の有力者に引き渡した件が露見すれば、ただでは済まないような気がしてくる。

勿論、教会や辺境伯、皇帝がレオポルドを保護する為に、わざわざ、動いてくれるほど、彼を重要視している保証はない。破算した下っ端の騎士の一人や二人、見捨ててもおかしくはない。

とはいえ、パウロス卿には、レオポルドがどの程度の者なのかを知る術がないのだ。騎士の中でも、有力な者は皇帝の宮廷で大臣の席にある者もいる。それほどとは言わずとも、一族に皇帝の顧問や側近がいるかもしれないし、皇帝に目をかけられているという可能性もなくはない。

しかも、クロス家は、パウロス家の主家であるサーザンエンド辺境伯フェルゲンハイム家から嫁を貰っているのだ。辺境伯家の子女を嫁に貰えるほどの力があるとパウロス卿が勘違いしてもおかしくはないのだ。

実際のところは、クロス家はもはや破算し、領地も失い、財力も権力もないに等しい状況で、家族も一族もなく、サーザンエンド辺境伯から嫁を貰ったのも、随分と昔の話で、しかも、辺境伯家自体が破算ギリギリだったので、嫁の嫁ぎ先に困っていたという事情がある。

だが、パウロス卿はそれを知らない。南部においては、レオポルドやクロス家の知名度など、全くないに等しいのだ。

レオポルドは半時以上も、他愛ない世間話を続けた後、

「さて、そろそろ、お暇したいと思います」

と、席を立った。

パウロス卿父子は、腰を浮かし、口を開きかけるが、言葉は出てこない。

その代わり、レオポルドが口を開いた。

「ああ、そうだ。大変不躰な申し出で申し訳ないのですが、レイクフューラー辺境伯爵下やクロヴェンティ司教猊下から、私宛の手紙が来るかもしれませんで、見かけたら、ハヴィナのロバート・フェルゲンハイム様の方に送って頂けますか。私は、おそらく、そこに滞在しておりますので」

ロバート・フェルゲンハイムは、フェルゲンハイム家の唯一ともいえる生き残りで、現在、辺境伯代理として、フェルゲンハイム家の相続問題に取り組んでいるはずだ。

レオポルドはロバート・フェルゲンハイムと面識はないが、口から出任せで、勝手に繋がりがある風を装って言っておいた。言うだけならばタダだ。

結局、レオポルドは散々虎の威を借る狐が如く、自身の背後に権力者がいるようなことを匂わせた。彼を捕縛してガナトス男爵に引き渡すべきか否か迷っていたパウロス卿は、この話を聞いて、すっかり、決断する気を失くしたようだ。

そもそも、パウロス卿は、次期辺境伯候補の帝国騎士を捕縛して、異民族に売り渡すという裏切り行為を働けるほど悪人ではなかったし、悪人になる勇氣や決断力もなかったようだ。そこらの庶民ならばいざ知らず、貴族を一人捕まえて取引に使うという犯罪をやるには、教会や皇帝に喧嘩を売るくらいの気概がなければできないことなのだ。

何事もなかったかのように悠々と一人歩いて宿まで帰ってきたレオポルドを見て、連れの三人は一樣に驚いていた。

レオポルドが事の顛末というか、口から出任せに虎の威を借りる狐みたいなきことを散々言っ、弱気なパウロス卿が手出しするのを諦めたことを説明すると、フィオリアとソフィーネはすっかり呆れた顔をした。

「何それ。諦めるんなら、最初から、手出してこなければいいじゃない」

フィオリアの言っていることは、大変ごもつともである。とはいえ、そうはいかないのが政治とか、そういうものなのだ。

レオポルドがパウロス卿に呼び出されている間、三人はどうしていたかと尋ねると、三人は顔を見合わせる。

「いつ、どこで、どの段階で、レオポルド様を救出するか話し合っていました」

キスカが無表情に述べた。

更に詳しく話を聞いたところ、三人は、このまま、レオポルドが拘束され、ガナトス男爵の下へ送られるようであれば、移送中か、どこかの段階で、移送の隊列を襲撃して、レオポルドを救出するつもりだったらしい。

「なんて、無茶な」

「夜闇に紛れて奇襲をかければ、成功の余地は十分にあります」

レオポルドが呆れると、キスカは大真面目な顔で言い切った。そこまで大真面目に言われると、なんだか、できそうな気もしてくるが、三人では、そのうちの一人、フィオリアは戦力にならないから、実質的には二人だけで、少なくとも十数人はいるであろう護衛を打ち破ってレオポルドを救け出すなど成功の確率が極めて低い、危険極まりない賭けであることは間違いない。

そここのところは、キスカも十分に理解していたらしい。だが、それでも、彼女はやるつもりだったようだ

「レオポルド様がいなくなつては、今まで旅してきた意味がありませんから、私は、貴方をサーザンエンドにお連れして、辺境伯になつて頂く為に、お仕えしているのですから」

キスカは真剣な顔でそう言い切った。

「あ、あー。そう、か。うん。ありがとう」

真つ直ぐな忠誠心を向けられて、レオポルドはなんだか、気恥ずかしい気分になつてきて、顔を赤くしながら、礼を述べた。

気恥ずかしい気分になつているレオポルドを見て、今更ながら、キスカの方も恥ずかしくなつてきたのか、顔を朱に染めて黙り込ん

だ。

顔を赤くする二人の主従を見て、フィオリアは非常に不機嫌そうな顔をして二人を睨み、ソフィーネは呆れ顔で三人を眺めていた。

一九 サーザンエンド辺境伯の宮廷について

サーザンエンド辺境伯領の首都ハヴィナは南部では、最も大きな都市である。

元々人口が希薄で、大きな都市の少ない南部にあつて、ハヴィナは五万という帝国本土でも中堅都市並の人口を持つ。

町の造りは、所謂、帝国風と南部風が入り混じつた感じであつた。都市はぐるりと城壁で囲まれ、城壁には大小八つの門があり、役人が人や物の出入りを管理し、関税を取り立てている。

広い道路が南北と東西にハヴィナを分断し、中心部には大きな円形の広場があつて、教会や市参事会議事堂、裁判所、そして、辺境伯の宮殿などの建物が広場の周囲に建っている。

建物の多くが、薄茶色の煉瓦製で、どこか異国情緒感じさせる様式であつても、都市としては帝国風の造りである。

ただ、それは市の大通りと広場周辺の中心部のみで、大通りから一步街路に入ると、途端に雰囲気は一変する。

杓子定規にきつちりと直線で区切られた建物と道路の秩序だつた都市計画はどこかへ吹き飛んでしまったかのように、雑然とした、猥雑な街並みが広がっている。曲がりくねつた細い街路に、統一性のない、高さも大きさも、まちまちな四角い建物がひしめき合っている。

通りと建物の境もアヤフヤで、食べ物屋のテーブルや椅子は通りにまで置かれ、そこいらで客が飯を食う合間を通行人が通り抜け、商人が店の商品を通りにまで棚を置いて売っていたり、職人が作った商品を通りに並べてそれを小僧が次の作業場に運んでいたりと、通りを挟んで建物と建物の間に渡された紐に洗濯物が吊るされて、通行人の頭の上に水滴を落としていたりする。

通りは基本的に狭く、所によつては向かいから来る人とすれ違つのがやつつとというような箇所もある。たまに開けた場所があると、

そこには必ず井戸と共同の洗濯場があつて、奥さん方が姦しく世間話に花を咲かせながら洗濯や食器洗いなどの水仕事をしていた。

このように非常に雑然とした町ではあるが、いくつかの街区に分割されているようだ。

まず、広場とその周辺を中心部は、官庁や貴族、上級聖職者、上級役人、士官などの屋敷や家が整然と並ぶ官庁及び高級住宅街である。他の部分は東西南北に町を分断する大通りによって四つに分けられている。

北西の街区は、帝国系の住民が多い地区で、比較的きつちりと通りも家も整理され、小さな教会もいくつかある。その東隣は職人街で、木製品や金属製品、革製品などの製造や修理を行っている。なお、革製品の職人は北東の街区の中でも、南東寄りに集中している。というのも、その南隣の街区の東側には肉屋が多く、そこで屠られた家畜の革が、すぐ北の革職人の許へ届くようになっていたのだ。南東の街区には肉屋の他、魚屋、野菜屋など、食品を扱う商人が多く住んでいる。その西隣の街区には小さな市場や宿、風呂屋、食堂、飲み屋が点在していた。

レオポルド一行はハヴィナの複雑極まりない迷路のような下町を歩き回った果てに、それだけのことを身をもって理解してから、安くて清潔そうな宿を見つけて、そこに部屋を借りた。

レオポルドは部屋に入るなり、荷物を放り出し、ほとんど倒れ込むように、部屋の真ん中で大の字になった。

「つ、疲れた……」

息も絶え絶えにそう呟く、彼の隣にフィオリアが無言で、こちらと同じように倒れ込む。彼女の方が体力の消耗は酷いようで、顔は土気色で、息は荒く、薄い絨毯の上で横になって、ほとんど茫然としている。

体力には自信がありそうなソフィーネも壁に背を預けて座り込んでいる。

「申し訳ありません。私が不甲斐ないばかりに……」

最も健脚で体力がありそうなキスカだけは、まだマシなようだったが、土下座せんばかりに、レオポルドに向かって謝罪を口にする。彼女は一行がこんなことになっているのは自分のせいであると、責任を感じているらしい。

レオポルドたちがハヴィナに入ったのは、昼前のことで、そこまでは、やたらと快晴で暑い以外には、非常に順調で全員足取りもしつかりとしていた。

大変だったのは、ここからだ。

旅装のままで宮廷に乗り込むのは如何なものかと思われた。準備とか作戦会議をしてから宮廷に乗り込むべきであろうというわけで、まずは、宿で部屋を借りて、そこで一日休憩してから最終目的地へ行くことにした。

そういうわけで、一行は宿屋を探した。それが、長い長い旅の最後の、長い旅の始まりだった。

一行の中で唯一土地勘があるキスカにしても、ハヴィナの町の中に入ったのは初めてで、彼女の道案内は殆ど役に立たなかった。道すがら、人に道を聞いては、右へ左へと歩き続けるが、いつの間にか、元の場所に戻っていたり、明らかに全く見当違いの場所に出てしまっていた。天気は快晴で、気温は大変高く、流れ出る汗を何度も拭いた。何度も同じ場所を廻っているという徒労感に、長い旅の疲れがどつと出て、一行は急速に疲労していき、やっとなき、宿が集まる地区を見つけたときは、四人の口から一斉に安堵の息が漏れた。

そうして、そこから、良い宿を見つけて、部屋を取って、階段を上って、部屋に入ったときには、夕刻を過ぎていた。

全員が疲労困憊で、思わず、倒れ込んだりしゃがみ込んだりしてしまっただ。無理もない話であろう。

「いや、いいんだ。うん、これくらいは、な」

キスカの謝罪に、レオポルドは床の上に大の字になったまま、身動きもせずに、弱弱しい調子で言った。

レオポルドとフィオリアの貴族育ちの二人の疲労は回復せず、その日は二人とも夕飯も食べずにそのまま寝入ってしまった。

翌朝、レオポルドとフィオリアは、朝から旺盛な食欲を發揮していた。

仔羊の腸とトマト、香辛料の炒め物、あっさりとした味の鳥の煮込み、酸味のある豆のトマトスープ、ヨーグルトには刻んだ胡瓜が入っていた。パンはしっかりとした歯ごたえで、食べごたえがある。朝食にしてはかなりポリュームのあるメニューだったが、二人は無言で、食べていく。

昨日の食事が軽い朝食と、街中を彷徨っていたときに屋台で買って立ち食いしたパンだけだったから、空腹なのだろう。

やたらと朝からがつつく二人を、キスカとソフィーネは冷静に眺めていた。昨日、夕飯を食べずに寝た二人と違い、この二人はきちんと夕飯を食べることができたのだ。

この二人だけの食事の席ではどのような会話がなされたのか、或いは何も会話がなかったのかと、レオポルドは少し気になった。

「それで、これからの予定は」
クロス家の姉弟の食事がひとまず済んだところで、ソフィーネが口を開く。

「まずは、今の边境伯の宮廷の様子が知りたいな」

レオポルドがパンをトマトスープに浸しながら答える。

レオポルドの現在のところの最終目標はサーザンエンド边境伯になることであるが、その為には、まず、少なくとも、宮廷の支持をとりつけることが必要になる。

边境伯という役職は皇帝により任命される帝国の役職ではあるが、その全てを皇帝の自由にできるわけではないのだ。諸侯の位は血統により継承されるものと絶対的な慣習として定まっており、これは、皇帝といえども無視できない。何故ならば、その慣例によって皇帝位も一つの家で代々継承できているからである。この慣習を破れば、

皇帝位をも別の家に取って代わられる名分を与えることになる。一つの家から諸侯の位を奪うには血統が断絶したとか、皇帝に対して反乱を起こしたとか、そういった大義名分が必要になるのである。

この為、諸侯の位は血統によって代々継承され、原則的には嫡子が相続するものであり、嫡子がいない場合は、諸侯本人やその宮廷が後継者を選択するのである。皇帝はそれを承認するだけだ。

故に、レオポルドがサーザンエンド辺境伯位を得ようとするには、辺境伯の宮廷の支持を得る必要があるのだ。地元が支持する相手ならば、皇帝も辺境伯位の継承を認めるだろう。

宮廷の支持を得るには、まずは、宮廷の様子を知らなければならぬ。一行の中で最もサーザンエンドの情勢に精通しているキスカにしても、彼女は異民族であり、宮廷の一員ではないので、宮廷の内部事情はよく分からないようであった。

とりあえず、キスカがなんとなく見聞きしていたことがある情報と、レオポルドが今まであちこちの教会などで得た情報、ソフィーネが修道院の中で聞いた話と、フィオリアがレイクフューラー辺境伯邸で働いていたときに聞きかじった話なんかを突き合わせてみた。

以前から聞いていたことであるが、一年前、第十六代サーザンエンド辺境伯コンラート三世は没し、辺境伯位を継承できる血統であるフェルゲンハイム家の相続適格者はサーザンエンドからいなくなってしまった。

唯一残ったのは第十四代辺境伯ヴィルヘルム二世が帝都に訪れた際に出会ったカロン生まれの少女との間に生まれた非嫡出子で、御年六十歳を超えるロバート老と、その孫だけであった。

ロバート老の母は、正式な辺境伯の妻ではない為、一夫一妻制である西方大陸では、正式な子として認められない立場である。それ故に、辺境伯の継承権をも持っていない。それ故に、このままではフェルゲンハイム家は断絶。サーザンエンド辺境伯位はその上位である皇帝に返還されることになる。とはいえ、帝国政府は扱いが厄介な南部に深く踏み入るのを嫌い、なんとかサーザンエンド辺境伯

を存続させようとした。そこで、政府はロバート老を臨時の辺境伯代理とし、相続適格者をなんとか確保するように命じた。ここまでは以前聞いたとおり。

今の宮廷ではそのロバート老がトップであり、後継者を選択し、皇帝に推挙する権限を有している。ただ、彼は数月前から、急病で倒れているという話だった。今もどうにか生き長らえてはいるようだが、後継問題を主導できるかは怪しい。

聞いたところによれば、ロバート老が病床に臥せっている中、宮廷を取り仕切っているのは、侍従長レツケンバルム卿という人物であるらしい。また、宮廷の金庫は財務長官のボスマンという人物が握っており、辺境伯軍はジルドレッド卿が司令官で、その傘下にあるようだ。

つまり、今のところ、宮廷ではこの三者が実力者のようだ。この三人の支持を取り付ければ、レオポルドが辺境伯になれる可能性は非常に高くなる。

とはいえ、これらの情報は噂や人づてに聞いた話ばかりで、詳細はわからず、正確性にも欠けている。

「もっと詳細で確かな情報が必要だな」

レオポルドの言葉に全員が同意した。

「じゃあ、どこで情報収集するの」

「いいところがある」

フィオリアの問いに、レオポルド即答した。

「まあ、毎度のところなんだがな」

レオポルドの言葉を聞いて、三人はそれがどこかすぐに見当がついたようだ。いずれも微妙な顔をして黙り込んだ。

二〇 フェルゲンハイム家について

レオポルドが足を運んだのは、例によって例の如く、ハヴィナの教会であった。

ハヴィナにおいて、レオポルドが頼ることのできる場所は、教会を置いて他には何もなかったのである。その上、教会といえば、帝国どころか大陸全土に情報ネットワークを持つ非常に強力な情報力を持つ組織だ。情報を得たければ、教会を通じれば大概の情報は手に入る。また、上位の聖職者は宮廷の一員でもあり、頻繁に出入りしているだろうから、宮廷の内情にも深く通じていよう。

レオポルドが情報の入手先として選んだのは、全く妥当なことであつた。

とはいえ、レオポルドの同行者たちはいずれも教会に対してあまり良い印象を抱いていない面子ばかりだった。そういうわけで、今回も、レオポルドは一人で教会に乗り込んでいく。

これから辺境伯になろうというのに、供回りの一人もいないでは全く心許無い。と思いつつも、今周りにいる連中を一人二人でも同行させても意味がないので、しょうがないか。と、レオポルドは嘆息した。

ハヴィナで最も大きな教会である聖マルコ教会は、ハヴィナの中心にあるコンラート一世広場に面して建っている。石造りの立派な建物で、鋭い尖塔が天を突き刺し、聖堂の屋根はドーム状で純白。門も大きく高く、数人程度ならば、一斉に出入りができそうなのだ。

内部も壮麗な造りであり、祭壇は金銀で飾られ、ステンドグラスは七色に輝き、聖職者たちは純白の絹の聖服を身に纏っている。

「大変立派な教会ですね」

応対に出た主任司祭にレオポルドは少々皮肉じみた贅辞を述べた。サーザンエンド辺境伯が金銭的に困窮しているのは有名な話であ

る。サーザンエンドは産業に乏しく、土地は痩せていて、税収が非常に少ない。そのくせ、水路を整備しなければ農地は干上がるし、道路は整備しなければならぬし、反抗的な異民族の反乱は抑えなれないといけないし、必要な出費は山とある。辺境伯の金庫が空っぽであることは想像に難くない。

対して、聖マルコ教会は、はつきり言って、非常に金がありそうだった。

レオポルドはその辺りを皮肉に込めて言った。

「いえいえ、帝都の大聖堂や教会に比べれば、小さくみすぼらしい教会でしょうとも。いやいや、お恥ずかしい」

聖マルコ教会の、でっぷりと肥満した初老の主任司祭はそう言つて、のんきに笑っていた。レオポルドの皮肉は通じなかったようだ。「いえ、これほど、立派な教会は帝都にも多くはありません。それに、大きければ、華美であればいいというものでもないでしょう」

そもそも、教会というところは、神に祈りを捧げる為の施設であり、その教会を巨大にする必要がどこにあるのか。華美である必要があるのか。神様はそんなに派手好きなのか。聖典を読む限りは吝嗇ともいえるほど、節制と質実を口酸っぱく説教しているイメージがある。と、レオポルドは常日頃から感じていた。ならば、神の家は、清廉で質素であるべきではないか。

「いやいや、そんなお世辞を申されましても。いやはや、クロス卿は、人を持ち上げるのが上手いですなあ」

しかし、その辺の思いは、主任司祭に全く通じなかった。

「いや、これも、全て、ボスマン殿の功績なんですな」

皮肉も通じないようだし、社交辞令はこのくらいにして、本題を切り出そうかとしていたレオポルドの耳に主任司祭がぼろりと漏らした名前が飛び込んでくる。

「ボスマン殿、というと」

「ああ、辺境伯の財務長官のボスマン殿です。以前は、この教会の事務長を務めておりました。その間、この教会の発展に尽くしてく

れました。古かった教会も改築できましたし、祭壇や祭器も良いものを揃えることができました。それに、あとは、なんといつても、聖遺物を納めることができましたし。数年前に、聖マルコの遺髪を持つという商人がおりまして、その者から、聖髪を買い求めるのに、かなりの費用がかかりまして。いや、しかし、聖遺物というものは、お金以上の価値がありますから」

ほとんどレオポルドの反応を無視して、主任司祭は延々と話し続ける。どうやら、かなり話好きなようだ。

お喋りな主任司祭を勝手に喋らせておいて、その間に、レオポルドは思案する。どうやら、辺境伯のボスマン財務長官は、以前は教会の事務長を務めた人物で、若しかすると、聖職者の身分であるようだ。

聖職者が宮廷の役職に就くことは多々あることである。何故ならば、聖職者は教会で高い教育を受けており、教会という巨大な組織に身を置いている為、有能な者が少なくないのだ。また、聖職者の給与を教会が払っているのです、宮廷が払う給与が少なくて済むのも利点である。教会からしても、身内の者を宮廷の役職に置くことができる、影響力を発揮できるのだから、メリットは十分にある。

さて、そういうわけで、ボスマン財務長官は、教会出身で、教会との繋がりが深い人物のようだ。また、教会の財務を改善しているようなので、財務担当者としては有能なのだろう。

主任司祭の話が一段落したところで、レオポルドは早々と本題を切り出すことにした。まずは、クロベンティ司教とレガンズ司教から預かった聖マルコ教会宛の手紙を渡す。封がされているので、内容はわからないし、レオポルドには読む気もなかった。教会間の手紙を隠し読むような姑息で些細なことをして、教会からの信用を失う方がリスクのある行為だからである。

「それで、宮廷の様子はどうですか」

「どう、といいますと、そうですね。ロバート様は政務に復帰されました、今はボスマン財務長官と財務関係について連日協議されて

いるようですよ」

病を得て、明日をも知れぬ命とされていたロバート老は、どうやら、まだ生きており、政務を執れるほどに回復しているようだ。血の繋がりはそれほど濃くはないが、一応、同族であるロバート老生存の報にレオポルドは安堵する。同族ならば、レオポルドに味方してくれる可能性が高いからである。

「商人たちに借金の返済期限と利子を猶予してもらったので、どうか、破綻は免れたのですが、肝心の後継問題は未だに妙案がないようです。唯一候補として挙がっているのは、ウォーゼンフィールド男爵のようですな。男爵の祖母はヴィルヘルム三世后のお妹でした。その姉妹というのは、更に先代の辺境伯カール四世の娘で。それに、カール五世の母君はウォーゼンフィールド男爵の伯母ですし、コンラート三世后は男爵の御息女で」

「ちょよ、ちょよと待って下さい」

ただ話を聞いているだけでは、頭の中で家系図がこんがらがってくる気がして、レオポルドは主任司祭の話を通り、もっと詳しく分かり易い説明をお願いした。主任司祭は面倒くさそうな顔はしたが、話し始めると、お節介なくらい丁寧に事細かく教えてくれた。

まとめると、まず、第十三代辺境伯カール四世には娘が二人がおり、このうち姉の方が第十四代辺境伯ヴィルヘルム三世の后。妹はウォーゼンフィールド男爵の祖母である。なお、ヴィルヘルム三世は、元々、フェルゲンハイム家の分家の出身で、そこから当主の娘を娶って養子に入っただけらしい。

さて、そのヴィルヘルム三世には子が三人いた。一人は妾に産ませた非嫡出子のロバート老。残りの二人は嫡出子で、一人はゲオルグという男子だったが、当主になる前に若死。もう一人は娘で、はるばる帝都の帝国騎士クロス家に嫁いだ。

ゲオルグは若死したが、ウォーゼンフィールド男爵の伯母との間（つまり、ここは従兄妹婚になる）に子を一人残していた。この子がヴィルヘルム三世の死後、第十五代辺境伯カール五世となる。た

だ、カール五世は病弱で十代のうちに早々と没す。

ここで、フェルゲンハイム家の血筋は一旦手詰まりになったが、ヴィルヘルム三世には弟がいて、その弟が分家を相続しており、孫が一人いた。これを持ってきて第十六代辺境伯コンラート三世とした。

ちなみに、フェルゲンハイム家は幾度もそんな目に遭っており、生き残りが一人になっても、どうにかこうにか、頑張って凌いだということが少なからずあるらしい。

その時は、どうにかこうにかなったのだが、しかしながら、コンラート三世は精神病を患っていた。普段より言語不明瞭で、その言葉を理解できるのは侍従長のレッケンバルム卿のみであった。更には、唐突に怒りだしたり、暴れたりすることも、しばしばあり、宮廷は外に漏らさないようにはしていたが、何度か殺傷事件を起こしているようであった。主任司祭はコンラート三世が椅子に縛り付けられているのを見たこともあったという。

それでも、唯一残ったフェルゲンハイム家の生き残りというわけで、どうにかして血筋を遺そうと、ウォーゼンフィールド男爵の息女を娶らせて、子を為そうとしたが、上手くいかず、昨年、コンラート三世は没したという。病死との報だったが、自殺したとか暗殺されたとかいう噂もあるという。

さて、こうして話を聞いて、目立つのはウォーゼンフィールド男爵の存在である。周辺に適当な帝国系の諸侯がないとはいえ、フェルゲンハイム家は、異様に臣下であるウォーゼンフィールド家と縁組することが多いようだ。今聞いた限りでは、十三代目のカール四世の娘がウォーゼンフィールド男爵家に嫁いでいるし、その娘は十四代目ヴィルヘルム三世の子息と縁組している。そして、十六代目コンラート三世の後もウォーゼンフィールド家の娘である。

聞けば、フェルゲンハイム家とウォーゼンフィールド家の繋がりは以前より深いらしい。

ウォーゼンフィールド男爵は、辺境伯の配下の領主層では筆頭の

家柄であり、サーザンエンド中部の、首都ハヴィナの周辺を含む、広大な地域を領有している。血の繋がりもあり、実力もある。そういうわけで、宮廷ではウォーゼンフィールド家がサーザンエンド辺境伯を継承するという線で動いているようだ。

ただ、ウォーゼンフィールド家はフェルゲンハイム家に度々娘を后として出しているが、その血統を受けているのは、現当主アウグスト・ウォーゼンフィールド男爵の祖母まで遡らなければならぬ。しかも、齢四十を超える男爵には娘が二人いたが、男子がい無い。これは、今まで後継問題に悩まされてきた宮廷にとっては、大いに懸念材料である。

また、男爵自身も、己の辺境伯就任にそれほど積極的ではないという。その理由は、野心がないとか、病を得ているとか、諸説あるが、そう言われるくらい、温和で控え目で、表に出てこない人物なのだそうだ。

その為、レオポルドにお鉢が回ってくる可能性は十分にある。彼の祖母は第十四代辺境伯ヴィルヘルム三世の娘であり、血統の近さからいえば、レオポルドの方が近いといえる。

しかも、彼はまだ若く健康で、結婚はまだであるが、後継者ができる可能性は男爵よりも高い。ただ、彼には何の実績も知名度もないのが困ったところである。というか、宮廷の面々がレオポルドの存在を知っているかどうかすら疑わしい。

いや、本当に知らないというのだろうか。

レオポルドの脳裏に一つの疑念が浮かんだ。後継問題に悩む宮廷の面々が誰一人、レオポルドの存在に気付かないのだろうか。宮廷では後継問題に思い悩む度に家系図を広げて、線をなぞって適任な人間がいなか探しているだろう。その中で、レオポルドの存在に気付かないとは考え難い。顔を知らずとも、存在は知っているはずだ。少なくとも、宮廷にいる連中は知っているに違いない。それでも、レオポルドに対して何の音沙汰もないというのは、何か思惑があつてのことなのか。それとも、本当に見逃しているのか。或いは

使者が行き違いになっているという可能性も否定できない。

「宮廷の方々は、私の存在を存じているのでしょうか」

レオポルドは思い切って、目の前の、おそらく、ハヴィナでは数少ないレオポルドの立場と顔を知っている聖マルコ教会の主任司祭に尋ねた。

「はて。どうでしょうね。宮廷ではクロス卿の名前を聞いた覚えはありませんねえ。ということは、おそらく、気付いていないのではないのでしょうかね」

主任司祭はのんきな返事を寄越してきた。

レオポルドは愛想笑いをしながら、少し前から思っていた疑念を確信に深めた。この主任司祭は使えない男のようだ。

二二 宮廷からの手紙について

レオポルドが聖マルコ教会で情報収集を終え、宿に戻ると、扉を開けると同時に、宿の主人から声を掛けられた。

「来客がありましたよ」

その言葉に、レオポルドは顔をしかめた。彼に会いに来るような知人など、ハヴィナどころか、サーザンエンドにも南部にすらいはいはずだ。一体、誰が、何の用で、レオポルドの許を訪れたというのか。

「不在だと言ったら帰っていききましたよ。同行者の方がいることは話したのですが、本人に用があるそうなので帰ってしまいました。この手紙を置いてね」

レオポルドは主人が差し出した手紙を受け取り、礼を述べてから、その客人の風体を尋ねた。主人の話によれば、背の高い若い帝国人で、あまり見かけない顔だが、余所者ではない雰囲気だったという。また、立ち居振る舞いや口調からして、役人か何かのように思えたという。

「なるほど」

彼は重ねて礼を言ってから、二階の借り上げている部屋に向かった。

部屋に入ると、キスカは不在で、フィオリアとソフィーネだけが、外は快晴にも関わらず、不健康にも部屋の中に閉じ籠っていた。

「こないだいい天気なのに、部屋の中に籠ってるなんて、不健康だな」
レオポルドが呟くと、寝転がって本を読んでいたフィオリアが不機嫌そうな顔を上げた。

「こんな暑苦しいのに、よく外なんか出ていられるわね」

そういえば、この義理の姉は、昔から暑いのが苦手だったな。と思いつく。

ソフィーネは部屋に入ってきたレオポルドをちらりと見ただけで、

すぐに読みかけていた本に視線を戻した。

「その本はどうしたんだ」

ふと疑問に思ったレオポルドが尋ねる。旅の荷物に、本はなかったはずだ。

「貸本屋で借りてきたの。暇だし、外に出る気もないしね」

東方大陸から伝わった紙と印刷技術の発展により、数百年前よりは随分と安価になり、流通するようになった本ではあるが、未だもって非常に高価なものであることに変わりはない。また、図書館などという高等な施設は文化的に先進した大都市にしかないもので、このような辺境都市には存在しなかった。しかし、文字を読むことができる人々の本を求める需要は高いものがある。そこで、本を有料で貸し出す貸本屋という商売が成立するわけだ。

「あんまり品揃えはよくなかったわ。これは、料理と薬の本。ソフィーが読んでるのは何だっけ。聖人の話だっけ」

「違う。騎士物語」

「ああ、そう」

そうして、二人は再び読書に戻る。品揃えに文句を言っていた割に、借りてきた本は面白いようだ。

「ところで、キスカは」

「ちよつと出るってさ。ついでに、お昼も買ってきてって言ったんだけど」

フィオリアは本から目を離さずに答える。

レオポルドは頷きつつ、女性陣の関係性について考える。彼女たちは、互いに干渉しないようにしているのか。その割には、互いに遠慮がないような。仲が良いのか悪いのか。彼にはイマイチわからなかった。

レオポルドが帽子と上着を脱ぎ、シャツのボタンを緩めて、比較的楽な恰好になった頃、キスカが部屋に戻ってきた。律儀に昼飯を買ってきている。固いパンを切って、羊の焼肉とチーズを挟んだものを人数分とポットに山羊の乳とお茶を混ぜた飲み物を持ってきた。

軽食の方は、無難に美味しかったが、飲み物の方は帝国人貴族の舌と鼻には合わないようで、クロス家の姉弟は丁重に遠慮した。

「しかし、南部に入ってから、肉ばかり食べている気がするわ」

確かに、コレステルケで川魚のフライを食べた以外は、大体、パンか魚ばかり食べていた。たまに、南部で広く栽培される果実であるナツメヤシの乾燥させたものを食べたりもしたが、ほとんど野菜も果実も摂っていない。

「土地柄、あまり、野菜や果実が食べられないのだろう」

出回っているのは、乾燥させたものが多く、時期によっては新鮮な生の野菜・果実は貴重なのである。キスカ曰くには、もう少し季節が過ぎれば手に入り易い価格になるそうだ。

部屋の中でも軽い昼食を終えた後、レオポルドは、上着の内ポケットに入れっ放しにしていた、自身の不在中、宿に置かれた手紙の存在を思い出す。

「何それ。手紙。誰から」

上着の内ポケットから取り出した手紙を見てフィオリアが尋ねる。

「俺の予想では宮廷の誰かからの使者だろう」

「宮廷の誰かさんから、どうしてレオに手紙が来るの。ていうか、何故、レオがこの宿にいるってことを知っているの」

「それくらい把握しているんだろう。してない方がおかしい」

フェルゲンハイム家の血統を受け継ぐ有力な継承候補の居場所すら把握していないようでは、ましてや、目と鼻の先にいるのすら分からないようでは、余程の怠慢か無能としか思えない。サーザンエンド辺境伯の宮廷はそれほど怠惰でも能無しでもなかったようだ。

封を開け、手紙を読む。

内容は非常に簡潔。たった二行程度である。

「当地は非常に危険にて、直ちに此の地より離れ、御身を隠されよ」
「何それ」

レオポルドが読み上げ、ついでに差出人の名前はないと付け足すと、フィオリアが剣呑な顔で呟く。

「それって、忠告なのか注意なのか脅迫なのか、よくわからないわね」

ここは危険だから、何処かへ行けと、理由も説明もなく一方的に告げられるのは、気分の良いものではない。しかも、それが差出人不明の手紙であれば尚更である。

この手紙から分かることは、宮廷の中に、レオポルドをハヴィナから遠ざけたいと思っっている人物がいるということだろう。それがどういった理由でかはこの手紙だけでは推し測ることもできない。「それで、どうするつもりなんです」

ソフィーネが素っ気なくあまり興味なさそうな様子で尋ねた。彼女としても、一応、レオポルドと共に行動している故、これからの方針が定まらないと都合が悪いのだろう。

「出てけと言われて、はい、そうですね、その通りにするわけにはいかんからなあ」

とはいえ、当初の予定どおりにもいくまい。本来は正々堂々と正面切って宮廷に乗り込み、ロバート老ら宮廷の支持を取り付けて、辺境伯になる基盤を固めるつもりだった。

しかし、宮廷にはウォーゼンフィールド男爵を辺境伯に推す勢力があるようだし、このように、ハヴィナからレオポルドを遠ざけようとする意図を持った者もいるようである。そんな中に飛び込んでいくのは、飛んで火に入ることにはなるまいかと、レオポルドは危機感を抱いたらしい。

「しかし、この手紙の主も、今すぐ、俺の命をどうこうするつもりはないらしいな」

「殺すつもりなら、ご丁寧に手紙なんて送り返しませんからね」
ソフィーネの言葉にレオポルドは頷く。

ハヴィナを出るつもりはない。とはいえ、宮廷に乗り込むのは短慮というものだ。そういうわけで、レオポルドが選択したのは、とりあえず、この宿に留まって様子見するという日和見的な方策だった。

その選択に、フィオリアとソフィーネだけでなく、キスカもどことなく呆れ顔で、レオポルドを見つめた。

「いや、確かに、優柔不断な判断に思えるかもしれん。しかし、今は情報が少なすぎるからな。下手に動いて、余計なことになっても困る。第一、どう動けば、ベストかベターかもわからないのだから、動かないより他に策はないだろ」

レオポルドの弁解を三人の女性陣は黙って聞き流し、キスカは再び外に出かけ、フィオリアとソフィーネは読書に戻った。レオポルドは釈然としない顔で、キスカの後に付いて外へ出た。とりあえず、やることもないので、散歩でもすることにした。

「何処に行くんだ」

先に宿を出て、フードを深くかぶったキスカに、なんととはなしに声をかける。

キスカはレオポルドを見つめて、なんとも言い難そうに、口を微かに開けたり閉めたりした後、顔を伏せた。

「言いたくないなら、いいんだが」

レオポルドは彼女の妙な様子を訝しがりながら言った。

考えてみれば、キスカは、今はレオポルドに従ってはいるが、それは、キスカの部族の為に行動しているわけであって、レオポルドへの忠誠心は、本来は部族への忠誠心である。故に、部族の方針が変化し、彼らにとってレオポルドの存在価値がなくなれば、自然とキスカは離れていくだろう。

旅の間は、故郷の部族と連絡を取ることができず、彼女は当初の方針どおりに動くしかなかったわけだが、サーザンエンドに入った今は、そうではないだろう。今は、その気になれば、数日くらいの間に、手紙のやりとりをすることができる。

レオポルドは、この点を理解し、彼女が頻繁に外出しているのは、その連絡の為ではないかと考えた。

そして、部族の方針が変わったときには、彼女はどう行動するのだろうか。黙って、自分たちの元から離れていくのか。若しくは、

寝首をかかれるかもしれない。そこまで考えてレオポルドは少し憂鬱になった。

「あの、レオポルド様」

レオポルドの表情が暗くなったのを見て、キスカが恐る恐る声をかけてきた。

「いや、なんでもない。余計なことを聞いたな。まるでお節介な恋人のようだ」

彼がこう言ったのに、特に深い意味はなかった。かつて帝都で、恋人の浮気を心配して、過剰に相手を縛り、お節介なことをする男が主人公の有名な歌劇のことが頭の片隅にあつて、そういう言い回しになったのかもしれない。

「こ、恋人……」

レオポルドの思惑とは裏腹に、キスカは、その言葉を聞いた途端、顔を朱に染めて、狼狽えはじめた。

「レ、レオポルド様、御冗談でも、そのようなことを言われると、その、困ります」

「あ、いや、別に、深い意味があつて言ったわけではないのだ」

キスカに過剰に反応されて、レオポルドも顔を赤くして弁解する。暫く二人して、おろおろした後、キスカは俯いて黙りこくってしまった。

レオポルドはこのなんとも言えぬ雰囲気はどうしたものかと思案していた。

「街を」

ふとキスカが口を開き、囁くように話し始めた。

「ハヴィナの街を把握しようとしていたのです。道案内ができずに、レオポルド様にご迷惑をかけないように」

どうやら彼女は、ハヴィナに到着した初日に道案内ができず、一行を迷子にさせてしまったことを未だに申し訳なく思っているらしい。その為、今後はそのようなことがないよう、時間が空けば、街を散策し、道を覚えるよう努めているという。

レオポルドは彼女の行動に大変感心した。と、同時に、さっきまで彼女の裏切りを考えていたことが、なんだか申し訳ない気分になつてきた。

「そういうことか。確かに、道が分かる奴がいると助かるな」

彼の言葉に、キスカは無言で頷くと、フードを深くかぶり直す。

「それでは、行ってきますので。夕食までには戻ります」

そう言つて歩き出したキスカに、レオポルドは声をかけて引き留める。

「キスカ。俺も、街の中を見て回りたいのだが、あー、一緒に行つてもいいか」

彼の問いに、彼女は、無言で微かに首肯して応えた。フードの奥に隠れてその表情は窺えない。

そうして、二人は連れ立ってハヴィナの街を散策に向かった。

二二 レッケンバルム卿の屋敷前にて

レオポルドたちが投宿している宿の周辺は、同じような小さな宿や食堂、風呂屋などが多くある地域で、レオポルドと同じような旅人の姿がよく見受けられた。誰も彼も、まずは、宿を取り、風呂屋に入って旅の汚れを落として一服してから、食堂で飯を、という流れなのだろう。

旅人の多くは帝国人以外の、所謂異民族（元々、南部に住んでいる諸民族からすれば、後からやって来た帝国人こそ異民族なのだ）で、多くは南の砂漠地帯を越えてきた隊商キャラバンのようだった。

彼らはサーザンエンドよりも更に南の砂漠地帯の南端にある港町に陸揚げされる南洋諸島や南方大陸からの商品、或いは、砂漠地帯の東にある港町から東方大陸の商品を運んでくるのだという。前者の多くは香辛料や珈琲、砂糖、奴隷などである。後者は、茶や絹織物、陶磁器など。

それらの商品売り捌くと、彼らは鉄製品や武具、塩、毛織物などを買い込んで、砂漠を越えていくのだ。

それらをキスカに教えられたレオポルドは、隊商の引く四足獣を見てぎよつとした。背中にコブがあり、毛色は茶色で、強烈な臭いを放っていた。

「アレは、何だ……」

「駱駝ラクダという獣です。砂漠を越えるには、非常に有益な獣です。長い間、水を飲まないでも生きていけます」

レオポルドの問いにキスカが答える。

「そうなのか。見たことがない」

「南部では、サーザンエンド以南ではよく見受けられます」

「ふむ。砂漠で長時間活動できるというのは、あのコブの中に水を貯め込んでいるのか」

「そう言う人もいますが、あのコブを裂いても水は出てきません。」

脂肪が詰まっています」

キスカの言葉に、レオポルドは彼女を見つめた。

「アレのコブを裂いたことがあるのか」

「はい。うちで飼っていますから」

そういえば、キスカの家は遊牧民であるらしい。砂漠や荒野を遊牧するのならば、そういう地勢で長時間活動できる駱駝を飼っているのは当然であろう。

「じゃあ、なんで、アレはそんな長いこと水なしで生きられるんだ」

「さあ……」

その仕組みはキスカも知らないらしい。おそらく、隊商の連中も遊牧民も皆知らないで使っているのだろう。

「む。奴ら、こっちに来るぞ」

気が付くと、駱駝の背に荷物を載せた隊商は、レオポルドたちの方へ向かってきていた。レオポルドは顔をしかめて、強烈な臭いに呻く。

「有益な獣だということはわかったが、この臭いは堪らん。さつさと離れよう。いくらか前に読んだ『都市と農村、空気と水』という書によれば、悪い空気と水は、人体に有害であり、その悪い空気と水は、いずれも臭く、不味く、黒っぽい色をしているそうだ」

レオポルドはそんなことをキスカに話しながら、隊商から距離を取って、通りを歩いていく。キスカは彼の話聞きながら大人しく付いて行く。

通りは基本的に狭く、広い箇所でも、馬が行き違い、その間を人が通れるかどうかという程度だった。狭い箇所では、馬が通れば、通りが完全に塞がってしまうような通りもある。

わざわざ狭い通りに入って迷子になるのは困りものなので、レオポルドとキスカは、比較的広い通りを選んで歩いた。

また、一応、辺境伯にならんとという大仰な目的を持ち、その資格もあるレオポルドは命を狙われる可能性が無きにしも非ずなので、あまり、人通りの少ない場所に行くのは避けるべきだと思われた。

とはいえ、白昼堂々都市の中で襲撃するというのは、あまり現実的ではない選択肢ではあるが。そもそも、宮廷からわざわざ「出てけ」と手紙が来ている時点で、少なくとも、その手紙の主はレオポルドを今は殺す気はないと思われる。殺す気ならば、手紙を書いて送るなんていうまどろっこしい手を使わず、以前あったように、夜中に宿を襲撃すればいいはずだ。

とはいえ、警戒しておくにこしたことはない。二人は人の少ない通りを避け、比較的広く、人や馬、駱駝、山羊、牛、豚、鶏なんかはひしめき合う、下町の中では、まだ広い方の、人通りが多い道を行く。

「しかし、まあ、大変な混雑だな。この町の都市計画はどうなっているんだ」

「南部の街は、どこもこんな感じですよ。これだけ大きな町はハヴィナだけですけど」

「こんな滅茶苦茶な道では迷子になりかねんな。ん。まさか、それが目的か」

レオポルドは、ふと思いつく。これだけ、狭く曲がりくねった道ならば、侵入者も易々と街を制圧できないだろう。上手く立ち回れば、侵入者を誘い込んで、挟撃し、包囲し、逆襲することも可能であろう。高い城壁がない南部の町は、こういった防衛機構を備えているのかもしれない。

「なるほど。防衛上の観点から、こんな曲がりくねった狭苦しい道にしているのだな」

彼の言葉に、キス力は、曖昧に頷いた。彼女はよく知らないらしい。彼女は南部の住人とはいえ、遊牧民なので、都市のことには詳しくないのだ。

二人はその後とも相変わらずの曲がりくねった道を進んだ。たまに行き止まりで行き詰ったり、分かれ道で迷ったりしつつ、歩いていく間に、二人は自分たちがどこにいるのかすっかりわからなくなっていた。が、あえて、それは口にせず、街の散策を続けた。迷子に

なっている事実を口にして、現実を目の当たりにするのが嫌なのだろう。

殆ど迷子になりながらも、二人はひたすら西を目指した。ハヴィナは大通りで十字に分断されているので、どこかしらへ真っ直ぐ行けば大通りか街をぐるりと囲む城壁に当たるはずであり、彼らのいる街区から西へ進めば大通りへ出られるはずであった。

とはいえ、進む方向が分かっても、ハヴィナの下町の道は曲がりくねっていて、分かれ道や行き止まりが多いので、何度も引き返したり迂回したり、考え込んだり、道端にある屋台で軽食を食べたりしながらも、なんとか、大通りへ出ることができた。

当初の予定では、この街区を抜けた後は、大通りを越えた隣の街区へ行くつもりだったが、大通りに到達するまでにかんりの労力と時間を費やし、この時点で、時刻は夕方に迫りつつあったので、隣の街区に入るのは諦めることにした。

その代わり、大通りをそのまま北に進んで中央の広場付近を散策することにする。大通り沿いと中央の地区は比較的きっちり整備された町並みで、迷子になる恐れがなかったからだ。

大通りも人通りが多く、帝国人も異民族も、旅人も住民も見受けられる。とはいえ、下町のように、頭上に洗濯物が干してあったり、道端で子供が遊んでいたり、奥さん方が井戸端会議に花を咲かせていたり、じいさんがぼんやりしていたりといった生活臭は格段に薄い。また、道幅も広いので、大変歩き易かった。

レオポルドとキス力はたまに会話をしつつ、建物を眺めたり、道端に出ている屋台を冷かしたり、隊商が馬や駱駝の背に積んでいる荷物を見つめたりしていた。

大通りを北に向かって歩き、中央の広場にさしかかった頃、ふと背後が騒がしいと振り返ると、目前を物凄い勢いで馬が駆け抜けていった。馬には青い軍服の士官らしき男が乗っており、馬の尻に鞭を食らわせつつ、怒鳴り声をあげて、道行く人々を押し退けながら、広場に突っ込んでいく。

土官は広場に入ると、一軒の大きな屋敷の前で馬から飛び降りると、門衛と二言三言話してから、屋敷の中に飛び込んでいった。

瞬く間に屋敷の前には野次馬の人だかりができて、誰も彼もが何事かと様子を伺っていた。

レオポルドとキスカもその野次馬の群れに加わった。野次馬根性というよりは、情報収集の為である。サーザンエンドの現在の情勢と、早馬で首都へ飛び込んできた土官とを考えれば、何かしら大きな情勢の変化があつたとも考えられる。単純に、その土官がこの屋敷の家の者で、家族の急病などで駆け付けたという可能性もあるわけだが。

レオポルドは、屋敷を囲う塀に寄りかかって胡坐をかいていた瘦せこけて年老いた乞食に歩み寄る。老人の手に銅貨を握らせながら、尋ねる。

「この屋敷は誰のものなのかな」

彼らは人々の慈悲を求めて日がな決まった所に座っているもので、日によつては一日中、一か所に留まっていることもある。その間、彼らはずつとその辺りを眺めているのだ。当然、その辺りのことをずつと見つけているし、人々の話をずつと聞いており、多くの噂や情報を見聞きしているのだ。

「旦那。余所の人じゃろ」

「よくわかつたな」

「見たことがねえ顔じゃし、レッケンバルム卿の屋敷を知らねえんだ、余所者としか思えねえさ」

そう言つて老人は齒の抜けた口を開けて笑った。

どうやら、この屋敷は宮廷の有力者である侍従長レッケンバルム卿のものらしい。

「あの急使はレッケンバルム卿に何の用で来たのだろうか」

今来たばかりの急使の持つてきた知らせを、この老人が知るわけではないと思いつつも、レオポルドはなんとはなしに、呟いてみた。「どういふ知らせかは、ここで待つてりゃあ、いくらから見当はつく

つてもんさ」

「ほう。そうかね」

「そうさ。ちよいと待つてな。すぐに屋敷から使いがでるさ」

そう言つて老人はにやにやと笑う。

彼の言葉を信じてレオポルドはその場に待機することにした。

すると、老人の言ったとおり、屋敷から数人の役人と兵士が出てくると、何事かと質問を浴びせる野次馬の群れを怒鳴り散らしながら掻き分けて、駆け去つていった。

「なるほど。あの使いがどこに行つたか見定めればよいということか」

「なあに、使いの連中を追いかけるこたあないさ。まだまだ待つてりゃあいい」

老人がそう言うので、レオポルドはなおもその場に留まり続けた。半刻もすると、多くの野次馬は何の発表も情報も聞けないのに飽きて、その場を後にしていった。それでも、レオポルドとキスカは乞食の老人と一緒に屋敷の前に佇む。

行商人が売りに来たお茶を買つて、キスカと老人を含めた三人で飲んでみると、馬に乗つた高官が部下を引き連れて、レッケンバルム卿の屋敷へやつて来た。

「今のは」

「市の参事会の顧問官さ」

「なるほど。レッケンバルム卿の屋敷が会議の場になっているのだな」

辺境伯不在にして、辺境伯代理のロバート老の具合が思わしくないのでならば、侍従長であるレッケンバルム卿が宮廷を取り仕切つていてもおかしくない。また、政治や会議が有力者の家で行われることは至極当然にしてよくあることである。

その後も、続々と高官が参集してくる。兵器庫、火薬庫の管理責任者、市の治安当局者、辺境伯軍の指揮官が数人、そして、更に、「あの赤髪の貴族様は、シルドレッド卿さ」

老人の言葉に顔を向けると、数人の貴族が騎乗で向かってこるところだった。いずれも燃えるような赤髪である。先頭を行く一人は、四十代ほどでの大男で、立派な顎髭を蓄えている。他の面々は彼よりも一回り若い。あとは息子くらいの年の若者だ。

「誰がジルドレッド卿だつて」

「全員さ。あの赤い髪のは、皆、ジルドレッド家の方々だよ」

ジルドレッド家は一族揃つての参集らしい。

確か、ジルドレッド卿は、辺境伯軍の司令官だったはず。ジルドレッド家の誰がその司令官なのかはわからないが。

「ジルドレッド家のカール・アウグスト様は、司令官で、弟のパウロス・アウグスト様は近衛連隊長。カール・アウグスト様の御子息のカール・ジギスムント様とパウロス・アウグスト様の御子息フェルディナント・パウロス様は中隊長。カール・アウグスト様のもう一人の御子息カール・ルドルフ様は、連隊旗手だったはずじゃ」

「御老人。よく知っているな」

「一日中、ここに座つてりゃあ貴族様や役人の話が嫌でも耳に入ってくるのさ。貴族様も役人も人事の話が好きなんで、もう耳にタコができちまう」

しかし、ジルドレッド家は中々面倒な名前が多い。レオポルドは覚えようとしたが、厄介なので早々と諦めた。

さて、ここまで集まってきた面子を見れば、今回の知らせがどういふものか。確証はなくとも推察はできる。

集まったのはいずれも辺境伯の宮廷の高官である。市参事会顧問官。市の治安当局者。兵器庫や火薬庫の管理責任者。軍高官。

「戦争か」

レオポルドの呟きに、老人は黙って頷いた。

二三 レッケンバルム卿の思惑について

レオポルドとキスカが、宿泊している宿のある地区へと戻ってきた頃、食堂や飲み屋はかき入れ時で、多くの人々が集まって食事をして、酒を飲み交わし、話に花を咲かせていた。

そこで今最も多く話題に上がっているのは、レッケンバルム卿の屋敷に飛び込んだ急使の知らせについてだった。その後、屋敷に多くの高官が参集したという話も飛び込んできて、何か重大な案件だということはいくつもの人々が認識していた。とはいえ、その重大事が戦争だと推察している者は多くはなく、中には戦争があると察しをつける者もいたが、大勢を占めているようではなかった。また、戦争があると推察する者も、では、一体、どこで誰と誰が戦争するのかという点では、明確に答えることができなかった。これは、レオポルドも同様である。レッケンバルム卿の屋敷に入った高官連中の顔触れを見れば、戦争関係の重大事があったものと推察することはできるが、それでは、実際、その戦争がどういうものかを知るのは限界というものだ。

果たして、戦争はどこで行われるのか。敵の軍勢がハヴィナに迫っているのか。或いは遠く離れた地域で第三者同士で争うのか。そこに辺境伯軍は介入するのか静観するのか。

次の行動に移るには、もっと情報があるだろう。そう考えて、レオポルドたちはその日は宿に留まることにした。戦争がハヴィナに迫っているとしても、そこから逃げた方がいいのか、その戦争に関わった方がいいのか。今の段階では判断できなかったのだ。

動きを止めて静観していたレオポルドに対して、レッケンバルム卿は矢継ぎ早に指示を下していた。

夜中のうちに、すぐに動員できる五〇〇名ばかりの兵士を招集して、市内各所に送り込んでいく。市内各所に関所が設けられ、城壁

や塔に兵員が配置される。武器庫からは銃や槍、剣が取り出され、火薬や弾薬が火薬庫から運び出される。普段から夜の間、閉められている市門の閉鎖を更に嚴重に行い、朝になつても開門せず、誰一人市内には入れず、誰一人市内から出さないよう厳命された。

ところで、ハヴィナは平素から十の街区に区分けされており、それぞれに、街区長という役職の者がいる。その街区は更に細分化されて、小街区というものに区分けされる。小街区長は、小街区の住民による投票で決められ、住民を代表している。街区長は小街区長の中から市参事会が任命する仕組みである。

その街区長が呼び出され、いくつかの命令が発令され、各々の街区の住民に布告し、小街区長と共に、その命令を実行するよう指示された。

まず、各街区からそれぞれ壮健な若者二〇〇名を兵士として徴募し、正午までに中央広場に集合させること。また、それとは別に、市内の警備要員として二〇〇名を出し、指定の関所や市門に配置し、街区内を巡邏して、治安維持に努めること。市民は原則として自宅待機し、外に出ないこと。宿に、宿泊者の名簿を提出させること。食糧などの備蓄を確認し、その備蓄量を報告すること。事前に定められている有事の行動計画を確認すること。

これは元々、緊急時の行動計画として定められていることなので、街区長たちは特に戸惑うこともなく、実行した。

翌朝には市門は閉鎖され、市内各所には関所が設けられて、人々の往来を制限し、住民は家に、旅人は宿に待機することを余儀なくされた。

それはレオポルドも例外ではなく、宿の主人から、宿の外に出ないよう布告されていることと、それでも外出した場合、当局に通報しなければならぬことが告げられた。

「さて、どうしたものか」

「どうもこうもこんなところに閉じ込められてどうすんのさ」

レオポルドがぼんやり呟くと、フィオリアが刺々しい声で言った。

「どうしようもないな」

宿を抜け出すことは、強行しようとするれば、不可能ではないだろう。ただ、その後、手詰まりになることは明白である。市内の各所には関所が設けられ、人の往来を制限しているし、巡邏が通行人を片っ端から捕えて事情聴取するだろう。上手くそれらを潜り抜けても、市門は閉鎖されている為、市外に出ることは、まず不可能と考えてよい。

そういうわけで、レオポルドたちは、その日はずっと宿で大人しく、情報収集の為に同宿の旅人らと世間話をしたりしていた。

動きがあつたのは翌日だった。

翌朝早く、宿の主人が持ってきた宮廷からレオポルドに宛てられた手紙の中身は、レッケンバルム卿の屋敷へ出頭するよう求める内容であった。差出人の名はレッケンバルム卿その人であり、宛名にはレオポルドのフルネームが書かれていた。

この手紙から分かることは、つまり、レッケンバルム卿は、レオポルドの存在と立場を知っており、また、彼がこの宿に滞在していることも承知していたということだろう。いつから知っていたのかという点は不明だが、今現在は承知しているのは確かだ。

ただ、辺境伯の後継者となり得るレオポルドの立場を承知しているながら、手紙一枚で出頭を求めてくるあたり、それほど敬ってはいないようだ。

そういうわけで、レオポルドたちは、軽めの朝食を摂ってから、宿を出て、レッケンバルム卿の屋敷へ向かった。途中、何度も巡邏の兵士に呼び止められたり、関所を通ったりしたが、手紙を見せれば、無事に通ることができた。

レッケンバルム卿の屋敷に入ると、レオポルドは大広間へ通され、他の連中は別の部屋に控えた。

大広間には大きなテーブルが一つ。最奥に初老の貴族が座って書き物をしていた。

背が高く細身。目つきは鋭く、鼻は高く、顎は細く尖り、灰色の短い髪に、素晴らしく綺麗に整った口髭と尖った顎鬚を生やしている。濃い緑色の上着に襟元には純白のレース飾りを付けている。

来客の到着に気が付いたレッケンバルム卿は、書き物をしていた書類から顔を上げ、杖を手に立ちあがった。

「これはこれは、レオポルド・フェルゲンハイム・クロス卿。わざわざ、御足労頂き感謝する」

渋くしわがれて乾いた声だ。深い皺が刻まれた顔をびくりとも動かさず、口だけで話すように言って、レオポルドに椅子を勧めた。

レオポルドが座ると、彼も座り、レオポルドを暫し見つめてから口を開いた。

「現状は御理解しておられるかな」

「戦争が近いことくらいは」

「勿論、そうだろうとも。今のハヴィナを見て、そう思わない者はおるまい」

レッケンバルム卿は、不機嫌な顔をしてから、吐き捨てるように言った。

「ブレド男爵だ。あの野蠻で強欲なテイバリ人め。サーザンエンドを我が物にせんとしている」

キスカから聞いた話によれば、ブレド男爵はサーザンエンド中部で勢力を持つテイバリ人の領主らしく、辺境伯位に食指を動かしているらしい。詳しいことは知らないが、レッケンバルム卿は非常に嫌っているようだ。

「奴めは、前の辺境伯が崩御して以来、長く、宮廷に対し、自らを辺境伯にするよう圧力をかけてきたが、それが上手くいかぬと知って、今度は武力に訴えてくるつもりのようなようだ。まったく、蛮族らしい、乱暴で粗野で道理の通らぬやり方だ」

老齢の侍従長はイライラと嫌悪感たっぷりな様子で言い連ねる。

「知っているかね。奴の城には、妾が数十人どころか百人もいて、東方大陸の皇帝の後宮のような有様だ。その上、民には重税を課し、

逆らう者は斬り捨てる。法も秩序もあつたものではない。貴族の風上に置けん輩だ。あのような蛮族の族長風情に貴族の称号が与えられているとは、甚だ不愉快なことだ」

彼は、ブレド男爵をとことん嫌い抜いているらしい。

帝国が異民族の有力者に貴族の爵位や称号を与えて、一定の統治権を認めているのは、彼らを支配階級に取り入れることによって、異民族を統治しやすくしているのだが、そんなことは、この老練な侍従長は百も承知だろう。知っていても、理解していても、なお、不愉快なことには変わりないらしい。

「まあ、そういう言葉を喋る野獣のような輩に、辺境伯の位を与えろわけにはいかぬし、サーザンエンドの支配者の椅子に座らせるわけにもいかん。ましてや、あのような屑に仕えるなど言語道断である。私の目の黒いうちは死んでも奴に頭なぞ下げぬ」

理由としては公私混同しているが、とにかく、レッケンバルム卿としては、断固としてブレド男爵を辺境伯にしたいくないらしい。

「私としては、君を辺境伯にしたかったのだ」

「私をですか」

レッケンバルム卿の口から、自身を支持する意味の発言が飛び出してきて、レオポルドは驚いた。宮廷では、ウォーゼンフィールド男爵を支持する動きが盛んだと聞いていたからだ。宮廷でも主導的な立場の実力者であるレッケンバルム卿が自身を支持してくれるとなれば、心強いことこの上ない。

「ウォーゼンフィールド男爵は優柔不断で、統率力に欠ける。そのくせ、矜持だけは一人前だ。故に、臣下の言葉に判断を左右されても、言うがままにはならぬ。下手に我を通そうとして無用に決断を延ばし、判断を鈍らせる。あの坊ちゃんでは、情勢不安な南部を支配しきれんだろう。せいぜい、小領主程度の器だ」

レッケンバルム卿は、しかめ面で、自身よりも目上で、サーザンエンドの領主層では筆頭格である男爵に手厳しい評価を与えた。

「それに比べ、君の能力と人格は未知数ではあるが、聞いた話によ

れば、それほど異常でも無能でもないらしいからな」

褒められたのかどうなのか判断に困ったレオポルドは曖昧な顔で黙っていた。

「少々若すぎるが、その分、私が自由に取り仕切ることができから、君が辺境伯になることは、私にとつて非常に好都合なのだよ」

「そう言われて腹を立てたり、ヘソを曲げたりするようならば、それまでの器ということだ」

レッケンバルム卿の言葉も一理あるとレオポルドは考えた。相手に利用されていても、それを逆に利用し返すくらいでなければ、この権謀術数入り乱れる伏魔殿のような宮廷、貴族社会を生き延びていけないだろう。いや、生き延びていけたとしても、その中で、主導的な立場に立つことは不可能であろう。

「それに、今となつては、私の思惑通り、君を辺境伯の椅子に座らせるのは、中々困難だ」

レッケンバルム卿はそう言って、不機嫌そうにレオポルドを睨んだ。

「私は、君にはまだサーザンエンドに来て欲しくなかった。最も有力な辺境伯候補である君がこのこと無防備にサーザンエンドまで来てみる。辺境伯の椅子を狙う者どもは君を亡き者にしようと策謀を巡らせるだろう」

卿はレオポルドを支持してはいるが、その行動を支持していないらしい。

「あー。若しかして、あの手紙を出したのは」

「私だ。君には、この危険なハヴィナから出てほしかったのだ。そもそもは、帝都から出てほしくなかった。帝都にいる限りは、安全だからな」

そうは言われても、レオポルドにはレオポルドで、帝都にはいろいろな事情があったのだ。あのまま、帝都にいても、一文無しの貴族の坊ちゃん一人で生きていけるほど、世の中は甘くない。

「しかし、帝国政府からは、早急にと求められているのでは」

「確かに、皇帝はそう言ってきた。が、そんなことはどうともなる。帝国も本音を言えば、南部など放っておきたいのだ。皇帝は、今、大貴族連中を如何にして抑え、従わせるかに注力しており、辺境の地などに構っている暇などないのだ」

先々代皇帝カール三世による大貴族の粛清で、一時は高まった皇帝の権威であるが、その後を継いだ前帝ゲオルグ五世の早すぎる若死と、続いて皇帝位に就いた帝国初めての女帝ウルスラの為に、皇帝の権威は大きく揺らぎ、大貴族の勢力は再び盛り返しつつあった。両派は武力衝突こそしていないが、事あることに激しく対立していた。

このような情勢下で、辺境の南部などに注目している暇などあるはずがない。帝国が南部統治に本腰を入れるのは、皇帝が再び権威を確かにしたときか、大貴族たちが皇帝を傀儡としたときだろう。

「故に、君は安全な地にいるべきだったのだ。この地が落ち着き、安全が確保できた頃に、やって来て、しっかりと安全に確実に辺境伯の椅子に座るべきだった」

「それならば、そうと言って頂ければ」

レオポルドの言葉に、レッケンバルム卿は口をへの字にして彼を睨んだ。

「君の所在がわからなかったのだ。私が報告を受けたときには、いつの間にか帝都を発っていて、時折、見かけたと思ったら、再び姿を消す。ようやく、行方を掴んだと思ったら、いつの間にか、ハヴィナに入っておった」

どうやら、レオポルドたちは、あまりにも気ままに無計画に旅したせいで、サーザンエンドの有力者たちから見事に行方を掴ませぬ隠密行動をしていたらしい。レオポルドたちはキスカに、ただただ付いて行っただけであったが、そういえば、彼女はたまに街道から外れた近道を進んだり、あまり旅人が寄らないような隠れた場所を野営地に選んだりしていた気がする。彼女はただハヴィナに向かうだけでなく、当人たちも気付かぬうちに、レオポルドを付け狙う輩

から巧妙に身を隠すような旅をさせていたのかもしれない。

「君の身の隠し方は非常に巧妙で見事だったが。しかし、こんな近くまできては、さすがに誰の目からも隠し続けることはできぬ。他の連中はもう君の存在に勘付いていよう。今回、ブレド男爵が性急な動きに出てきたのも、君の存在を察知したからだ。長々と宮廷工作をしている暇がないと感じたのだろう」

今回のブレド男爵の軍事行動はレオポルドの登場がトリガーとなつているらしい。今まで、自分なんか誰にも相手にもされていなかったころか、存在に気付かれてもいないと思つていたレオポルドにとつては、中々意外で衝撃的な知らせだった。

「事ここに至つては、あの野蛮で強欲な蛮族の頭目を迎え撃ち、討ち取るより他に手はあるまい。その戦いにおいて、君が功績を挙げれば未だにウォーゼンフィールドの奴に期待を寄せている輩も君に乗り換えるかもしれない」

「ちよ、ちよつと待つて下さい」

不意に聞き逃せない言葉が鼓膜を震わせてきて、驚いたレオポルドは思わず声を上げていた。

「それは、つまり、私も戦に出ると、そういうわけですか」

レオポルドの言葉に、レッケンバルム卿は渋い顔で彼を睨みつけた。

「何を言つておるんだ。当たり前だろう」

二四 軍議にて

「報告によれば、ブレド男爵の軍勢は歩兵二〇〇〇に軽騎兵五〇〇、駱駝騎兵五〇〇とムールド人傭兵が一〇〇〇の合計四〇〇〇余のこと」

レッケンバルム卿の屋敷の大広間で行われた軍議の席上で、辺境伯軍司令官ジルドレッド卿が報告した。ジルドレッド卿は立派な顎鬚を蓄えた赤髪の四十代ほどの大男である。

「軍勢はリソカの町に集結した後、西に進み、ハヴィナまで五日の距離に到達している模様。別働隊や伏兵の動きは確認できぬ」

「どうやら、宮廷側はブレド男爵軍の動きをかなり正確に把握しているらしい。というのも、ハヴィナ周辺は辺境伯の直轄領であり、宮廷の勢力下にある。故に、住民の協力と通報が得やすく、斥候も地理をよく知っており、男爵軍に発見されることなく、男爵軍を偵察し、帰還することができる。また、南部全域においていえることだが、サーザンエンドは概ね荒野や砂漠が広がる平坦な地勢で、数千もの軍勢を隠しきることは不可能に近い。どうあっても露見する運命にあるのだ。」

対して、辺境伯軍の軍勢はというと、

「直ちに動員が可能なのは、近衛連隊に加え、第一連隊、第四連隊、第五連隊。それに、軽騎兵連隊。あとはハヴィナ市民から徴募した兵が二〇〇〇ある」

帝国軍制では、連隊は八個中隊で構成され、歩兵連隊は定員が一二〇〇名。騎兵連隊の定員は八〇〇名である。ただ、連隊が常に定員を満たしているとは限らない。というか、多くの場合、常に定員割れの状態が常であった。戦時であれば、死傷者や病人、脱走兵が抜けた穴があり、平時であれば、兵務担当者は給与を削減する為に定員を保持しようとしなからである。また、連隊によってそれぞれ中隊の数や定員が違う場合もある。辺境伯軍では近衛連隊がそれ

で、近衛連隊は騎兵二個中隊二〇〇名余と歩兵六個中隊九〇〇名余で構成され、定員は一一〇〇名ほどとなっている。

辺境伯軍の場合、定員を満足しているのは近衛連隊だけで、第一連隊については、一〇〇〇名。他の二個連隊は八〇〇名ほどの人員しかいないようであった。また、軽騎兵連隊は五〇〇程度の人員であった。

「市民から徴募した兵を連隊に補充し、定員を満足させよう」

「そうすれば、正規軍は歩兵四五〇〇に騎兵一〇〇〇となるな」

「他にも近隣から五〇〇程度の傭兵を掻き集めることは可能だ」

「残りはハヴィナの守備兵とするべきだ」

辺境伯軍の高官たちが次々に発言し、それらの意見は概ね了承された。

続いて、軍の兵站関係の責任者であるルゲイラ兵站監が立ち上がった。ひよろりと背の高い痩せぎすの男だ。

「連隊の編成と装備、糧秣、弾薬などの補給は三日程度で完了するでしょう」

「その頃には、男爵軍はハヴィナの間近まで来ているな」

ジルドレット卿がしかめ面で呟く。

「敵は我らよりも寡兵である。また、装備も士気もこちらの方が優れている。ハヴィナ市内に籠城する手もあるが、喫緊のことにて籠城するには準備をする時間が足りぬ」

籠城戦には攻撃側は当然であるが、守備側にしても大変準備が必要である。攻撃側に包囲されている間、城内或いは市内への補給はほぼ寸断されている為、武器、弾薬、食糧、水といった物資の備蓄が必要となる。また、城壁を常に完璧な状態に保全できていなければ、多くの都市や城ではそうはなっていない。平和なときには邪魔にしか思われていない城壁などをこまめに整備しているところは少ない。近隣の情勢が不安定になったり、戦の足音が聞こえてきて慌てて城壁の壊れた部分や弱くなっている部分を補修するのが常である。

それらの準備不足から籠城は困難であるとジルドレッド卿は述べた。

そして、もう一つ、最も重要なことである。

「籠城などできるものか。いつ寝首を搔かれるかわからぬ」

レッケンバルム卿が不機嫌そうに呟き、軍高官たちは首肯した。

ハヴィナの市民のおよそ半分は帝国人ではない異民族である。多くはサーザンエンドの主要民族であるテイバリ人で、ブレド男爵らと同じ民族である。籠城など迂闊にしようものならば、共に立て籠もっている身内の裏切りにあつて手痛い損失を被る可能性があるのだ。

それならば、兵力も装備も士気も勝っているのだから、外に打つて出て野戦で勝敗を決するのが妥当であろうとジルドレッド卿は考えているようであり、他の軍高官らの意見も同じようだ。

「では、各連隊は二日後を目途に編成と補給を済ませ、出陣できるように準備を執り行え。また、集められるだけ騎兵を集めて連隊を一つ編成する」

ジルドレッド卿はそのように指示を出した。

騎兵を集めるようにと特に指示を出したのは、唯一、辺境伯軍が男爵軍より劣る面として騎兵の不足を危惧しているせいだろう。男爵軍に加わる一〇〇〇のムールド人傭兵はそのほぼ全てが騎兵だからである。ムールド人は遊牧民である。戦に赴くとき、馬か駱駝かは別として、騎乗であることは間違いない。故に、男爵軍は全軍のほぼ半数が騎兵で構成されているということになる。

騎兵の武器は機動力にある。両翼から展開した男爵軍の騎兵が辺境伯軍の左右に展開し、包囲されるのが最も危惧されるシナリオである。

その為の騎兵の徴募である。サーザンエンドには遊牧民が数多く居住しているので、騎兵になり得る傭兵を掻き集めることはそれほど難しいことではない。

「ところで、ジルドレッド卿」

軍議が一段落したところで、レッケンバルム卿がジルドレッド卿に声をかける。

「こちらの、クロス卿を然るべき地位で使って欲しい」

彼は、傍らの、軍議の間中、レッケンバルム卿の横で大人しくしていたレオポルドを示して言った。

ジルドレッド卿は、訝しげな顔で老齡の侍従長と若い青年貴族を見つめる。

「クロス卿は、亡きエレオノーレ様の御嫡孫だ」

エレオノーレとは、レオポルドの祖母であり、前々代サーザンエンド辺境伯カール五世の伯母であり、その前の辺境伯ヴィルヘルム三世の娘である。

「おお、なんと。エレオノーレ様の」

レッケンバルム卿の言葉に、ジルドレッド卿をはじめとする軍高官の多くが驚きを隠さなかった。レオポルドが見る限り、この軍人たちは、レオポルドの正体について全く知らなかったようだ。彼らが揃いも揃って役者並みの演技力を持っているのならば話は別だが。「クロス卿には、ゆくゆくは、サーザンエンドで重要な立場に立つてもらうつもりだ」

レッケンバルム卿の言葉に、ジルドレッド卿は頷き、然るべき地位を用意すると約束して退出した。多くの軍人たちもそれに続き、場に残ったのはレオポルドとレッケンバルム卿だけとなった。

「カール・アウグストは、武人としては優秀な男だ。しかし、政治家としては下の下というべきであろう」

ジルドレッド卿たちがいなくなった途端に、レッケンバルム卿が毒づき、レオポルドは思わず苦笑いした。

「これだけ後継問題が騒がれているというに、エレオノーレ様の血統については、頭にも浮かばなかったのか」

しかし、レオポルドが聞いた話によれば、ジルドレッド卿は、後継問題にあまり口を挟まなかったらしい。あくまで自身は軍司令官として、軍務に専念し、後継問題や宮廷の内のごとは、レッケンバ

ルム卿たちに任せていたのかも知れない。それはそれで立場を弁えているといえるのではないか。

「ところで、ロバート様とボスマン財務長官の姿が見えないようですが」

レオポルドは常々疑問に思っていたことを尋ねてみた。

今回の軍議は、宮廷側の命運を左右する重大事を決する会議に、辺境伯代理であるロバート老と財務長官という要職にある人物が出席しないのは、不自然というものであろう。

「ロバート老は、まだ病状が思わしくないらしい。ボスマンは所用法さそうだ」

そう言って、レッケンバルム卿は険しい顔で黙り込んだ。

後日、レオポルドに与えられた地位は、近衛連隊の騎兵中尉（騎兵中隊副長）であった。

本来であれば、将兵には布地が支給され、それをもって衣服を仕立てるところであるが、喫緊のことで、そのような時間はない。そこで、レオポルドが軍服を揃えられるよう、レッケンバルム卿とルゲイラ兵站監が特別に取り計らってくれた。

辺境伯軍の軍服は概ね赤色で統一されている為、朱色の毛織物の上着、濃灰色のスボン。革製の乗馬ブーツ。白い羽飾りを付けた緑の広い帽子に、絹の襟飾り。黄色の飾り帯。

多くの将校や富裕な騎兵が着るバフコート（もみ革製の短い上着）は南部ではあまり着られないようだ。おそらく、気候的な問題で着ていると暑くてしょうがないのだろう。また、軽騎兵なので、甲冑や兜の類も装備しない。

それに、ピストルを二挺と赤毛の馬が与えられた。中尉身分である場合、本来ならば馬は四頭用意しなければならぬところであるが、今回は一頭しか用意できなかった。

それらを装備すれば、すっかり立派な将校である。

「馬子にも衣装とはよく言ったものね」

将校姿になったレオポルドを見て、フィオリアが呟いた。レオポルドは黙って顔をしかめる。

レオポルドの隣には、いつもの恰好のキスカとソフィーネがいる。彼女たちも従軍するのである。キスカはレオポルドの副官（従者といてもよいし、召集係という呼び名でもよい）。ソフィーネは、なんと、従軍牧師代わりとか何とかという名目で付いて行くようだ。二人の戦闘能力があれば、戦場でも生き延びられるどころか活躍すらできそうである。

ただ、さすがに、唯一、フィオリアは従軍するわけにはいかない。そういうわけで、彼女だけハヴィナに待機することになっていた。「勝てるの、よね」

暫く黙ってレオポルドを見つめていたフィオリアは不機嫌そうなしかめ面で、確かめるように尋ねた。

「数はこちらの方が多し。聞いた話だが、指揮官は優秀な將軍らしいし、兵の士気も練度もこちらの方が上だよ。装備もこちらの方が整っているとの話だし」

レオポルドは冷静に自軍の優勢を言い並べる。それを聞いてフィオリアの表情がいくらか和らぐ。

「とはいえ、戦は時の運だからな。勝敗を確実に予測することは難しい」

しかし、その後、レオポルドが続けた話を聞いて、再び険しい顔つきに戻った。

「要するに、勝てるかどうかわかんないってそういうことね」

「まあ、そうなるな」

フィオリアはなんとも言い難い複雑な表情で、押し黙り、広場に集まる将兵を見やった。

編成と補充が済んだ近衛連隊はハヴィナ中心部の広場に集結し、すっかり進軍の用意は整っていた。揃いの赤い上着を着込み、幅広いつばの帽子をかぶり、歩兵はマスケット銃やパイクを持ち、騎兵は腰にサーベルとピストルを提げている。将校は上着にレースやリ

ボン、帽子に羽を飾っている。

広場の片隅には近衛連隊の騎兵中隊と行動を共にする予定であるムールド人傭兵騎兵が屯していた。揃いも揃って檻褸のような茶色い衣を頭からかぶり、腰には半月刀を提げている。

「れんたーいっ。連隊っ。せいれーっ」

短い鉾を持った下士官が怒鳴り、兵士たちが慌ただしく駆け足で分隊ごとに集合し、更にそれが小隊になり、中隊としてまとまっていく。

レオポルドも中尉としての職務がある。いつまでもぼんやり突っ立っているわけにはいかない。

「じゃあ、行ってくる」

レオポルドはそう言うつと鎧に足をかけ、さっと馬の背に乗った。貴族たる者、乗馬は心得ているものである。その辺りは、彼も不自由なくできた。

遊牧民であるクスカも難なく馬上の人となる。ソフィーネは徒歩でついて行くようだ。従軍牧師は勿論戦闘要員ではないから、馬がないのは当然である。

「レオっ」

中隊に合流すべく進み始めたレオポルドたちの背に声が浴びせられる。

その声に、レオポルドは振り返る。ただ、あんまり大きな声で呼びかけたものだから、周囲の兵士たちまで何事かと声の主を見つめた。

大勢に注目されて顔を赤くしたフィオリアは、至極不機嫌そうなしかめ面で、レオポルドの傍まで歩いてきて、彼を見上げた。

「絶対に帰って来てよっ。こんなところまであたしを連れてきておいて勝手に一人で死ぬなんて許さないんだからっ」

彼女はそれだけを言い放つと踵を返して、さっさと歩み去ってしまった。

「連れてきたわけじゃなくて、ついてきたんだろ」

レオポルドはそれだけ誰にともなく呟くと、再び馬腹を蹴って馬を進める。

何はともあれ、彼の最優先の目的は定まった。

二五 聖オットーの戦い前

その戦いは後に、聖オットーの戦いと呼ばれた。戦いが起きた日が、聖人オットー・ロンダリオンの祭日だったからである。聖オットーは異教徒への布教に精力的に取り組み、多くの異民族を西方教会に改宗させたが、ある異民族の不興を買い、拷問の末に、異教の祭祀の生贄にされて殉教したという聖人である。なお、聖オットーの祭日は、彼が殉教した日である。

前日、ハヴィナの東七マイルの場所に宿営していた辺境伯軍は、早朝には陣営を整えて、東から向かってくるブレド男爵軍の襲来に備えた。

その陣容は、総司令官であるカール・アウグスト・ジルドレット卿率いる中央が第一連隊と近衛歩兵六個中隊の歩兵二一〇〇に砲が三門。

ルーデンブルク准将率いる右翼は第五連隊と軽騎兵連隊の歩兵一二〇〇と騎兵八〇〇。

バレットール准将が指揮する左翼には第四連隊と近衛騎兵二個中隊、ムールド人騎兵五〇〇。歩兵一二〇〇に、騎兵は七〇〇である。レオポルドたちはここに加わっている。

その合計はおよそ六〇〇〇。中央と両翼にほぼ同等に兵を配分し、最も警戒すべき、敵騎兵による包囲に備え、両翼に騎兵を配している。騎兵はほぼ全員が甲冑を着ない軽騎兵で、武器はサーベルや半月刀とピストルである。歩兵は半数がパイク兵、半分はマスケット銃兵である。

辺境伯軍が陣を構え、万端整っている所へ、東からブレド男爵軍が進軍してきた。こちらの陣容を既に把握しているようで、油断なく横に広がった戦闘隊形でじわじわと前進してくる。

遠目からの観察と、事前に得た情報などから推察から見て、男爵軍の陣容は中央に歩兵二〇〇〇。左翼にムールド人傭兵騎兵一〇〇〇

○。右翼は軽騎兵五〇〇と駱駝騎兵五〇〇。

男爵軍の合計はおよそ四〇〇〇である。両翼に騎兵を配する常道的な陣容であり、その機動力を生かして、両側から辺境伯軍を包囲せんとする思惑が透けて見える。ムールド人傭兵騎兵の装備はこちらとほぼ同じだが、駱駝騎兵は槍やマスケット銃を持ち、軽騎兵はその後ろにいてよく見えない。砲を曳いている様子はなかった。

歩兵はマスケット銃兵が一〇〇〇ほどいるようだが、後はあまり長くない槍を持っているか、棍棒、戦斧、半月刀と盾と、それぞれ思い思いの装備で、あまり統一されていない。それは軍服も同じで、毛皮や布の粗末な衣服を着ている。ちらほらと革の鎧や、鉄の胸甲、背甲などを装備している者もいたが、全体的に不揃いであった。中には浅黒い肌の南部人よりも更に肌の黒い南方人らしき男も数多く含まれていた。おそらくは、南方の諸島や大陸から連れてこられた奴隷兵だろう。赤にほぼ統一されている辺境伯軍と比べると、蛮族の兵という印象をレオポルドは感じた。

とはいえ、軍服や装備を規格化して、將兵に統一した装いをさせるといふ概念は、ここ数十年の間に現れたものである。そういった規格化された装備の將兵というものは、国家や有力な諸侯の正規軍にしかないもので、帝国南部のような辺境の領主の軍隊の多くは、昔ながらの、不揃いな装備の軍隊であった。

「駱駝騎兵が前か。奴ら、何を考えておるのだ」

辺境伯軍左翼を指揮するバレットール准將は、向かいに陣取るブレド男爵軍右翼を視察して言った。

バレットール准將は、顔に大きな傷があり、灰色の短い髪に口髭を生やした三十代後半の將軍だった。

駱駝騎兵とは、書いて字の如く馬の代わりに駱駝に乗った騎兵である。

馬ではなく駱駝に乗る利点としては、なんといっても暑く乾燥して、水の少ない砂漠で運用しやすいという点が第一である。次に、駱駝特有の臭いである。この悪臭を鼻にすると馬は混乱して逃げ出

すという効果がある。また、駱駝の背は馬よりも高い為、高所からの攻撃が可能となる。

ただ、小回りが利きにくく、背が高いが故に、一度乗ると容易に降りられないという短所がある。その上、気性が荒く扱い難い獣なので、熟練した乗り手でなければ乗りこなせないことも欠点である。

駱駝騎兵は薄汚れた衣服を着て、顔にも目の部分を除いて布を巻いている。武装は槍やマスケット銃だった。

「我々の側面に回り込もうというのに、小回りが利き難い駱駝騎兵を前に置くと、理解に苦しむな。こちらの馬が混乱するとも思っているのか」

バレットール准将は少々呆れたように言った。

敵の側面に回り込んで突くのが目的ならば、小回りの利く機動力のある騎兵を前に置くべきだろう。

また、駱駝の長所である体臭にしても、帝国本土の騎兵はともかく、駱駝が広く使役されている南部の騎兵が乗る馬は、普段から隣の厩舎に駱駝が繋がれているというような状況にあるので、駱駝の体臭には免疫ができており、混乱することは少ない。

「まあ、良い。敵の思惑がどうであれ、我々の目的は変わらぬ」

そう言つてバレットール准将は背後に控える辺境伯軍左翼の將校たちを見やった。その場にいるのは連隊本部の幕僚の他侍従長レッケンバルム卿の子息である第四連隊長レッケンバルム大佐と第四連隊の高官たち。近衛連隊騎兵二個中隊を指揮する近衛騎兵連隊副長ロウ中佐と二人の中隊長とレオポルドともう一人の中隊副長。それにムールド人傭兵騎兵連隊を指揮するファンリット大佐。

「我々の役割は、我が軍の左側面に進出しようとする右翼の敵騎兵を防ぎ、この動きによって空隙ができた敵右翼と敵中央の間を突くことにある」

この戦いにおける辺境伯軍の目論見は、つまりそこにあつた。自軍の側面に出ようとする男爵軍の騎兵に自軍の騎兵を当てて側面を

守りつつ、側面に進出しようとする敵騎兵と中央にある敵歩兵の間にできた空隙に両翼の歩兵を入れて敵軍を分断し、各個撃破するという作戦である。

問題は、数で優勢な敵騎兵を自軍の騎兵が防ぎきれるかという点である。自軍の騎兵が持ち堪えられずに崩れ、進軍中の歩兵連隊の横腹に敵騎兵が突撃してくることが最も恐れられる事態であろう。

「騎兵部隊は敵の動きを注視し、敵に動きあれば直ちに行動せよ」
バレットール准将はそう下命し、近衛連隊副長ロウ中佐とムールド人傭兵騎兵連隊長ファンリット大佐は頷き、自陣へと戻った。その後、レオポルドを含めた騎兵將校たちが続く。

騎兵部隊は第四連隊の左に陣取り、近衛二個騎兵中隊が並ぶ後ろにムールド人傭兵騎兵連隊が控えていた。

「敵陣をよく警戒し、何か動きあればすぐに報告するように」

中隊に戻ったレオポルドは中隊長の命令を下士官に伝達した。下士官は頷くと、中隊の騎兵たちに呼びかけていく。

中隊の兵は、既に騎乗しており、ピストルにも弾と火薬を込め、いつでも突撃できる体勢をすっかり整えていた。

「レオポルド様」

ふと背後から声をかけられ、レオポルドは振り返る。茶色い馬に跨ったキスカがいつものような無表情で彼を見つめていた。ちなみに、ソフィーネは、もつと後方にいる。

「味方との連携はどうなっているのでしょうか」

「歩兵連隊は、こちらが敵騎兵を抑えている間に、敵の空隙を突く手筈になっている」

「いえ、そうではなくて、後ろの騎兵との連携です」

キスカは近衛騎兵とムールド人騎兵との間の連携が不十分ではないかと危惧しているようだった。

確かに、今回は騎兵の数が非常に足りないという問題で、近衛騎兵とムールド人の傭兵を合わせて左翼に配置しているが、両者の性質は非常に違っていて、また、指揮系統も統一化されていなかった。

そもそも、左翼騎兵部隊の総指揮を誰が執るのかも定かではない。

近衛騎兵の方が格式は上なので、ロウ中佐か。しかし、階級はフアンリット大佐の方が上だし、ムールド人傭兵の方が数が多い。かように統一化されていない両隊だが、運用上は合同での動きが求められている。合同して敵騎兵に当たり、これを防ぎ、撃破することだ。「しかし、敵を目前にした、今になって、これほど性質が違う二つの部隊をどうこうできるもんじゃない」

「それではいけません」

キスカは無表情ながら強い視線でレオポルドを射抜くように見つめながら言った。

「できないとか、無理だとか、無駄だとか。例え、本当に、そうであつても、そこで努力や対策を諦めたり怠つたりしては、なお悪い結果を招くだけです。悪い影響を少しでも僅かでも弱め、取り除く、努力と対策を、今からでも考え、実行すべきです」

レオポルドは面喰つていた。いつも寡黙で従順な彼女が、ここまではつきりと意見というよりは、痛烈な批判とも思える言葉を口にする事自体初めてであつたし、ここまでの確にして率直な意見を持つていたことにも驚きを感じていた。彼女はいつも何も語らないし、感情も思考を表に出にくいので、何を考えているのかよくわからないのだ。

「あ、差し出がましいことを言いました。申し訳ありません」

ふと、我に返つたキスカは、自分が主君に対して失礼で率直過ぎる意見を言ったことに気付いたのか、慌てた様子で謝罪の言葉を口にした。

「いや、君の言う通りだ。中隊長に話してどうにかしてみよう。大将をどっちにするかだけでも、どうにかできるかもしれん」

レオポルドはそう言つて、中隊長のいる方を見やった。

その時、戦場にラッパの音色が高らかに鳴り響いた。

見れば、敵陣が茶色く曇っていた。馬が地面を蹴り上げて舞い上げる土煙に間違いないだろう。

「敵が動き出したぞーっ」

「ぜんぐーんっ。突撃準備っ」

下士官の怒号が響き、騎兵たちは顔を引き締め、腰に提げたサーベルとピストルを確認し、真っ直ぐ前を見つめる。

「こうなつては、どうにもならんな」

レオポルドは先の件を諦めることにした。敵が動いたとなつては、あとはもう敵を打ち破ることに注力する他ない。

「合同で動く、決まつてはいるのだ。指揮系統が別であっても、戦いの中で、自然と統一された動きができるものと期待しよう」

非常に楽観的な見方ではあつたが、今となつてはそう考えるしかない。

レオポルドとキス力は中隊のちようど中央部先頭に馬を進めた。

そこには既に、近衛騎兵隊の指揮官ロウ中佐に、中隊長、旗手ら中隊幹部が揃つていた。レオポルドは中隊長の横に馬を並べ、帽子を取つて敬礼した。

「見たまえ。駱駝騎兵が動き出すぞ」

中隊長の言葉に顔を前へ向けると、正面の駱駝騎兵がまっすぐこちらへ向かつてきたところだつた。横に大きく広がつた陣形を維持したまま、突き進んでくる。

「側面にこないぞ」

「正面突破する気か。なんと愚かな」

下士官が驚きの声を上げると、ロウ中佐がせせら笑いながら言った。

胸甲騎兵をはじめとする重騎兵ならまだしも、軽騎兵による正面突破は非常に難しい。パイクを揃えて待ち構える歩兵の陣地を突破することは大変な犠牲を伴う。多くの場合、その突破は失敗に終わり、手痛い損害を被る結果を招く。

「横にいる歩兵連隊が見えていないのか」

「先に歩兵を前に出しましょうか」

中隊長が助言すると、ロウ中佐は暫し考えてから首を横に振つた。

「このまま、敵の自由にさせるわけにはいくまい。途中で方向転換して側面に回り込む意図かもしれない。それに」
そう言ってから、中佐はサーベルを抜いた。

「騎兵の相手は騎兵が務めるものと古来より決まっておる。行くぞつ。我に続けつ。突撃つ」

ロウ中佐は抜き放ったサーベルを前に倒してから、馬腹を強く蹴って、叫んだ。

「皆の者つ。続けつ。とつげーきつ」

すかさず、中隊長と旗手が続き、レオポルドもサーベルを抜くと同時に馬腹を蹴り飛ばした。馬は悲鳴を上げるように嘶いてから走り出す。

騎兵たちも馬の腹を蹴って、馬を駆けさせた。

「神よわれらとともにっ」

近衛連隊の突撃のときに合言葉なのか、そんな文句を叫びながら近衛騎兵は突撃を開始した。

二六 聖オットーの戦いの中

「神よわれらとともにっ」

赤い上着に幅広の帽子を被った近衛騎兵二個中隊は、その合言葉を叫びながら、馬腹を蹴り、ギャロップで駆けさせる。地響きを轟かせ、土煙を舞い上げながら、真っ直ぐ前へ突き進む。陣形は横に広がった横列のままだ。

先頭に行くのは近衛騎兵を率いるロウ中佐である。サーベルを煌めかせ、鮮やかな黄色い飾り帯や羽飾りがひらめく。

ロウ中佐のすぐ傍を駆けるのは赤地に白い立った獅子を描いた旗を掲げた旗手。そして、中隊長とレオポルドだった。更にその後ろに彼ら将校の副官が従う。

近衛騎兵の後ろにはムールド人傭兵騎兵連隊が続いていた。こちらは抜き身の半月刀を煌めかせ、団子のようにまとまった集団で前進している。その右では、第四連隊の歩兵が騎兵を援護しようとする進をはじめていた。マスケット銃と銃架を持ち、長いマントを着た銃兵が太鼓の音に合わせて横列を維持して前へ進む。その後ろにはパイクを持った兵士が続く。

真正面からは駱駝騎兵の一群が突撃してくる。こちらから見るとやや左に寄りながら、横長の陣形のまま、トロットで向かってくる。辺りには濛々と土煙が巻き上がっている。

駱駝騎兵の陣形はあまりにも広く横に広がっているように見えた。陣形を横に広げるとは、銃を武器とする兵であれば一度に射撃できる者が増えることと敵を包囲しやすいという利点があるが、敵の突撃によって突破されやすいという大きな欠点がある。軍隊にとって戦線を敵に突破されるということは、致命的な意味を持つ。戦線が突破されると軍は分断され、背後から回り込まれて無防備な背中を突かれるからだ。

両騎兵部隊は概ね真正面から向き合った状態で、距離を詰めてい

く。

彼我の距離が一〇〇ヤードに差し掛かった頃、駱駝騎兵前列の兵がマスケット銃を構え、一斉に発砲した。マスケット銃の射程距離としては非常に際どいところであり、走る駱駝の上という、かなり不安定な場所からの射撃は非常に命中率が低い。当たる弾の方が少ない。

実際、駱駝騎兵が放った銃弾はほとんどが命中しなかった。数少ない命中弾に当たった不運な騎兵が何人か落馬し、被弾した馬は前脚を折って乗り手ごと倒れ込む。後に続く数百もの騎兵は哀れな落伍者を容赦なく、無視して、或いは進路上にいれば止む無く馬蹄にかけ、踏み潰しながら、突撃を敢行する。

双方の距離が更に半分ほどになった頃、今度は近衛騎兵の前列が一斉にピストルを構えて撃ち放った。ピストルはマスケット銃よりも更に命中率は低く射程も短い、それでも距離が近かったせいか、少なくとも一〇騎以上の駱駝騎兵が射殺された。前列以外の騎兵はこの場面ではピストルは撃たず、白兵戦での使用に備え、温存しておく。

両軍が撃った銃による白煙と舞い上がった土煙で、辺りはかなり視界が制限されていた。その中、近衛騎兵はサーベルを抜き放ち、鬨の声を上げながら突き進み、同じように突進してきた駱駝騎兵と会敵した。

サーベルと半月刀、槍が交差し、ぶつかり合い、刃が肉を切り、骨を絶ち、血に塗れる。各所で怒声と悲鳴が響き、哀れな犠牲者は馬や駱駝の背から転げ落ち、乗り手を失った四足獣は乱戦の中を自由奔放に駆けていく。

近衛騎兵は立ちはだかる駱駝騎兵を斬り捨て、撃ち殺し、倒しながら、駱駝騎兵の戦列を掻き分けるように突き進んでいく。

レオポルドは駱駝騎兵と交差した瞬間に、サーベルを振るって、駱駝騎兵の腹を狙ったが、半月刀に弾かれた。そのまま、レオポルドは駱駝騎兵を捨て置き、直進したので、互いの刃は相手に届かず

に終わった。

レオポルドが逃した駱駝騎兵はその後ろに続いていたキスカの半月刀の一閃で右手を切り飛ばされ、その痛みに悲鳴を上げながら、駱駝から転げ落ちた。キスカは特に止めも刺さず、放置してレオポルドの後ろに続いて馬を駆けさせる。通常、ある程度の怪我を負えば、その兵はそれ以上の戦闘行為は不可能となる。故に、わざわざ止めを刺すのは時間の無駄でしかない。

レオポルドとキスカは、結局、その後は、特に他の駱駝騎兵と斬り合うこともなく、駱駝騎兵の群れを抜けた。敵の駱駝騎兵はそれほど薄い横列だった。

近衛騎兵は次々と駱駝騎兵の戦列を突破していく。駱駝騎兵たちは薄い陣形が災いして、呆気なく突破を許すと、耐え切れないかのように、散り散りになって思い思いの方向へ逃げ去っていく。

近衛騎兵の目的である敵騎兵の自軍側面への展開を防いだのは間違いないばかりでなく、敵騎兵の前衛を打ち破ることにすら成功した。多くの、殆どの近衛騎兵は、些か早過ぎる勝利の予感に胸躍らせていた。

しかし、興奮と高揚感から、無暗に逃げる駱駝騎兵を追う者はいなかった。指揮官は追撃の命令を出さなかったし、駱駝騎兵の後ろには軽騎兵五〇〇が控えているという情報があったからだ。

近衛騎兵は勢いを維持し、そのまま直進する。土煙と白煙を抜けた瞬間、彼らが見たものは、一列に並んだ百人以上のマスケット銃を構えた歩兵の姿だった。その後ろには乗り手のいない馬が見える。この歩兵は実は騎兵なのである。竜騎兵は、名こそ騎兵とされており、移動は馬によって行いが、戦場では下馬し、徒歩でもってマスケット銃で戦う兵である。つまりは、馬に乗る銃兵と称して問題ない。ただ、恰好は騎兵のものを着ているので、遠目からの偵察では単なる軽騎兵と見られても止むを得ないといえる。

駱駝騎兵の戦列を突破した近衛騎兵と、下馬して一列に並び銃を構えた竜騎兵との間の距離は五〇ヤードもなく、騎兵ならば一瞬と

もいえる時間で詰めることができる距離である。だが、その前に、銃兵は騎兵を狙って引き金を引くことができる。そして、騎兵のよくな大きな的ならば、十分に命中させることができる距離である。

連続した発砲音が響き渡り、真つ赤な上着の近衛騎兵が次々と落馬し、被弾した馬が甲高く嘶きながら倒れ込む。唐突な一斉射撃に近衛騎兵は大きな損害を受けた。そして、その中には指揮官であるロウ中佐も含まれていた。

竜騎兵の歩兵のものよりも短く軽いマスケット銃が撃ち放った銃弾は、ロウ中佐の胸を穿ち、その身を馬上から引き摺り落とした。同時に一人の中隊長が頭を撃たれて声も上げずに馬から転げ落ち、旗手は腕を撃たれて旗を取り落とした。

「糞っ。誰かつ。旗を拾えっ」

下馬して駆け寄った従卒に抱えられながらロウ中佐は血を吐きながらそう怒鳴った後、絶命した。

旗はもう一人の中隊長が拾い上げて、高らかと掲げた。

「者どもっ。臆するなっ。蹴散らせっ。進めっ」

中隊長は号令を下すと、馬腹を蹴って前へ進む。

竜騎兵はマスケット銃を撃ち終えると、すぐに後退した。その合間を縫うように、後方から別の部隊が突き進んできた。大きな体躯の立派な馬に跨り、鋼の胸甲と背甲を装備し、丸い兜を被り、半月刀を振りかざしている。その数、三〇〇ほど。明らかに軽騎兵ではなく、重騎兵に分類される重装備の騎兵である。

「報告では、駱駝騎兵五〇〇に軽騎兵五〇〇ではなかったかつ」

レオポルドの隣を進んでいたもう一人の中尉が狼狽したように叫んだ。

おそらく、敵はこちらに偵察されることを理解しており、その上で、重騎兵の存在を隠蔽すべく工夫を凝らしていたのだろう。例えば、行軍中は装備を外しておくとか、周囲を先の竜騎兵で固めておくとか。三〇〇騎程度ならば数日隠し通すのは難しいことではない。近衛騎兵と重騎兵はぶつかり合い、激しい白兵戦を繰り広げる。

サーベルや半月刀を振り回し、ピストルを撃ち、馬上から蹴りを繰り出す。犠牲者は落馬して土に塗れ、流れ出る自らの血潮を見ながら意識は闇に包まれる。

重騎兵は集団となって敵の戦列に突っ込み、それを分断し、粉碎することを目的とする兵である。甲冑も白兵戦での防御に備えてのものだ。銃弾は弾けないが、敵の刃を防ぐ役割は十分に期待できる。要するに、重騎兵は近接戦を目的とした兵である。駱駝騎兵との戦いを潜り抜け、竜騎兵の一斉射撃で指揮官を含む多数の犠牲者を出し、勢いを殺された近衛騎兵が敵う相手ではない。

当初、二〇〇騎いた近衛騎兵はあつという間にその数を半数まで減らし、壊滅的打撃を受けていた。

レオポルドにも鈍い銀色の甲冑を着た重騎兵が襲いかかる。曲線に反り返った半月刀をレオポルドめがけて振り下ろしてくる。彼はその一刀をサーベルで防ぐが、勢いが強く、右手のサーベルは弾き飛ばされた。

敵は間髪入れず、半月刀を振り回す。レオポルドは顔をしかめながら、体を逸らしてそれを紙一重で避けるが、バランスが崩れ、馬上から転がり落ちた。地面に背中から叩きつけられ、息が詰まり、一瞬意識が飛ぶが、幸いにも意識はすぐに戻り、すぐに立ち上がる。先程の重騎兵は、自身の馬の向こうにいて、こちらの止めを刺そうと、回り込んでくる。

レオポルドは咄嗟に、馬の鞍に付いているホルスターからピストルを抜いて、狙いもつけずに撃ち放った。

銃弾は幸運にも敵の馬の頭に命中し、重騎兵は馬ごと倒れ込んだ。レオポルドは先程自身が落としたサーベルを拾うと、乗馬の下敷きになってもがいている重騎兵の元へ駆け寄り、その首に無我夢中でサーベルを突き刺した。重騎兵は声も上げられずに、血を吐きながらもがき苦しんだ後、動かなくなった。

レオポルドは荒い呼吸を繰り返しながら、サーベルを引き抜こうと柄を掴んだ。引っ張っても中々抜けず、止む無く死者の頭を踏み

つけて力を入れて引つ張ると、ようやくサーベルを抜くことができた。

初めて人を殺したことを、遅ればせながら自覚して、早かった動悸が更に早くなるのを感じた。頭の中が真っ白になり、意識がどこか自分の頭上に飛んでいるような気がした。

不意に、背後に馬蹄の音が響いて慌てて振り返ると、馬上から黒い瞳が彼を見下ろしていた。

「レオポルド様っ。御無事ですかっ」

そう叫ぶキスカの右手にある半月刀は真っ赤に染まり、鮮血が滴っている。

「今しがた殺されかけたが、何とか無事だ」

レオポルドはそう言いながら再び馬上に舞い戻り、すぐに馬腹を蹴り、馬を駆けさせる。戦場で一カ所に留まり続けるのは危険であることは言うまでもない。その横をキスカも並走する。

「落馬したときに骨をやらなくてよかった。落ち方が悪かったら、今頃、俺は天国にいただろう」

「それは、良かったです」

主君の死にかけた話を聞いて、キスカはちよつと答え辛そうにしつつ、そう言った。

「ところで、自軍はどうなっている」

「総崩れです。中隊長が落馬するのを見ました。私たちも退きましよう」

レオポルドは苦々しい表情を浮かべて頷く。

「後方のムールド人傭兵騎兵が支えてくれることを期待しよう」
彼はそこに一縷の望みをかけた。

しかし、レオポルドの期待が叶うことはなかった。

時を少し遡り、近衛騎兵が下馬した竜騎兵から一斉射撃を浴び、重騎兵と衝突した直後、後続していたムールド人傭兵騎兵は兵を分散させていた。

というのも、近衛騎兵に蹴散らされた駱駝騎兵はそのまま潰走するかと見せかけて、再び反転して、自軍に襲いかかるうという構えを見せていた。つまり、彼らの敗退はフェイクであった。駱駝騎兵の役割は後方の竜騎兵と重騎兵を敵の目から隠すことであり、その後、重騎兵に打ち破られた敵に追い打ちをかけることであった。

そもそも、駱駝騎兵たちは、正規兵ではなく、普段、遊牧や隊商の護衛をしている連中であり、特別な訓練も為されていない。その為、彼らは集団行動よりも、単独行動の方が得意であった。陣形を組んで戦うというよりは、散開して、思い思いに敵に襲いかかる方が性に合っていた。

ムールド人傭兵騎兵連隊の指揮官ファンリット大佐はそれを見て、敗退したように見せかけて、再び襲いかからんとする駱駝騎兵に対応せねばならないと考え、隊を分け、各一〇〇騎を左右に派遣して、駱駝騎兵に当てることにした。

この時、直進した近衛騎兵が重騎兵と死闘を繰り広げている状況は、後続のムールド人傭兵騎兵に伝わっていなかった。キスカが危惧したとおり、両隊の連携と命令伝達は非常に不確かであったのだ。そもそも、彼らの間には、ムールド人傭兵騎兵の運用に関して共通した認識が欠如していた。近衛騎兵の指揮官たちはムールド人傭兵騎兵は、黙っていても自分たちの後に続くものと思込んでいたが、ムールド人傭兵騎兵連隊にそのような意識はなく、その場の状況に応じて、独自に判断し、行動するものと考えていた。

そして、その判断と行動を、前方に行く近衛騎兵たちは知らなかったのである。

近衛騎兵はムールド人傭兵騎兵の十分な援軍が来ることを期待して、重騎兵と死闘を続け、じりじりと数を減らしていく。

ムールド人傭兵騎兵は間もなく来援したが、三〇〇騎ほどの数では重騎兵を押し返すには不十分であった。一時的に均衡を保ったかのように見えたが、今度は、乗馬した竜騎兵が今度はマスケット銃の代わりにサーベルを振りかざして来援し、辺境伯軍左翼騎兵は完

全に粉碎された。その死傷者は全体の半数にも及び、特に近衛騎兵は殆どが死傷するという壊滅的打撃を受けた。

二七 聖オットーの戦い後

全面的な敗走に陥った辺境伯軍左翼の騎兵を散々に追い散らしたブレド男爵軍右翼の騎兵は陣形を整えた後、第四連隊の左側面に進出する。

辺境伯軍左翼を指揮するバレットール准将は、前衛の自軍騎兵部隊が壊滅したのを見ると、直ちに進軍を停止させ、前方は勿論のこと、側面と後方に兵を配して、敵騎兵の襲撃に備えた。

歩兵連隊は八個中隊から成り、中隊は一八人で構成されるパイク兵小隊と二四人で構成される銃兵小隊が各三個。合わせて六個小隊に中隊本部の要員、予備兵（とは名ばかりで実際は欠員であることが多かった。その分の給与は将校の懐に入る）、合わせて定員は一五〇名である。連隊全体の定員は連隊基幹要員を合わせて一二〇〇名であるが、実際の人員はそれよりも一割程度少なかった。

帝国軍の規定では、パイク兵は胸甲と兜を装備し、長さ一七フィート半（およそ五二五cm）のパイクを持ち、剣を携えていた。ただ、予算の関係から甲冑や剣が省略されることもあった。また、パイクの長さを維持することは困難であった。行軍の際、パイクは非常に邪魔になるので、切りつめられてしまうことがよくあったのだ。銃兵は、帝国中央のような正規軍であれば、銃剣付でフリントロツク式（火打石式）の軽いマスケット銃を装備しているところだが、南部のような辺境では未だにマツチロツク式（火縄式）で、銃架が必要な重いマスケット銃が現役であり、近衛連隊以外はこちらの方を使用していた。このマスケット銃は非常に重く、両手で持っても狙いをつけるのが非常に難しい為、銃身を支える銃架を用いる。

ブレド男爵軍右翼の騎兵部隊は、陣形を整えると、重騎兵を先頭に据え、第四連隊の陣地へ突撃を仕掛けた。剣を掲げ、雄叫びを上げながら、数百もの騎兵が突進してくる様は、それだけで大変な迫力があり、練度や士気の低い兵ならば、見ただけで狼狽え、陣を離

れ、逃げ出すことだろう。

しかし、そんなことをすれば、その兵士は直ちに士官のサーベルで斬られるか、ピストルで撃ち殺される。或いは下士官の持つ短めの槍に貫かれるだろう。戦場において脱走は容赦なく即決で処刑される大罪なのである。

第四連隊の兵士たちは、誰一人そのような死刑に処されることもなく、じっと配置について、向かってくる数百の騎兵を見つめていた。パイク兵はパイクを押し並べ、銃兵は火の付いた火縄を取り付けたマスケット銃を構え、狙いを定める。

バレットール准将の他、連隊長のレッケンバルム大佐ら、連隊幹部、中隊長、中隊副長、旗手らは騎乗にあつて、向かってくる敵騎兵を睨みつける。

やがて、騎兵たちの顔の一つ一つが、表情が見えるほど近づいた頃、しかめ面をしたレッケンバルム大佐が連隊副長に頷いて見せた。

副長は直ちに号令をかける。

「放てっ」

傘下の中隊長ら士官、下士官が復唱し、銃兵たちは上官の命令に従い、引き金を引く。火縄が落ちて火皿の火薬に着火し、銃弾が放たれる。

一斉に飛び出した鉛弾は、空気を切り裂きながら飛翔し、男爵軍重騎兵の鉄の鎧を突き破つて、肉に食い込み、骨を砕く。銃弾を食らった騎兵は悲鳴を上げながら落馬し、被弾した馬は嘶きながら乗り手を振り落して倒れ込む。

銃弾の雨をかい潜った騎兵たちは、仲間の悲劇には目もくれず、臆することなく、突撃を敢行する。マスケット銃は一度射撃すると次弾を装填するまでに、数十秒を要する為、騎兵は、その間に、マスケット銃兵の戦列に食い込み、それを蹴散らせなければならぬ。それができなかつたとき、騎兵は新たな出血を強いられることとなる。

第四連隊のマスケット銃兵が次弾を装填し、マスケット銃を銃架

に置く前に、ブレド男爵軍の騎兵は、第四連隊の目前へと迫った。しかし、彼らを待ち受けていたのは、中世より騎兵を阻む憎きパイクの壁である。

パイク兵は、後方へ下がった銃兵の盾になるように前に進み出て、広がり、パイクを突き出して、騎兵の突撃を阻む。パイクに突かれた騎兵は馬から転げ落ち、体を貫かれた馬は悲鳴を上げながらひっくり返る。土に塗れた騎兵には容赦なく、突きが繰り返され、甲冑の隙間に鋭い刃が突き刺さる。

騎兵はピストルを撃ってパイク兵を撃ち殺したり、どうにかパイクの隙間を縫って歩兵の戦列に躍り込もうとするが、その試みは尽く失敗に終わる。

やがて、装填を終えたマスケット銃兵は、パイク兵たちの隙間から銃身を突きだし、パイクの前で右往左往する騎兵を狙い撃ちにする。

ラツパの音色が響くと、騎兵たちは一斉に背を向け、一目散に後方へと逃げ出した。敵騎兵を打ち破った勢いで、そのまま歩兵を潰そうという目論見は諦め、一度後退して体勢を整えるつもりだろう。

騎兵を追い払った第四連隊の将校たちは一様に安堵の息を漏らす。とはいえ、味方騎兵の擁護を失った第四連隊は、このまま敵の騎兵に釘づけにされ、動くことはままならなくなってしまった。少しでも動けば、敵騎兵がその隙を突いてくるのは言うまでもないことであり、行軍中の歩兵に騎兵を追い払う能力はない。

辺境伯軍左翼騎兵が敗北し、第四連隊が動くことのできない状態に陥った頃、中央は一進一退の攻防を繰り返していた。

男爵軍中央に配された二〇〇〇の歩兵は、積極果敢に辺境伯軍中央の第一連隊と近衛連隊に向かって攻め寄せ、マスケット銃を撃ちかけ、白兵戦部隊が突撃を繰り返す。

辺境伯軍は前衛の第一連隊が応戦し、三門の砲をはじめとする、旺盛な火力によって敵を寄せ付けず、戦列に辿り着いた数少ない敵

兵もパイクの前に倒れ伏す。第一連隊の前には男爵軍の歩兵の屍が死屍累々と横たわっていた。

しかし、それでも、男爵軍は攻撃を止めていない。既に一割以上の死傷者を出しているにも関わらず、積極的な攻勢をかけていた。仲間の死骸を踏みつけ、呻く負傷者を足蹴にしながら、武器を振りかざしてパイクの穂先とマスケツト銃の銃口が並ぶ第一連隊へと突進していく。

辺境伯軍としては、守勢に回ってはいるが、悪くない戦況である。敵の攻勢によつて第一連隊は少なくない数の死傷者を出してはいるが、まだ十分に持ち堪えているし、その後ろには無傷の近衛連隊の六個歩兵中隊を温存している。このまま敵が無謀ともいえる攻勢を継続してくれれば、こちらは無理に攻勢に転じずとも、敵の出血を強いることができるのだ。敵が攻勢に疲れ、士気が落ちた頃合を見計らつて反転攻勢に出て、一気に敵を突き崩せばよい。

しかし、そんな優位な戦況にあつても、ジルドレッド卿の顔は不機嫌そのものであつた。左翼の自軍騎兵が敗れ、第四連隊が身動きできない状況にあるのは勿論のことだが、その他にも彼を不機嫌にさせる要因があつた。

辺境伯軍右翼の戦線は、激しい戦闘が続き、既に両軍共に数百もの死傷者を出している中央と左翼に比べると、全くと違っていいほど、静かなもの。

時折、男爵軍のムールド人傭兵騎兵が、数十騎ばかり馬を駆けさせて辺境伯軍に近寄つて、馬上からマスケツト銃を撃ち放つ。とはいえ、射程距離ぎりぎりからの射撃はほとんど命中していなかった。ほんの数発が不幸な兵士を貫くのみだ。

ムールド人傭兵騎兵の攻撃に対して、辺境伯軍右翼に配された第五連隊は時折、威嚇するようにマスケツト銃兵が射撃をするもの、こちらでも射程距離ぎりぎり、しかも、動局的相手とあつて、命中率は非常に低い。

両軍ともそのような散発的な攻撃を繰り返すに止めており、前進

する気配はない。辺境伯軍輕騎兵連隊は第五連隊の後方にあつて待機している。

本来であれば、左翼が苦境に陥り、中央が激戦を繰り広げているのならば、右翼は前へ出て、敵左翼を打ち破り、敵中央に圧力をかけるか、若しくは、中央に増援を送るべきである。

ジルドレッド卿も勿論そう考えている。そして、何度も右翼指揮官のヨハンス・ルーデンブルク准将の元へ伝令を発して、行動を促しているが、反応はない。

「おのれ。どうなっているのだ。ヨハンスめ。まさか、異教徒に寝返るわけではあるまいな」

「まさか。准将の御令弟は教会の助任司祭ですぞ」

ジルドレッド卿の独り言に、第一連隊の連隊長ジューディ大佐が声を上げる。

ルーデンブルク家は、サーザンエンドでは名のある家柄であり、准将も騎士の称号を有している。また、教会との結びつきも強く、多くの聖職者を輩出してきた一族なのだ。そのような教会に近い人物が異教徒の側に付くなど想像できないことだ。ついでにいえば、准将の弟の助任司祭は、教会出身のボスマン財務長官とも親しいことで知られており、あまり有能とはいえない主任司祭に代わって、教会を取り仕切っているという。

「大佐。戦場において、まさかや有り得ないは、禁句だぞ」

ジルドレッド卿は険しい顔で言った。

「それはそうですが。いや、しかし、まさか」

「それ以外、右翼が動かない理由など考え付くまい。まさかの事態を想定して、対応策を取るべきだろう」

「確かに、その通りですね。では、もしものときは、近衛連隊に動いてもらいましょう」

ジューディ大佐の進言に將軍は黙って頷く。

こうして、辺境伯軍の予備兵力である近衛連隊は、自由に動かすことができなくなってしまった。戦況によっては、中央が前に押し

出て敵を押し潰すことや、近衛連隊を左翼の応援に向かわせることも可能ではあったが、右翼の裏切りという事態を想定すると、近衛連隊を動かすのは難しい。

近衛連隊が動かせないとなると、途端に中央が苦しく感じられる。第一連隊は一二〇〇の兵員で、敵の歩兵二〇〇〇の猛攻を耐えているのだ。後方に近衛連隊九〇〇はいるが、これは、前述の理由で動かせない。

辺境伯軍中央の苦しい状況を知ってか知らずか、男爵軍はこれまで以上の総攻撃を仕掛けてきた。ほぼ全軍が雄叫びを上げながら押し寄せ、辺境伯軍はマスケット銃兵の一斉射撃で応戦する。三度の一斉射撃が繰り返された後、男爵軍の数百もの歩兵がついに辺境伯軍中央の陣地に乱入した。

マスケット銃を撃ち終えたばかりの銃兵に半月刀を振り下ろし、槍で突き、斧で斬りつけ、棍棒で殴る。銃兵も負けじとマスケット銃を振り回す。旧式のマスケット銃は非常に重く、ちよつとした棍棒代わりを務めることができる。パイク兵も押し出して、中央の戦線は敵味方入り乱れての乱戦に突入した。

こうなると、あとは、もう兵士たちの士気と根性、そして、兵士の数で勝敗は決まると言ってもいい。

その点でいうと、両軍の士気と根性は互角のようであったが、数の上では、第一連隊は些か不利であった。

時間が経つにつれ、男爵軍の優位が目立ち始め、第一連隊の兵士たちは自分たちがじりじりと後退していることに気付いた。

「閣下つ。近衛連隊を投入してくださいっ。このままでは、持ち堪えられませんっ」

前線で指揮を執っていた第一連隊のジューディ大佐は、一度、本営に戻ると、ジルドレッド卿に懇願した。

「連隊の損失は既に二割を超えますっ。中佐と少佐に加え、中隊長も二名戦死しております」

第一連隊は既に壊滅的な打撃を受け、戦闘継続が危ぶまれる瀬戸

際まで追い詰められていた。増援がなければ、瓦解することは目に見えている。

しかし、相変わらず、辺境伯軍右翼は不気味な沈黙を続けている。今ここで、近衛連隊を増援に出したとして、その時、右翼が裏切つて、こちらに攻め込んだとしたら、それは敗北と同義であろう。それも、大敗北。惨敗と言っていだらう。

戦闘において、最も死者が出るのは、戦線が持ち堪えられず、兵士が逃げ出し、全軍が撤退するときである。この時、敵の容赦のない追撃が敗北者の背に浴びせられる。特に、今回の戦いでは、男爵軍は騎兵を多く擁している。追撃戦は、騎兵が最も得意とするところである。走って逃げる敵兵に、何倍もの速力で追いついて、その背を斬り捨て、銃弾を撃ち込み、馬蹄にかける。戦死者の半数以上、或いはほとんどは、このときに出るものだ。

ジルドレッド卿は、はつきり言って迷っていた。彼は優柔不断な男ではないし、慎重な方でもない。この場面で、虎の子の近衛連隊をどう動かすかは、いくら決断力のある指揮官であっても難しい判断だろう。

「わかった。近衛連隊を前に出す」
結局、ジルドレッド卿は、ルーデンプルク卿の忠誠心を信用することにした。

真っ赤な軍服に統一された近衛連隊が行進し、奮戦する第一連隊に代わって前に出た。マスケット銃を押し並べ一斉射撃を食らわせ、パイクを突き出す。

第一連隊の疲労し、傷ついた兵士たちは一旦後方に下がって体勢と陣形を整える。

精鋭の近衛連隊の投入で、ずるずると下がり始めていた戦線はどうにか維持された。

しかし、将軍たちの注意は引き続き激戦が繰り広げられる前線よりも、右翼に注がれていた。今この瞬間にも、自軍右翼が敵に寝返りでもすれば、辺境伯軍は瞬く間に全面潰走に陥るだろう。

辺境伯軍首脳の心配を余所に、第五連隊と輕騎兵連隊は不気味な沈黙を続けていた。

ジルドレッド卿は一先ず安堵の吐息を漏らす。まずは、目前の敵に集中できるというものだ。

辺境伯軍随一の精強と名高い近衛連隊の勇名は伊達ではなく、じりじりと男爵軍を押し返し始めていた。

数が少ないにも関わらず押し返すことができているのは、近衛連隊が練度や士気、忠誠心の高い精銳部隊であることも理由の一つだが、その上、戦闘開始から二時間余。それまで休むことなく蛮勇ともいえる突撃を繰り返す猛攻を続けてきた男爵軍に対し、後方ですっと温存されていた為、疲労と消耗が極めて少ないのである。

もつ少し数が多ければ、近衛連隊を投入した段階で、男爵軍中央を潰走させることもできただろうが、そこまで優勢には立てないでいる。

しかし、疲労と消耗が限界に近付きつつある男爵軍中央の戦意は見るからに落ち込んでおり、やや浮き足立っているように見えた。攻めよりも守りの姿勢が多くなり、踏ん張りが足りず、ずるずると下がり始めている。

そこに満身創痍ながらもどうにか再編成された第一連隊を再び投入すれば、敵の戦線を一気に打ち破ることができる。と、ジルドレッド卿は踏んでいた。

「第一連隊の再編成が完了しました。しかし、戦死者に加え、負傷者も多く、戦える兵は八〇〇いるかどうかといったところですよ」

第一連隊長ジューディ大佐がジルドレッド卿の傍に馬を寄せて報告した。

「構わん。直ちに前に出せ」

「しかし、士気も低く、疲労も回復しておりません。あまり長くは戦線を維持できません」

「それでも構わぬ。今、投入せずしていつするのだった。今は優勢だが、近衛連隊が押し返されたときに半死の第一連隊を出しても挽

回できぬぞつ。優勢な今だからこそ、一気呵成に攻めねば勝機は望めぬっ」

ジルドレッド卿は唾を吐き散らしながら一喝し、大佐は青い顔で黙って頷いて馬を駆けさせた。

直ちに再度陣列を整えた第一連隊が前進する。主に前へ戦う近衛連隊を後ろから支援し、攻勢をかける。

やがて、辺境伯軍決死の反撃に、二時間半に渡って無理な攻勢を続けてきた男爵軍中央は崩壊し、兵たちは震えながら後ろに下がり、背を向けて走って逃げだす兵も続出した。

「勝てるっ。この勢いならば、勝てるぞつ。全軍突撃っ」

ジルドレッド卿は腰のサーベルを引き抜きながら絶叫し、馬腹を蹴って、前線に躍り出た。突撃ラツパが狂ったように吹き鳴らされ、太鼓が乱打される。兵士たちが雄叫びを上げながら走り出す。

「神よわれらとともにっ」

近衛連隊お決まりの合言葉らしい言葉を狂ったように怒鳴り散らしながら、勇猛果敢な総司令官に率いられた辺境伯軍中央は一丸となって突き進む。

これには堪らず、男爵軍歩兵は浮き足立って全面的な潰走に陥った。武器を捨て、敵に背を向け、仲間を見捨て、士官や下士官の怒号にも耳を貸さず、走り出す。

その背中を辺境伯軍の兵士が放った銃弾が貫き、バイクが突き刺さり、サーベルが斬りつける。悲鳴を上げながら卑怯な逃亡者は地面に沈む。即死したにしろ、負傷したにしろ、遠からぬうちに天国か地獄に足を踏み入れることになるだろう。

辺境伯軍は歓喜に満ちていた。絶体絶命ともいえる戦況から、一転して勝利を得たのだ。

少なくない犠牲ではあったが、戦術的にも戦略的にも意味のある勝利だったと言えるだろう。こちらの犠牲に負けず劣らずブレド男爵軍も大きな犠牲を出している。再起して、戦を仕掛けてくるには軍の再編成に少なからぬ時間が必要になる。その前に、辺境伯軍は

更に多くの兵を集めることができるだろう。次の戦いがあるとするば、より辺境伯軍にとって有利な戦いとなるはずだ。その前に、この戦いで、男爵を捕えることができるかもしれないし、若しかすると、戦死するかもしれない。そうなれば、少なくともサーザンエンド中部は安泰といえるに違いない。

価値ある勝利を手にした將軍や士官たちの顔にも安堵の色が浮かんでいた。

「閣下つ。敵の騎兵がつ」

そこに飛び込んできたのは彼らの頭からぽつかりと抜け落ちていた言葉だった。

そうだ。敵にはまだ両翼に騎兵がいる。いや、しかし、自軍両翼が抑えているではないか。そんな容易にこちらに攻め入ることなどできまい。

ジルドレッド卿をはじめ士官たちは、両翼は膠着状態に入っているという認識であった。故に、両軍とも動けないはずである。

しかし、辺境伯軍左翼は第四連隊の歩兵のみで、騎兵を相手にしていた。連隊長レッケンバルム大佐は非常に慎重な人物で、機動力に勝る敵騎兵に側面や後方から攻撃されないようしっかりと腰を落ち着けて前には出ず、ただただ防御に徹していた。迂闊な攻勢に出て陣形が乱れたところを突かれては敵わない。

一方、男爵軍右翼は、目の前の第四連隊が攻め難いと考え、下手な攻勢には出ず、睨みを利かせていた。

そこで、自軍中央が崩れるのを目撃したのである。と同時に、辺境伯軍中央が逃げる敵を追撃せんと突撃をかけるのも見ていた。騎兵が恐れるのは歩兵の突撃ではない。歩兵が押し並べたマスケット銃とパイクだ。防御隊形でない歩兵など騎兵の敵ではない。

男爵軍右翼の騎兵は目前の第四連隊を無視して、辺境伯軍中央に向かって突撃した。

これを見ていた第四連隊も慌てて牽制せんと動くも、歩兵の足では騎兵に追いつけない。マスケット銃の射程に入る前に、男爵軍右

翼の騎兵は、敵を追うのに夢中になっていた辺境伯軍中央の近衛連隊、第一連隊の兵の群れに突っ込んでいった。

数百騎もの騎兵の突撃は見ただけで震え上がるほどの勢いと迫力を持ち、実際、大変な衝撃力を持つ。馬に跳ね飛ばされた兵が吹き飛び、騎兵が馬上から振るう半月刀の一閃で歩兵は血飛沫を上げながら倒れ伏す。

「下がれっ。下がれっ。戦列を組み直せっ。マスケット銃兵っ。装填だっ。装填っ」

ジルドレッド卿は慌てて兵たちに早口で下知を飛ばす。

前に向かって走っていた兵たちは慌てて後ろに下がり、銃兵はマスケット銃の銃口に火薬と鉛弾を押し込む。

しかし、陣を組み直す前に、騎兵ができた脆い戦列を一気に突き破る。銃兵はマスケット銃を構える前に斬り捨てられる。

「閣下っ。堪えきれませ……」

そう叫んだジューデイ大佐の帽子が吹き飛んだ。一瞬のうちに大佐は表情を凍らせ、体はゆっくりと傾いて地面に落ちた。土の上に横たわる大佐の目は開いたままで、頭にできた穴からは血が流れ出ている。

「將軍っ。撤退致しましょうっ。これ以上は無理ですっ」

血塗れのサーベルを手にした副官が叫んだ。兵たちは半数近くが後退りし、半数近くが敵に背を向けて一目散に逃げ出していた。

「糞っ。ヨハンスめっ」

ジルドレッド卿は自軍右翼を睨みつけて、吐き捨てるように叫んでから、馬の腹にキツイ蹴りを入れた。

撤退のラツパが鳴り響き、辺境伯軍中央は一目散に逃げ出す。消耗激しく連隊の大佐、中佐、少佐というトップ三人を失った第一連隊は統率も何もなく、個々人がバラバラに逃げ出していた。

まだ統率がとれている近衛連隊は、ジルドレッド將軍の弟で連隊長のジルドレッド大佐が殿の指揮を執った。逃げながらマスケット銃に装填し、僅かな余裕を見て、陣列を組んで、一斉射撃を食らわ

せる。時折、十数人の決死隊を送り込んで敵を足止めする。そうやって、どうにか自軍の兵が一兵でも多く逃げられるように努める。

全面的な敗北を悟った第四連隊も隊伍を組んで戦場を後にした。こちらは敵の追撃が少なく、また、消耗も酷くなかった為、比較的安全な撤退をすることができた。

静観というか、味方を見殺しにした辺境伯軍右翼は、その後も沈黙と不動を維持し続けた。

聖オットーの戦いは、辺境伯軍の完全ある敗北で幕を閉じた。戦い自体は三時間ほどで決したが、逃げる辺境伯軍は男爵軍の執拗な追撃に遭い、多くの戦死者を出しつつも、どうにかハヴィナの城門を潜り抜け、逃げ込むことができた。ブレド男爵軍もハヴィナには手を出さず、ハヴィナの城壁近くになると、追うのを止めて引き下がっていった。

辺境伯軍の最終的な戦死者は不明であるが、ハヴィナを出立した六〇〇〇の軍勢が二〇〇〇足らずに激減してしまったのは確実であった。二〇〇〇余の右翼は離反し、残りは戦死したか、負傷して戦場に転がっているか、敵に捕らわれたか、どこか遠くへ逃げていてしまった。つまり、二〇〇〇の兵を損耗したことになる。大敗北といつて言い結果だ。

こうして、聖オットーの戦いは、後世においては、異教徒の軍勢を前に、西方教会の兵が聖オットーよろしく大勢殉教を遂げた悲劇として語られることになる。

しかし、この戦いの敗北の原因はいくつかあれど、その最大の原因は、異教徒でも異民族でもなく、同じ神を信じる西方教会の人間の裏切りによるものであった。同胞の裏切りによって起きた悲劇であり、殉教であった。

二八 財務長官ボスマンについて

サーザンエンド辺境伯領の財務長官を務めるポール・ボスマンは、帝国人ではない。

では、帝国人とはどういう人間かという定義は中々難しい。国籍という制度のない大陸においては、自分が何人かという認識は、人種的、民族的な、或いは地域的なもので成り立っていた。

多くの民は、自分は何市の市民であるとか、何村の人間だとか、何地方の人間だとかそういう認識であつて、国というものを意識することは少なく、特に帝国はその傾向が強かった。

帝国は大陸の三分の一という広大な面積と幾千万もの人口と、数十、数百ともいわれる民族を抱える巨大な多民族国家である。

帝国直轄領や皇帝私領を除く大部分の地域の統治は数百もの諸侯に委ねられ、皇帝はそれらの諸侯を支配するというのが、帝国の構図である。故に、皇帝は間接的に全土と全人民を支配している形にはなっているが、諸侯の中にはたまに皇帝の意思に逆らったり、刃向ったりする者もいて、完全に全土と全人民を支配しているとはとても言える統治体制ではなかった。

諸侯の支配地域（領邦）はそれぞれ独立した小国家のようなもので、それらの連合体が帝国と言う方が、現実に即している。

そのような帝国においては、帝国の中に住む人間が、自分は帝国の人間だと認識することは大変稀であつた。それよりかは、ナントカ公領の人間とかいう方がまだ実感があつた。また、独自の宗教や文化、習慣を持つ異民族は、それぞれまとまっております、彼らは自分が帝国人だとは欠片も思っていない。洪々と帝国に従っているに過ぎず、その内部に取り込まれたとは全く考えていないのだ。

つまり、帝国に住んでいる人間が帝国人というわけではない。

では、どういう人間が帝国人と呼ばれるのかといえば、これは非常に曖昧な定義と用語であるが、帝国領土内で生まれた西方教会を

信仰する西方人（白人）のことが、大体帝国人といわれた。西方人とは、大陸西部から東部へと進出してきた人々で、大陸西部の西方諸国と人種的に殆ど同一である。西方諸国家と帝国に住む西方人の枝分かれは僅か数百年程度前である。その中で、帝国で生まれれば帝国人。リトラントに生まれればリトラント人。クライスに生まれればクライス人と呼び称されるのである。僅かに外見と習慣、文化言語に違いはあるが、大元は同一で、非常によく似通っており、共通する部分も多い。

対して、異民族と称される人々は、西方人よりも遙かに前から大陸東部に居住していた人々で、枝分かれは数千年遡る（当時の人々は知る由もなかったことだが）。当然、違いは大きい。

さて、では、どうして、西方人にして西方教会を信仰するボスマンが、帝国人でないのかといえば、それは彼が帝国生まれでないことが最大にして唯一の理由である。

彼の生地は帝国の北西クライスのどこか、或いは帝国の南西バートリア王国と云われている。

生家も、またはつきりとはしないが、商人か職人の家に生まれた五男だか六男だかであるらしい。その後、成人する前に、どこかの修道院に入り、何かしらの原因で、修道院を出て、帝国に渡り、二十年ほど前に、教会軍の事務局に入ったという。そこで資金の調達や会計事務などで手腕を見せ、教会軍南部管区の事務局の会計責任者にまで出世した。

常に慢性的な財政難に悩まされていたサーザンエンド辺境伯であるが、同じように、ハヴィナの教会も深刻な赤字に陥っていた。教会は借金を抱えており、早急な収支の改善と借金の返済に迫られていた。

そこで、教会は、資金調達や会計事務に実績のあるボスマンを事務長に迎えて財務再建を図った。

とはいえ、ボスマンにとってもこれは難しい仕事だった。ハヴィナの教会の財務基盤は非常に弱かったのだ。

教会の財源の多くは、信者から寄進された土地や寄付金などであるが、西方教会信徒の少ない南部にあつては、その寄進される土地も寄付金も格段に少ないのである。にも関わらず、教会の上級聖職者たちは、帝国本土並みの贅沢な暮らしと、立派な建造物、儀式、祭典を求めた。身入りは少ないにも関わらず出費は多額であつた。

ボスマンの財政再建策に対しても、教会の上級聖職者たちは出費の削減には強く抵抗し、彼を叱責までした。彼ら曰く、

「外国人である貴様を事務長にしてやったのは、我らの出費を削減する為ではないつ。出費が減らせぬならば、収入を増やせばよかるう」

とのことだつた。

とはいえ、収入は限られているのだ。しかも、その収入は不安定で、一定していない。

辺境伯の宮廷と同じくらい教会の財政も切羽詰つており、八方塞がりであつた。

しかし、そこで、投げ出すわけにもいかない。事務長に就いてしまったからには、何かしらの成果を挙げなければ、免職されるのは間違いないだろうし、彼のキャリアにも傷がつく。その上、教会から悪い意味で目を付けられる。

そこで、彼はある手を使うに至つた。

教会は度々多くの物を必要とする。教会の儀式で使う品々や教会の聖職者が必要とする衣類や消耗品、貧者に分け与えるパンを作る為の小麦など。通常、これらの品は市内の証人から購入されるが、市内にないものは市外から輸送される。

通常、市外から市内に運ばれる品には関税が課される。関税の税率は品物によつて違い、城門の役人が検査を行つて税率に基づき関税を徴収する。

しかし、帝国においては、教会の品物には、税を課さないことが特権として認められており、教会向けの品は無検査で城門を通ることができた。

これを活用して、ボスマンは密かに、外から市内に入れる品物に金や香辛料といった小さく高価で、特に関税の税率が高いものを紛れ込ませ、関税の検査と課税を逃れ、これを密かに結託した商人に転売する。関税分まるごと安い品を売ることができるのだから、利益が大変大きいのは言うまでもない。勿論、これは、密輸であり、教会の特権をしても、逃れられないレベルの犯罪であった。発覚すれば、ボスマンの首は比喩的な意味でも飛ぶであろうし、文字通りにも飛ぶことは間違いなかった。

ボスマンは巧妙に事を進め、帝国人と関わりがほとんどない遊牧民から品物を買ひ、特定の商人と強く結びつき、何人かの役人を買収し、有力な貴族を味方に付けていた。密輸は継続的に行われ、密輸品は、違法な品と発覚しないよう、密かに運ばれ売られていった。全ては上手くいき、教会の収入は数倍に増え、借金は返済され、会計は改善し、教会の建物を改築する余裕まで生まれた。

事務長であったボスマンの名声は高まり、この当時、サーザンエンド辺境伯の宮廷を取り仕切っていた侍従長マクシミリアン・ルーデンプルク卿から財務長官への就任を要請され、これを受けた。

財務長官になったボスマンは、辺境伯の宮廷の財政再建に奔走した。彼は財政再建にあたり、関税や商取引に関わる税金の軽減や規制の撤廃を唱えた。そうして、商取引を活発化させ、物の出入りを多くして、結果的に税収を増やすということだ。

しかし、この案に、死去したルーデンプルク卿の後任である侍従長レッケンバルム卿が強く反対した。商取引を活発化させるのはいが、多額の借金を抱えている現状にあつて、減税を行えば、ただでさえ低い辺境伯の返済能力の信用が更に下がり、新たな借金の借り入れが難しくなるとの理由であった。レッケンバルム卿は、逆に、新税を導入し、税金の徴収方法を合理化し、一定の税収を確実に確保して、辺境伯の財政に信用を取り戻すことが肝要であり、その上で、現在の借金を整理し、低利で長期の債権を発行して、安定的な財政運営ができるようにすべきであると主張した。また、侍従長は

教会への課税にも乗り出す構えを見せ、教会とも対立した。

レッケンバルム派と教会派は強く対立し、基本的にはレッケンバルム派の方が、強い権力と影響力を持つており、優勢であった。

ボスマン財務長官は危機感を募らせた。商人からは税金を軽減しろとせつつかれ、特に、教会事務長時代の密輸で共謀した商人からは事あるごとに便宜を図るよう陳情が来た。

そんな中で、レッケンバルム卿の本格的な改革が行われる前に、件の边境伯継承問題が持ち上がった。第一六代边境伯コンラート二世は没し、边境伯位は空白となる。改革や財政再建どころの話ではなくなってしまう。

借金の返済は、边境伯代理ロバート老の半ば強引な手法によって延期され、一先ずはどうにか息を吐ける状態には落ち着いていた。

ボスマン財務長官に、ブレド男爵からの手紙が来るようになったのは、この頃からだった。

ブレド男爵は、遊牧民とも通じており、その情報力は、異民族との関わりに忌避的な边境伯宮廷よりも優れていた。そして、彼は、教会がどのような手を使って財務を改善させたのかよく知っていた。初めは、情報提供を求められた。宮廷内の情報を男爵側に連絡するだけである。次に、ブレド男爵からウォーゼンフィールド男爵やサーザンエンド司教への仲介と連絡を行い、その密やかな交渉を調整した。そこに、密輸の際、協力した貴族ルーデンブルク家が入って、交渉をスムーズに進めることに一定の役割を果たした。

教会が密輸に手を染めていたという事実が明るみになることを恐れ、レッケンバルム派から主導権を取り戻そうという思惑が、ブレド男爵との協調に繋がった。

ブレド男爵が边境伯に就任した際は、帝国人にも西方教会信徒にも、危害は加えず、その生命と身体と財産を保障する。何なら、西方教会に改宗してもよいとまでブレド男爵は言い、両者の利害はほぼ一致した。

聖オットーの戦いにおける边境伯軍右翼の沈黙、パウロス・ルー

デンプルク准将の裏切りは、この流れで起きたものであった。

さて、聖オットーの戦いに敗れた辺境伯軍左翼騎兵に属していたレオポルドは、近衛騎兵の崩壊後、キスカと共に馬を走らせていたが、敵の追撃がないと見ると、速度を緩めた。

「さて、これからどうしようか」

レオポルドはキスカに向かって尋ねた。

戦闘はまだ継続している。とはいえ、二騎だけで戦場に戻っても戦況に影響を与えるこ

とはできそうにない。それどころか、どうにか逃れられたのに、再び敵の手中へと飛び込むようなものだ。

「とりあえず、自軍の騎兵を再編成してはどうでしょうか」

キスカは冷静に戦線の様子を伺いながら助言した。

周囲にはレオポルドたちと同じように、敵から逃れてきた騎兵がいくらかいた。彼らは自らの身の振りように戸惑い、右往左往しているようであった。

レオポルドはキスカの助言に納得し、周辺でうろろしている騎兵たちを掻き集めて再編成を試みた。

集まった騎兵は、近衛騎兵とムールド人傭兵騎兵を合わせて一〇〇騎ほどで、将校はレオポルドだけのようにだった。

そこへ馬に乗ったソフィーネもやって来た。手にした十字剣は赤く染まり、血が滴っている。いくらか敵兵を斬ったようだ。

「その馬はどうしたんだ」

「近くで拾いました」

レオポルドの問いにソフィーネは素っ気なく答える。乗り手を失った馬はそこら中にいるので、手に入れるのは簡単だろう。

とりあえず、一個中隊くらいの戦力が揃い、これなら、どうにか敵を牽制するくらいはできるかと思つて、戦線に戻ると、既に辺境伯軍は崩壊し、潰走に移っているところだった。

ここで、今から敵軍に突撃していても無駄死にというものだ。

「ハヴィナに戻るう」

レオポルドは素早く決断を下し、一〇〇騎を率いて、ハヴィナへと引き返した。

途中、敗軍の兵から情報収集して、ルーデンブルク准将率いる右翼が不動を決め込んだという情報を知り、驚きつつも、城門を潜った。

戦場がハヴィナからさほど離れていないこともあって、辺境伯軍敗北の知らせは速やかにハヴィナに届いていたようだった。

市内は混乱し、人々は右往左往していた。中には家財を荷車に積み込んで逃げ出す市民もいるが、民兵が混乱を抑えようと表に出て、人々の往来を規制していた。

敗軍はレッケンバルム卿の指示で、広場に集められているらしく、レオポルドたちもそこへ向かった。

レオポルドはキスカと連れ立ってレッケンバルム卿の屋敷に入り、ソフィーネにはフィオリアを迎えに行ってもらった。これからどうなるか分からないのだ。できるだけ集まって行動するべきだろう。

勝利は確実と思われる戦いの結末を知り、さすがのレッケンバルム卿も狼狽しているようであった。それでも、宮廷でも第一の実力者だけあって、既に対応策を講じていた。

まずは、状況把握に努める。市内各所に部下を送り込み、どこで誰がどのような行動を取っているか調査する。というのも、戦場で裏切り者が出たのなら、市内にも裏切り者がいるかもしれないと考えたからであった。それと同時に、敗退してきた軍を受け入れ、広場にまとめて収容し、整理、編成するように指示する。この敗軍をなんとか蘇らせ、市内の裏切り者を捕えて、どうにかハヴィナ市内に籠城できないかと考えていた。

こうした中で、市内に残っていた民兵のかなりが不穏な動きをしており、教会とロバート老、ボスマン財務長官の、動きは非常に怪しく、少なくとも、こちら側ではないということがわかってきた。

レッケンバルム卿は愕然とする。まさか、宮廷の有力者が、それ

どころか、辺境伯代理のロバート老まで、こちら側ではないとはどういうことか。その上、異民族であり異教徒であるブレド男爵にどうして教会が味方するというのか。

これをレオポルドもちょうど聞いていた。

どんなことがあっても異民族、異教徒に味方することがないと思われていた教会どころか、顔を見たこともないが、同族であるロバート老までブレド男爵寄りであることを知って、レオポルドも強い衝撃を受けた。

とはいえ、ショックを受けて茫然自失している暇はない。宮廷の実力者までもがブレド男爵派であるということは、籠城が不可能であることを意味している。元より、市民の半分以上は異民族というハヴィナにおいて、教会までもが敵方に付けば立て籠もることなどできようはずもない。

籠城戦とは、攻守において非常に我慢を強いられるものである。敵に囲まれているという極限状態に加え、水や糧食の制限など、守備方は一致団結して籠城戦を耐え抜かねばならない。裏切り者や卑怯者、臆病者が多ければ、守備方は戦う前に敗れる。

今のハヴィナはどう考えても籠城できる状況ではない。

籠城できなければ、どうするか。

「逃げるしかないな」

「逃げるんですか」

レオポルドが呟いた言葉に、キスカが無表情に応じる。

「逃げるしかないだろう」

レオポルドははつきりと言い切った。

彼の最終的な目的は辺境伯に就任することであり、ハヴィナに入り、宮廷の支持を取り付けることは、その為の手段である。そのハヴィナに固執して、当地に留まり続けることは、現状では賢明とは言えない。いくらか抵抗できたとしても、最終的にはブレド男爵の手に捕まることは間違いないし、辺境伯の椅子を狙っている男爵が、有力な辺境伯候補であるレオポルドを厚遇してくれるとは思えない。

「それで、相談なんだが。逃げる先に心当たりはあるか」
レオポルドに尋ねられてキスカは黙考する。

ハヴィナ近郊及びサーザンエンド中部は、ブレド男爵とウォーゼンフィールド男爵の勢力下にある為、逃亡先には向かないだろう。逃げて、すぐに見つかり、追手が来ることは間違いない。

北部にあつては、同じように辺境伯位を狙うアーウエン人系のガナトス男爵の勢力下である。追手がブレド男爵からガナトス男爵に代わるだけだ。北部の有力者である帝国系のベルドルン男爵を頼る手もあるが、帝国人ではないキスカには頼る先として頭には浮かばなかった。

となると、あとは南部しかない。南部を支配しているのはキスカの民族であるムールド人である。彼らの世界は部族社会であり、民族としてのまとまりはない。帝国に反感を持つ者もいるが、キスカのような帝国寄りの者もいる。まとまりがなく、混在しているが故に、逃げ込みやすく紛れ込み易い。また、キスカの出身部族ならば彼を匿ってくれると思われたし、キスカからも口を利きやすい。

「サーザンエンド南部の、私の部族など如何でしょうか」
キスカはそう提案してから、細々と理由を言い並べた後、補足するように言い足す。

「私の部族であるネルサイ族は、遊牧民ですが、友好関係にある部族は町や村に住んでいます。それらの町を拠点とすることもできるかと思われます」

「なるほど。それは妙案だ。それでいこう」

レオポルドは即座にキスカの提案に同意した。それ以外に良い方策がないように思えたし、のんびり腰を据えて考えている余裕もないのだ。

そうして、レオポルドたちはハヴィナを後にすることにした。

二九 ハヴィナを後にして

レオポルドはハヴィナを捨て、キスカの部族を頼ってサーザンエンド南部へ落ち延びることを決め、その旨を侍従長レッケンバルム卿に告げた。

「なんと、ハヴィナを捨て逃げるつもりかっ」

レッケンバルム卿は眉を吊り上げて叫んだ。

「しかし、このままハヴィナに留まっても、勝てる見込みはないでしょう」

レオポルドは努めて冷静に改めて現状を説明した。

現状、辺境伯軍が動かせる兵力は、ブレド男爵軍に大きく劣り、また、ハヴィナ市内は一致団結しているわけではない。異民族もいれば、裏切ったことが確実な教会もいる。とてもじゃないが、籠城戦などできる状況ではないのは明らかだ。

そして、ブレド男爵は、有力な辺境伯候補である（血統的には明らかに正当といえる）レオポルドを生かしてはおかないだろう。レオポルドにとっては生命の危機が迫っているのだ。

レッケンバルム卿は、説明を受けて渋い顔をしながらも納得した。「しかし、命が危ないのは君だけではない。私とて危ういことに違いないだろう」

侍従長は、裏切り者である財務長官ボスマンや教会と激しく対立していた経緯があり、以前から辺境伯の椅子に意欲を見せていたブレド男爵の就任に強く反対していたのだ。

「そこで、相談なのだが、私も君達に同行してもよいか。いや、私だけでなく、ブレド男爵に反対する者を全て連れて行くわけにはいかないか」

レッケンバルム卿は、ブレド男爵反対派を丸ごとサーザンエンド南部へ亡命させようと考えているらしい。

味方が増えることはよいことだ。しかし、大人数で逃げるとなる

と、追手に発見され、追いつかれる危険も増す。

レオポルドは僅かの間、考えてから答えた。

「よいでしょう。しかし、追手を上手くかわす方法を考えねば」

「では、私は、ジルドレッド卿らに話を付ける。それと物資と馬や駱駝を調達しよう」

そう言つてレッケンバルム卿は、杖を突いて部屋を出て行つた。

「さて」

レッケンバルム卿を見送つたレオポルドは腰に手を当て、顎を摩りながらぼやく。

「どうしたものかな」

彼はこれから限られた短い時間のうちに、敵の追手をかわして逃げる算段を付けなければならぬのだ。一番の難題は彼を暫し悩ませた。

さすが侍従長という要職にあるだけあつて、レッケンバルム卿の動きは早かつた。

まず、味方になることが確実な貴族や軍人の一族郎党をレッケンバルム家の屋敷に集めた。

レッケンバルム家の他、ジルドレッド家や法務長官を務めるシュレイダー卿の一族、辺境伯軍の左翼を指揮していたバレットール准将、ルゲイラ兵站監らが集い、その数は女子供を合わせて数十人にも及んだ。更に、ブレド男爵に付いた教会指導部の決定に反発したサーザンエンド司教付司祭をはじめとする聖職者が加わる。その他、反対派貴族や軍人に従う兵や従者とその家族は四〇〇人に上つた。反対派の総数は五〇〇人程度である。

また、そこら中から物資と資金、馬、駱駝を掻き集める。馬や駱駝の数は三〇〇頭にも及び、糧秣や飲料水、武器弾薬、衣類、薬品などの物資は木箱や樽に詰め込まれ、広場の片隅に山積みされた。これらの物資を大慌てで馬車に載せ、駱駝の背に積み込む。

積み込みの指揮はジルドレッド卿が行い、兵士や従者たちだけで

なく、貴族も女子供ですら、その作業を手伝った。

レオポルドは、レッケンバルム卿の屋敷の一室で、その様子を横目に見ながら、手紙を書いていた。それほど長い文面ではない。速やかに書き終えると、何も書かれていない羊皮紙を手にすると、再びペンを走らせる。

彼はブレド男爵側の状況を理解していた。男爵側に裏切ったともいえる教会と男爵が結んだ約束についてもよく知っていた。

というのも、教会の決定に反対したサーザンエンド司教付司祭が教会を飛び出し、事の次第をレッケンバルム卿に報告していたのだ。これを侍従長からレオポルドは聞いていたのである。

教会とブレド男爵の約束というのは、大きく三つの条項から成る。まず、第一に、ブレド男爵軍は、ハヴィナにおいて市民の生命と財産を保護し、略奪も破壊も行わない。

次に、ブレド男爵は、西方教会に改宗する。そして、教会は、ブレド男爵がサーザンエンド辺境伯として、認められるように帝国政府に働きかける。

追記として、ハヴィナの有力者を集めた評議会を組織し、男爵はその意見をよく聞いて、統治にあたること。ウォーゼンフィールド男爵は可及的速やかにハヴィナに入ること。が決められていた。

サーザンエンドを実質的に支配し、教会や地元有力者の支持を得て、しかも、西方教会に改宗すれば、帝国政府も辺境伯の就任を認める可能性がある。

ただ、そこには、血統的な問題がある。原則として、貴族の称号は、血から血へ。血統による継承に正当性がある。この問題をどう解決するつもりなのか。

それはさておき、まずは、ブレド男爵派が支配するであろうハヴィナから安全に脱する方策を講じなければならぬ。

レオポルドはそれを今書いているいくつかの手紙だけで為そうとしていた。

彼が最後の手紙を書き終えた頃、部屋の扉がノックされた。

「どうぞ」

声をかけると、扉が開かれ、いつものとおり無表情なキスカが音もなく部屋に入った。

「御指示通り、二人の帝国人、ムールド人、テイバリ人、アーウェン人を連れて参りました」

「結構」

レオポルドは手紙をそれぞれ封筒に入れて封をすると、キスカが連れてきた五人の男たち、一人につき一通ずつ手紙を手渡し、それぞれに指示を与えた。

レッケンバルム卿の忠実な従者である帝国人には、帝都のレイクフューラー辺境伯宛の手紙を。

もう一人の、普段は行商人の護衛などをしている帝国人には、帝国中央の教会本部への手紙を。

キスカと同じ部族であるムールド人には、サーザンエンド南部の帝国寄り部族の指導者たちに宛てた手紙を。

金で雇ったテイバリ人には、ウォーゼンフィールド男爵宛の手紙を。

同じく金で雇ったアーウェン人には、サーザンエンド北部のガナトス男爵への手紙を。

報酬の金は全て前払いで支払われ、男たちは部屋を出て行った。

「レオポルド様」

扉を閉めた後、キスカは少し言い辛そうにレオポルドを見つめる。

「ん。何だね」

「お言葉ですが、先の者たちは……」

「信頼できないか」

レオポルドの言葉にキスカは頷く。

「侍従長様の御家来と、私の同胞はともかく、他の者たちは金で雇った輩ですし、その謝礼も前払いしてしまつては……」

彼女は金で雇われた連中がちゃんと手紙を届けないのではないかと危惧しているらしい。それどころか、彼らはその手紙をそのまま

ブレド男爵や教会へ持ち込み、それを売るかもしれない。敵方が出した手紙ならば、どんなものでも買うだろうし、それがレオポルドという辺境伯候補のものともなれば、さぞ高値が付くだろう。

「手紙がブレド男爵や教会の手に落ちるかもしれないか。いや、恐らく、何通かは敵の手に渡るだろうな」

しかし、彼はそれを裏切り行為だとはあまり思っていないかった。テイバリ人やアーウエン人が余所者の帝国人である自分への忠誠を尽くすより、同胞であるテイバリ人のブレド男爵に協力するのは自然なことだろう。彼らのような、南部に遙か千年以上前から住んでいる民族にとつて、帝国は侵略者であり征服者に他ならない。帝国に対する嫌悪感は拭い難いものがある。また、地元の帝国人であっても、余所から来た新参の貴族に忠義を尽くすよりは、教会や地元の有力者に味方する方がずっと利に適っているというものだ。

「それでは、あの手紙は」

レオポルドの言葉を聞いて、キスカは合点がいったようであった。「うむ。あの手紙のうち、レイクフューラー辺境伯閣下宛ての手紙と君の部族宛てのもの以外は、実際は男爵や教会に読ませる為のものだ」

彼が書いた手紙の内容は、いずれも同じような文面である。

ハヴィナにおいて教会が裏切り、ブレド男爵が侵攻してくる窮状を訴え、救援を求めるといふものである。レオポルドは宛先に指定した人々、教会本部の上級聖職者、ウオーゼンフィールド男爵、ガナトス男爵の三名とは全く面識がない。にもかかわらず、文面は旧知の間柄であることを匂わせ、レオポルドと彼らに繋がりがあるように装っている。実際、両者に繋がりがあることを、ブレド男爵らは疑わなければならなくなる。

さて、この手紙を読んだ男爵はどう考えるだろうか。南へ落ち延びるレオポルドたちを追う間に、北からガナトス男爵が襲来するかもしれない。若しくは、実はウオーゼンフィールド男爵がレオポルドを保護するかもしれない。

彼らはいずれもサーザンエンドの有力な領主であるが、いずれもサーザンエンド辺境伯の椅子を窺うような間柄である。互いに潜在的な敵対関係にあり、いつ、剣を交えてもおかしくはない。そういう状況にあつては、レオポルドの思わせぶりな手紙は、男爵を疑心暗鬼に陥らせるほどではなくとも、疑念を抱かせるには十分だろう。そして、教会本部宛の手紙は、ハヴィナの教会に読ませる為である。

ブレド男爵側に付いたハヴィナの教会は大きな重い目を背負っている。異民族にして異教徒（改宗すると表明してはいるが）に味方して、同じ西方教会信徒を裏切ったことが、レオポルド側から教会本部に一方的に伝えられれば、ハヴィナの教会は窮地に陥るだろう。最初、彼らは、その手紙が帝国本土の教会へ届かずに済んだことを安堵するかもしれない。しかし、その手紙を齎した使者に話を聞けば、手紙を預かったのは、他にも何人かいたことを知ることになる。そのうちの一通でも帝国本土へ届けば今回の件は西方教会の総本山の耳に入ることになるだろう。

また、手紙を出すのが、レオポルドだけとは限らないのである。他にも、何通もの手紙が帝国本土へ向けて放たれる。

ハヴィナの教会は、どうにかして自分たちが異教徒に味方して、西方教会信徒の同胞を裏切ったというレッテルが張られることを避けねばならない。

彼らは今までのところ、そのレッテルが完全に張り付けられることを、巧妙に避け続けている。確かに、教会は男爵側についたことが明白ではあるが、それを公表しているわけではなかったし、レオポルドたちを攻撃するようなこともしていない。先の聖オットーの戦いにしても、辺境伯軍右翼は戦況を静観し、味方を見殺しにしたが、味方を殺しはしなかった。そして、戦場は市外であつて、教会はこれに干渉することはできなかったという言い訳もできる。

だが、しかし、ハヴィナに背を向けて南へ下るレオポルドたちに、ブレド男爵が追手を放つのを座視するわけにはいかない。

いくつもの手紙によって、レオポルドたちがハヴィナを出ることは、知られるだろう。それ以降、ぱたりと手紙が来なくなれば、勿論、多くの人々は、レオポルドたちがブレド男爵らに追われ殺されたか捕らわれたと考えるだろう。

そして、何人かの思考は廻っていく。さて、その時、ハヴィナの教会はどうしていたのか。異民族の異教徒がハヴィナから南へ追手を放ち、同じ西方教会信徒を追い殺すのを、見逃したのか。聖オットーの戦いは言い逃れられたとしても、こちらを言い逃れるのは難しい。男爵軍はハヴィナから南へ向けて教会の面前を通り抜けて同胞を殺しに行くのである。これを見逃せば、ハヴィナの教会は、同胞殺しの異端か異教徒と弾劾されるだろう。

つまり、この手紙を読んだことによって、教会は、異民族、異教徒が西方教会信徒に手を出すことに反対せざるを得ない。

そして、本音は追手を出したいブレド男爵にしても、他の領主たちの動向を見極める必要があるし、ハヴィナ市内にあって、男爵に味方した教会勢力も警戒しなければならぬ。彼らは利害の一致で結託しているだけであって、真からの友軍とは言えないのだから、信頼しきることはできない。しかも、ブレド男爵軍は先の戦いで少なくない数の損失を出している。彼は慎重に行動せざるを得ないだろう。

ただでさえ少なくなっている兵力を割って追手を差し向けるよりも、ハヴィナを手に入れたことに満足して、教会や有力者と交渉を重ねて、連携を深め、支持を取り付けることに注力すべきだろう。

ブレド男爵や教会が実際、レオポルドの書いた手紙を読んで、どう考えたかわからない。

しかし、唯一、確かなのは、結局、レオポルドたちは、安全にハヴィナを脱し、サーザンエンド南部へと落ち延びていくことに成功したということである。

三〇 南下して

帝国南部を南北に縦断する南部街道は、サーザンエンドの首都ハヴィナまでは道幅も広く、帝国本土の主要街道のように石敷きではないものの、平らに整地され、人も馬も車も、比較的安全に移動することができる。

しかし、ハヴィナを超えると、南部街道は、街道という名を称するのもおこがましいと思えるような悪路へと変貌する。土が剥き出しの地面は波打つようにでこぼこで、雑草が生い茂り、石が転がっている。その上、誰かが悪戯で掘ったのではないかとも思える大きな穴ぼこが各所に点在している。道の真ん中に細い木が立っているなんてこともあった。長いこと、まるで整備がなされていないようだ。

周辺は砂漠と荒野の間くらいの様子で、あちこちに乾いた茂みや干からびたような細い木が立っている。生き物の気配はなく、時折、空高くを鳥が輪を描くように飛んでいるのを見かける程度だった。

日差しは強く、地面を焼き、たまに吹き付ける乾いた風は砂埃を纏い、涼しさを感じるよりも息苦しさと不快感を覚える。

レオポルドたち、ハヴィナを脱出した一行は、馬の脚や馬車の車輪が穴にはまったりしないよう、慎重に、進んでいく。道が通り難い箇所では、道を外れ野に馬車を乗り入れて盛大にガタガタと揺られながら障害物を迂回する。

それくらいにの障害物と道の悪さは、まだ我慢できる。しかし、強い日差しによる暑さは一行の体力を容赦なく奪っていく。時折、吹き荒ぶ砂埃から顔を守ろうと、人々は自然と現地のムールド人がするように布を顔に巻くようにしていた。

辺境とはいえ、都市の中に生まれ育った貴族の子女は、こんな旅が半日も続くと、もうすっかり参ってしまったが、黙って馬車の荷台に横になっていた。ハヴィナを出ると決めるときから、これ

くらいの困難は覚悟の上なのだろう。

ところで、レオポルドたち、後にクロス卿派と呼ばれることになる一団は、いくつかの隊に分かれていた。

一つは、荷物や女子供を乗せた十数台の馬車とそれ以上の数の駱駝から成る荷駄隊。

次に、ジルドレッド卿が指揮する五〇騎ばかりの騎兵。辛くも先の戦いを生き延びた近衛騎兵がほとんどであった。彼らは荷駄隊の周囲に散開して、これを警護していた。

荷駄隊の後ろには一〇〇名ほどの歩兵が隊列を組んで続き、ほぼ全員が比較的新式の軽いマスケット銃を装備している。彼らは後方から来るかもしれない敵の追撃に備えており、バレットール准将が指揮をしていた。

そして、先頭に行くのは、二〇騎ばかりの馬や駱駝に乗ったムールド人騎兵である。彼らは元々、先の戦いの前に、雇われたムールド人傭兵で、その中で、キスカの部族やそれに近い者たちだった。彼らは非常に有能で、レオポルドたちは彼らの存在によってかなり助けられた。彼らは普段は遊牧や隊商の警護をしている為、ここいらの地理には明るく、砂漠や荒野を旅する術にも長けていた。彼らなしでは、クロス卿派のサーザンエンド南部落ちは、犠牲者を出すような悲惨なものになったかもしれない。地理に疎く、旅慣れない者の長距離の移動はそれくらいの危険を伴うものである。

レオポルドは彼らムールド人騎兵と共にいた。傍らにはキスカの姿もある。フィオリアとソフィーネは二人よりもいくらか後ろの荷駄隊の先頭の馬車に乗り込んでいた。

ムールド人騎兵の多くは駱駝に騎乗していたが、レオポルドとキスカは馬を選んでいった。というのも、キスカはともかくレオポルドは駱駝を乗りこなすことができないからである。前述した如く、駱駝は背が高く、気性が荒い生き物で、これに乗りにくすには、馬よりも高いレベルの技術が必要となり、一朝一夕で乗れるような獣ではない。キスカはレオポルドに合わせて馬を選んでいった。

「中々、厳しい道だな」

道の真ん中にできた穴ぼこを迂回しながらレオポルドは渋い顔で呟く。騎兵や歩兵は少し迂回すればいいだけなので、それほど苦ではないが、馬車は道を外れるくらい迂回しなければならず、それにはかなりの労力と時間を要した。道に大きな障害物がある度に、彼らはそうやって時間と体力を費やしていた。

「我々や兵たちはまだいいが、女子供の中には疲労が激しいものもいるようだ」

「明日にはナジカが見えるでしょう。それまで御辛抱下さい」

レオポルドにキスカが無表情で応じる。

「ナジカには、入ったことはあるか」

レオポルドの問いにキスカは頷く。

「幾度か訪れたことがあります。ハヴィナやコレステルケよりもずっと馴染みがあります」

聞くに、サーザンエンド南部のオアシス都市ナジカはコレステルケのような帝国風都市でもなく、ハヴィナよりも、更に異民族が多く居住しているという。人口は二万ほどで、帝国人は一割もいないようだ。ハヴィナよりも南に居住する帝国人はかなり希少といえる。「帝国本土の諸都市に比べれば見劣り致しますが、西岸や南岸の港湾都市との交易で賑わう交易都市で、大変多くの人や物が行き交います」

「南岸は分かるが、西岸の港湾都市からも人が来るのか」

キスカの説明にレオポルドは顎に手をやって疑問を抱く。

確か、サーザンエンドを含む帝国南部と呼ばれる大きな半島は、その付け根にグレハンドム山脈が聳え、西岸地帯にもプログテン山脈が南北に走っているはずだ。この山脈が湿気を含んだ西風を阻んでいるせいで、南部一帯は乾燥した気候になっているという。

「確かに、南部の多くの地域ではプログテン山脈を越えるのは容易ではありません。ただ、ナジカの西には、プログテン山脈が途切れている箇所があるのです」

南部西岸部の山脈はプログテン山脈と一つの山脈にまとめられているが、実際には、ナジカの西の地点で、分割されているのだという。故に、山脈は、北プログテン山脈と南プログテン山脈と分けて表現されることもある。

この途切れになっている峠を越えることはそれほど難儀ではないという。道も整備され、気候が温暖な為、冬でも雪に閉ざされることはなく、一年を通じて通行が可能である。この峠を利用して、西岸の港湾都市と交易が営まれているという。

ナジカは西岸の港と南岸の港を結ぶ中継地点なのだ。

「なるほど。そのナジカならば、少しは休めるか」

「おそらくは。ただ、彼らはブレド男爵の支配下にあると思います」
ナジカに居住する主要な民族はテイバリ人であり、テイバリ人の中で最も有力であるブレド男爵には逆らえないだろう。

「ただ、彼らは商人ですから、利益になる取引ならば、何であろうともするでしょう」

交易都市に住む商人たちの商魂は逞しいものがある。商売相手が有力者の敵であれば、積極的に味方はしないにしても、商売相手には違いない。きちんと取引をして、有力者に目を付けられない程度に、見て見ぬふりくらいはしてくるだろう。

幸いにも、クロス卿派は、当面は困らない程度の資金を確保していた。その資金というのは、サーザンエンド辺境伯の宮廷費である。基本的に辺境伯領の資金は財務長官が管理するものであるが、唯一、辺境伯の私費ともいえる宮廷費のみは、侍従長ががちりと握っていた。辺境伯空位の上、一族もほとんどが天に召されているにも関わらず、侍従長は財務長官よりも強い立場を利用してしっかりと宮廷費を要求し、確保していた。その資金は、侍従長派の財布と化していたわけであり、それを、今回の逃避行にもしっぴかり持って運んでいたのだった。

「ふむ。では、たらふく物を買ってやれば、街の近くで数日休んでも目を瞑ってくれるかな」

「おそらくは」

そう言ってから、キス力は視線をレオポルドの手元へとやった。

彼の手は、手綱を握ると共に、小さな本を開いていた。先程から、彼は時折、その本に視線を落としていた。つまり、乗馬しながら読書するという、少し危険な行為をやっている。

「その、本は、えつと……」

キス力は、レオポルドの顔を見たり、彼の手元の本を見たりして言葉を濁らせる。尋ねてよいものかどうか躊躇しているようだ。彼女は、ほとんどの場合、こうして遠慮がちな態度を示す。

「ああ、これが。これは、あー、キス力についての本だ」

「私についての、本ですか」

その答えに、キス力は怪訝な表情を浮かべる。眉を八の字にして困ったような顔になって、主を見つめた。

レオポルドは彼女の反応に機嫌良さそうに微笑んで、本の表紙を見せた。革張りの表紙には「ムールドの民たち」と、読み辛い装飾文字で綴られている。

「レッケンバルム卿に頂いたものだ。百年ほど前に、サーザンエンド南部を旅した宣教師の著作だそうだ。ムールド人の文化、生活、習慣、装束、言葉なんかが記録されている。いくらか差別的表現もあるが、例えば、間違った神を信仰しているとか。文化が遅れているとか。まあ、そこに目を瞑れば、参考程度にはなる」

レオポルドはそう言ってから、本を睨んで、たどたどしく、帝国人には意味不明な言葉を口にする。

それを聞いた周囲のムールド人騎兵たちは一斉に笑い出し、キス力は目を丸くしてレオポルドを見つめた後、慌てた様子で顔を俯かせた。

「む。間違えたか。さっきのは、君と、旅ができて、良かった。じゃないのか」

レオポルドは苦い顔をして本を睨みつける。

「旦那が今言ったのは、直訳すると、君と旅を共にできたら良い。」

だよ」

近くの中年のムールド人騎兵が帝国語で言った。彼らのような帝国人に雇われることも度々あるようなムールド人には帝国語を解し、自由に話すことができる者も多い。

「何だ。少し間違えたくらいじゃないか。少しくらい発音が悪くても笑うことはないだろ」

レオポルドがむっとして言うが、ムールド人騎兵たちはにやにやと笑うばかり。

どういうことか。と、キスカを見やると、彼女は俯いたまま口を開く。

「私たちの言葉で、旅という単語は、同時に人生という意味にもなるんです。レオポルド様が先程仰ったのは、私たちの言葉では、あー、その、えっと……」

キスカはそこまで言っけて口籠る。

レオポルドは顎を摩りながら考える。旅という単語は人生という意味にもなる。ということは、先程の自分の台詞は「君と人生を共にできたら良い」という意味にも取れるということらしい。

「その言葉は、結婚を申し込むときの、慣用句の一つ、なんです」つまり、周りのムールド人から聞くと、先程、レオポルドは唐突にキスカに結婚を申し込んだように聞こえたらしい。

レオポルドもキスカと同じくらい顔を真っ赤にして黙り込む。

揃って赤い顔をした二人の主従は、そのまま黙って馬を進めた。

三一 七長老会議について

交易都市ナジカの有力者たちは、レオポルドたちの市内への入城を明確に拒絶した。

しかし、キスカの予想どおり、こちらが糧秣や水、馬、駱駝などの購入やハヴィナから持ち出した財物の換金などを申し出ると「ナジカは何人にも商売の自由を許している。例え、罪人であろうとも、奴隷であろうとも、悪魔であろうとも、商売を望む者をナジカは拒まない」というナジカに伝わるという言葉を持ち出して、取引は許可された。

取引をするとすると、麦の袋を五個六個買うような取引ではないのだから、一日二日で終わるものではない。額が額だけに、腰を据えて話し合い、契約書を交わすものだから、簡単に短時間で済むことはない。また、その荷物を積む時間も必要となる。

そこで、レオポルドたちは、市内への入城は許可されなかったものの、市門のすぐ近くで野営することが許された。彼らはそこにテントを張って、旅の疲れを癒すことができた。

ナジカの商人たちは、こちらの苦しい立場を知っているので、かなり強気の状態で行引を行おうとした。つまりは、売る商品の値をふっかけ、買う商品を値引きしたのだ。

しかし、クロス卿派の交渉者はレッケンバルム卿であった。この老獪なる御仁にかかれば、ナジカの有力商人たちなど稚児にも等しい。

いくつかの商会と同時並行で行引を進め、安い方と取引しようと思っかけて、値引きを誘い、将来的に、クロス卿派が復権したとき、このときの取引でしこりが残るようなことがあればどうなるかを想起させ、時にはぐらかし、時に恫喝し、商人たちを手のひらでころころと転がして、結果的には三つの商会とそれぞれ互いに利益的な値で取引を成立させた。

「お見事です。さすがは、サーザンエンド辺境伯を支えてきた御方です」

レオポルドが感嘆するように言うと、レッケンバルム卿は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「帝国中央政府や他の諸侯、教会との交渉に比べれば、彼奴らのような野蛮な異民族相手の交渉事など、兎戯のようなものだ」

彼がサーザンエンド辺境伯を實質的に率いていた間、幾多もの外交的な試練があつたのだらう。それをどうにかこうにか乗り切つてきた御仁なのだ。交易都市とはいえ、辺境も辺境の田舎商人相手の交渉など、彼にとっては朝飯前なのかもしれない。

「ところで、我々の行く先はファデイらしいな」

レッケンバルム卿の言葉どおり、レオポルドたちは、ナジカから更に南へ進み、まずは、ファデイという町に向かう予定であつた。

ファデイは、ムールド人が住む地域では最も北に位置し、人口二千ほどの辺境にしては、まずまずの規模の町である。

「ファデイには、キスカの部族ネルサイ族と親縁のカルマン族が住んでいるそうです」

二八あるムールド諸部族のうち、帝国寄りの部族は七あり、まずは、ファデイでカルマン族と接触し、帝国寄りの諸部族を味方にする足がかりとする予定である。

「キスカはネルサイ族では、族長の家柄にある娘のようで、カルマン族にも話が通じるでしょう」

「遊牧民なんぞに助けを求めねばならんとは、忌々しいことだ」

レッケンバルム卿は不機嫌そうに呟いた。

以前から感じていたことだが、レッケンバルム卿は、異民族に対してあまり良い感情を抱いていないようだ。はつきりいつて蔑視しているともとれる言動が見られることがある。レオポルドはこの傾向を好ましいものとは思つていなかったが、あえて無視することにした。ハヴィナから逃れてきた一行の、現在のところの實質的な指導者は彼なのだ。その彼につまらないことで楯突くことがレオポル

ドにとって利益になるわけがない。

レオポルドは黙ってレッケンバルム卿の言葉を聞き流すと、話を続ける。

「帝国寄りのムールド人たちは、その他の帝国に敵対的な諸部族に対抗する為、同盟を結んでいるようです。その同盟は七長老会議と呼ばれています」

「では、まずは、その七長老会議とやらをこちら側に付けねばならぬな」

「勿論です」

レオポルドたちの方針としては、まず、七長老会議を味方につけ、できれば、ムールド人全体を掌握するつもりだった。

ムールド人は、ほとんどの部族が反帝国であるが、それらの部族間でも争いが絶えず、まともにはない。これを各個撃破し、従属させていくのだ。

そうやって、ムールド人を配下に収めると同時に、帝国中央へも働きかけ、こちら側の正当性を主張して、ブレド男爵の辺境伯就任を妨害する。ムールド兵を掻き集めて戦力が増強でき次第、ハヴィナへ舞い戻り、ブレド男爵を追い落とす。これが彼らの方針であった。

問題は、七長老派が、素直にこちらの味方になってくれるかという点。そして、なおかつ、他の反帝国諸部族を打ち破り、配下に収めることができるかという点である。

クロス卿派の持つ軍事力と資金力は、それほど多くはない。騎兵一〇〇騎に歩兵二〇〇。それにキスカに従うムールド人騎兵二十騎。資金も、物資を補給する分には事足りるが、いくつもの部族に資金的な仕事を仕掛けたり、傭兵を雇い入れるには少なすぎる。

頼りはネルサイ族の族長の家柄だというキスカだけなのだが、彼女がいつまで自分に従っていてくれるのかレオポルドは不安を感じていた。

彼女がレオポルドに従っているのは、彼を辺境伯にする為であり、

それは、帝国寄りである彼女の部族の立場を悪くしない為である。

安定した辺境伯政権が維持されれば、ネルサイ族は満足なのである。レオポルドがすんなりと辺境伯の椅子に収まっていれば、引き続き、キスカはレオポルドに従い、ネルサイ族は安泰であつただらう。しかし、事態は流動化している。

レオポルドの辺境伯就任は見通しが立たず、ハヴィナから追い出される始末である。辺境伯の椅子にはテイバリ人のブレド男爵が手を伸ばしている。

事態は変わってしまったているのだ。この状況で、キスカが、ネルサイ族がどう動くかレオポルドには予想ができない。状況によつては、彼女が裏切ること十分に考えられるのである。

とはいえ、今、レオポルドにできることは、まずは、七長老派を味方に付けるべく、キスカを頼ることくらいしかない。あとは、手紙を書くくらいである。

ナジカに滞在している間、レオポルドはテントの中で、いくつか手紙を書いて送った。

クロス卿派は三日の滞在の後、ナジカを発ち、そのまま南へと進んだ。

相変わらず気候は乾燥して、砂埃が酷く、道は悪かった。

とはいえ、ブレド男爵の手の者に追われることはなく、野営中に野盗の襲撃を受けることも、野生動物に襲われることもなく、比較的 safely に移動することができた。

これは、襲撃するには、一行があまりにも大きな集団で、なおかつ、十分に武装しているからであらう。また、彼らは注意深く行動し、集団から離れ少数人数で行動することを避け、集団行動を心掛けていた。

ナジカを発つて四日後、一際日差しが強く、風のない日。ムールド人傭兵が「ファディが見えてきた」とレオポルドに報告してきた。報告を受けたレオポルドは目を凝らして前方を注視するが、茶色

い土の地面と枯れたよう細木。青すぎる空と、うつすらとした雲の他は何も見えない。陽炎の向こうを見ようと目を細めても何も見えなかった。

「何も見えないが」

困惑してキスカに顔を向けると、キスカは困った顔をして、前方のある一点を指差した。

「あちらに」

その指差す方を見ても、何もあるようには見えない。眼を細め、眉間に皺を寄せて、睨むように遠くを見るが、地平線の辺りはぼやけていて何があってもわからない。

結局、レオポルドは視認を諦め、とりあえず、ムールド人たちの言葉を信じて、そのまま進むことにした。

レオポルドの視力でも、どうやら、何かあると町影らしきものが見え始めたのは、半日も経った頃合で、彼はムールド人たちの視力の良さに感心した。

ファデイの町に入ったのは、その翌日の昼過ぎであった。

三三 ファーディにて

ファーディは荒野の真つ只中にある町で、中央に水場を備えた広場があり、それを囲むように茶色い日干し煉瓦製の家々がごちゃごちゃと集まっている。周辺にはナツメヤシやオリーブの畑が広がり、山羊や駱駝も飼われている。

町には中央の広場の他、各所に井戸が掘られており、この地下水で生活し、農業を営んでいるようだ。

おそらくは、隊商の中継地にもなっており、隊商に糧秣や水を売って商売をしているのだろう。

レオポルド一行がファーディに入るのに、大きな混乱は生じなかった。よく隊商が訪れるので、客人の来訪に慣れているのと、クロス卿派一行が、ファーディに入る前にムールド人の使者を立て、事前に用件を伝えていた為だろう。

町の入り口には、ファーディの有力者たち、つまりは、ファーディの町の住民であるカルマン族の有力者たちが並んで、レオポルド一行を出迎えた。

「これはこれは、このような辺境まで、遙々ようこそいらっしやいました。何も無い寂れた町ではございますが、どうか、ごゆるりとご滞在下さい」

カルマン族の有力者たちの中でも、最も年老いた長い白髭の老人が代表してレオポルドたちを出迎える言葉をしわがれ乾ききった声の帝国語で述べた。赤茶色のローブのような衣をまとい、頭からすっぽりと布を被っている。

どうやら、彼がカルマン族の族長であるようだ。彼の帝国語はいくらか拙いが、十分に通じる。ムールド人の居住地の中でも、最も北に位置している為、帝国人と関わることも多いのだ。そういう位置関係もあって、彼らは帝国の国力を十分に理解し、それに抗わず、従うことによって命脈を保とうとしているのだろう。

レオポルドたちは手厚い歓迎を受けた。カルマン族は、レオポルドたちに随分と好意的であった。

町はそれほど大きくはない為、クロス卿派を全員收容できるような建物はない。そこで、彼らは分散して、町に滞在することになった。幹部クラスと女子供や老人、体力の落ちている者は、町の集会所に収められ、その他の兵は郊外に馬や駱駝、荷物と共に野営することになった。

レオポルドをはじめとする幹部たちは集会所の一室でカルマン族の有力者と会談し、歓待された。

ムールド人の食事にテーブルの類はない。料理を乗せた皿は直接絨毯を敷いた床の上に置かれる。羊肉の焼肉がいくつかの味付けで何種もあり、鶏肉のパイ、スパイスの効いた辛いスープ、いくつかのチーズ、干したナツメヤシの実、平たいパン、山羊乳の酒、葡萄酒などが供された。葡萄酒は帝国人の客が来たことから出されたのだろう。

「我々は閣下を全面的に支持致します。できる限りの支援をお約束いたします。これは、七長老の一致した意見でございます。我々はフェルゲンハイム家によるサーザンエンド辺境伯による統治の継続を望んでいるのです」

カルマン族の族長はこのように発言し、有力者たちの多くも同意するように頷いた。しきりと山羊酒の杯を傾け、顔を赤くしているそれに釣られるようにカール・アウグスト・ジルドレッド將軍らは上機嫌で、葡萄酒の杯を重ねた。

「どうか、七長老会議は我々の味方になってくれて、一安心といつたところですか」

レオポルドの右隣に座ったジルドレッド將軍の弟であるパウロス・アウグスト・ジルドレッド大佐が機嫌良さそうに言った。

「ふん。どうか。連中の言うことなど信用できまい」

レオポルドの左隣に座ったレッケンバルム卿がしかめ面で呻くように言った。

「また、卿は、それほど異民族を敵視せずとも良いではありませんか」

「真の神から目を背け、邪教を信じる輩の言葉など信用できまい」その真の神を奉ずる教会に裏切られた結果、自分たちはここにいるんだが。と、レオポルドは言いそうになって、喉の奥に押し込めた。余計なことを言っつて、レッケンバルム卿の不興を買う必要もあるまい。

「しかし、彼らが我々に付くことには道理がありますからな」

ジルドレット大佐の更に右に座つたルゲイラ兵站監が細い髭を撫でながら言つた。

「七長老会議は、以前から帝国に親しい態度を保つてきました。それを今更態度を変え、反帝国に衣替えしても、今まで散々帝国の傘下で働いてきた彼らを他のムールド人が許すとは思えませんからな。反帝国の部族は、これ幸いと今まで帝国の庇護下において手を出せなかつた彼らの土地に侵入し、征服してしまうでしょう。ムールド人の世界とは、そのように、同族であっても、食い食われる弱肉強食の世界なのです」

彼はどうやらかなり異民族について詳しく研究しているらしい。

レオポルドは感心してルゲイラ兵站監を見つめる。

「それに、今、帝国を裏切れば、帝国の恨みをも買うことになり、彼らは南北に敵を抱える羽目になります。そのような危険を犯すほど彼らは愚かではないでしょう」

「しかし、連中がブレドに付く可能性はあるだろう」

レッケンバルム卿の言葉に、ルゲイラ兵站監は顎に手をやりつつ、冷静に分析する。

「ムールド人とテイバリ人は、古くからこの地に住まう民族ですが、両者の仲は必ずしも良くありません。農耕を営むテイバリ人と遊牧民であるムールド人では文化の違いがあり、相容れないところも多いのでしよう。幾度か境界を巡つて衝突を起こしておりますし。両者が手を結ぶことは考え難いのでは」

「しかし」

そこで、初めてレオポルドは口を開いた。

レッケンバルム卿と、ジルドレッド大佐、ルゲイラ兵站監が興味深そうに彼の言葉を待つ。

「教会とブレド男爵が手を結ぶこともありませうからな」

レオポルドの言葉に、彼らは嫌なことを思い出したとばかりに顔をしかめる。確かに、有り得ないと思っていた間柄で密約が結ばれ、裏切りに遭うという経験を、彼らは既に済ませているのだ。

「では、クロス卿は、彼らを信用していないと。彼らがブレドと通じていると考えておられるのか」

ジルドレッド大佐が抑えた声で尋ねた。

彼の言葉は丁寧だが敬語ではなかった。

というのも、レオポルドの立場は非常に曖昧なところであつた。

一応、レオポルドは辺境伯候補として、一行のトップであるはずなのだが、レオポルドは何の力も実績もないただの帝都から来た余所の若造である。対して、彼らはいずれも辺境伯の宮廷で重きをなす有力者である。彼らがレオポルドに素直に従えるわけがない。また、彼らを配下として扱おうとはしなかった。両者の関係は微妙なところで、どっちが上とも下とも言い難く、レオポルドの立場は宙ぶらりんであつた。

それはともかくとして、レオポルドの考えもこれまた中途半端なところであつた。

「それはまだ判断できません。ただ、容易に信用できないとは思いますが」

「これだけの歓待を受けているというのに」

レオポルドの言葉を受け、ジルドレッド大佐が呟く。

「我々を油断させる為かもしれぬぞ」

そこにレッケンバルム卿が懐疑心に満ちた言葉を挟む。

「しかし、そのようなことを疑っていると、何も信用できないのでは」

確かに、ジルドレッド大佐の言葉にも一理ある。そうやって、何もかも疑っていくと、誰も何も信用できなくなっていくてしまう。

信用できない相手からは、はっきりとした約束を取り付けたり、口約束で満足できなければ、文書にしたりするものだ。ただ、これとて、ただの紙切れである。国家間での正式なもので、世界に公開されたものであれば、効力を持つかもしれないが、こんな辺境の地で、非公式な敗軍と部族の間で結ばれたものなど、いくら反故にしたとて何の問題もないだろう。

では、どうするかといえば、こういう場合は、人質を取ったり、交換したりするものだ。

しかし、人質を望むことは、相手を信用していないと言外に言うようなものだ。

レオポルドらはカルマン族の言葉を、はたして信用してよいものが悩んでいた。

「クロス卿。あのムールド人の娘を使って連中の内情を探ればよからう」

「キスカですか」

確かに、レッケンバルム卿の言葉通りムールド人のキスカならば、上手くカルマン族の内情を探り、その真意を知ることができるかもしれない。

「そうですね。やらせてみましょう」

レオポルドはその案に同意し、場に同席しているキスカを見やっ
た。彼女はいくらか離れた席で、カルマン族の老人の話を聞いてい
た。

三三 キスカの忠誠心について

「そういうわけで、彼らが、本当に我々の味方であるかを調べて欲しいんだが」

未だクロス卿派を出迎える宴が続いている集会所を抜け出し、首尾よくキスカを呼び寄せたレオポルドは、集会所から程よく離れた家の影で、周囲に人がいないことを確認しつつ、彼女に言った。

キスカはいつものとおり、無表情でじっとレオポルドを見つめる。「彼らの言葉を疑いたくはないのだが、本当に我々に味方してくれ」という保証はないからな。それに、彼らが現状をどの程度把握しているのかも気になるところだ」

「疑っているのですか」

レオポルドが独り言のように話していると、低く静かな声が聞こえた。

「私たちを、疑っているんですか」

彼女はいつものように無感情ではなく、いくらか気色ばんでいるようにも見える。

「私たちが、異民族だから、同じ帝国人ではなく、異教を信じているから、信用できないというのですか」

キスカは詰め寄るように、レオポルドを見つめながら迫った。

「いや、そういうわけではない。私は、」

そこまで言つて、レオポルドは、ふと、この町に来るまでの間に読んでいた「ムールドの民たち」という本に書かれていた一文を思い出す。砂漠の民は誇り高く、約束を違わず。嘘と裏切りを最も軽蔑するという。百年も前の本だが、彼女は、確かに、誇り高く義を重んじる砂漠の戦士であるようだ。

「私は、誠心誠意、貴方に尽くし、仕えてきたつもりです。それでも、私を、信じられないのですか。異民族である、私など、信じるに値しないのですか」

キス力はレオポルドを睨みつける。その目は怒りに燃えているとも、悲しみに濡れているとも思えた。

「そんなことはないっ。君は十分に仕えてくれた。疑うことなど……」

そう弁解するが、レオポルドは言葉に詰まる。自分は本当に彼女を信用していたか。出会った瞬間から、今まで、彼女を心の底から信用していただろうか。答えは、否である。

彼女が自分に仕えているのは、自分の存在が彼女の部族の利益に適うからだと理解していたから、どこか、彼女を疑う心は常にあった。失うものなど何もなかったから、裏切られても良いと思つて彼女の言葉通りに行動してきただけだ。実際、彼女のことなどほとんど信用していなかった。いつ、寝首を搔かれてもおかしくはないと考えていた。

彼のその思いを、キス力は敏感に感じ取つたようだ。

キス力はレオポルドを一際強く睨んだ後、踵を返して立ち去つて行つてしまった。

遠くなる彼女の背に、レオポルドはかける言葉を持たなかった。

「あれ、キス力は」

部屋に入ると、フィオリアに尋ねられた。

レオポルドとフィオリア、ソフィーネらは、三人一組と思われているようで、三人で一つの部屋を割り当てられていた。姉弟のような二人は構わなかったが、ソフィーネは強く反発した。とはいえ、じゃあ、余所の家族の部屋に御厄介になるかといえ、黒髪という西方教会では悪魔と同一視すらされている髪色の彼女ではそれも難しく、渋々と今までどおりの部屋割りを受け入れた。

キス力だけは、親しい部族ということで、縁戚の者がいるようで、その家に泊まる。

ただ、彼女はレオポルドに仕えているという認識が強く、町に着いてから、ほとんどの間、レオポルドの傍に付いていた。

それが、レオポルドが一人で帰ってきたものだから、フィオリアは疑問に思ったようだ。

「あー、うむ、親戚の家に行ったのではないか」

レオポルドは歯切れ悪く答えて、フィオリアは不思議そうな顔で首を傾げる。

「何。なんかあったの」

「いやいや、別に。何も」

レオポルドは慌てて否定するも、姉の如く、一緒に育ってきたフィオリアに、誤魔化しが通用するはずもない。

「レオ。何隠してるの。言いなさい」

「いや、何も隠してなど……」

「言いなさい」

そうやって睨まれると、レオポルドはどうにも弱いのだった。

「そりゃ、あんたが悪い」

全ての事情を洗いざらい喋らせた後、フィオリアははっきりと言いつ切った。

「何、あんた、こんだけ一緒にいて、あの人のこと、全然信用してなかったのっ」

「いや、フィオだつて、信用できないとかどうとか言っただけじゃなかったか」

「そんなこと言っただけじゃないわよっ」

そうだったか。いや、そんなことない。と、レオポルドは首を傾げる。帝国本土から南部へ至る大蛇の峠にて、二人で散歩したときに、そんなことを言われたような気がするのだが。

「あたしはともかくっ。レオが信用してないのはおかしいでしょっ。

あんた、あの人に言われて、ここまで来たんでしょっ」

どういうわけだが、フィオリアは怒り出す。

「いや、それは利害が共通していたからであつてだな……」

「利害が共通って、利益の為だけだつていうのっ」

「まあ、そつだなあ」

「利用してたつてことつ」

「いやいや、それはお互い様ってわけであつてだな」

レオポルドが辺境伯になるといふ利益は、サーザンエンドにおいて引き続き帝国の威信が維持されるということに繋がり、親帝国派である部族の立場が強くなるという利益にも繋がるのである。それこそがキスカの目的なのである。

これが両者の利害の共通である。その為、レオポルドが辺境伯になれないといつた事態や、キスカの部族が反帝国派に鞍替えするといつた事態になると、両者の利害の共通は失われ、キスカはレオポルドから離れていくのではないかと思われた。

レオポルドはそつという理屈で、彼女が自分に仕えていると思つていた。

「レオがそつというふうにも考へてても、彼女もそつ考へていたとは限らないじゃない」

フィオリアにそつ言われて、レオポルドは咄嗟に否定しようとしたが、言葉に詰まつた。

確かに、キスカが自分に仕えるようになったきっかけは、彼女の部族の利益の為だつたかもしれないが、だからといつて、そのことが今の彼女の忠誠心を否定することには繋がないのではないか。レオポルドとキスカの主従は、この数ヶ月も時間を共に過ごしてきたのだ。その数ヶ月といふ時間は、二人の間に何らかの繋がりを作るのに不足であらうか。

レオポルドにしても、キスカに親しみを覚えてるし、二人の仲は、初対面のときよりも進展していると思ふ。最初は何を考へているかよくわからなかつたが、今でも表情は薄い、何を考へているのか理解できてきた。今までの旅路や戦場での彼女の忠誠心や働きは称賛に値すると思ふ。

そして、先程のキスカの反応である。普段から表情の乏しい彼女にしては、珍しく感情を露わにして、自分が、自分の部族が信用さ

れていないことに憤っていた。彼女は嘘や裏切りを軽蔑する砂漠の戦士であった。

結局、レオポルドはフィオリアに反論することができず、もごもごと口籠る。

「とにかく。悪いのはあんなだから、謝ってきなさいっ」

フィオリアに怒鳴られ、追い出されるように、レオポルドは部屋を出た。

外に出ると、既に日は傾き沈みかけており、時刻は夕刻から夜へと移ろう頃だった。

キス力は集会所の近くに一人で佇んでいた。暗い所に立っているせいか、彼女の背中はどこか悲しげに見えた。

「あー、キス力。ちよっといいか」

若干の気まずさを感じながらレオポルドが話しかける。

キス力はレオポルドに背を向けたまま俯いた。

「先の件なのだが、あれはだな」

「……レオポルド様」

キス力はレオポルドの言葉を遮った。いつも控え目な彼女が人の話を途中で遮ることは珍しい。

「申し訳ありません」

そうして、彼女は謝罪の言葉を口にしたのだった。

「いや、君が謝ることは何もないだろう。あれは、私が悪かった」

「申し訳、ありません……」

レオポルドが謝罪する必要性を否定しても、キス力は背を向けたまま謝罪を繰り返す。

彼女の言動に、レオポルドは違和感を抱いた。

キス力がこれほど謝罪を繰り返す意味が分からない。仕える主君であるレオポルドに無礼とも取れる言動をしてしまったからか。それにしても、謝罪が過ぎる気がする。これほど何度も謝罪を繰り返さなければならぬほど重大ではないだろう。キス力が過剰に責任

を感じすぎているのだろうか。それとも他に何か謝罪せねばならないことがあるのか。

レオポルドがキスカの言動に戸惑っていると、彼女は背を向けたまま、

「……失礼します」

と、微かに呟くと、駆け去って行ってしまった。

キスカは終始レオポルドに背を向けたままで、一度も顔を見せなかったし、見せようとしなかった。

彼女の一連の言動が理解できず、レオポルドは一人首を傾げた。

三四 ファティの夜にて

その夜、レオポルドが目覚めると、目の前にはソフィーネの少しキツイが端正な顔があった。どうやら、彼女が彼の体を揺さぶって起こしたらしい。

何事かと問う前に、ソフィーネは声を潜めて囁く。

「外が騒がしいです」

その言葉に耳を澄ませると、確かに何やら外が騒がしい。馬の嘶き、馬蹄が地を蹴る音、人々の囁き声が聞こえてくる。かなりの数の人間と馬が、音を押し殺して蠢いているようだ。

「何事だ」

「わかりません」

レオポルドの疑問に、ソフィーネは顔をしかめる。

「しかし、良い予感はありませんね」

二人は寝ていたフィオリアを起こして、部屋に留まるように言うてから、それぞれサーベルと十字剣を手にして、外の様子を伺いに出た。集会所の二階の窓から外を見やる。

「追手に追いつかれたか」

「馬鹿を言わないで下さい。それにしても、静かすぎます」

レオポルドの呟きに、ソフィーネはじと目で彼を睨むと言った。

「外敵の侵入ではないでしょう」

「敵ではないのならば何だというのか」

「鈍いのは女心に対してだけにして下さい。それとも、まだ寝ぼけているんですか」

今日のソフィーネはいつも以上に手厳しい。

「まさか……」

「まさかも何もありません」

外を窺う二人の前を、数騎の騎兵が駆けていく。手には槍や銃を

持ち、腰に半月刀を提げ、頭には特徴的な布を被っている。明らかにムールド人騎兵である。その数は二百から三百といたところで、集会所をすっかり取り囲んでいた。

「まんまと謀られたようですね」

ソフィーネの言葉に、レオポルドは苦虫を噛み潰し、その苦汁を舌に塗り込んで、口の中で攪拌させたような顔で声にならない呻き声を漏らした。

やがて、数名の騎兵がマスケット銃を空に向けて撃ち放つ。集会所の中にいる者への警告だろう。怒号が響き、抜き身の半月刀を携えた兵が集会所に押し入ってきた。

「それで、どうします」

「どうもこうも……」

「選択肢は三つ」

ソフィーネはそう言って指を三本立てる。

「一、ここに立て籠もって徹底抗戦。二、この町から逃げ出す。三、無駄な抵抗はせず降伏」

彼女はそう言ったが、現実的に取り得る選択肢は一つしかないだろう。

この場に立て籠もって徹底抗戦するにしても、この集会所にはレオポルドらの幹部クラスと女子供、老人しかない。剣を手に取り戦える者は十数人しかない。戦闘力となる兵は郊外に野営しているのだ。すっかり取り囲まれたこの状態では外の自軍と連絡を取ることも難しい。しかも、既に敵に押し入られている。抵抗するには遅すぎる。

また、逃げるにしても、集会所は四方を取り囲まれ、蟻の這い出る隙間もないほどだ。万が一、どうにかこうにかして建物から逃れられたとしても、外には馬術に優れたムールド人騎兵が多くいる。徒歩で逃げてもすぐに捕捉されるだろう。

レオポルドは手に持っていたサーベルを腰のベルトに提げ、諸手を挙げた。

「お手上げだ」

「賢明ですね」

「とはいえ、俺たちの寿命をいくらか延ばす程度の意味しかないだろうしな」

相手は蛮族とはいえ、すぐさま虐殺されるということはないと思われた。最初から皆殺しにするつもりならば、わざわざ警告の為に銃を撃つたりせず、集会所に火を放つだろう。

しかし、それは、レオポルドたちに利用価値があるからだ。連中はレオポルドたちの身柄をまとめてブレド男爵にでも引き渡せば、男爵からの覚えは目出度く、部族の立場は安泰というものだ。

その後はどうなるかわからないが。あとはブレド男爵の考え次第だ。

「貴方はまだマシです。利用価値がある高貴な身上ですからね。たとえ、殺されようとも、悲劇的な名譽の死と彩られるでしょう」

塔の中に幽閉されようが、拷問にかけられようが、首を斬られて死のうが、いずれにせよそれはある貴族の悲劇的な最期として記憶され、記録されることだろう。

「対して、私らときたらどうなることか。戯れに殺されるか、奴隷として売られるか、犯され辱められるか、いずれにせよ名譽の死もなく、恥辱と悲嘆に満ちた道を歩み、その上、誰からも記憶されず、記録さえ残らず死ぬことになるでしょうね」

戦禍に巻き込まれた、哀れで不幸な幾万、幾億もの、名も無き庶民の一人として誰の記憶にも残らず、どのような文書にも書き残されず、歴史の闇へ葬り去られるのだろう。

「それはいかな」

レオポルドは他人事のようにぼんやりと呟いた。

「貴方。私は別に、貴方とは赤の他人ですから、どうでもいいとは思いますが、貴方のお姉さんもそうなる可能性はあるんですよ」

「わかっている。では、ここで仲良く雁首揃えて自決と洒落込むか」
ソフィーネの呆れたような言葉に、レオポルドが真顔で呟く。

「それもまた一興ですね」

いつも不機嫌そうなソフィーネにしては、珍しく楽しみに言って、微笑んだ。

「お前、何で、そこで笑う」

「面白くありませんか」

「全く笑えん」

レオポルドは不機嫌に呟き、階下から駆け上がってきたムールド兵たちを見やった。

「とはいえ、残念ながら、集団自殺する時間はないようだ」

そう言つて、至極渋い顔で、腰のサーベルを掴むと、その柄を敵に差し出した。

「だからっ、異民族など信用できないと言つていたのだっ」

レッケンバルム卿の怒りは怒髪天を突かんばかりであった。

「最初から、奴らに頼るのが間違いだったのだっ」

「今頃、そのようなことを言われてもしょうがありませんまい」

怒り狂う侍従長に、ジルドレッド將軍の弟であるジルドレッド大

佐が少し呆れたような疲れたような顔で言つた。

「しかし、まあ、まんまと騙されたなあ」

兄の方のジルドレッド卿は意外と気軽そうに、ぼんやりと言つた。

「將軍。もう少し緊張感を持たれては如何です」

あんまりにもあっけらかんと言つので、バレットール准将が呆れ顔で言つた。

「こうなつては、今更、ごちゃごちゃ言つても致し方あるまい。あとは座して待つのみよ」

「まあ、確かに。あとは、野と成れ山と成れの心境ですのう」

法務長官を務めていたシュレイダー卿が山羊のような白く長い髭を撫でつけながら頷いた。

幹部たちの愚痴ともボヤキとも言つような会話を聞きながら、レオポルドは沈黙を守つていた。

クロス卿派の幹部たちは集会所の一室に集められ、軟禁されていた。出入り口には槍を持った数人のムールド兵がしかめ面で立っている。

他の婦女子や老人は別室に集められているようだ。蛮族ながら、最低限の礼儀くらいはあるようで、乱暴狼藉はなく、皆、肅々と集められ、軟禁され、監視されていた。

レオポルドが黙って椅子に座っていると、隣の椅子にルゲイラ兵站監が腰かけた。

「彼らは、私たちが思っているよりも、ずっとハヴィナの情勢に通じていたようすな」

軍人でありながら、どこか博士のような風貌の兵站監は、あくまで客観的に状況を分析していた。

「今までの情性に任せて、我々の側に付くよりも、今までの遺恨を乗り越え、ブレド男爵と結んだ方が得策と考えたのでしょうか。我々を引き渡せば、男爵から大きな利益を引き出すこともできますからね。頑迷でプライド高いムールド人にしては、大変賢明な判断をしたものです」

「どうやら、彼は思考回路も学者然としているようで、現状をあくまで冷静に客観的に思考し、ムールド人を褒めさえした。」

ムールド人は、元々、政治的にあまり上手い生き方のできる民族ではなかったらしい。

名誉や義理に固執することは、人間の生き方としては素晴らしいかもしれないが、政治としては上手くはない。情勢に合わせて臨機応変に、時には、非情にも冷酷にもならねばならないときはある。例えば、味方であった勢力が、敗れ去ったときなど。そういうとき、その残党を匿って敵に睨まれて何の得があるのか。かつての仲間を斬り捨て、敵に売り渡すことが、自らの安寧と利益に繋がることもある。それが政治というものだ。

今回の彼らの行動は、ムールド人にしては、政治的には大変優れた選択だったのだろう。

「今回の行動は、ムールド人にしては珍しい行動なのでしょうか」
レオポルドの質問に、彼はしつかりと頷いた。

「ムールド人は、頑固で誇り高く、一度こうと決めた道を外れることを大変不名誉なことと考えます。騙し討ちや裏切りを何よりも嫌悪しますからな。故に、当初、我々の味方であるふりをして、このように捕えるというような行動を取るのは予想外でした。彼らの思考や行動様式も変わってきているのかもしれないな」

「しかし、唐突にこのような行動をすると、部族の中に反発する者もいるのでは」

「その可能性は十分にありませんな。今回の行動を不名誉なものと考え、乗り気ではない者も少なくないはずですよ」

「なるほど」

レオポルドは渋い顔で頷くと、再び黙って何やら考え込む。

暫くして、クロス卿派の幹部たちが押し込められている部屋の扉が開いた。

一斉に集まる視線を受けたムールド兵は、片言の帝国語でレオポルドを呼んだ。

「来い。族長が、話がある」

幹部たちの視線を受けたレオポルドは、ゆっくりと立ち上がり、扉へ向かって歩き出す。

「さて、どうしたものかな」

レオポルドは歩きながら、誰にも聞こえないように、口の中で呟いた。

三五 カルマン族とネルサイ族について

レオポルドが通された部屋には数人の老人と、数人の中年の男、数人の若い男。それに、キス力がいた。

男たちは分厚い赤い絨毯を敷いた床に座っていた。上座に老人たち。そこから、中年の男、若い男の順に並んでいる。キス力は入口の傍に所在なさそうに立っていた。

レオポルドが部屋に入ると、一斉に鋭い視線が向けられた。キス力は俯いたまま視線を合わせようとしない。

奥にいる老人のうち何人かは見覚えがある。レオポルドから見ても上座の右側に並んでいるのはカルマン族の族長はじめとする有力者たちだ。彼らはレオポルドと目が合うと気まずそうに視線を逸らした。そこから右の壁際に座っている男たちにも見覚えがある気がする。おそらく、彼らもカルマン族の有力者たちだ。対して、左側に並んでいる男たちには見覚えがない。

レオポルドを立たせたまま、左の壁際に最も上座に座った豊かな髭を蓄えた大柄の男が口を開いた。何やら渋い顔で話しているが、ムールド人の言葉であり、しかも早口だったので、齧る程度にムールド語を学んだくらいにレオポルドには理解することができなかった。

「ネルサイ族の族長代行であるカリエイ・アリ・レオコルです。私の伯父上です」

レオポルドの後ろでキス力が通訳するように言った。カルマン族の中には帝国語を解する者もいたが、勿論、帝国語を話せない者も少なくない。そこで、部族の有力な血筋の人間であり、帝国語に通じている彼女が通訳としてここにいるのだろう。

「なるほど、ネルサイ族か」

レオポルドは口の中で呟く。

集会所から外を見たとき、ムールド騎兵の数がカルマン族のみの

兵にしては多い気がしたのだ。集会所を囲んだ兵が二百か三百騎。それに、外で野営していたクロス卿派の兵を押さえるのに同数くらい**の兵が必要となるだろう。人口二千程度しかいないファデーの兵としては多すぎる。どこか町の外から援軍が来ているのではないかとレオポルドは考えていた。**

その外から来た兵というのは、要するに、キスカの出身部族であるネルサイ族だったのだ。

今回のカルマン族の裏切りは、少なくともネルサイ族も同調しての行動だったのだろう。もしかすると、クロス卿派を捨て、ブレド男爵に付くことは、七長老派の一致した意見なのかもしれない。

カリエイは低く轟くような声で話を続ける。

「この度は、このような事態になり、大変申し訳なく、遺憾に思っております」

キスカはかなり言葉を選んで通訳しているようであった。彼女が訳したようなことを厳つい顔で踏ん返り返っているカリエイが言っているとはとてもじゃないが思えなかった。

レオポルドは微かに苦笑しつつも、表情を押し隠す。

「それで、早速、本題なのですが」

裏切った相手を前にして、あんまりにもあつさり和本題に入るものだ。彼にとつてレオポルドなどブレド男爵への手土産程度にしか思っていないのだろう。

「郊外に野営している、兵が投降にも武装解除にも応じず、抗戦の意思を示しているのです」

カリエイの言葉を通訳したキスカの言葉を聞いてレオポルドは自分が呼ばれた理由を理解した。

クロス卿派の兵たちが幹部たちが拘束され、軟禁された後も、投降も武装解除もせず、抵抗を続けるのは、至極当然のことだろう。幹部たちが人質に取られているとはいえ、武器を捨てれば名も無き兵たちは殺されるか奴隷として売られるしか道はない。むざむざ最悪な運命を辿るよりは、せめて兵として抵抗し、名誉の戦死を遂げ

た方がマシだと思うのも無理はない。少なくとも、抵抗もせず大人しく武器を捨てる選択を易々とはできまい。

「レオポルド様には、彼らに、命を無駄にせず、投降するよう、説得して頂きたいのです」

他の幹部ではなく、レオポルドが選ばれたのは、一応は、彼が辺境伯候補であり、形上、クロス卿派のトップといえなくもないからだろうか。或いは、キスカが仕えていたから、話が通じ易いと思っただのかもしれない。

「なるほど。命を無駄にせず、か」

レオポルドは独り言のように呟く。

ムールド人たちも攻撃を仕掛けて、無用な損失を被りたくないのだろう。

確かに、ここでクロス卿派の兵たちが徹底抗戦を続けても、何も得るものはなく、必要のない血が流れる悲劇を生み出すだけだろう。

「嫌だな」

しかし、レオポルドははっきりとムールド人の求めを拒否した。

キスカの他、帝国語を解する者たちは啞然とする。キスカはすぐに気を取り直してレオポルドの言葉を、どう通訳したものか少し悩んだ後、「嫌だと言っている」と通訳した。帝国語を理解しない者たちはそれを聞いて慥然とする。

「何で、私があんたらに協力せねばならんだ」

レオポルドの言葉を訳すキスカはどう言ったものかと悩んでいるようだった。挑発的とも言える彼の言葉を直訳するのは気が引けるのだろう。

「我々との約束を違ひ、嘘を吐いて、裏切っておきながら、困ったことがあると、利用しようとするのか。つくづくあんたらの汚いやり方には呆れるな。反吐が出る」

どうやら帝国語を理解する者に短気な者はいないようで、怒鳴り返されることはなかった。ただ、啞然として狼狽していた。そして、キスカは通訳に困っていた。

「砂漠の民は勇敢にして誇り高く、義に厚く、決して約束を違わぬというのは、全くの嘘だったようだな。あんたらは平気で嘘を吐いて、仲間を敵に売り渡し、強者に媚び諂^{へつ}う連中だったわけだ」

帝国語を理解できる者は、半分は決まり悪そうに俯き、半分は顔を赤くして静かに怒っているようであった。帝国語を理解できない者は、どうやら自分たちが愚弄されていると気が付いたようで不機嫌そうに顔を顰め、キスカになんと云っているのか通訳しろと口々に言った。

キスカはどう通訳したものか悩んでいるようだった。

「構わん。直訳しろ。ああ、そうだ。最後の連中つてのを犬どもと訳してくれ」

レオポルドは通訳に困るキスカに言った。ちなみに、相手を「犬」と呼ぶのはムールド人にとっては最大の侮辱の言葉である。

「しかし、その……」

そうは言われても、彼女には通訳し難いようであった。

「まあ、あんたらが裏切るのはいい。我々もあんたらを心底信用していたわけではないからな。今更、ぐだぐだ言ってもしょうがないというものだ」

訳しかねているキスカを置いてけぼりにしてレオポルドは自分勝手に話を続ける。

「ただ、俺は、正直、悲しく、思っている。疑っておきながら言うのもアレだが、やっぱり、君は裏切らないような気がしていたのだ」その言葉に、キスカは顔をはっと上げる。話し続けるレオポルドの後頭部を見つめる。

後頭部に視線を感じながら、レオポルドは硬い表情で真っ直ぐ前を見つめたまま語り続けた。

「いつまでも、仲間で行ってくれると思っていた。君の部族が裏切っても、君だけは仲間で行ってくれるような気がしていた。そんなこと、理想論であって、実際は無理だとは分かるがね」

そう言ってから、彼は振り返った。キスカの黒い瞳を真っ直ぐに

見つめて囁くように、彼女だけに聞こえるような声で続けた。

「願望を言えば、私は、君と、まだ、もっと、ずっと、一緒に旅を続けたかった」

そうして、彼はさっさと部屋を出て行く。ネルサイ族の若い男が怒声を上げて制止するようなことを言っていたが、無視した。第一、何を言っているのか理解できなかったのもので、意味が分からないことにして、その場を立ち去る。あとは、祈るだけだ。

「一体、何を言っていたのだ。あの男は」

一方的に帝国語で喋り倒してレオポルドが部屋を出た後、ネルサイ族の族長代行カリエイは不機嫌そうに言った。

不幸なことに、この場にいるネルサイ族の中で、帝国語を十分に理解するのはキスカだけだった。あとはカルマン族の長老と幾人か。カルマン族とは縁戚の関係で、関係は悪くないが、このところは少しぎくしゃくしていた。七長老会議で、クロス卿派を裏切り、ブレド男爵に付くことに最後まで反対していたのはカルマン族だった。その上、最も嫌な役どころ、嘘を吐いて騙し討ちするという誇り高く義に厚いムールド人には屈辱的ともいえる役を演じさせられたのだ。彼らはそれを上手く演じ切り、策謀は成功したのだが、本心はやりたくなかったの一言に尽きるだろう。カルマン族の長老は先祖に顔向けができんと嘆くほどだった。

カリエイに言わせれば「馬鹿馬鹿しい」としか思えなかった。そんな矜持に拘り、小事に囚われ、大局を見失い、部族を、家族を破壊に追いやることの、どこが正しいというのか。

数千人の部族を率いる長ならば、矜持や誇りなんぞよりも、優先することがあるだろう。部族を豊かに安全に生活させることが長の役目だ。その為ならば、多少汚いことに手を染めることも仕方がない。

第一、このようなこと、帝国人や他の民族ではよくあることだ。今まで、頑なに愚直に義を守り続けてきたから、ムールド人は勢い

を失い、南の荒れ地に追いやられて、数を減らしてきたのだろう。

「キス力。あの男はなんと言っていた」

カリエイは不機嫌そうに鼻を鳴らしてから、キス力に尋ねた。

「え、ああ、裏切り者に協力するのは嫌だと、まあ、そういうことを……」

キス力は歯切れ悪く答える。

明らかにそれ以上に長々と喋っていたはずなのだが、それを彼女は要約したのか、訳す必要なしとして省略したのか。はたまた、聞かれない話だったのか。

カリエイは不機嫌そうに彼女を睨みつける。

不愉快そうな強い視線を受けてキス力は、居心地悪そうに顔を背けると、「失礼」と一言呟くと、部屋を出て行った。

カリエイは彼女に良い感じを抱いていない。

キス力は、今は亡き前族長、自分の弟の唯一の子だ。ムールド人では、最年少の男子が家督を継ぐしきたりだ。

ムールド人の男は嫁を迎えると、親から財産（家畜）を分与され、独立し、新しい家を興す。ただ、最年少の男子は結婚しても家に残り、親が死ぬとその財産をそのまま継承し、次の当主になるのだ。

しかし、前の族長の弟は、女子のキス力にしか恵まれなかった。

そのような場合は、キス力の婿が家督と財産を全て継承することになる。

自然、キス力の婿争いは部族の中で熾烈を極め、部族の娘の平均的な結婚適齢期を過ぎてても、婿は決まらなかった。やがて、去年になって、ようやくカリエイの息子が婿と決まった。

しかし、ある程度の年齢で親もいない為に、いくらか発言力と自由があるキス力は何だかんだと結婚を引き伸ばし、そうこうしている間に、いつの間にか、レオポルドを迎えに行く使者の役割を引き受けると、逃げるようにサーザンエンドを飛び出してしまった。

あからさまに結婚を嫌がり、避けている。

「オルバイ」

カリエイは息子の名を呼んだ。背が高く黒々とした髭を蓄えた逞しい若者だ。六人いる息子の中で最も自分に似ていて、体力と気力に溢れ、何者をも恐れぬ勇敢な戦士である。カリエイはこの自慢の息子をキスカの婿に選んだ。

「キスカとはどうだ」

父親の問いにオルバイは顔を顰める。

「どうもこうもありません。父上。話をしようにも、いつも何処かへと姿を晦まし、何かかにかと理由を付けては、私と顔を合わせようともしません。その上、いつの間にか、帝都に行ってしまう始末で……」

「馬鹿者つ。そんな手緩いことで、どうする。女なんぞというもんは、自由にさせてはいかんのだ。しっかりと首輪を付けて言うことを聞かせる。いいか。お前はあの女の主人となるのだから。ここ最近の騒動が済んだら、すぐにも婚礼を行うのだぞ」

オルバイの嘆きに、カリエイは憤激し、どやしつける。

「あの女は、もうお前のものなのだから、今のうちから躡けておけ。多少、手荒な真似をしても良い。今夜辺りにでも、あの生娘に誰が主人かをとくとその体に覚えさせておけばいいだろう」

そう言つてカリエイは豪快に笑い、オルバイもにやりと笑みを浮かべた。ネルサイ族を取り仕切るカリエイの息子や、兄弟たち、甥たちも下品な笑みを浮かべる。

その様子を見ていたカルマン族は、何人かは気まずそうに席を立ち、幾人かは明らかに不愉快そうな顔をしていた。

三六 キスカの裏切りについて

キスカは一人、集会所の廊下を走るように歩いていた。

かなりの早歩きで、足は自然と早まっていく。心臓は既に走った後のようにばくばくと鼓動している。頭の中は同じ場所をぐるぐると走るように空回っている。空転する脳内を落ち着かせて、彼女は思考を整理する。

先程、レオポルドが言っていた言葉。あれは、全て自分に向けた言葉だ。そう、彼女は確信していた。彼は話している間、ほとんどキスカとは目を合わさず、前を向いていたが、しかし、他の誰かと目を合わせることもなかった。まるで空気に向かって話しているようで、しかも、帝国語で、通訳を待たず、一気に言い切ってしまった。あの場には彼女の他にも帝国語を解する者もいたが、後半ともなると、確実にキスカを指名して話しかけている。

散々、裏切りを責めておきながら、最後にはやっぱり信じていたと口にして、あまつさえ、もっと、ずっと、一緒に旅をしたかったとは。一度落としておいて、持ち上げて、そして、旅。

「まるで、これは……」

そこまで思考を巡らせてキスカは立ち止まる。真っ赤になった両頬に思いつきり平手を打ち込む。

考え過ぎた。想像が飛躍している。

キスカは自身の思考を否定する。頭の中に浮かび上がる一つの結論を振り払うように頭を振ってから、再び歩き始める。

それでも、その考えは、甘美で理想的で魅力的だ。つい、今しがた否定したばかりのはずなのに、彼女の頭は再びその考えで満ち溢れていた。もしも、自分の考えが正しく、レオポルドもそれを望んでいるならば、自分が選ぶべき道は。

しかし、それを選んだとしても、上手くいく見込みは、

「おい、キスカ」

歩きながら考えを巡らせていると、不意に背後から呼びかけられた。聞いたことがある声だ。聞きたくもない声だ。

いつの間にか表情を緩ませていたキスカの顔つきは途端に険しくなり、不機嫌そうに顔を顰め、声を振り切って歩き出す。

「おいっ。待てっ」

後ろで怒声が聞こえ、腕を掴まれた。反射的に、腕を掴んだ相手を睨みつける。

「何だ。その目は。それが、夫となる男に向ける目か」

キスカの従兄にして婚約者であるオルバイは険しい顔で彼女を睨み返してきた。

前の族長であったキスカの父の長兄の五男である彼は、キスカよりも数歳年上で、背が高く大柄で逞しく黒々とした髭を蓄えた大男だった。逞しさや強さが重要視されるムールド人の中では理想的とも言つべき男だろう。

しかし、キスカは彼が好きではなかった。そもそも、族長の遺児である自分との結婚が政略結婚というのが気に入らないし、オルバイの女を見下すような言動も好きではない。

男社会であるムールド人社会では男尊女卑は自然なことなのだが、幼い頃から、女性の社会進出が進んでいる帝国の文化や言葉を学んだキスカには耐え難い悪しき風潮としか思えなかった。

また、父の死後、比較的自由に動いていたのが、結婚によってその自由が制限されることも耐え難いことである。

その上、今回の裏切りである。ムールド人の誇りと伝統に泥を塗りつけるような所業は、彼女にとって許容できるものではなかった。この裏切りを主導したのがネルサイ族であり、かつ、キスカの伯父であるカリエイの家であった。

キスカのオルバイに対する感情は嫌悪どころか憎悪に近いものがあった。

「放して下さい」

キスカは努めて冷静に、感情を押し隠して、はっきりと彼を拒絶

した。

「主人が妻の手を取って何が悪いのだ」

そう言われ、彼女は途端に憎悪を露わにした。

「まだ、夫ではありません」

「婚約は部族会議で決まっているのだ。最早、結婚したも同然ではないか」

その言葉にキスカは苦々しく表情を歪めさせた。ムールド人の部族では部族の会議での決定は絶対である。今回の裏切りも、部族会議で決められたことだ。それ故に、キスカも、従ったのだ。

ただ、その決定にあっさり素直に応じたわけでもないし、納得しているわけでもない。最初、この決定を知らされたとき、彼女は猛然と抗議した。抗議はしたが、既に部族会議で決められてしまったことだ。部族の総意だと言われれば、従うより他に道はない。

こうして、彼女は不本意で不愉快な裏切りをする羽目になったのだ。

キスカは不機嫌さを隠そうともしていない。顔にも態度にも表情にも声にも、不愉快さを露わにしている。それでも、彼女がご機嫌だと思つような奴がいれば、そいつの目と耳は節穴で、脳味噌は空っぽとしか思えない。

「何を怒っているんだ」

オルバイはそれほど頭が悪くもないし、空気が読めない男でもない。キスカが機嫌が大変宜しくないことくらい理解できるし、その原因が何かくらい察しも付く。

「なんだ。まだ、あの間抜けな帝国人どもをはめてやったのを根に持つてるのか」

オルバイはなんでもないことのように言い、飽きたるように嘆息した。

「お前はどっちの味方なんだ。ネルサイの娘だろう。どうして、そんなに帝国人どもに味方したがるんだ。連中に味方したところで、良いように利用されるだけだ。万が一、勝ち馬に乗れたとしても、

連中は俺たちに助けられたことなんかけるつと忘れて、支配者ぶるんだぞ」

確かに、帝国人のやり方はいつもそうだった。辺境伯が帝国に刃向う反抗的な部族の追討に向かう際、親帝国派の諸部族は従軍を求められ、軍資金の供出を命じられ、糧食を徴発された。この貢獻に対する帝国からの見返りは、いくらか税が軽減されるのと、何かあったときには帝国軍が助けしてくれるという保障くらいのものであった。帝国人はいつも尊大で傲慢で、異民族を見下し、差別していた。それでも、親帝国派諸部族が余所者である帝国人に頭を下げてきたのは、帝国の後ろ盾という安全を確保する為であった。

この最も重要なものが失われた今、彼らに従っても何の意味もないし、何の得にもならない。と、考えるのは当然といえば、当然だろう。未だに遊牧生活を営むネルサイ族は、特に、帝国との商売で利益があるわけでもなく、帝国の文化に触れているわけでもないの、帝国には全く親近感を抱いていない。それどころか、心の底では反感を抱いてきたのだ。

ただ、唯一、ネルサイ族の中にあつて、キスカだけは違っていた。「そうであつたとしても、帝国から離れては、部族に未来はありません。帝国はあなたたちが思っているよりもずっと強大な国です。私たちはできる限り、彼らと友好的に接し、彼らと協力関係を築かなければなりません。何があつても、彼らと敵対するようなことは避けなければなりません」

それが彼女の思想であつた。

彼女はネルサイ族の中では比較的開明的であつた父の影響で、帝国語を学び始めた。父親としては、避けることのできない帝国との付き合いの中で、帝国語が話せる人間がいくらかいた方が良く思つて、帝国語を教えたのだらう。いくらか話せる程度になると、父は帝国人との会合で町に行く度に帝国の本を持ち帰り、彼女に与えた。

キスカはそれらを読んで、帝国語を学ぶと共に帝国の風俗や文化、

制度に興味を持った。自分たちとは全く違う生き方に純粋に好奇心を抱いたのだ。

両親が流行り病で相次いで亡くなり、自由に行動できる立場を手に入れると、彼女は近くの町やサーザンエンド南部の都市ナジカに出かけては、帝国人と話をしたり、帝国の本を手に入れたりして帝国のことを勉強するようになった。それは帝国という異文化に対する好奇心と共に自分たちを支配する強大な支配者を知っておくべきであるという政治的な考えからでもあった。

いくらか帝国について学んだ結果、彼女は、多くのムールド人や他の諸部族が思っているよりも、帝国はもつと強大な国家であることを知った。それでも、帝国に反抗的な部族が生きていられるのは、帝国が南部を境界と見做して放置しているからだ。

それでも、南部で何か大きな事件が起きれば、反帝国勢力が大きな勢力を形成するようなことがあるれば、帝国はその動きを許さないだろう。最新の大砲とマスケット銃を装備した十数万もの大軍が押し寄せ、数万も集まればいかなりの反帝国勢力を踏み潰してしまうだろう。

そう考えた彼女は、帝国から付いて離れないことが部族の安泰に繋がると主張した。

キスカの帝国かぶれは一族で問題視されたが、伯父たちは、誰が族長の地位を継ぐか、族長の一人娘であるキスカの婿は誰にするかという後継問題で揉めていて、キスカに構っている暇などなかった。そんな頃、サーザンエンド境界伯が崩御し、境界伯の後継問題が顕在化した。親帝国派のムールド人部族から成る七長老会議は、フエルゲンハイム家の生き残りであるレオポルドを帝都からサーザンエンドへ呼び寄せようと画策し、使者を出すことにした。

これに帝国に強い興味と憧れを持っていたキスカが乗らないはずがない。折しも、婿も決まり、結婚させられようとしていたこともあって、彼女はかなり強引に自分が帝都に行くことと殆ど一方的に言い残して、サーザンエンドを飛び出し、さっさと帝都に行ってしまう

た。

帝国を見て回った彼女は従来の考え方を更に強いものとし、決して帝国に刃向ったり、逆らうような真似はしてはいけないとの確信を深めた。

それが、今回の事件だ。ネルサイ族は、あっさりと目先の、短期的な利益の為に、帝国人を裏切り、屈辱を与えてしまった。部族の誇りと矜持の問題でもあるが、長期的に見て、この事件は確実に部族の損失となる。ネルサイ族は帝国人を裏切った蛮族というレッテルを貼られ、後々まで歴史に書き残され、帝国人はネルサイ族にマインナスの感情を抱くだろう。

ブレド男爵派に鞍替えするにしても、他にもっとうまいやり方もあったはずだ。こんなふうには帝国人を騙し討ちするような卑怯な手ではなく、穏便に、正直に味方できない旨を伝えて、町を出て行ってもらうとか。それであれば、まだ恰好も付いたし、今回のようなやり方ほど帝国人に憎悪されることもない。

しかし、カリエイたちは、勝ち馬に乗るだけでは飽き足らず、ブレド男爵に渡す手土産まで欲したのだ。その強欲さ故に、帝国人を裏切り、捕縛するという卑怯極まりない行為に及んだ。

「この行為は必ず帝国の反感を買い、ネルサイ族は卑怯者の蛮族として憎悪されるでしょう。その報いはいつか必ず火の粉となって私たちに降り注ぎます」

「ふん。貴様は、帝国びいきだからな。帝国が何ほどのものか。もう何百年も前から帝国人はここにいて、結局、未だに全部族を従属させることもできていないではないか」

キスカの言葉に、オルバイは顔を顰めて言い放つ。

そう言う彼は、帝国が数千万もの人口を誇り、サーザンエンド全域の数十倍もの領土を持つことを知っているのだろうか。全部族合わせてもたかだか十万人程度しかいないムールド人が敵う相手だと思っっているのか。

キスカは今までも何度か帝国について、帝国との関係について意

見を述べてはいるのだ。しかし、その度に、虚しい反応が返ってくるばかりだった。

「女が政に口を出すなっ。少々ものを知っているからと偉そうにつ。身の程を弁えろっ」

オルバイが苛立ち、怒鳴り散らす。

今までも、このように叱責され、彼女の意見は、耳さえも傾けられず、排除されるのが常であった。

キスカは憮然として黙り込む。自分の一族は、どうしてこんなに短絡的で思慮が浅いのかと辟易としていた。同じ部族だというのに、同じ言葉を話しているはずなのに、話を通じない。

これでは、自分とは異なる民族である帝国人と、レオポルドと話している方がずっと話を通じる。レオポルドは自分の話を真摯に聞いてくれるし、意見を取り入れ、尊重してくれる。彼も意見を言うし、知らないことを教えてくれる。旅の進路について、旅中の生活について、それどころか、政治的なことにも、戦場での戦術的な意見にも耳を貸してくれた。彼女の意見を最初から聞く価値のないものとして排除することは絶対になかった。今まで言葉を頭から無視されてきた彼女にとって、レオポルドとの会話は大変心地よく貴重な経験だった。

ムールド人の裏切りの直前、彼はカルマン族を疑う発言をした。それをキスカは自分たちムールド人が信用されていない証として受け取り憤慨したが、今思い返すと、レオポルドはカルマン族が信用できないことを他ならぬ自分に明かしたのだ。それは、つまり、カルマン族は、ムールド人は信用していなかったが、キスカ個人はムールド人という民族とは切り分けて一人の個人としてそれ以上に信頼していたことに他ならない。先のレオポルドの発言はその証左である。

それに対してムールド人は、誰も彼も、個人の考えよりも部族や家族の考えを重視し過ぎている。親帝国派ムールド人への不信をキスカが自身への不信と考えたのは、彼女自身があくまで自分を部族

の中の一人として捉えていたからだ。故に、彼女は部族の、帝国を裏切り、クロス卿派を騙し討ちにして捕縛するという計画を知らされても、それをレオポルドたちに漏らさなかったのだ。部族の決定は絶対であり、個人がそれに逆らうなんてことはあり得ないのだ。そして、目の前にいる、女を見下す男との婚姻も部族の決定なのだ。

キスカは、心が暗い地の底に落ちていくかの如き重苦しさで、思うように生きられない苛立たしさを感じて、一層不機嫌になった。かなり乱暴に捕まれていた腕を振りほどく。

「用がないなら失礼します。急いでいますので」

殺気すら含まれる黒い瞳でオルバイを睨みつけ、吐き捨てるように言うと、彼女は集会所の廊下を歩き出す。急ぎの用も目的もないが、これ以上、オルバイの傍にいたくなかった。

「おいつ。待てっ」

しかし、オルバイは彼女を逃がさない。婚約者だというのに、以前から全く自分と接しようとしなかったところか、益々反抗的になり、思い通りにならないキスカに、若く血気盛んな彼も苛立っていた。妻は夫に従うものという風潮が強いムールド人で、しかも、ネルサイ女は、愛情豊かで、亭主には従順で一生懸命に尽くすと評判なのだ。周りの同世代の男たちは従順な妻を得て、愛されているというのに。

このまま彼女を自由にさせておくわけにはいかない。どうにかして、自分に従わせなければならぬと彼は強く感じていた。多少強引なことをしても、自分が主人であると彼女に認めさせねばならない。

オルバイは再びキスカの手を掴み、半ば引き摺るように手近な部屋に引つ張り込んだ。キスカは不意を突かれた上に、大男の力には抗うこともできず、部屋に連れ込まれ、床に組み敷かれる。

大声を上げようとするとキスカの口をオルバイの大きな無骨な手が覆い隠す。

「誰がお前の主人かを、お前の体に思い知らせてやる」

彼の言葉に、キス力は目を見開く。ムールド人の文化、風習では男女共に貞操は結婚まで守らねばならず、初めての性交渉は初夜でなければならぬとされている。

キス力は婚約者のあまりの暴拳に驚き、啞然とした後、自分の婚約者は、なんと短絡的で、暴力的で、下劣な男だと軽蔑した。

そう思った瞬間に、彼女の頭の中に、もう一人の異性の姿が浮かんだ。

先に言われた言葉を再び思い返す。

「私は、君と、まだ、もつと、ずっと、一緒に旅を続けたかった」
彼は帝国語でそう言ったが、そこで、あえて「旅」という単語を使ってきたことに、どういう意味があるかを彼女はずっと考えていた。

ムールドの言葉で「旅」は「人生」そのものを表すとは、以前に話したことがある。レオポルドはそれを忘れていないだろう。そして、ムールドの言葉で、旅と一緒にしたい。とは、愛の告白の慣用語である。

レオポルドはこれを意識して言ったのだろうか、キス力はこの言葉を聞いたときから、ずっとそれを考えていた。彼は、私に愛している。と、これからも、ずっと一緒に人生を歩みたいと言ってくれたのか。

彼女はそう言われたかと思っていた。願わくば、そういう意味の発言であつて欲しい。

では、レオポルドの発言がそのような意味合いを持っていたとすれば、彼女はどうすべきか。どう行動すべきか。愛する人の為に、何を為すべきか。

彼女の頭は瞬く間に目まぐるしく思考し、一つの結論を出した。

キス力は自分の上に押し掛かるオルバイの腹に膝蹴りを食らわせて、押し退けると、腰に提げていた半月刀の鞘を払った。窓から差し込む月光に半月刀の刃が鈍く光る。

「貴様つ、何をする気だつ」

抜き放たれた半月刀を見て、オルバイが叫んだ。

キスカは何も答えず、無表情で半月刀を振り上げると、一切の躊躇もなく、袈裟懸けに斬り捨てた。血飛沫が噴き上がり、部屋中に鮮血が飛び散る。

「ひっ、キ、キスカ、貴様、裏切り者めえっ」

血塗れになりながら、床に転がったオルバイは憤怒の形相でキスカを睨みつけながら、断末魔の呻き声を上げる。

「裏切り者などと、よく言えますね」

返り血を浴びたキスカは冷え切った声で呟くと、仰向けに倒れているオルバイの胸を踏みつけ、止めを刺すべく半月刀を構える。

「糞っ、何故だっ、どうしてっ」

オルバイは己を踏みつける足を掴み、もがきながら叫ぶ。既に致命傷ともいえる重傷を負っている為、彼女を押し退ける力は残っていないようだ。

「貴方がどうして理由を問うのか私にはわかりません」

そう言ってから、キスカは顔を寄せる。

「ただ、私は愛する人には従順で、愛される為ならば、何でもする典型的なネルサイ女なんですよ」

彼女は微笑を浮かべて囁くと、半月刀をオルバイの首に突き刺した。鋭い刃は皮膚を破き、肉を引き裂き、骨に突き当たる。そのまま更に力を込めて首の骨を砕く。血管が断ち切られ、鮮血が撒き散らされる。

返り血を浴びて真っ赤になったキスカは半月刀を引き抜き、立ち上がる。無表情で元婚約者の亡骸を見下ろした後、抜き身のままの半月刀を持ったまま、部屋を出る。

「私も、貴方と一緒に旅をしたいです。これからも、ずっと、永遠に、あの世まで」

キスカは真っ直ぐ前を見つめて、歩を進めながら呟いた。ここにはいない。愛する人に向けた答えを。

三七 罪と愛について

従兄にして婚約者であるオルバイを斬り捨てたキスカは、盛大に返り血を浴びたまま、集会所の廊下を軽やかに歩を進めていた。窓から差し込む月光に半月刀が鈍く光る。彼女の歩いた後には、てんと血の跡が続いていた。

その歩みに迷いはなく、元来た道に戻っていく。

角を曲がったとき、ちょうど向かいから来た数人の男たちと鉢合わせた。いずれも、キスカとは顔馴染。数人いる伯父のうちの一人とその息子たちだ。

「何だその血はっ」

真つ赤に染まったキスカの姿を見た伯父が仰天して叫ぶ。

「オルバイはどうしたっ」

彼は、先程のレオポルドを呼び出した場に居合わせていた。キスカが部屋を出て行った後、カリエイとオルバイの父子の間で交わされた会話を聞いており、オルバイがキスカを追うように部屋を出るのを見送つてもいた。そして、両人の関係の悪さはネルサイ族ならば知らない人はいない。

その後、出くわしたキスカが一人で血塗れになっていれば、最悪の事態を想起するのは自然なことといえよう。

「無礼を働いたので斬り捨てました」

伯父の問いにキスカは無表情で率直に答える。

彼女の言葉に、伯父と従兄弟たちは啞然として言葉を失い、立ち尽くす。

どの民族でも、どの社会でも、同族殺しは大罪である。ましてや、彼女が殺めたのは、婚約者である。ムールド人の文化では、妻は夫に従うものとされている。それを、刃向ったどころか、手にかけてともなれば、衝撃的な事件である。

「なんとということをつ。一族から同族殺しが出るとはっ」

「卑怯な裏切りと無礼を働く者を肅清するは、一族の名誉と矜持の爲です。裏切り者どもは、族長の娘である私の責任でもって肅清いたします」

伯父の嘆きに、キス力は涼しげな顔で応じる。

「それで、貴方たちは如何します」

彼女の言葉に、伯父と従兄弟たちは顔を見合わせる。

「お前一人で我々と戦おうというのか。勝てるものか」

従兄弟の一人が嘲るように言った。

「勝てる勝てないではありません。やるか、やらないか。それだけです」

キス力は彼らを見つめて、はつきりと言いつつ切った。

漂う不穏な空気に、従兄弟たちは腰の半月刀に手をかけた。

「つまり、貴様はやる気というわけだ」

「今からでも、過ちを認め、恭順するならば、許しましょう」

「何を偉そうにつ。斬れつ。同族殺しは身内の恥辱ぞつ。我々の手で彼奴の血をもって恥を雪がねばならぬつ」

身内に罪人や悪人が出たとなれば、それは一族全体にとっての恥辱である。その恥辱を晴らすには、身内において、その恥知らずを肅清せねばならないというのは、ムールド人共通の概念である。キス力も伯父たちもそうだった意識のもとで動いていた。

つまり、伯父たちは同族殺しという大罪を犯したキス力を肅清することによって恥辱を雪がんとし、キス力は裏切りという不名誉を犯した一族を残らず肅清することによって名誉を回復しようとしているのだった。

従兄弟たちが一斉に半月刀を抜き放つ。その寸前に、キス力は手にしていた血に汚れた半月刀を振り抜いていた。従兄弟の一人の右腕が、抜いたばかりの半月刀を握ったまま斬り飛ばされる。

痛みに悶絶し悲鳴を上げる従兄弟を蹴り倒しながら、キス力は半月刀を構え、突進する。彼女の進路にいた従兄弟は間一髪でその突きを避けるが、彼女はその回避を予想していた。避けた拍子に崩れ

た体勢になつてゐる彼の脚に足を引つ掛けて、転倒させる。彼は、横にいた伯父を巻き込みながら転倒する。

まず、前にいた三人を、一旦、戦闘状態から切り離れた彼女は、そのまま、後ろにいた二人の従兄弟と対峙する。同時に振り下ろされる二本の半月刀を、半月刀で受け、力強く押し返す。

二人が後退りする間に、キス力は屈むほどに姿勢を低くして、一人の腹めがけて突きを繰り出す。彼はそれを寸でのところで避け、再び半月刀を振りかざした。低い姿勢を維持した彼女は、突きを放った勢いを緩めず、彼の脚に刀を持っていない方の左腕を絡めて、そのまま引き倒した。

もう一人は、一瞬、キス力の行方を見失つていた。その一瞬が、彼の命取りとなる。隣にいた兄弟を引き倒した後のキス力は、彼の背後に抜け、姿勢を直し、半月刀を振り下ろす。背後からの斬撃を背中に受けた彼は断末魔の悲鳴を上げながら、血飛沫を上げる。

「糞つ。ちよこまかと動きやがつてっ」

転ばされただけで、まだ無傷の伯父と二人の従兄弟が立ち上がる。憤怒で、顔を真っ赤に染め上げ、半月刀を構えて突進する。とはいへ、廊下は狭く、大の男が三人同時に突き進むのは難しい。自然と、伯父が後ろに立ち、息子たちが前に立った。男二人くらいならば並べるくらいの廊下の幅なのだ。

キス力は前に立つ二人の従兄弟が繰り出す突きや斬撃を、半月刀で受け、弾き、時に斬り返しながら、じりじりと後退する。幾度か刀を交えた後、彼女は素早く後ろに飛び退くと同時に手にしていた半月刀を投擲する。放たれた刃は一直線に空気を切り裂き、二人の従兄弟の間を飛び抜け、伯父の胸に突き刺さった。予想もしなかった唐突な最期に、伯父は目を見開き、啞然として、呻き声を上げながら、ゆっくりと仰向けに倒れ伏した。

唐突な半月刀の投擲と父親の死に、残る二人は意識を逸らされた。そこにキス力は襲いかかる。フォークのように突き出した人差し指と中指を、敵の両目に突き刺し、抉り込む。眼球を突かれた男は悲

鳴を上げながら、武器を取り落とし、両目を押さえて激痛に悶絶する。

キス力は素早く落とされた半月刀を拾い上げて、彼を斬り捨てる。返す刀で、残る一人に斬りかかった。最後の一人は初撃をどうにか避け、次の斬撃を半月刀で受けとめたが、次の突きを避けることに失敗した。半月刀が腹に突き刺さる。その突きの勢いで背中が壁に当たった。半月刀を抜き去ると、血を吐きながら、ずるずると崩れ落ち、壁に背中を預けたまま床に座り込むような体勢で絶命した。

彼女は休むことなく、重傷を負い、立ち上がって逃げることもできず、廊下でのたうち回る従兄弟の髪を掴み上げ、喉笛を掻き切った。鮮血が飛び散り、廊下が真っ赤に染まる。

キス力は荒い息を吐きながら、立ち上がった。最初に右腕を切り落とした従兄弟の姿がない。おそらくは、逃げたのだろう。

背後から迫る騒々しい足音に、彼女は躊躇なく振り向きざまに半月刀を振り抜く。騒ぎを聞きつけ、キス力が従兄弟に止めを刺す場面を目撃したカリエイの息子の一人は、一刀のもとに斬り捨てられた。

キス力は新手が現れる前に、その場を後にする。

廊下を駆けていると、背後で悲鳴が聞こえた。おそらくは、あの惨状を誰かが見たのだろう。騒ぎは既に、相当広まっていると考えていいだろう。

前方から騒ぎを聞きつけた男たちが駆けてくる。血塗れで走ってくるキス力を見て、一様に啞然とした。

「一体、どうしたのだっ」

中年の髭面の男が叫ぶ。ハヴィナから、キス力に同行してきた十数騎のムールド人騎兵のうちの一人だった。

「貴方は薄汚れた裏切り者どもの味方をしますか。それとも、ネルサイの名誉と矜持の下に生きますか」

キス力は血走った目で彼らを睨みつけて問う。その手には血塗れ

た半月刀が握られている。

彼女の問いの意味を、彼らは十分に理解したし、彼女のしたこと、しようとしていることにも察しがついた。帝国人たちを裏切ったカリエイたちに従い、この場でキスカと斬り合うか。それとも、キスカの側に付いて、同族と戦うか。

男たちは顔を見合わせる。ムールドの戦士は名誉と矜持を重んじ、約束は違えず、仲間を裏切らないことを絶対とする誇り高い男たちだ。カリエイたち、指導部の方針ややり方に納得できない者も多かった。本心では、ムールドの戦士の誇りを簡単に投げ捨て、平気で裏切りをやった指導部の連中を軽蔑していた。彼らの胸中には強い不満が渦巻いていた。

その上、目の前にいるキスカの様子はただならぬものがあり、屈強な砂漠の戦士ですら、気圧される殺気と迫力を放っていた。ここで、カリエイたちに従うと答えれば、即座に斬り捨てられそうな勢いだ。

「わかった。俺は、あんたに付こう」

先頭に立っていた中年の男は、キスカに味方することを決めた。一人がそう言うと、他の者も、その流れに逆らわず、彼女の側に付いた。

「では、貴方たちは、レオポルド様たちを解放して下さい。それから、一人でも多くの者を味方に付けて下さい」

「あんたはどうするんだ」

その問いに、キスカは無表情で答える。

「家族を殺しに行きます」

彼女の氷のように冷たい顔、乾ききった声、血走った目に、気圧された男たちは、自然と道を開け、キスカはその間を悠然と歩いて行く。

「なんつう恐ろしい女だ……」

一人の呟きに、全員が頷いた。

「一体、どうしたのだっ。この騒ぎは何なんだっ」

集会所の一室で休もうとしていたネルサイ族の族長代行カリエイは、先程着たばかりの寝間着を脱ぎ、再び普段着に袖を通しながら怒鳴った。

彼は事態を全く把握できていなかった。

集会所の各所で発見される惨殺された同族の遺体、どこからか聞こえてくる剣を交える音に、怒号と悲鳴。どういわけだか、同族同士が集会所内のあちこちで斬り合っている。

事態が把握できないのも致し方ないというものであった。騒ぎの張本人であるキスカと出くわしたカリエイ派の人間は一人残らず殺され、生きて彼女の裏切りをカリエイに報告できた者がいなかったのだ。その上、全てが夜の闇の中で行われていたものだから、余計に状況把握を難しくしていた。

カリエイ派が混乱しているうちに、指導部が主導した今回の裏切りに不満を持っていた者たちは、次々とキスカの下に入り、集会所の各所を占拠していた。

状況を把握できないまま、カリエイは、着替えを終え、腰には半月刀を提げて、部屋を出た。傍には二人の息子と一人の部下が付き従っていた。

そこへ一人の男が駆けてくる。

「オルバイ様が遺体で見つかりましたっ」

報告を受けたカリエイたちは、顔を見合わせ、途端に憤怒に顔を赤く染める。

「糞っ。あの女だっ」

息子の一人が叫び、壁に拳を打ちつけた。

キスカとオルバイの関係の悪さは誰もが知っている。しかも、彼は彼女を追うように部屋を出て行ったのだ。誰がオルバイに手を下したのか察しがつかないはずがない。

「待てっ。拙速に動くなっ。まずは、ここに兵を集めるのだっ」

兄弟を殺され、復讐の念に駆られ、今にも走り出しそうだった兄

弟を押し止める。

状況が把握できない中で、安易な行動に移るのは危険と考えていた。まずは、まとまった数の兵を確保し、それから行動に移るべきだ。

「兵を集めるつ。掻き集められるだけ集めて、ここに集合させろつ。それと、カルマン族の族長たちも呼び寄せろのだ」

側近の部下と報告に来た男に指示を与え、二人を走らせる。

「兵が集まるまでは、ここに留まろつ」

「しかし、父上。その間に、奴が逃げるのでは」

「あの女は、そんな玉ではない」

息子の懸念にカリエイは確信に満ちた答えを返す。

「逆に、こつちへ向かってくるような奴だ」

彼の印象は正しくその通りであった。

音もなく現れた影は、矢の如く真つ直ぐ廊下を駆け抜け、無言で彼らに襲いかかった。最初に餌食になったのは、運悪く背を向けていたカリエイの長男だった。

べつとりと血に塗れた手に握られた半月刀が彼の喉笛を掻き切る。既に数人を葬り去り鋭さを失った刃が皮に食い込む、勢いだけで強引に肉を食い千切り、血管を引き裂き、骨に噛みついて止まった。

父親と弟が異変に気付いたとき、彼は首から宙に鮮血を撒き散らしながら仰向けに倒れ込むところで、キスカは彼の腰に提げた鞘から半月刀を抜き放っていた。

「おのれっ」

カリエイは怒りの形相で、半月刀を抜き、上段から振り下ろす。

キスカは新たな半月刀で、重い一撃を受け止める。

「この悪魔めつ。今すぐ殺してやるつ」

カリエイは血走った目で彼女を睨みつけ、唾を撒き散らしながら怒号を上げる。

キスカは無言で、半月刀を押し返し、素早く後ろに飛び退く。その一瞬後に、彼女が寸前までいた場所にカリエイの息子が渾身の突

きを放っていた。前傾姿勢になった彼の頭上に鋼鉄の刃が振り下ろされる。容易く頭皮を引き裂き、強引に頭蓋を砕き、脳漿と血潮が撒き散らされる。

「貴様あつ。絶対に殺してくれるわっ」

目の前で息子たちを殺されたカリエイが、憤怒に満ちた鬼の形相で、半月刀を振るつた。

キスカは躊躇なく敵の頭に食い込んだ半月刀を手放し、後ろに飛び退き、左右に身を躲して、次々と浴びせられる斬撃を避ける。

「よくも息子たちをつ。この悪魔めえっ」

カリエイは怒りと悲しみに満ちた叫びを上げながら遮二無二半月刀を振り回す。額には青筋が浮き上がり、顔は怒りに歪み、血走つた眼には涙が浮かぶ。

感情を露わにする伯父とは対照的に、キスカの顔は氷のような無表情のまま、黒い瞳は、波のない闇夜の湖のように静かで、冷え切っていた。瞳に映るのは、己を殺さんと襲いかかる鈍い銀色の光を放つ鉄の刃だけ。冷静に落ち着いて斬撃を避け続ける。

カリエイの息が上がり始めた頃、キスカは獲物を捕らえる蛇のように素早く左腕を突き出した。半月刀が握られた伯父の右手手首を掴み、その刃の先を逸らす。その一瞬後に伸ばされた右手は伯父の喉笛に噛みついた。爪が皮膚を突き破り、肉に食い込み、血が滲み出る。それと同時に足払いをかけ、体重を前に伯父の体に預けて、押し倒す。

巨体が廊下に倒れ込む。強かに後頭部を床に打ち付け、カリエイは一瞬意識を手放す。倒れた拍子に半月刀は手放され、床の上を回転しながら滑っていく。キスカはその上に馬乗りになって、両手で彼の首を押し潰すように全体重をかけていく。爪を食い込ませ、喉の肉を引き裂き、首の骨を押し折り、喉笛を握り潰さんばかりに力を入れる。意識を取り戻したカリエイは耐え難い苦しさや嘔吐感を覚え、死に物狂いで足をばたつかせ、自らの首を絞めるキスカの首を逆に掴み返した。

しかし、彼は既に酸欠状態になりかけていた。意識は揺らぎ、消えそうになる。それでも、必死の抵抗を試みる。

ごつごつとした太い指に細い首を掴まれ、呼吸ができなくなっても、骨を折られそうなほどの力を込められても、爪が肌に食い込む鋭い痛みを感じても、キス力は彼の首から手を放さず、僅かたりとも力を抜かない。

二人は暫しの間、瞬きもせずに、相手の首を絞めながら、互いのよく似た黒い瞳を見つめ合う。キス力の瞳には憤怒と苦しみに満ちたカリエイの黒い瞳が映り込み、カリエイの瞳には何の感情も感じさせないキス力の黒い瞳が映り込む。

明かり一つない廊下の闇の中で、二人は一つの影となって蠢く。

暫く後に、一つの影が立ち上がった。壁に手を付き、激しく咳き込んでから、胃の中身を嘔吐した。胃液まで廊下にぶちまけた後、その影は床に転がる半月刀を拾うと、動かなくなつた敵の首に押し当てた。肉が千切れ、骨が砕かれる鈍い音が響き渡る。

レオポルドをはじめとするクロス卿派の幹部たちは集会所の一室に集まっていた。

彼らは、唐突に現れた味方らしきムールド兵に解放され、武器を取り戻し、新たに味方になったムールド兵から状況報告を受けていた。既に集会所の各所は味方のムールド兵たちが占拠し、町の弾薬庫、武器庫、食糧庫も制圧したという。また、抵抗を続けていたクロス卿派と睨み合っていたムールド兵の多くもこちら側に付き、辺境伯軍残党の兵と共にこちらへ向かっていった。また、カルマン族の族長を含む多くの者は、抵抗せず恭順の意を示しているという。

「一体全体、どういうわけで、彼らは我々の側に付いたのだ」

「ありがたいことだが、まさか、神の思召しというわけでもあるまい」

ムールド兵から事の次第を聞き及んだクロス卿派の幹部たちが困惑した表情で口々に囁き合う。彼らには上手く状況が把握できてい

なかった。

絶体絶命と思い、最早、これまでと違っていたのが、そこへ、突然、味方が沸いて出て、一気に大逆転とは。唐突過ぎる展開に、困惑するのも無理はない。

レオポルドは、上座の席ですつと無言のまま座っていた。

そこへ、静かな足音が近付いてくる。幹部たちが議論する声の隙間に、その音を聞いたレオポルドは、顔を上げ、部屋の入口を見つめる。彼の視線に気づいた幹部たちがそちらに目をやる。

褐色の肌に、銀色の短い髪、黒い瞳。背は高く、手足は細く長い。冷涼とした美しい顔立ちには、氷のような無表情を張り付けている。全身を鮮血で真っ赤に染め上げ、体中に傷を負い、血を流している。首にはくつきりと締め上げられたときの指の跡が残る。抜き身の半月刀を握った右手はべつとりと血に汚れ、ぼたぼたと指先から血が滴り落ちる。逆の、左手は髪を掴んでいた。胴体から切り離された男の生首だ。切り裂かれた首から流れ出た血潮が床に血溜りをつくっている。

「キスカ……」

レオポルドは漆黒の瞳を見つめて、彼女の名を呼んだ。

「レオポルド様……」

キスカは赤い瞳を見つめて、愛すべき主の名を呼んだ。

彼女は数歩歩み寄ると、部屋の中心に跪き、生首を差し出した。

「私は、レオポルド様に、恭順し、服従し、隷属し、今後、二度とつ。未来永劫、裏切らぬと誓います。これは、その誓いの証つ。

裏切り者たちの、私の一族のつ、血をもって、

二心無きことの証左とします。」

キスカの声は、乾き切り、掠れ、聞いているだけで痛々しかったが、それでも、彼女は血を吐くような勢いで、レオポルドへの忠誠を誓い、その覚悟を、泣き出しそうな声で叫んだ。

彼女の言葉で、その場にいた人々は、全てを理解した。つまりは、彼女が同族を裏切り、一族を殺して、レオポルドに味方した。と、

そういうことであるようだ。

「あのムールド女が、身内も部族も裏切り、レオポルド殿に味方したというのか」

「拳句、同族を殺したとな。恐ろしい女だな」

クロス卿派の幹部たちが嘔き合う。帝国においても、同族殺しは大罪だ。まず、天国行は望めない。聖職者が、口を揃えて地獄に落ちると言うであろうほど、憎悪され、軽蔑され、忌み嫌われる大悪だ。

「レオポルド殿は、この女が味方すると知っておられたのか」

ジルドレッド將軍の弟がレオポルドに尋ねる。

「いや、それはおかしいじやろう。この娘が味方なのであれば、カールマン族とネルサイ族の裏切りを知った段階で、レオポルド殿に告げるべきであろう」

シュレイダー法務長官が異を挟む。

「では、初めは部族側に付いておったが、変心して、再びこちら側に寝返ったということか」

レッケンバルム卿が渋い顔で言い、キス力を侮蔑するように見下しながら、続ける。

「なんと姑息な。何度も心変わりする者など信用できぬ。しかも、同族すら手にかけるとは、冷酷で残虐なつ。これだから、汚らわしい異民族どもはつ。この女も、今は、このように口先だけで、恭順を口にしておるが、いつなるとき、我らを騙し、裏切るか」

「黙れっ」

鋭い怒声が部屋中に轟いた。

歴戦の將軍であるジルドレッド卿ですら、目を剥くような裂帛の怒号だった。

「レッケンバルム卿。彼女は、私の大事な人です。これ以上、彼女に酷いことを言わないで頂きたい」

レオポルドはレッケンバルム卿を見つめ、穏やかな調子で言った。その赤い瞳は、夜の湖のように静かで、しかし、その奥には、揺

らめく怒りの炎が見えた。レッケンバルム卿は、思わず視線を逸らした後、相手がはるかに年下の若造だということを思い出したのか、顔を朱に染め、苦々しい顔をして、黙って部屋を出て行った。

レオポルドは、キスカの傍に歩み寄り、屈み込む。

「キスカ、どうして、ここまで……」

確かに、キスカが告白として受け取ったレオポルドの言葉は、キスカに味方して欲しいという意思を含めたものであったが、まさかここまで、同族を殺してまで味方しろと言いたかったわけではなかった。彼らが寝静まった後にでも、こっそりとレオポルドたちを逃がしてくれば、それくらいでよかった。同族殺しという大罪を背負わせたかったわけではなかった。

「私は、貴方に仕えると言いながら、その誓いを破り、一度、貴方を裏切ってしまった……」

キスカは跪いたまま、震える声で呻くように答える。

彼女は、一族が、ネルサイ族が、レオポルドたちを裏切るという部族の決定を知った後、レオポルドと会った。しかし、彼女はその事実を彼に告げなかった。告げずに、逃げた。裏切りも同然である。と、彼女は強い罪悪感を胸に抱くことになった。

「これは、裏切った一族を肅清すると同時に、主を裏切った私への罰なのです。そして、二度とつ、二度とつ、貴方をつ、レオポルド様を裏切らないというつ、私の覚悟です」

レオポルドはキスカの頬を撫で、顔を上げさせる。

いつもの冷たい氷のような無表情の仮面は崩れ落ちていた。悲しみと嘆きに顔は歪み、充血した目からは、透明な涙が流れ出て、顔に飛び散った返り血の上を流れ、赤くなって床に落ちる。

レオポルドはキスカを胸に掻き抱く。彼女は、彼の胸に顔を押し当てて、子供のように泣きじゃくった。

伯父たちは、従兄弟たちは、生まれたときから、見知った家族だった。伯父たちは彼女を可愛がり、膝に乗せて、肩車もしてくれた。従兄弟たちは、一人っ子だった彼女の遊び相手であり、馬に乗るの

再び二人は唇を合わせる。

クロス卿派の幹部の面々は、お熱い二人を見て、飽きたり、困ったり、苦笑いしたりながら、部屋を出て行った。

「私、凄い、恐い女ですよ……。好きな人の為に、家族まで殺すよ
うな……」

唇を離してから、キスカが呟くように言った。自覚があるらしい。
「それくらい愛されているのならば、男冥利に尽きるというものだ」
レオポルドは平然と言い放ち、彼女の睫毛に浮かぶ涙の滴を指で拭う。

「それよりも、私の方が大変だ。君への愛を証するのに、何をすれば君と肩を並べられるんだ」

キスカは儂げに微笑んで答えた。

「もう一度、キスをして頂ければ十分です」

そうして、二人は三度唇を合わせた。

三八 人質について

レオポルドの前に数人の老人が跪いていた。

いつもムールド人が被っている布を脱ぎ、ムールドの男たちが常に携える半月刀を、差し出し、額を床に擦り付ける。

彼らは、いずれもカルマン族とネルサイ族の古老たちである。カルマン族の長老と、その兄弟。それに、ネルサイ族の長老たち。ムールド人は年長者を大いに敬う風習があり、老人たちは、族長の一族でなくても尊ばれ、指導層に入り、部族の政に参与する権利を持つ。族長の一族がキスカや女子供を除いて尽く排除されてしまった今となつては、ネルサイ族を代表するのは彼ら長老しかない。

彼らはレオポルドに許しを請いに来ていた。

「勿論、我々のでかした恥ずべき罪は、到底許されるものではありません。貴方たちを捕え、敵に売り渡そうとした我々が、罪を許してくれなどと請うのは、烏滸がましいことです。この大きな過ちをなかつたことにしてほしいなどは、口が裂けても言えません」

カルマン族の族長はしわがれ乾ききつた声で滔々と話し続ける。

「罪には罰を与えなければなりません。どうか、我々を殺して下さい。どのような刑罰であろうとも、責め苦であろうとも、謹んで受け入れます。しかし、どうか、どうか、他の者たちの命ばかりは助けて頂けませんでしょうか。彼らは我々に命じられて行動しただけなのです。どうか、この爺どもの命に免じて、その寛大なる御心で、他の者の命ばかりはお助けを……」

敗れた者の指導者が他の者の助命を嘆願する為に、己の命を差し出すのは当然の行為である。敗北者の最後の責務といえるだろう。

レオポルドは彼らの傍に屈み込み、族長の肩を優しく押して、顔を上げさせた。

「どうか、頭を上げて下さい」

「このような恥ずかしい行為に手を染めてしまい、顔向けできません

ん

「そのようなことを言つて、私を困らせないで頂きたい」
そう言われて、古老たちは渋々と顔を上げた。

「私は、貴方たちの命を頂くようなつもりはありません。勿論、他の方々も同様。無抵抗で恭順する者には、その生命、身体、財産に一切の危害を加えないことを約束しましょう」

レオポルドの言葉に、老人たちは再び頭を深くと下げた。

「その代わり、貴方たちには、私の配下に入ってもらい、指示に従つて頂くことになります」

「勿論でございます。我々はレオポルド様の臣下となりましょう。兵も出します。糧食も供出致しますし、税も納めましょう」

「結構」

実際、レオポルドにとつては、そちらの方が大事であつた。老人たちの命を貰つたところで、両部族の強い反感を買うつくらいの効果しかない。それより、部族のまとめ役を残し、彼らをしっかりと従わせておく方が得策である。

「ただし、二度目はないものと思つて頂きたい。次、裏切りがあつた際は、貴方たちは勿論、貴方たちの家族、奥方、兄弟姉妹、子供、孫に至るまで、病人から乳飲み子まで一人残らず一族郎党根絶やしにさせて頂く」

レオポルドはしっかりと言い聞かせるように、宣告した。

「その時は、私が斬ります」

そこに、傍らのキス力が一言添える。今しがた、自分の一族を尽く殺した女が言うのだ。長老たちは青い顔で黙つて頭を下げた。

「シュレイダー卿。先程の誓約を文書に」

「承知した」

レオポルドが声をかけると、辺境伯宮廷で法務長官を務めていたシュレイダー卿が、部下を伴つて前に出た。レオポルドとカルマン族、ネルサイ族との間の合意をきちんと文書にして、形として残すのだ。口約束ほど当てにならないものはない。

「ところで、両部族は既に全員恭順しているのか」

文書として残す誓約書の文面を巡って話し合いを始めたシュレイダー卿とその部下や両部族の古老たちから離れ、レオポルドがキスカに尋ねた。

「カルマン族はほぼ従っています。この町は既にこちら側です。周辺の村にも夜明けにも、使者を出し、村の長たちを挨拶に来させます。おそらくは、ほぼ抵抗なくこちらに付くでしょう」

そこへ、若いムールド兵が駆けて来て、キスカに何事かを報告し、駆け去っていく。

「問題は、ネルサイ族です。戦士の多くはこちらに付きました。その家族も問題なく、レオポルド様に従うでしょう。ただ、まだ一部抵抗を続けている者がいます」

そう言つて、キスカは腰に提げた半月刀を掴む。

「その愚か者どもが、人質を取つて立て籠もっているとのことですが、今から向かいます」

「待て。私も行く。君だと、人質ごと皆殺しかねん」

歩き出したキスカに、レオポルドも歩調を合わせる。

「そんなことしません……」

彼女はレオポルドを見つめて、心外そうに言った。

人質を取つて集会所の一室に立て籠もっているのは、キスカの伯母の婿と兄弟や息子たちの一派だった。

キスカが次々に伯父や従兄弟たちを粛清したものだから、身の危険を感じたのだろう。その上、いつの間にか、ネルサイ族もカルマン族もキスカ派が多数となつてしまい、容易に外に出て逃げることもできなくなつていた。そこで、人質を取るといふ手段に出たらしい。

真つ先にキスカの指示で解放された幹部たちには手が出せない。勿論、レオポルドなど論外。かといって、あまり重要な位置にいない人間を人質に取つても、相手が人質の命を重要視しないかもしれない。

ない。となれば、狙う人間は、集会所にいた帝国人の女子供。その中でも幹部の子女ということになる。

そういうわけで、彼らは数人の夫人、子供を人質にしていた。その中には、あるうことか、次期辺境伯になるかもしれない男の義理の姉まで含まれていた。

「要するに、連中の要求は、生命と財産の保障だろう。そんなもの、いくらでも保障してやるんだが」

事情を聞いたレオポルドが呟く。

彼からすれば、連中の命も財産も、特に欲しいわけではない。反抗したりせず、大人しくしてくれれば、それでいいのだ。

とはいえ、相手からすれば、突如、一族が情け容赦なく尽く惨殺され、一度裏切った相手が、今度は優位な立場に立ってしまい、自分たちは追い込まれている。相手の口先だけの保障なんか信用できない。人質を解放して、のこのこと投降してみたら、一網打尽にされ、揃って串刺しにでもされては堪ったものではない。

しかも、レオポルドの傍にはキスカがいるのだ。

「人質を取るとは、砂漠の戦士にあるまじき卑劣で下種な恥ずべき行為です。しかも、よりにもよって、フィオリア様を人質にするとは、万死に値する許し難き所業。一族のしでかした罪は、私の罪。私の責任で、彼らの血をもって、その罪を贖います」

などと不穏当なことを言う大量殺人鬼がいては、恐くて無防備に人質を解放することなどできるわけもない。

彼女の存在はネルサイ族に強烈な恐怖感を抱かせているな。と、レオポルドは感じていた。今に、悪いことをする子供に母親が「キスカが来るぞ」と言っつて、悪さを戒めるようになるだろう。

「いや、これ以上の流血は避けたい。これ以上死人を出して、ネルサイ族の反感を買うのは得策ではないからな」

レオポルドは、既に腰の半月刀に手をかけているキスカを押し止め、ネルサイ族とカルマン族の長老を呼び寄せた。年長者を敬うムールド人ならば、長老たちの説得に応じるのではないかと期待を寄

せたが、中々上手くはいかない。

レオポルドはどうしたものと考えた末、キスカを連れ立って自ら交渉に当たることにした。彼の後ろにマスキット銃を構えた歩兵が続く。

キスカの伯母の婿である痩せぎすの男は、フィオリアを盾にするように、彼女の後ろに屈みこんでいた。彼女の腕を縄でしっかりと縛り、逃げられないように左手でしっかりと掴んでいる。右手には抜き身の半月刀を握り、いつでも人質の命を奪えるよう、油断なく構えている。

その後ろには数人の人質と、同じように半月刀を持った男の息子たちが固まっている。

フィオリアは恐怖と緊張から、顔色は蒼白で、口を真一文字に結んで、黙り込んでいる。目の前にレオポルドが立つと、表情にいくらか明るいのが浮かんだ。

「先程から言っているとおり、即刻、人質を解放し、我々に恭順すれば、諸君らの生命と財産は保障しよう。今後諸君が我々に危害を与えない限り、決して諸君の生命や財産を傷つけることはない」

レオポルドの言葉をキスカが訳する。敗北者相手にしては、寛大すぎる申し出とも、身内を人質に取っている者相手としては、寛大すぎる申し出とも言えよう。実際、彼はこのような下らない事柄にかまけていたくなかったのだ。さっさと解決して、次のコマへ進みたいのだ。

「ただし、人質の身が、些かでも傷をつけられた場合には、貴様らの命はないと思え。耳と鼻を削ぎ、腕と脚を^もいで、荒縄で縛り上げ、死ぬまで馬で引き摺り回してやる。貴様らの子供らは見せしめに吊し上げ、遺骸は豚の餌となろう。妻と娘は、東の大陸にでも奴隷として売り飛ばされよう」

寛大なことを言っておきながら、即座に掌を返したように辛辣なことを口にする。

「そんな非道なことをするわけがないと信じていないかね。では、この場に貴様らの家族を連れてきて、一人ずつ、殺していけば、信

じて頂けるかな」

逆に、彼らの家族を人質に取るようなことまで言い出す。当然のことながら、親類であるキスカは、彼らの家族を一人残らず知っている。

しかも、そう言うレオポルドの顔は真剣そのものであった。

「あと、一〇数える間に、決める。投降せぬ場合、或いは答えを出さぬ場合は」

彼がそう言うのと、マスケット銃を装備した兵が前に出た。数人の兵が二列に並び立ち、マスケット銃を構える。既に火縄には火が付いている。引き金を引けばいつでも撃てる状態。

これ以上、時間をかけるつもりはない。との言外の宣告である。今、最も、優先すべきは、この下らない人質事件をさっさと終わらせ、ネルサイ族とカルマン族を完全に掌握することだ。両部族を従えたとしても、ブレド男爵に付いた七長老会議の残り五部族がどう動くか。更に、他のムールド諸部族やブレド男爵の動きにも注視せねばならない。時間はいくらあっても足りない。

「こちらには人質がいるのだぞ。見ろ。あんたの義理の姉だ。この娘がどうなってもいいのか」

堪らず瘦せぎすの男が叫ぶ。

「諸君が投降せぬならば止むを得まい」

レオポルドは努めて静かな声で言い放った。

男は啞然とし、フィオリアは愕然とした。

「レオポルド様。お止め下さい。もう少し脅しつけて、考える時間をやれば、或いは、家族を一人でも、ここに連れて来れば、彼らがいくら愚かでも下手な真似はしなはずです。それに、これ以上の流血は避けたいと仰っていたじゃありませんか」

キスカが早口で言うのを、彼は押し止めた。

流血を避けたいのは、事実だ。しかし、それよりも、早くに事件を解決したい。

また、一族十数人を自らの手で殺した彼女に比べれば、これくら

いのこと、些末とすら言えよう。ここで身内可愛さに、躊躇してはキスカに合わせる顔がない。彼女と肩を並べるには、身内の流血を恐れてはいけない。

「一〇、九、八、七、六、」

レオポルドは片手を上げ、一〇から数字を減らしてゆく。〇と口にした途端、片手は振り下ろされ、同時にマスキット銃が火を噴くだろう。

キスカの伯母の婿は、余程の愚か者ではなかったらしい。いや、逃げ道のない集会所の一室に人質を取って立て籠もるくらいの愚か者ではあるのだが、それ以上に考えなしではなかった。

男はフィオリアを解放し、武器を捨てた。息子たちも同様に武器を捨て、人質を手放す。

レオポルドは無表情でそれを見届けると、マスキット銃を構えた歩兵たちを見やる。伍長が、号令を発し、兵たちは銃口を上に向け、武器を捨てた男たちを連行する。人質たちも兵たちに付き添われ、恐怖に解放されたこと安堵から、涙を流しながら歩いて行く。

部屋に残ったのは、無表情で突っ立っているレオポルドと、氷のように冷え切った顔付きに、真っ赤な炎の如き瞳で彼を睨みつけるフィオリア。ただならぬ二人の様子に、狼狽するキスカの三人だけだった。

「何か言うことは」

フィオリアが低い声で尋ねる。

「あ、あの、レオポルド様も、本気で、あのように言っていたわけではなく、あれは、はったりといえますか……」

二人の険悪な雰囲気慌てたキスカが勝手に考えた言い訳を口にする。その傍らで、固い表情をしていたレオポルドが口を開いた。

「何もなし」

「レ、レオポルド様っ」

何で、そんなことを言うんだ。と、キスカが泣きそうな顔をする。

「ふーん。あんたも、一人前の貴族になったってことかしら」

対して、フィオリアは、晴れがましいような顔で、平然と言ってみせた。怒りなど欠片も抱いていないようだ。

「身内可愛さに判断を誤るようでは、貴族失格つてものよ。しかもあたしなんて、本当は血の繋がりもないんだしね。いざというときには、いつでも切り捨てられないと」

勿論、王族・貴族といえ、人間である。身内可愛さに、判断を誤り、敵を逃がしたり、不利な条件を飲む羽目になったりする場合も多い。逆に、身内を人質に取られても、冷酷に、人質を打ち捨て目的を達成する者もいる。人間としては、身内を助ける方が正しいかもしれないが、政に生き、戦に死ぬ貴族としては後者の方が正しい。少なくとも、帝国の貴族はそう思っている。「貴族たるもの有能たれ。政に生き、戦で死ぬ」とは、帝国で古くから言い継がれる貴族の誇りだ。多くの貴族はそうように生きて死のうとしている。

そういうものなのか。と、キス力は釈然としない気持ちで首を傾げる。

「あ、あー。ところで、フィオ」

「ん。何」

レオポルドは、先程の落ち着き払った様子から一転。視線を泳がせ、冷や汗を浮かべながら、口籠る。

「その、何だ。あー、えーっと」

「何なの。さっさと言いなさい」

「キス力なんだが」

「キス力が何さ」

「好きなんだ」

「……は」

「互いに」

レオポルドとキス力は真つ赤な顔で視線を明後日の方向に向けている。二人並んで、揃って顔を朱に染めて、視線を逸らしている様は、よく似ていた。

「だから、おそらく、結婚することに、なる、と、思う」

フィオリアは唾然としていた。「冗談みたいに目を見開き、阿呆み
たいに口をぽかーんと開けている。」

「フィオには、先に言っておこうと思っただな」

「はあぁっ。何だそりゃっ」

フィオリアが叫んだ。

三九 第二夫人について

後年、「フアデイの夜」と呼ばれることになる惨劇の後、レオポルドたちクロス卿派は、そのままフアデイの町に留まり、ネルサイ族とカルマン族の掌握に努めていた。

相変わらず幹部と婦女子は集会所を宿舎とし、兵の多くは郊外に野営していたが、前回の事件を受けて、集会所の周辺には常に五百ばかりの帝国兵が警備に立っていた。

レオポルドは恭順を誓う者たちを寛大に扱い、一切の罪を問わなかった。

しかし、従属を良しとしない者もいる。

あの夜、族長一族でありながら、運よくキスカの手にかからなかった者、或いは、命だけは取り留めた者たちは、レオポルドに従うことを良しとしなかった。というより、正しくは父、伯父、兄弟たちを殺したキスカを許さなかった。

彼らの処遇はクロス卿派で議論され、最終的にレオポルドが決断した。

女子供らの生命は保護され、多くは子供と共に妻の実家に帰されることとなった。子供たちは妻の実家の養子となるか、或いは、妻が結婚した次の夫の子供とされる。

残る成人の男たちは全員が処刑されることとなった。裏切りの責任を誰かが取らなければならぬという意識は、誰の頭にもあり、また、従属を拒絶する彼らを生かしておいては、後々、厄介の種となることが考えられたからだ。彼らが一族の中を動き回って、反抗的な活動を始めないとも言い切れない。後々、面倒になるかもしれない種を、しかも、素直に従おうともしない者を、寛大に放置しておくことは利口とは言えない。

従属を拒否した男たちの処刑は、速やかに執り行われた。場所は町の郊外で、クロス卿派の下士官が首切り役人の代理を務めた。

レオポルドとキスカは処刑の場に立ち、彼らの憎悪の視線と罵声を身に浴びながら、次々と首が斬り落とされていくのを黙って見つめていた。

その翌日、集会所の広間には、頭を垂れ、跪く十数人もの男たちが並んでいた。ほとんどの者が老人で、いずれも長い髭を生やし、腰には半月刀を提げている。

ネルサイ族とカルマン族の有力者たちである。族長とその一族、長老たち、村の長たち、主な氏族の長たち。彼らは、いずれも頭を低くして、上座に座る未だ二十歳にもならぬ若造であるレオポルドに恭順の意を示した。

レオポルドは、彼らの先の背信行為を寛大に許し、今後は、自分に忠実に仕え、尽くすように、命じた。

「レオポルド様。つきましては、従順の証を差し上げたく」
カルマン族の族長が顔を上げて言った。

「従順の証は、これからの諸君の働きで示してくれば良い」
ムールド人は、仁義を尊ぶ民族だ。一度は、キスカの伯父カリエイらの主導で義に背く行動に及んだが、やはり、義に背くものには強い抵抗感を抱く。先の事件において、多くの者が、裏切り者に従わず、義を通したキスカに付いたことから明らかだ。

安易に人を信用するなど愚の極みだが、レオポルドは彼らを信じることに決めていた。それに、これ以上、彼らの忠誠を疑ってはいは、彼らから目を離すことができず、身動きできなくなってしまう。ただ、これに、レッケンバルム卿以下、宮廷派の貴族たちの多くは不満であるようだった。彼らはネルサイ族とカルマン族の恭順に半信半疑であった。

「恭順の証だと。それは何か」

レオポルドの左隣に座ったレッケンバルム卿が尋ねる。今しがた、レオポルドが言った言葉を無視するかの如く。

表面上、レオポルドは顔色一つ変えなかったが、心の中では苦々

しい思いでいつぱいだった。ネルサイ族やカルマン族との付き合いよりも、貴族たちとの付き合いの方がずっと難儀だ。彼らは自分を主と認めていない。彼は、ただ、フェルゲンハイム家の血筋と、ネルサイ族を掌握したキスカの主ということで、連中の上に立っているだけなのだ。レオポルドの立場は、クロス卿派の中でさえ不安定で弱々しかった。

「遠慮なく申せ」

相反することを口にするレオポルドとレッケンバルム卿を交互に見て、どうしたものかと悩んでいたカルマン族の族長にレッケンバルム卿が声をかける。レオポルドも渋い顔で頷いた。

「私の孫娘をレオポルド様に献上致したく」

要するに、人質ということだろう。既にネルサイ族はキスカをレオポルドに差し出しているのだから、カルマン族からも、という理論であろうか。

「なるほど。宜しい。では、そうしよう。そなたの孫娘をレオポルド殿に差し出すことによつて、カルマン族の恭順の証とせよ」

レオポルドは啞然としたが、レッケンバルム卿は乗り気のようにであった。信用できない相手から人質を取るのは、よくよく有り触れたことである。

「いや、しかし、私にはキスカが」

レオポルドは狼狽しながら、傍らに控えるキスカに視線をやる。

キスカはいつものような無表情のまま黙って大人しくしている。主の視線を感じると、小首を傾げる。

「何か」

「いや、何も」

キスカは何も思っていないのか。さしたる反応も見せなかった。

幹部や部族の有力者が居並ぶ前で、キスカがどう考えているのか問い詰めるわけにもいかず、レオポルドは思案の末、とりあえず、その件は保留とする旨を回答した。

「困ったことになったぞ」

部族の有力者たちとの会合の後、レオポルドとキス力は集会所の廊下を歩いていた。その道すがら、レオポルドは頭をぼりぼり掻きながら渋い顔で呻く。

「何がですか」

弱っているレオポルドを見つめてキス力が尋ねる。

「何がって、あのカルマン族の族長が差し出してくる娘のことだ」

「受け入れればいいではありませんか」

キス力は何でもないことのように言った。確かに、カルマン族の族長一族の娘と結婚すれば、カルマン族との結びつきは強固なものになるだろう。

「いやいや、私の妻は君だろ」

これから夫婦になるうという二人の中にもう一人嫁さんが増えたなんて意味がわからない。

彼の言葉に、キス力は顔を赤く染めつつ答える。

「もう一人くらい妻が増えてもよいのでは」

「何を言ってるのだ。妻は一人きりだろう」

レオポルドは当然というふうに答える。何を言っているんだと言わんばかりである。

夫婦とは、男女が一人ずつ。ということとは、帝国をはじめ西方大陸各国においては、地面が足の下にあって、空が頭の上にある。ということくらい、常識的な概念である。勿論、中には、夫や妻以外に愛人を持つような不埒な男女もいるが、それでも、結婚という神の前で行われる契約で結ばれている相手は一人きりである。極稀に妻ある身にも関わらず、それを隠して別の女と結婚したとかいう輩が現れることもあるが、それは重婚という罪であり、厳しく罰せられる対象である。

しかし、それは西方教会を信奉する帝国や西方各国の人間にとっての常識である。西方教会から外れた異民族・異教徒の中には別の夫婦観を持つ民族もある。

「ムールド人は、古くより男は四人まで妻を持つていいのです」
文化や宗教観の違いというものだろう。言われてみれば、そういう文化の民族もいるな。と、レオポルドも思い至る。

ムールド人の場合は、四人まで妻を持てるという。しかし、実際、全てのムールド人の男が四人の妻を持つてゐるわけではない。多くの庶民は貧しく、妻を何人も養うことができない為、自然と一夫一妻の夫婦が多いという。何人も妻を抱えているのは、生活に余裕のある部族でも上の方のクラスの者だけである。

しかし、レオポルドはムールド人ではない。帝国人にして、少々不信心ではあるが、西方教会の信徒なのである。当然、帝国人の結婚は一夫一妻であり、レオポルドの妻も一人と決まっている。

その旨を話すとキスカは首を傾げた。

「しかし、帝国人も何人か妻を迎えてましたけど」

「そんなわけあるまい」

レオポルドはキスカの言葉を否定したが、彼女の言う話が嘘とも思えず、彼女と同じように首を傾げた。

「それにだ」

とりあえず、その疑問はさておき、レオポルドは渋い顔をして呟く。

「もう一人、嫁さんを迎えるとか言い出したら、フィオになんと言われるか」

彼とキスカが結婚することになったと聞いたフィオリアは、まず、驚愕し、その後は大騒ぎになった。一体全体、なんだって、いきなり、そんなことになっているんだ。と、フィオリアからすれば全く納得できないことだったのだろう。

とはいえ、彼女は二人の結婚に反対とは言わなかった。心の底でどう思っているかはわからないが、少なくとも反対を口にはしなかった。

「では、妻という形にしなければよいのでは」

キスカの言葉に、レオポルドは眉根を寄せる。

「そりゃ何か。愛人にでもしろという意味か」

実際、帝国の大貴族や大商人、上級の聖職者には、正式な妻の他に、愛人を抱えている者が少なくない。しかし、勿論、それは倫理的に宜しくないことであり、信心深い人々からは強く非難されることだろう。それでも、事実、愛人を抱える王侯貴族は数多いのだから、愛人をつくれないうわけではない。

「そもそも、君はいいのか」

「いいも何も。男とはそういうものだ。と、祖母が申しております」

「ああ、そう」

彼女の祖母は男というものをよく分かっているらしい。うう。

一夫多妻制度のムールド人社会で生きてきたキスカは大変物わかりがよかったというよりも、あっさりしていたものだったが、誰も彼もそういう反応をしてくれるとは限らない。

そんなことは、レオポルドも承知していたが、しかし、それでも黙っているわけにはいかない。

ファデイに来たときから、ずっと滞在している四人の部屋に戻り、そろそろと、そういう話が出ているというようなことを口にする。フィオリアとソフィーネは揃って彼を睨みつけた。

「はあ。あんた、何言ってるの」

「いや、俺が言っているわけじゃなくてだな。あちらさんが……」

鋭い視線に突き刺されたレオポルドはしどろもどろで応じる。

「あっちが何言おうが、レオはもうキスカと結婚するっていうんだから、もうどうしようもないじゃない」

フィオリアの言葉は刺々しい。例の結婚話をしてから、彼女はずっとこんな調子であった。

「それがそもいかないよう……。よくわからんのだが……」

「何言ってるのさ。馬鹿じゃないの」

ぶつぶつと歯切れ悪い回答を繰り返すレオポルドにフィオリアは冷たく言い放ち、ソフィーネは軽蔑を込めた氷のような視線を突き刺してくる。

「俺も、断りたいのは山々なんだが、その政治的かというと、なんというか。人間関係とか、そういうのもあって、断り辛いところだな。とりあえず、会うだけ会ってみることは、なりそうなのだ」

「あっそ。もう、あんたの好きにしまさいよ」

フィオリアは素っ気なくそう言い放つと、途中だった読書に戻ってしまった。かなり、機嫌を損ねているらしい。

「フィオはどうしてこんなに機嫌が悪いのだろうな」

困惑した様子でレオポルドが傍らのキスカに尋ねると、彼女は呆れ顔で、彼を見返した。

「おそらく、一番の原因は、レオポルド様が、そう疑問に思っていることだと思います」

部屋の片隅でソフィーネが黙って強く頷いていた。

四〇 アイラについて

アイラ・オスライ・オンドルは、大層な美人だった。

エキゾチックな褐色の肌に、すらりと背は高く、手足は細く長い乳房はふっくらと高く張り、体の線は、柔らかく滑らかで女性らしい丸みを帯びている。灰色の瞳はくつきりと大きく、形の良い鼻は高い。ふっくらと柔らかそうな唇は薔薇のように紅に染まっている。栗色の長い髪は、後ろで独特の形に結っていた。

透けるように白い薄絹のベールをかぶり、緻密な刺繍の施され、金系の飾りや布飾りの付いた白いワンピース状の衣装を身に纏っている。真珠をあしらった金の首飾りを提げ、細い指には銀の指輪が光る。ほんのりの焚き込められた香や薔薇水の香りが漂ってきた。

「アイラは、私の末息子の四人目の娘でありまして、齢は一六になります。上の娘達は、既に嫁に行っておるのですが、一昨年、彼女の父親が流行り病で亡くなり、その後の諸々の事情で、いくらか縁が遅れておったのです。今思えば、これは、レオポルド様に差し上げよとの神の思し召しだったのかもしれないな」

アイラの隣に座ったカルマン族の族長オンドルは、長い髭を撫でながら言った。

「彼女の父親である我が息子オスライも、一人残した娘が心残りであつたかと思えますし、古い先短い私も、この子を置いては、まだ神の身許には行けぬと思っておりましたが、これでどうにか私も心置きなく旅立つことができるというものです」

そう言ったオンドルの細面の顔立ちには、幾重にも深い皺が刻まれ、髭は白く細く、頬はやつれて果てている。彼の年齢は知らないが、既にかかなりの老境なのであろう。加えて、跡取り息子である末息子に先に逝かれてしまい、悠々自適に隠居生活を送ることもできず、族長の重圧に耐え続け、心身共にかなり疲労としているのだらう。

古い先短い老人は、心残りであつた孫娘の嫁ぎ先を決め、ほつと

安堵の様子であった。

そんな顔を見せられて、レオポルドは非常に困惑した。

そもそも、まだ、婚約するとは決まっていけないのだ。とりあえず、まず、本人と会ってみるといふ話になり、善は急げで、翌日には目通りとなつたのだが、そこでそんな話をされては、断るつもりであっても、断り難いこと極まりない。

レオポルドは石のように固い苦笑いを浮かべたまま、視線をアイラにやると、俯いた姿勢のまま、ベールの影からそっとレオポルドの顔を見つめていた彼女と目が合った。彼女は慌てて視線を落とし、頬を夕日のように赤く染める。

レオポルドは腕を組みそうになるのを我慢して、眉根を寄せ、眉間に深い皺をつくる。

政略的な関係での縁組の利益は理解できる。この縁組が成れば、レオポルドとカルマン族は結ばれ、強固な同盟関係が成り立つ。キス力もその点を理解しており、婚約を容認している。

また、ムールド人の慣例では、嫁入りに際しては、婿の元に多額の持参金が齎される。はつきり言って、レオポルドは一文無しに近い財政状況にあり、持参金は非常に魅力的である。

その上、相手方も婚約を望んでいる。彼らにとつても、将来辺境伯になるかもしれないレオポルドとのパイプは重要だし、族長個人の思いとしても婚約は歓迎すべき話だった。

しかも、その相手の娘は大変な美少女である。拒絶する理由がないと言つても過言ではない。

結局、レオポルドとアイラの面会は、顔見せ程度に止まり、婚約の件については先送りされた。とはいえ、周囲の空気や雰囲気は、既に決したようなもので、事実上断り難い状況であった。

ただ、婚約が決まったとしても、婚約にはまだ時間が必要である。「ネルサイとカルマン以外の五部族は兵を集めている模様です」
「ファデイの町の中を歩くレオポルドの傍らに影のように寄り添う

キスカが報告した。

「武力で我々を打ち破り、身柄をブレド男爵へ引き渡そうというつもりか」

レオポルドは渋い顔で呻くように呟く。

ブレド男爵側に付くことを決めている七長老会議派としては、なんとしても、レオポルドらクロス卿派を男爵に引き渡さなければならぬ。

というのも、ムールド人の中では、少数派である親帝国の七長老派が、今まで生き延びてこられたのは、サーザンエンド辺境伯の保護があったからであった。その辺境伯亡き今、彼らはブレド男爵を新たな保護者に選んだのだ。その保護の条件がレオポルドの捕縛と引き渡しなのである。

しかも、クロス卿派の傘下に入ったネルサイとカルマンはムールドでも北部を地盤としている。ここにクロス卿派が居座ると、七長老派の残る五部族はブレド男爵と分断されることになる。また、南には、反帝国である多くのムールド部族がひしめき、いわば、彼らは敵対勢力に南北から挟まれる格好になっているのだ。

ブレド男爵派五部族は、一刻も早く、クロス卿派を打ち破り、ブレド男爵との連携を復活させなければならぬのだ。

この動きに対して、レオポルドたちも対応しなければならぬ。兵を集め、訓練し、武器を揃え、糧秣や弾薬を蓄え、町の防備を固める必要がある。

現状、集められる兵は、ハヴィナから帯同してきたマスケット銃を装備した一〇〇名の歩兵に、騎兵が五〇騎。それに、ネルサイ・カルマンの軽騎兵が三〇〇騎ほど。それに、あと三〇〇程度はムールド人歩兵を集められるだろう。全て合わせれば七五〇ほどになるうか。

問題は三〇〇のムールド人歩兵だ。彼らは殆ど農夫であり、戦時ということで、徴集された男たちである。彼らの訓練はジルドレッツ一族が担っており、町の郊外で、連日厳しい教練が続けられてい

た。

武器弾薬や糧秣などの物資類は、ルゲイラ兵站監が徴発、管理を行っている。

ファデイの町の防備の拡充については、バレットール准将が、担当していた。町の周囲には空堀が巡らされ、土塁と柵が設けられている途中だった。

レオポルドとキスカは、その工事の進捗状況を視察しているところであった。近くには防衛施設の工事の責任者であるバレットール准将の姿もある。

二人の前では、半裸になった男たちが穴を掘り、杭を打ち、土砂や丸太を運んでいる。

ブレド男爵派の兵が迫る前に、防衛施設の工事が終わるかは微妙なところで、間に合わない可能性も考えられる。上手く工事が早く進み、間に合ったとしても、この程度の防備施設では本格的な籠城は不可能だろう。どうあっても、レオポルドたちは野戦で戦いを決しなければならぬ。

「五部族の動かす兵は合わせて二〇〇〇もいればよい方でしょう。装備は古く、馬上で撃てるようなマスケット銃やピストルは少ないと思われます。軽騎兵は弓矢と半月刀、槍を持ち、歩兵のいくらかは古いマスケット銃を持ち、残りは半月刀と円盾を装備しているでしょう」

キスカは冷静に敵戦力を分析する。

バレットール准将が、顔に残る大きな傷跡を撫でながら唸る。この傷は、十数年も前の初陣で、ムールド人軽騎兵と斬り合ったとき、顔面に受けた刀傷だという。

「いくら防衛施設を備えても、所詮は急ごしらえ。防衛効果は限定的でしょう」

准将の言葉に、レオポルドは黙って頷く。戦いは厳しいものになるだろう。

苦い顔で考え込むレオポルドに、バレットール准将が声をかける。

「これでは、婚礼どころの話ではありません。お二人の花婿、花嫁姿を見るのは、まだいくらか先になりそうですね」

そう言われて、レオポルドは啞然として、口を開くが、声が出ない。結局、開きかけた口を閉じて黙っていることにした。キスカは口を真一文字に結んだまま頬を朱に染めていた。

若い二人の初々しい姿を目の当たりにした准将は快活に笑った。

工事の進捗状況を視察し、そのついでにバレッドール准将にからかわれたレオポルドとキスカの主従は、元来た道に戻って、集会所に向かっていた。

歩きながら、レオポルドは咳払いをしてから言った。

「とにかく。どうにかして、ブレド男爵派五部族を迎撃する策を考えよう。あまり、時間をかけると、ブレド男爵が乗り出してくるかもしれない。南のムールド人の動きも気にかかる」

レオポルドは努めて落ち着いた調子で述べた。

「そう、ですね」

キスカは言葉少なに同意する。

初々しい二人にとって、婚礼という言葉は、意識せずにはいられないことであった。

二人は少し気まずい沈黙を漂わせながら並んで歩いていた。

ふと、集会所の近くの広場を通りかかると、子供たちの歓声が聞こえてきて、二人は視線をそちらへやった。

広場では十数人もの子供たちが棒切れを手にして、振り回して遊んでいる。その集まりの中に、珍しい人物を見つけた。

「ソフィーネ。何をやっているんだ」

レオポルドが声をかけると、黒髪の修道女は、苦々しい顔をした。「見ての通りです」

ソフィーネは特徴的な教会軍の十字剣を手にして、実践的な剣術の型をして見せた。それを見た周囲の子供たちがさかさずそれを真似る。彼らの真似を見て、ソフィーネは、一々、一人一人に、やれ、

腰の位置が上過ぎるだの。肘が曲がっているだの。視線が定まってい
ないだの。と、指導を入れていた。

「剣術教室でも開いているのか」

「やりたくてやってるわけじゃありません」

レオポルドの言葉に、ソフィーネは渋い顔で答えた。

聞くところによると、やることもなく暇を持て余していたソフ
イーネは広場で、毎日欠かさず、剣の鍛練を続けていたのだという。
それを見ていた近所の子供たちが興味を示し、見学に集まり、それ
どころか、自分にも剣を教えてくれと言い出したらしい。

無愛想で面倒見が良い方とは思えないソフィーネがよく子供たち
の願いを受けたものだ、と、レオポルドは感心した。しかも、剣術だ
けでなく、帝国語や数学、歴史などの学問も教えているという。ち
よつとしたソフィーネ学校だ。

「大したもんだな。さすがは、修道女といったところか。意外と、
優しいところもあるじゃないか」

子供たちの世話をしやり、ものを教えてやる姿は、まさに修道
女である。

レオポルドが褒めると、ソフィーネはしかめ面で彼を睨んだ。

「そうやって、女性を誰彼構わず、褒めるのはよくないと思います
けど。一応、忠告です」

「どういう意味だ」

「そのままの意味ですよ」

レオポルドが問うと、彼女は素っ気なく言い返す。

「どういう意味だ。と、レオポルドは困惑して考え込む。

「そういえば、今日はカルマン族の姫と会う日じゃありませんでし
たか」

「そうだが。もう会ってきた」

「どうでした」

「どうもこうも」

なんと答えるべきか悩み、レオポルドは言葉を濁す。

はつきりとした答えが得られないので、ソフィーネは周囲で様子を伺っている子供たちに、カルマン族の族長の孫娘について尋ねた。

「それって、アイラさんのことだよ。凄い美人だよ」

「綺麗で優しい人っ」

「すごく綺麗だし、刺繍が上手だよ」

「優しくて親切なお姉さんかな」

「確か、帝国の偉い人と結婚するんだよ」

子供たちは口々に答える。同じ町の人間なだけあって、皆、よく知っており、しかも、レオポルドと婚約することも既に知れ渡っているようだった。

「ふーん。美人なんですか。そりゃ、良かったですね」

子供たちの話を聞いたソフィーネはレオポルドを突き刺すような視線で射止めて言った。その声はどこか刺々しい。

「良かったも何も、別に、美人だから結婚するとかそういうわけではない」

レオポルドはぶつぶつと反論しつつ、その場から撤退した。

そうして、どうしたものか、と再び、自身の結婚問題について思い悩むのであった。

四一 ファディを囲まれて

七長老派のうち五部族の連合軍二〇〇〇の兵が、ファディよりいくらか南にある町ロジに集結しつつあるという情報が入ったのは、ファディの夜と呼ばれる惨劇から一週間後のことだった。一週間で二〇〇〇の兵を集めたのなら、よくやった方といえるだろう。

五部族連合軍はロジに集結し、当地で一日休息した後、北上を始めた。この動きは、キスカの指示によって放たれたネルサイ族の斥候により監視されており、これらの情報は全てキスカを通じてレオポルドの耳に入って来ていた。

「敵勢はファディまで一夜の距離まで迫っております。数は二〇〇〇。騎兵と歩兵が半々といったところです。装備は劣り、大小の火器は殆ど見られません」

改めて、現状を説明したキスカの言葉を聞き、クロス卿派の諸将は一様に渋い顔を浮かべた。

例によって集会所の一室には、クロス卿派の軍事担当である諸将が居並び、軍議を行っていた。上座にはレオポルドが座り、その傍らにはキスカ。その右手側の壁に沿って、ジルドレッド卿とその弟、レッケンバルム侍従長の息子であるレッケンバルム大佐が並ぶ。反対側には、バレットール准将とルゲイラ兵站監。それに、ネルサイ族とカルマン族の指揮官が座っていた。

文官である侍従長レッケンバルム卿や法務長官シュレイダー卿らの姿はない。

「やはり、町に籠り、迎撃するべきではないか」
バレットール准将が口を開く。

クロス卿派が動員できる兵は騎兵三五〇に歩兵四〇〇の合計七五〇ほどであり、敵勢の三分の一程度でしかない。野戦においては、基本的に数の多い方が勝つ。勿論、少数が多数を破ることもないではないが、決して多いとは言えないのが現実である。

それならば、一応は防御施設を備えているファデイの町に立て籠もって、敵を迎撃するのが堅実にして、賢明な判断といえるだろう。向かいに座ったレッケンバルム大佐が黙って頷き、賛意を示した。「しかし、町の防御施設は脆弱で、敵の攻撃に耐え切れないのでは」。この案に、ジルドレッド大佐が異を唱える。確かに、ファデイの町を守る防御施設は空堀に土塁、柵程度の急ごしらえのものでしかない。石壁の城壁や高い塔、水を湛えた深い堀に守られているわけではないのだ。

「勿論、町の防御施設は軟弱である。しかし、数万の軍勢を長期に渡って相手にするわけではない。ましてや、ムールド人は軽装の兵だ。城攻めは得手ではあるまい。この程度の施設でも、敵を食い止め、反撃して、打撃を与える効果はある」

「確かに、敵は数万もの大軍ではないが、このような長期戦に持ち込まれると辛いぞ」

バレットール准将の反論に、ジルドレッド將軍が更に意見する。ファデイの防御態勢は急ごしらえである為、長期の防衛に対する備えが万全ではないのだ。糧秣や水、武器弾薬の備蓄はかなり不足しているのが現実であった。町をぐるりと囲まれ、補給を絶たれ、長期の籠城戦に突入したならば、周辺の村落で糧秣や水を補給できる敵よりも、こちらの方が先に干上がるのは目に見えている。

その上、援軍の見込みがない籠城など愚策というものだ。戦いの結末は、町の陥落か、若しくは敵が攻略を諦めて帰っていく以外にない為、主導権は常に相手方にあることになる。出口が見えないまま、敵の攻撃にひたすら耐え続けることは、容易なことではない。兵の士気の維持は難しく、脱走兵や内通者が出ることも多い。

「長期戦はないでしょう。敵はこの戦いを早く終わらせたいはずですよ」

將軍が抱いた危惧を、ルゲイラ兵站監が否定した。

「何故だ」

「戦いが長期に及べば、ブレド男爵が介入してくるからです」

彼の回答に、ジルドレッド將軍は顎を撫でながら、疑問を口にす
る。

「それは、我々にとっては最悪の事態だが、敵にとって歓迎すべき
ものではないか。援軍が増えるのだから」

將軍の疑問は尤もである。しかし、事はそう単純ではないのだ。

「ムールド人は余所者の介入を好みません。例え、それが味方であ
ろうとも、ムールドの中のことは、ムールドの中で収めようとする
でしょう」

ルゲイラ兵站監の言葉を通訳されたネルサイとカルマンの代表二
人はしっかりと頷いた。

ムールド人の感覚には、ムールドの民とそれ以外の余所者という
しつかりとした区分があり、中のことは中で、解決することを好む
のだ。外の者が首を突っ込んでくることに強い拒否感を抱く。いわ
ば、非常に保守的な思考を持っているのだ。

故に、七長老派五部族は、余所者であるブレド男爵の介入を好ま
ず、男爵が首を突っ込んでくる前に、自分たちだけで片を付けよう
とするだろう。その為、彼らにはできる限り短期の決選を望むと考え
られた。ファディを包囲して、守備側の糧秣が尽きるまでずるずる
と籠城戦を続けたくはないはずだ。

「しかし、軽装のムールド兵が、何の策もなく、強引に攻めかけて
くるとも考え難い。軽装の二〇〇〇足らずの兵で、防備を固めた町
を攻め落とせると思うほど連中も愚かではあるまい」

「かといって、外に出て、野戦をやるうというのは、敵の思う壺と
いうものですぞ」

軍人たちの議論は数時間にも渡って続いたが、結論は出ず、結局
敵の動きを睨みながら、町に籠るといふ、消極的な対応策が取られ
ることとなった。

ブレド男爵派五部族の連合軍がファディ近郊に到着し、町を包囲
したのは、翌日昼過ぎのことだった。

敵の動きを監視する為に設けられた櫓からは、郊外に布陣する敵の様子が遠望できた。

ムールド兵の多くは、茶色や灰色の布を頭からかぶっており、腰には半月刀を提げていた。短い槍や棍棒、弓を手にする者はいたが、火器の類は殆ど見られなかった。鉄の胸甲や背甲を付ける者もいたが、多くは革鎧を装備するか甲冑の類は何もないかだった。赤や青、黄色の細長い旗が風に吹かれて靡いている。いくつもの革製のテントが設けられ、数百頭もの山羊や駱駝がいる。歩く食糧ということだろう。

対するクロス卿派の軍勢はファデイの町に立て籠もり、土塁と柵の内側に掻き集められる限りのマスケット銃や弓矢を押し並べ、攻撃に備えていた。

しかし、五部族連合軍は陣を設営したり、遅い昼餉を摂ったり、伏兵がいなか周辺を偵察したりして、すぐに攻撃に出てくる気配はなく、その日は攻勢なく日は没した。

その翌日も、更にその翌日も、攻勢はなかった。

ただ、時折、マスケット銃の射程ぎりぎりまで軽騎兵を寄せて来て、攻撃する気配を見せたり、戦禍を恐れて住人が逃げ去り無人となった近郊の村を焼いたりするくらいである。

これらの動きは、クロス卿派軍を町から引き摺り出そうという目論見で行われているのは明らかである。

そのような挑発に乗る愚か者は、クロス卿派軍の中にはおらず、レオポルドたちはファデイに腰を据え、町の中に引き籠り続けた。

一発の銃撃も、矢の応酬もなく、戦いは静かにずるずると、停滞していた。

どちらも動きようがない。というのが正直なところであったのだが、両者ともそれを望んでいるわけではなかった。

こちらは兵の数が少ないので、一応は防備の整っている町から出たくない。しかし、糧秣の備蓄が心許無いし、援軍の見込みがない為、長期戦はしたくない。

敵方は、町を攻めるには兵の数が多くないし、装備も満足ではないので、攻城戦はやりたくない。しかし、ブレド男爵の介入は避けたい為、長期戦はしたくない。

「どうしたものかな」

櫓の上から敵陣を視察しつつ、レオポルドは傍らのキスカに意見を求めるように呟く。

將軍たちは、集会所の一室で連日議論を戦わせているが、結論は出そうになかった。不毛な会議に嫌気を感じたレオポルドは何かと理由を付けて、軍議を欠席するようになっていた。

「軍議は宜しいのですか」

軍議を欠席していることを知っているキスカは心配そうな様子である。

「あの軍議に参加しても、良案は浮かばないだろ」

レオポルドは渋い顔で答える。

將軍たちが凡庸で無能だとは思ってはいない。しかし、今まで帝国の辺境伯軍に属していた彼らは、圧倒的に優勢な戦力で劣勢の異民族を駆逐するような戦争しかしてこなかった為、劣勢の戦力で、籠城する羽目になるという経験がないに違いない。そんな彼らの話し合いに耳を傾けても時間の無駄でしかない。というのが彼の認識だった。

「とにかく、現状をどうにかしないといけないのは俺たちの方だ。

このままじゃ、じり貧になるのはこっちだからな」

「状況は均衡状態では」

レオポルドの言葉にキスカが口を挟む。

現状、攻めようにも攻められないのは敵も同じであり、長期戦をしたくないのも同じなのだから、両者は拮抗状態にあると言えるのではないか。

「今のところはな。しかし、時が経てば違ってくる」

レオポルドは渋い顔で敵陣を眺めた。

「連中が長期戦をやりたくないのは、ブレド男爵の介入が嫌だから。

つてな理由だが、それは、つまり、ただの矜持の問題だ。戦いが長期間に渡れば、それも言ってられなくなるし、男爵だって強引に頭を突っ込んでくる。連中にとって好ましくないからぬ事態かもしれないが、こっちにとつちや、好ましくないどころの話じゃない。最悪の結末だ」

長期戦を避けたいという両者が抱く思惑の度合いが違うのだ。五部族連合軍は「できれば」だが、こちらは「なんとしても」なのである。

故に、現状を打開しなければならぬ切迫感はクロス卿派の方なのだ。

レオポルドの言葉に納得したキスカはいつものような無表情のまま思案した。

「騎兵を押し出して、敵を引き寄せましょうか」

「騎兵を囷に出して、敵をマスケット銃の射程まで近付けるか。よくある手だけに、そう簡単に敵が引つ掛かってくれるか疑問だな。やるなら、もう少し、いくらか小細工が必要だろう」

「マスケット銃兵を押し出しすのは」

「銃の数が足りん。火力不足だ。いくらか敵に打撃を与えることができるが、蹂躪されるだけだ。しかも、こちらは銃兵一人につき、十発程度の弾薬しかない」

「では、夜襲を」

「それは、敵も警戒していよう。警戒しているところへ攻めて行っても効果は薄いぞ」

キスカの提案を次々に否定しながら、レオポルドの頭の中では、いくつかの戦術や案が結びつき合い、一つの形になっていく。

「キスカ。ムールドの軽騎兵は一糸乱れぬ行軍は可能か」

この問いかけにキスカは苦い顔になった。

「正直に言いました、ムールド兵は、統一した動きが得意ではありません」

「指示が下れば、瞬時に、全員が馬の向きを変える程度でいいのだ

が

「それくらいならば、一糸乱れぬとまでは難しいかもしれませんが、可能だと思います」

キスカの回答にレオポルドは満足したようであった。

「馬の数は十分あるな。足りなければ、駱駝でも驢馬でもいいか」
ムールドは遊牧の民であり、財産とは家畜のことを指すくらいである。ファデイの町の中にも多数の馬があり、兵士全員を騎兵に仕立てられるほどの頭数が揃っていた。

「よし、ムールドの軽騎兵を集めてくれ。少なくとも、今日一日は猛特訓をもらうぞ」

レオポルドは微かに口端を釣り上げて言い、櫓を降りて行った。

四二 ファティの戦い

翌朝、クロス卿派の軍勢はファティの町を出た。

およそ七〇〇から成る軍勢は全員が騎乗で、一団となって、町の外に展開した。士官や下士官が馬を走らせ、怒号を飛ばしながら、定められたとおりに兵を整列させる。

そんな手間をかける暇や余裕があるのかと思われるかもしれないが、まとまりのない軍勢では、その力は発揮できないものである。兵は綺麗に整列され、まとまりを持ち、一糸乱れぬ行軍ができねばならぬ。という文面は、西洋式の軍事教練に長々と書かれる常套句である。大陸各国においては、戦いの前には、兵を整列させ、陣形を整える作業が欠かせないものとなる。その作業は、大軍では、時に、数時間にも及び、好機を逸することもしばしばである。

クロス卿派軍の場合、兵の数が少ない為、兵を整列させ、陣形を整える作業は、比較的早くに行われた。

しかし、この間に、五部族連合軍は、敵が町から出てきたことを確認し、町を囲んでいた兵を一カ所に集めていた。

クロス卿派軍の行軍準備が万事整った時、彼らの前方には二〇〇〇近くの戦闘準備を整えた敵軍勢が待ち構えていた。自軍のおよそ三倍である。

クロス卿派軍の先頭に立つのはジルドレッド將軍である。白馬に跨り、白い羽飾りの付いた灰色の幅広帽をかぶり、レース飾りの付いた白いシャツの上に羽織った赤い上着には金色の刺繍が施され、黄色い布飾りが付いている。赤い長ズボンに革の乗馬ブーツを履き、腰にはサーベルとピストルを提げていた。

將軍の周囲を数少ない旧サーザンエンド辺境伯近衛連隊残余の真っ赤な上着の騎兵が固めている。

その左翼にはレッケンバルム大佐率いるネルサイ族の軽騎兵、右翼にはジルドレッド弟大佐指揮するカルマン族の軽騎兵が並ぶ。

近衛騎兵、ネルサイ、カルマンの軽騎兵が合わせて三〇〇程度。その後方には更に四〇〇の騎乗の兵が控えていた。前の騎兵集団に隠れ、夜闇に紛れて、敵の目には騎兵であるとしか見えないだろう。レオポルドとキスカ、それにバレットール准将は後方に控えており、ルゲイラ兵站監は町に留まっている。

レオポルドはハヴィナから着ている軍装に身を包んでいた。朱色の毛織物の上着に、濃灰色のズボン。革製の乗馬ブーツ。絹の襟飾りに黄色い飾り帯。被った縁の広い帽子には白い羽飾り。

傍らに馬首を並べているのは、ゆったりとした緋色の綿のフード付の衣を身に纏い、腰に半月刀を提げたキスカに、レオポルドと同じ西方式の青色の軍服を身に纏うバレットール准将であった。

傍には十字剣を携えたソフィーネの姿もある。彼女の方は、徒歩で、いつも通りの服装をしていた。

「上手くいくといいのですが」

キスカが、どこか不安げな様子で呟くと、レオポルドはじろりと彼女を睨みつけた。

「上手くいくとか、いかないとかじゃない。上手くやるんだ」

「……申し訳ありません」

キスカは悄然として頭を下げる。

「敵は我々の動きを見て、どう考えていると思う」

彼は視線を前に戻して言った。

「敵の考えですか」

「戦においては、敵の戦略や思考を推察し、次の動きを予測することとは極めて重要だ。勝利の為には、これが最も重要というものだ」

「仰る通り」

レオポルドの言葉に、バレットール准将が頷いた。

キスカは、なるほどというふうに頷き、少し考えてから口を開く。「敵はこちらが長期戦を望んでいないことをよく理解しているですよ」

クロス卿派に物資の備蓄が十分ではなく、援軍の見込みがないこ

とは、敵方にも十分に予測がつくだろう。

キス力の言葉を受け、准将が口を開く。

「敵からは長期戦を避けようとした我々が打って出たように見えるでしょうな」

その後、レオポルドが続いた。

「奇襲においては敵の意表を突くことが重要だ。にも関わらず、西方式戦術に拘る余り、軍勢の整列に時間を無為に費やした愚か者ども。と、連中は思っているに違いない」

それでも、彼は敵の意表を突くよりも、軍勢を綺麗に整列させることを優先させた。当然、それには理由があり、意味もなく西方式戦術に固執したというわけではない。

軍勢の整列が済んだのを確認すると、ジルドレッド將軍はすらりとサーベルを引き抜いて、煌めく切っ先を真っ直ぐ前へ向けた。

「ぜんぐーんっ、前進っ」

將軍の放った怒号に、すぐさま將兵が鬨の声を上げ、馬腹に蹴りを入れる。馬が嘶き、蹄で地を蹴る。それほど多数の軍勢ではない。すぐに全軍が隊列を維持したまま、トロットで動き出した。

それを見て、一マイルも離れていない距離にある五部族連合軍も動き出す。騎兵には騎兵を。という意図からか、軽騎兵を前に押し出す。

西方式の軍隊ならば、マスケット銃の戦列やバイク兵の槍衾で、敵騎兵を迎え撃ち、血祭に挙げるところだが、騎馬民族であるムールド人の軽歩兵は、あくまで補助的な戦力に過ぎない。騎兵相手では、あつという間に蹴散らされるのは目に見えている対抗して、騎兵を押し出すのは、誤った判断ではないだろう。

しかし、彼らがそう動くことをレオポルドは予想していた。

両軍の距離は、かなり近い。五部族連合軍の騎兵はすぐさま突撃体勢に入った。半月刀を煌めかせ、突進してくる。足の遅い歩兵部隊は後方に置き去りにされていたが、騎兵部隊は構わず敵に向かって突き進む。

対して、クロス卿派の軍勢は、前進する最中も、士官や下士官は指揮下の隊列に注意を払い、陣形の維持に努めていた。

彼我の距離が残り数ヤードになると、俄かにクロス卿派軍の動きが慌ただしくなった。

レオポルドが命令を発する前に、彼の視線を受けたバレットール准将が直ちに、指示を飛ばした。

「歩兵部隊つ。下馬して、続けつ」

そう叫ぶと、准将は馬の速度を上げる。

辺りの兵たちは、一斉に馬を乗り捨てて、駆け出した。その数、およそ四〇〇。全員が新旧バラバラではあるが、マスケット銃を手にしていた。既に装填の用意は済み、いつでも撃てる状態である。クロス卿派軍は集められるだけのマスケット銃を掻き集めると、四〇〇の歩兵に持たせていた。彼らを騎乗させていたのは、敵に、こちらが全軍騎兵であると誤認させることと、行軍の間、歩兵の体力を温存する為である。

歩兵部隊は横列を維持したまま、そのままの速度で進み続ける騎兵部隊を追い抜き、最前列に飛び出すと、マスケット銃を構えて、突進してくる敵騎兵に狙いをつける。

騎兵はかなり大きな標的であり、その上、集団でまとまって、向こうから近付いてきているのだ。マスケット銃兵にとっては、外すはずもない恰好的である。

距離が一ヤードを切ると、バレットール准将が叫んだ。

「放てえつ」

四〇〇ものマスケット銃が一斉に火を噴く。放たれた四〇〇もの鉛玉は、そのほとんどが人馬に突き刺さった。撃ち抜かれた兵が血を吐きながら馬上から崩れ落ち、銃弾を受けた馬が悲鳴を上げながら倒れ込む。近距離からの一斉射撃を受け、ムールド騎兵は一〇〇以上もの死傷者を出した。

とはいえ、マスケット銃は間断なく撃ち続けることはできない。熟練した兵でも、次の射撃まで数十秒を要する。次弾を撃つ前に、

ムールド騎兵は、こちらの隊列に躍り込み、歩兵は、半月刀で斬り捨てられ、槍で貫かれ、馬蹄にかけられるだろう。

しかし、そうなる前に、クロス卿派の騎兵部隊が銃撃を終えた歩兵の前に躍り出た。

大きな打撃を受け、動揺するムールド騎兵の群れに、トロットからギャロップに変えたクロス卿派の騎兵三〇〇が突っ込んでいく。突撃ラツパが吹き鳴らされ、将兵の喊声が轟く。

「突撃ーっ。斬り込めっ。斬り捨てよっ」

先頭を突き進むジルドレッド將軍は、真っ先にムールド騎兵の群れに突っ込むと、瞬く間に、向き合ったムールド兵を一刀の下に斬り捨て、半月刀を振りかざして向かってくる敵兵をピストルで撃ち抜いた。

「我に続けっ」

將軍の怒号に、クロス卿派の騎兵たちは、指揮官に負けじと、ムールド騎兵に襲い掛かる。手にしたサーベルや半月刀で斬り捨て、至近距離からピストルで撃ち抜く。

一斉射撃を受けた直後の、敵の突撃に、ムールド騎兵は狼狽し、堪らず馬首を返して、逃げ出す者まで出る始末だった。

「臆するなっ。敵は、こちらより寡兵だぞっ」

「取り囲んで、殲滅せよっ」

慌てた指揮官たちが、怒号を飛ばす。

指揮官の的確な指示の下、ムールド騎兵は、どうにか、混乱を鎮め、クロス卿派の騎兵に立ち向かう。

すると、ジルドレッド將軍ら、指揮官らは、すぐに後退の指示を出した。後退のラツパが鳴り、クロス卿派の騎兵は、すぐさま、くるりと向きを変えて、素早く後退した。一糸乱れぬ集団行動が苦手であることを、レオポルドやキス力が懸念していたクロス卿派のムールド騎兵も、指示に従って、後退していく。

逃げる敵を追うのは、戦術の常道である。五部族連合軍の騎兵は、逃げるクロス卿派の騎兵を追う。

これを、騎兵同士の戦闘の間、左右に分かれて布陣し、次弾を装填していた歩兵隊が迎え撃つ。銃撃を受けた騎兵が馬から吹き飛ばすように転げ落ち、馬が乗り手ごとひっくり返る。

銃撃を合図に、敵に背を向け、逃げていたクロス卿派の騎兵が馬首を返し、再び敵へ切り込んでいく。

横腹に一斉射撃を受けた五部族連合軍の騎兵の統制は乱れ、そこに再度の突撃を受け、大混乱に陥った。

勇気ある兵が、どうにか敵に向き直り、剣を交えるが、勢いは完全にクロス卿派にあった。

しかも、敵騎兵を前にして、白兵戦を演じている五部族連合軍の騎兵を、クロス卿派の歩兵が狙撃していく。無防備に背中や横腹を晒した騎兵は格好の的で、次々と撃ち殺されていく。

「慎重に狙いを定めよ。指揮官らしき者とこちらに向かってくる者を狙い撃て。」

弾数に限りがあるクロス卿派は、優先順位を付けて狙撃を繰り返していた。

二度の一斉射撃と突撃を受け、その後の白兵戦と狙撃で、五部族連合軍のムールド騎兵は、あつという間に数を減らしていき、戦闘開始から、わずか数十分で、半数近くの死傷者を出していた。それでも、騎兵同士の白兵戦が続いている。

そこに、援軍として五部族連合軍の歩兵一〇〇〇がようやく来援する。クロス卿派の歩兵に当たる為、左右に分かれて向かってきた。クロス卿派の歩兵部隊は、すぐさま、騎兵を狙い撃ちするのを止め、隊列を整えて、敵歩兵部隊に一斉射撃を食らわせる。

騎兵ならば、一瞬のうちに詰められる距離も、歩兵ではその数倍は時間がかかる。その間、彼らはひたすら銃撃を浴び続けるしかない。一斉射撃を受ける度に、数十人もの兵が、血を噴いて、悲鳴を上げながら、倒れ込む。

銃撃に対抗するように幾人かのムールド歩兵が弓を放つ。飛来した矢で、クロス卿派にもいくらかの犠牲が出たが、数が多くない為、

さほどの脅威ではなかった。

銃撃を避けようと、ムールド歩兵が地面に伏せると、歩兵隊を指揮するバレットール准将は銃撃を止めさせた。

「無駄弾を使うな。いくら、伏せようと、匍匐前進で来ようと、無駄なことだ」

バレットール准将が指示を飛ばす。

この辺りの草は背が低く、遠くならば、身を隠すことができても、いくらかまで近付くと、地面にぴったり体を付けていても、丸見えになってしまう。そこで確実に撃ち殺さばいいのだ。

「なんと、愚かな。これでは、狙い撃ちにされる位置まで、自分でゆっくりと進んでいくようなものではないか」

バレットール准将が呆れ顔で呟く。

「あまり火器を使った戦闘に慣れていないのでしよう」

准将の言葉に、レオポルドが冷静に応じる。

彼らの指示通り、歩兵隊は敵が近付いてくるまで待ち受け、視認される距離に入った敵兵は狙撃され、そのまま土の上で動かなくなる。意を決して立ち上がり、向かって来れば、すかさず銃弾が飛んでくる。

「そろそろ、弾数が足りなくなってきたようです。弾数無しの兵も多いです」

暫くすると、伝令が駆け寄ってきて報告した。

元々、一人当たり一〇発程度の弾薬しかないのだ。敵騎兵を迎え撃つのに半分を使い、更に歩兵との戦闘で残りを使い果たした。

「ならば、突撃あるのみ。突撃」

レオポルドはサーベルを引き抜くと、号令を下して馬腹を蹴った。すぐさま、傍らのキスカが続き、一拍遅れてバレットール准将が追う。三騎の後ろをソフィーネと旗を抱えた旗手が走り、更に歩兵全軍が鬨の声を上げながら突進する。

彼らの武器は、先程まで撃っていたマスケット銃である。新式の軽量のものには銃剣を着け、旧式のものには、銃身部分を持って、銃

架部分で敵を殴る棍棒になる。マスケット銃は、硬い木と鉄でできており、振り回せば強力な打撃武器になるのだ。

銃撃に怯え、身を伏せていた敵兵は、その間に、隊列も崩れ、バラバラになっていた。統制の取れた動きは不可能に近い。敵の来週に気付いた兵が個々人に慌てて立ち上がるが、戦う体勢が整う前に、次々と斬られ、刺され、殴り倒されていく。

レオポルドは、敵兵の群れの中を突っ切っ歩いていき、走り様に、サーベルで撫で斬りにしていく。馬を駆けさせながら、二人斬ったところで、弓矢を向けてくる兵を目にして、すかさずピストルを撃ち放つ。顔を打ち抜かれた弓兵は仰向けに倒れ込んだ。

続くキスカは、レオポルドを護ることを第一として、盾になるように馬を進めつつ、近づく兵を半月刀で斬り捨てていく。

ソフィーネも傍にいて、巨大な十字剣を振り回し、敵兵を、まさに両断していった。馬上にある二人は元よりかなり優位だが、彼女も敵を寄せ付けぬ戦いぶり、二人三人と斬り捨てると、最早、敵は誰も彼女には近寄ろうとしなかった。

ムールド兵は、数としては多かったが、一方的な銃撃の間に、陣形は乱れ、士気は落ち込み、そこに突撃を受けて、一気に潰走しはじめた。

この頃には、騎兵同士の戦闘も終わり、クロス卿派の騎兵は一方的に五部族連合軍の騎兵を追撃していた。

後に、ファデイの戦いと呼ばれることになる、この戦闘は、わずか一時間と少しで決着した。

結果は言わずもがな、クロス卿派の圧勝であり、死傷者は一〇〇名弱。対して、潰走した五部族連合軍は、戦闘による死傷者の他に、敗走中に多くの死傷者及び捕虜を出し、拠点としていたロジの町まで逃げ切った兵は五〇〇に満たなかった。

クロス卿派軍は、捕虜と負傷者を収容すると、翌日には、直ちに南下し、ロジの町を包囲した。ファデイ以上に小さな町で、尚且つ、防衛施設がより貧弱なロジに町を守る手立てはなく、敗走した五〇

○の兵ともども、一戦も交えることなく投降した。

親帝国主義である七長老会議のうち、ブレド男爵に付いた五部族が結成した連合軍はこうして壊滅し、ファデイの戦いから一週間もしないうちに、各部族はレオポルドに降伏・恭順する意を示した。

四三 七長老会議にて

そもそも、七長老会議とは、今より百数十年も前、ムールドも北に住む七部族の族長、長老たちが集った会議に由来する。

この時の会議で、七部族は、帝国に対する無益な抵抗を止め、恭順を決めた。また、ムールド人の主流である反帝国主義の他部族に対抗する為に、七部族はサーザンエンド辺境伯の後ろ盾の下で同盟を結ぶ。以後、七長老会議はこの同盟における最高意思決定機関として機能することとなる。七部族は会議によつて決定された一致した行動を取り、この結束により、多数派である反帝国主義の他部族に対抗してきたのだ。こうして、親帝国派となつた七部族のことを七長老会議派などと称するようになった。

対して、他のムールド人部族の多くは、反帝国、親帝国に関わらず、家畜や放牧地、資源などを巡る部族同士の抗争が日常茶飯事で、反帝国の下に統一した行動ができない。

七長老会議による結束が、少数派である親帝国派ムールド七部族を生き長らえさせてきたといつても過言ではない。

さて、この七長老会議がフェアデイで開かれた。これまで、原則的に会議には七部族の族長や長老のみ参加を許されていたが、今回の会議では、この席にレオポルドとキスカが加わっていた。

というのも、キスカは、今やネルサイ族の族長代理の立場にあるのだ。先代の族長代理である伯父や一族は尽く肅清された為、ネルサイ族では、前族長の一人娘であるキスカが若い女であるにも関わらず族長代理の座に就くことになっていた。

レオポルドはというと、本来であれば前族長の娘と結婚した男が次の族長となる定めである為、前族長の娘であるキスカの婚約者である彼は、次期族長と見做されていた。

族長代理と次期族長であれば、出席する資格を有するとされ、二人はいつもの集会所の一室で行われる七長老会議の場に加わってい

た。

レオポルドが上座に置かれたのは、実際の力関係によるものだろう。七部族は、レオポルドに従属する立場なのだから。その傍らにキスカが控える。

他の参加者はカルマン族の族長や、その他の部族の族長、長老。いずれも、老齢の者が多く、レオポルドとキスカくらい若い者は他にいない。

レオポルドとしては、クロス卿派全体の会議として、七部族の長老たちの他に、クロス卿派の幹部たち、レッケンバルム卿や将軍たちを含めた全体会議を主催したかった。

しかし、両者を一緒に扱うのは非常に難しかった。プライド高い帝国人貴族たちは蛮族の老人たちを会議に含めることを良しとせず、余所者を嫌うムールド人の長老たちも、七長老会議に帝国人貴族たちが入ることに難色を示した。

クロス卿派の指導層である帝国人貴族と、実質的に兵力の大部分と資源や財貨を出すムールド人との間の軋轢は、レオポルドとしては頭の痛い問題であった。この問題の解決には時間がかかるものと彼は考えており、一先ずは棚上げにしていた。

こうして、七長老会議はクロス卿派の幹部会議とは別に行われていた。

前回の会合では、七部族は、一致してブレド男爵を支持し、ムールドへと落ち延びてきた男爵と対立するレオポルドらクロス卿派を捕縛し、ハヴィナに送ることが決定された。

それから、一月と経たぬうちに、会議は、前回とは全く違う結論を導き出す羽目になった。

冒頭で、七部族は揃ってレオポルドに刃向ったことが陳謝され、恭順する意が表明された。これを、レオポルドは寛容に受け入れ、誰一人にも罰を与えることはしなかった。ただし、再度の謀反があれば、一族郎党をも死罪を含む厳罰に処することが警告された。

「ところで、南の部族たちの様子はどうか」

主従関係がはっきりとしたところで、カルマン族の族長オンドルが口を開いた。

彼ら、クロス卿派と七長老会議派は、現状では敵対勢力に取り囲まれている状況にある。敵対勢力の動向を常に警戒しておくことは、死活問題といえる。

「パレテイ族がクラトウンの軍門に下ったとか」

サイマル族の長老の言葉に場がざわつく。

「何っ、真かつ」

「それは確かな情報なのですか」

「パレテイが下れば、西の部族全てがクラトウンの下に入るのも時間の問題だぞ」

長老たちは深刻そうな面持ちで口々に囁き合う。

唯一、ムールドの情勢をイマイチ理解していないレオポルドだけが、状況を把握できず、頭の中を疑問符で一杯にしていた。

すかさず、その耳元にキス力が唇を寄せる。

「クラトウン族は、ムールドで最も大きな勢力を持つ部族です。クラトウンと縁戚にある部族、従属下にある部族は合わせて一〇にも上り、その勢力はムールドの南半分にも及びます」

「なるほど。では、パレテイは」

「パレテイ族はムールド西部では有力な部族で、ここ最近は、クラトウンの侵攻に抵抗しておりました。ここがクラトウンの軍門に下れば、残りの西の部族は弱小な部族ばかりなので、彼らは早々とクラトウンに恭順の使者を出すでしょう」

「つまり、ムールドの南半分から西一帯はクラトウン族の勢力圏になるということか」

「そうです。残るのは、北端部の我々と、北東部の八部族だけになります」

南部を支配するクラトウン族が、西部を飲み込んだ後、次に食指を伸ばすのは、当然、北部となることは想像に難くない。

「我々が動員できる兵は、せいぜい二〇〇〇がいいところだが、ク

ラトゥン族は如何程の兵を動かせるだろうか」

「その気になれば、二万は動かせるのではないのでしょうか」

「何だどつ。二万だどつ」

キスカの答えに、レオポルドは仰天する。

「確か、ムールドの人口は一〇万人ほどと聞いたが……」

「そうです。そのうち、七長老会議派の部族を全て合わせると一万。クラトゥン族とその勢力にある部族、今回、軍門に下るパレテイ他西の部族が全部で八万五〇〇〇程。残りが五〇〇〇くらいでしょう」

「総人口が八万五〇〇〇で、兵を二万も出せるのか」

「遊牧民の男は、皆、砂漠の戦士ですから。その気になれば、下は一〇から上は六〇くらいまでの男全員が馬に乗り、弓を取って戦場に赴くことができます」

この答えに、レオポルドは納得した後、嘆息して呻くように呟く。

「そのような戦力差では、とてもじゃないが、太刀打ちできんぞ。

まして、こちらは武器弾薬すら事欠く有様だ」

「しかし、彼らも、パレテイ族と戦ったばかりで、戦力を再編成する時間を必要とするでしょう。また、西の部族を従属させるのにも、いくらか時間はかかると思われます。次の軍事行動が起こせるようになるまで、一月か二月はかかってもおかしくはありません」

そのことだけが救いといえるだろう。明日にも、こちらに二万ものムールド騎兵が押し寄せてくると言われたら、レオポルドたちは、せつかく手に入れた拠点を放り捨て、尻尾を巻いて逃げるしかない。

このことを自覚しているのはレオポルドだけではなく、七長老会議派の長老たちも同じようであった。七長老会議派が、これまで北端部に勢力を維持できていたのは、背後にサーザンエンド辺境伯が控えていたことと、他のムールド諸部族がバラバラになって互いに争いを繰り返していたからに他ならない。それが、今となっては両者とも失われているのだ。今回の事態は、レオポルドにとつての危機でもあるが、七長老会議派にとつても重大な危機なのである。

「どうにか、クラトゥン族と戦わずに済むような方策はないだろう

か

レオポルドの言葉に、場の面々は揃って渋い顔で考え込む。

沈黙が場を支配する中、ふと一人の絹の衣を纏った白く長い髭の老人が顔を上げる。

「クラトウンへ貢物を出しては如何であろうか」

この言葉に、場は騒然とした。

「なんとということか。クラトウン族の軍門に下るといふのか」

「そのような屈辱的なことなどできようはずがない」

「貢物を出しては、連中を更に増長させるのではないか」

誇り高いムールドの戦士としては、戦わずして敵に頭を下げることを止しとしないのだろう。ましてや、貢物を差し出して見逃してもらおうとするなどという屈辱には耐えられないというわけだ。

異論が続出する中、老人は眠たげな顔でもごもごと言いつ返す。

「戦って勝てるのであれば、己の矜持を貫き通すこともできようが、今の戦力では歯が立たないことは明白。実際、我々には二つの選択肢しかないのだ。矜持を貫き、戦って負けるか、先に貢物を差し出して見逃してもらおうか」

そこまで述べて老人はレオポルドを見つめる。

「決めるのは、レオポルド様じゃ」

場の視線が一斉に集まる中、レオポルドは渋い顔で傍らに寄り添うキスカに視線をやる。

すかさず、キスカはレオポルドの耳元に口を寄せた。

「あの方はエジシュナ族の長老トカイ様です。エジシュナは帝国ともクラトウンとも商売などで取引があります。クラトウンと通じているとの疑惑が出たこともあります。どちらかといえば、帝国との繋がりの方を優先しているものと思われれます」

レオポルドは渋い顔のまま頷くと、口を開いた。

「貢物を出すにしても、相手が受け取ってくれるとは限りません。差し出す物と、差し出す者によるかと思われれますが」

レオポルドの言葉に、同意の声が上がる。

「この件に関しては、帝国人よりもムールド人が当たった方が良いかと思われませう。特に、人生経験が長く、クラトウン族とも繋がりのある方が宜しいでしょう」

彼の言葉に、老人は苦い顔になる。

「貴方にお任せしたいと思いますが、宜しいですか」

そう言われて断るのは難しい。自分が提案したことが認められ、その実行を任された段階で、断っては言動不一致ではないか。口先だけの男は、ムールドでは軽蔑の対象である。口だけでなく、いや、口よりも行動力、実行力の方が尊ばれるのがムールドの男というものだ。

老人は渋い顔をしながらも、黙って頷いた。

「エジシュナ族は、東方から来る物産を商っていますから、クラトウン族の大物にも喜ばれるような物を送ることができるでしょう」

「彼の衣を見れば分かる。あの様な刺繍の絹衣は、西方にはない」

キスカが囁くように言うと、レオポルドは微笑を浮かべて応えた。

「エジシュナは、東方大陸とも商売をしているのか」

「ええ、エジシュナ族の町ハリバは、東岸の港湾都市イマンに荷揚げされた東方からの物産が西の港へ運ばれる途中の中継地なので」

東方大陸との貿易は西方大陸東岸部では盛んに行われており、そのうちの一つの貿易ルートが南部と繋がっているのだらう。ムールド人の隊商はそれらの品を東岸の港から西岸の港へ運ぶ役割を担っているようだ。

「ところで、レオポルド様。ご婚礼の日取りはいつになりましたでしょうか」

話が一段落したところで、カルマン族の族長オンドルが口を開いた。

彼の問いにレオポルドは再び顔をしかめる。

「婚礼だと。どうということだ」

「あのネルサイ族の同族殺しと……」

「おいつ。本人に聞こえるぞっ」

長老たちがひそひそ声で囁き合う。

「キスカとは、あー、まだ、その、」

レオポルドはしどろもどろになって、もごもご言葉を濁す。

「レオポルド様とキスカ殿のご婚礼は、帝国とムールドの間の盟約の証。早々に行わねばなりません」

そう言うてから、オンドルは髭を撫でつけながら続ける。

「それに、第一夫人たるキスカ殿とのご婚礼が済まなければ、我が孫との婚礼ができませんからな」

彼の言葉に、再び場は騒然とした。

「なんとっ。オンドル殿の孫娘とレオポルド様がっ」

「そのような話初耳だぞっ」

「如何なる理由でそのような婚約が成り立っておるのだっ」
人々の問いかけに、オンドルが応える。

「我がカルマン族の従属の証として、我が孫アイラをレオポルド様に差し出したのだ」

差し出されたのは事実である。だが、まだ婚約を決めたわけではない。と、レオポルドが口にする前に、次々と他の部族の長老たちが声を上げた。

「なればっ、我がキオ族族長の娘も、レオポルド様に差し出したく
っ」

「私の娘もレオポルド様につ」

「我が孫を人質にお取り下されっ」

「恭順の証として、うちの末娘をっ」

将来、辺境伯としてムールドの地を含むサーザンエンド全土に君臨する予定であるレオポルドの妻に、一族の娘を置くことができれば、一族にとって大変な名誉であることに他ならず、加えて、実利的にも非常に有利な立場に立てることは言うまでもない。

オンドルが、わざわざ、この場で、孫娘アイラとの婚約を口にしたのは、多くの人の耳に入れることによって、婚約を既成事実化する目論見があったのだろう。

それを聞いた他の部族の長老たちは、ネルサイとカルマンに遅れてはならじと、次々に声を上げる。

「ならんならんっ。妻の数は四人までと古よりも掟にて決まってい
るではないか」

「では、あと二人は席が空いておるといふことだなっ」

「妻でなくとも、妾としてお傍に置いて頂けても、うちは構わんぞ
っ」

激しい言い争いをする老人たちを前にして、レオポルドは疲れたように嘆息した。今となつては、何を言つても、彼らの耳には入るまい。とはいえ、放っておけば、いつの間にか、七人も妻を抱える羽目になりそうだ。

困り顔のレオポルドの傍らで、第一夫人となるキスカは、顔を朱に染めて黙り込んでいた。

「こ、婚礼……」

ぼそりと口の中でこっそりと呟いて、更に顔を赤く染めた。

四四 厄介な知らせについて

「何だとっ」

早朝に舞い込んだその知らせを最初に耳にしたのはサーザンエンド辺境伯の宮廷で侍従長の要職を務めていたレッケンバルム卿だった。

老練で強かな彼はハヴィナを去った後も、ハヴィナに太いパイプを持ち、配下の者を潜ませており、ハヴィナの情報は逐一、まず、真つ先に、彼の元に届くようになっていた。レオポルドの耳に入るのは、レッケンバルム卿が生意気な辺境伯候補の聞かれても差し支えないと判断したものでだけである。

さて、この日の朝早く、太陽の姿が地平線の後方に見え始め、雄鶏が鳴いてから、数刻も過ぎぬ頃、そろそろ、市場の商人たちが動き出す頃合にレッケンバルム卿は乱暴に戸を叩かれる音で目を覚ました。

不機嫌になりつつも新鮮な情報の希少さを理解している老人は、配下の者にお茶を出すように指示してから、早馬の使者が齎した知らせの綴られた文書を開いた。

従者が差し出したカップを受け取り、一度、口を付けてから、書面に目を走らせ、その表情は瞬く間に凍りついた。

驚愕のあまり、啞然として、思わず手にしていた杯を取り落とし

た。その後、怒りのあまり、机に拳を叩きつけると、吐き捨てるように言い放った。

「おのれっ。アウグストの腰抜けめっ」

昨夜したため、今日送るよう指示するはずだった手紙を掴むと、くしゃくしゃに丸めて投げ捨て、レッケンバルム卿は杖を手に取った。

「糞忌々しいことだっ。クロス卿の下へ行くぞっ。急ぎの用だっ」

そう叫んで、彼は従者を走らせた。

その頃、レオポルドは、剣の朝練に励んでいたソフィーネにある提案をして、

「嫌です」

と、一蹴されていた。

「いやいや、もうちょっとよく考えてくれ」

「嫌です。何故、私が子供の世話をしないといけないのですか」

ソフィーネはしかめ面で言い放つと、剣の素振りを再開する。大の男でも持ち上げるのがやっとと言われる非常に重い十字剣を何度も何度も振り上げ、振り下ろし、振り上げ、振り下ろす。

その周囲では十数人のムールド人少年少女たちが、大変真剣な顔で木刀の素振りをしている。ふざけたり、だるそうにしたり、私語をしている者は一人もない。そんなことをすれば、ソフィーネの鉄拳制裁が下ることをよく知っているのだ。鉄拳の後、黒髪の修道女は必ずこう言うのだ。

「やる気がないなら帰れ」

その通り、帰った者も少くない。

ということとは、この場に残った十数人は、それでも帰らなかった連中なのだ。もの好きにもソフィーネから剣を学び続けることを選んだ十数人は黙々と真剣な様子で素振りを続ける。

ソフィーネは彼ら、学びを請う者には、剣術だけでなく、槍や弓、火器の使い方、礼儀作法、歴史や数学、哲学、帝国語といった学問をも教えていた。それに加え、博識と名高いムールドの長老やバレット准将やルゲイラ兵站監のようなムールド人にも比較的好意的な帝国人貴族、聖職者、旅の行商人、歴戦の下士官などと呼んで、子供たちに色々を話を聞かせているようであった。

本人は、子供たちが学びを請うから、止む無く教えていると主張していたし、傍からは嫌々やっているようにも見えたが、ここまで手を尽くしておいて、嫌々なわけがあるまい。

もうちょっとした学校のように、レオポルドはこれをソフィーネ学校と呼んでいた。

そして、彼はあることを考え付いたのだ。

「何も特別、面倒なことを押し付けるつもりはない。ただ、今やっていることを、もっと組織的に、しっかりとやっていこうという話でな。今みたいに、自然に良い意味でできとうにやっていくのも悪いとは言わんが、やるからには、きちんと組織立てて行った方が、教える方としても、教えられる方としても、効率的で効果的だとは思わんか」

「私は、そうやってべらべらと言葉を並べる奴を信用しないようにしています」

ソフィーネに言い切られ、レオポルドは静かに口を閉じる。

「それで、一体、どういう目的なんですか」

「何がだ」

レオポルドがとぼけるとソフィーネは無言で鋭い視線を彼に突き刺す。

レオポルドは暫し苦笑いした後、観念して口を開いた。

「あー、いや、ええとだな。近々、ムールド人の有力者の子女を何人か預かる予定があつてな」

「人質の受け入れ施設代わりですか」

彼の話に、ソフィーネは不機嫌そうに顔をしかめる。

前回の七長老会議では、七長老会議派七部族のレオポルドへの臣従が確認されたと共に、各部族より数名ずつ有力者の人質を供出することが決定されていた。

というのも、ネルサイ族とカルマン族の娘がレオポルドに輿入れすることがほぼ決定的になっていることを知った他の五部族がうちも娘を差し出すと言い出したことから、全部族から、恭順の証、つまり、人質を貰うということが決定したのであった。その中で、もしかすると、レオポルドの目に留まって、妻や妾とされる者がいるかもしれない。と、レオポルドは本意でもないことを言わざるを得

なかった。そう言わねば誰も引き下がろうとする様子があったからである。

この差し出された有力者の子供たちを、レオポルドはただ人質としてのみ使うつもりはなかった。

彼はこの少年少女に帝国風の教育を施し、帝国人と交流させ、より親帝國的な人材へと育て上げ、成人すれば、彼らを元の部族へと返すつもりだった。有力者の子である彼らは部族でも指導的な立場に収まるだろう。つまり、彼ら部族の幹部候補たちを幼いときから親帝国派に染め上げておこうという計画である。

気の長い話ではあるし、子供たちが成長する前に、レオポルドが敗死する可能性も十分にある。

とはいえ、将来、辺境伯としてムールドの諸部族を支配する立場になったとき、役に立つ布石を今から打っておくことは無駄なことではないだろう。

しかし、そんなことはレオポルドの都合である。巻き込まれるソフィーネにしてみれば、いい迷惑である。

「君にとっても悪い話じゃないと思うんだがなあ。いつまでも、タダ飯食らいというのは、どうかと思うんだが」

レオポルドの言葉に、ソフィーネは沈黙する。

確かに、言われてみると、ソフィーネは特に何か仕事をしているわけではないのだ。剣の修道院から出てきて以来、たまに従軍司祭みたいな感じに戦場に出ることはあるが、普段から軍に籍を置いているわけではない。日がな、剣の鍛練に励んだり、ぼんやりしているだけだ。その生活費や食費はというと、レオポルド向けのものから分けてもらっている恰好である。要するに、彼女は実質的にレオポルドに養われているようなものだ。とはいえ、レオポルドもついでの間までキスカに養われているようなものだったのだが。

レオポルドはやんわりとその辺りのことを言葉の端々に織り交ぜ、彼女の説得を続けた。

ソフィーネの眉間の皺がこれ以上なくらいに深くなり、レオポ

ルドが勝利を確信しかけたとき、不意に彼の名が呼ばれた。

「レオポルド様っ。至急の知らせですっ。レッケンバルム卿がお呼びですっ」

駆け寄ってきたレッケンバルム家の従者は息を切らせながら言った。

「レッケンバルム卿が。こんな朝早くから何用だというのだ」

「大至急のことです。將軍方も参集されているかと」

レオポルドは訝しみながらも、兎にも角にもレッケンバルム卿の元へ向かうこととした。数歩歩き出してから、

「そうだ。学校の件、よく考えておいてくれ」

忘れずに、ソフィーネに釘を刺す。

黒髪の元修道女はしかめ面でレオポルドを思いっきり睨みつけた後、顔を背けた。

「非常に厄介なことになったっ。糞忌々しいことだっ」

レオポルドが部屋に入ると、開口一番にレッケンバルム卿が吐き捨てるように言い放った。

会議の場には、既にジルドレッド兄弟、バレットール准将、シュレイダー法務長官、レッケンバルム卿の子息、ルゲイラ兵站監ら、クロス卿派の貴族たちが揃っていた。

「あー。一体、何があったのですか」

レオポルドの問いかけにレッケンバルム卿は苦虫を噛み潰したような顔で答える。

「アウグストが。ウォーレンフィールド男爵が、あの忌々しいテイバリ人に付きおった」

アウグスト・ウォーレンフィールド男爵といえば、サーザンエンド辺境伯傘下の領主の中では筆頭の家柄であり、フェルゲンハイム家とも血の繋がりの深い人物である。忌々しいテイバリ人とは、おそらくはテイバリ人の領主であるブレド男爵のことだろう。

サーザンエンドでは多数派であるテイバリ人の首魁にして、首都

を抑えたブレド男爵と、フェルゲンハイム家がほとんど断絶状態にある中で、最も高い血統を持つウォーレンフィールド男爵が結びつければ、これは巨大な勢力になることは言うまでもない。

「それは確かなのですか」

「間違いない」

レオポルドが確認すると、レッケンバルム卿は断言した。

「ハヴィナに潜ませている配下の者が、ウォーレンフィールド男爵の名代としてカンブ卿がハヴィナに入るのを目にしている。その上、更に厄介な情報まで舞い込んできおった」

両者の同盟が成れば、首都ハヴィナに加え、サーザンエンド中部全域はブレド男爵のものとなる。これ以上に悪い知らせなどあるものか。

そう考えたのはレオポルドだけではなかったようだ。

「これ以上に厄介な知らせなど、有り得まい」

「あつたとしても聞きたくもないな」

將軍たちが渋い顔でぶつぶつとぼやいている。

レッケンバルム卿が鋭い視線を飛ばすと、一斉に口を閉じて黙り込んだ。

「縁組が計画されておる」

「縁組ですか。えーと、誰と誰の……」

レッケンバルム卿のナイフのように尖った視線が飛んできて、レオポルドは口を閉じた。そろそろ、どこか席に座りたいが、タイミングを逃してしまつたようで、立つたまま話を聞くことにした。

「ブレドとアウグストの娘との縁組だ。これにより、彼奴を辺境伯代理とし、二人の間の子を次の辺境伯とするつもりであろう。これならば、血統の問題を解決できる」

サーザンエンド随一の実力を持つブレド男爵が辺境伯になることに唯一足りなかったのが、血統の問題である。フェルゲンハイム家の血を全く継承していない彼では後継たり得ないと思われる。

しかし、件の縁組が成れば、その問題はクリアされてしまう。

確かに、非常に厄介で忌々しい知らせであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0588q/>

サーザンエンド辺境伯戦記

2011年11月5日02時21分発行